第７図　Ａ地区北西遺構群分布図

(1) 板石積石室墓（ＳＩ）

Ａ地区北西遺構群内に８基分布する。いずれも中世の遺構や近世以降の耕作によって上部を削平されており、板石が全て抜かれているものや、大部分抜かれているものがほとんどであった。しかし、他の墓制との切りあいは見られない。

ＳＩ101（第９図）　堀り込みのみを検出した板石積石室墓。北側を中世の溝に切られているが方形プランで一角が弧状を呈すると思われる。

ＳＩ102（第10図）　円形プランの石室。北側半分はコンクリート壁によって破損している。南側半分で長軸縦置きの石材が９枚検出された。北側の4ヵ所の掘り込みと合わせると13枚の石材を用いていると思われる。無茎鏃１（第107図１）が出土している。

ＳＩ103（第11図）　15枚の石材を長軸縦置きに用いた円形プランの石室である。外側に階段状に一段の堀り込みが検出されておりドーム状の石組みが考えられる。柳葉鏃１（第107図３）が出土している。

ＳＩ104（第12図）　石材は１枚しか残っていないが堀り込みから13枚の石材を用いた長方形プランの石室である。西壁と北壁の交点は直角に組んであるが、南壁から東壁にかけては弧状を呈する。

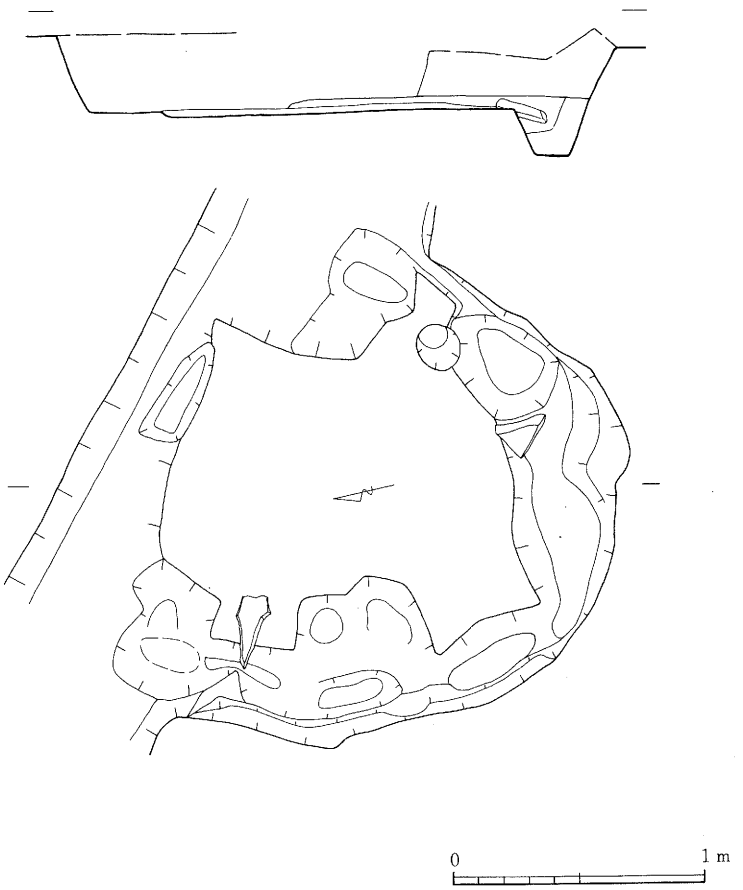
ＳＩ105（第13図）　３枚ほど石材が欠けているが14枚～15枚の石材を長軸縦置きに用いた方形プランの石室である。一角のみ弧状に組まれている。階段状に一段の堀り込みがみられる。ドーム状の石組みが考えられる。

ＳＩ106（第14図）　土取りによって北半分が削平されているが円形プランの石室と思われる。残存する石材は床面に弧状に組まれた長軸縦置きの４枚とその上段に２枚が見られる。堀り込みは４枚の石材のもののほかに２カ所確認された。

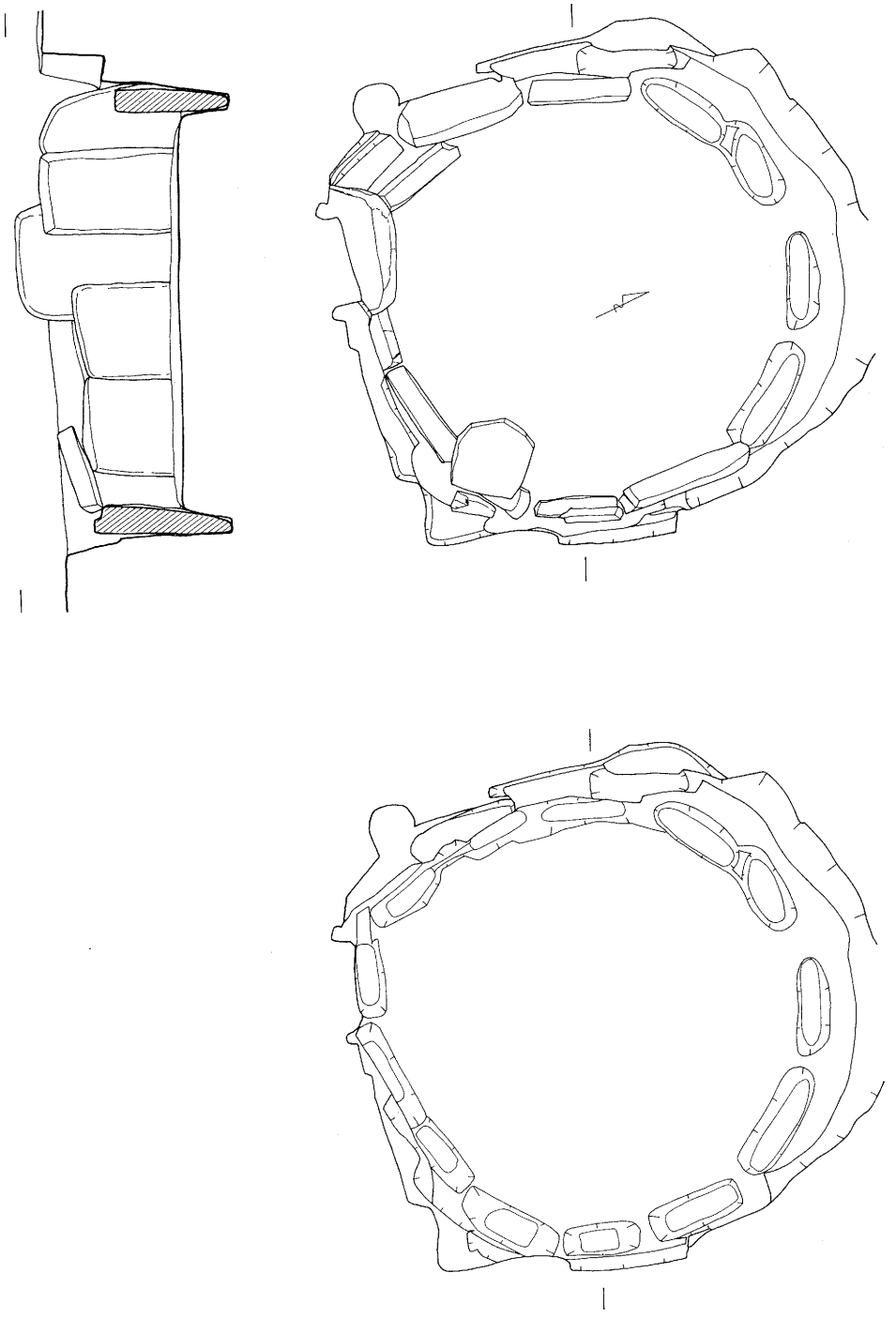
ＳＩ107（第15図）　石材は全て抜かれており、堀り込みも大半が原形を留めていない。床面のプランから一角を弧状に組んだ方形の石室と思われる。

ＳＩ108（第16図）　石材は全て抜かれているが検出された堀り込みから、一辺に３枚の石材を用いて一角を弧状に組んだ方形の石室である。

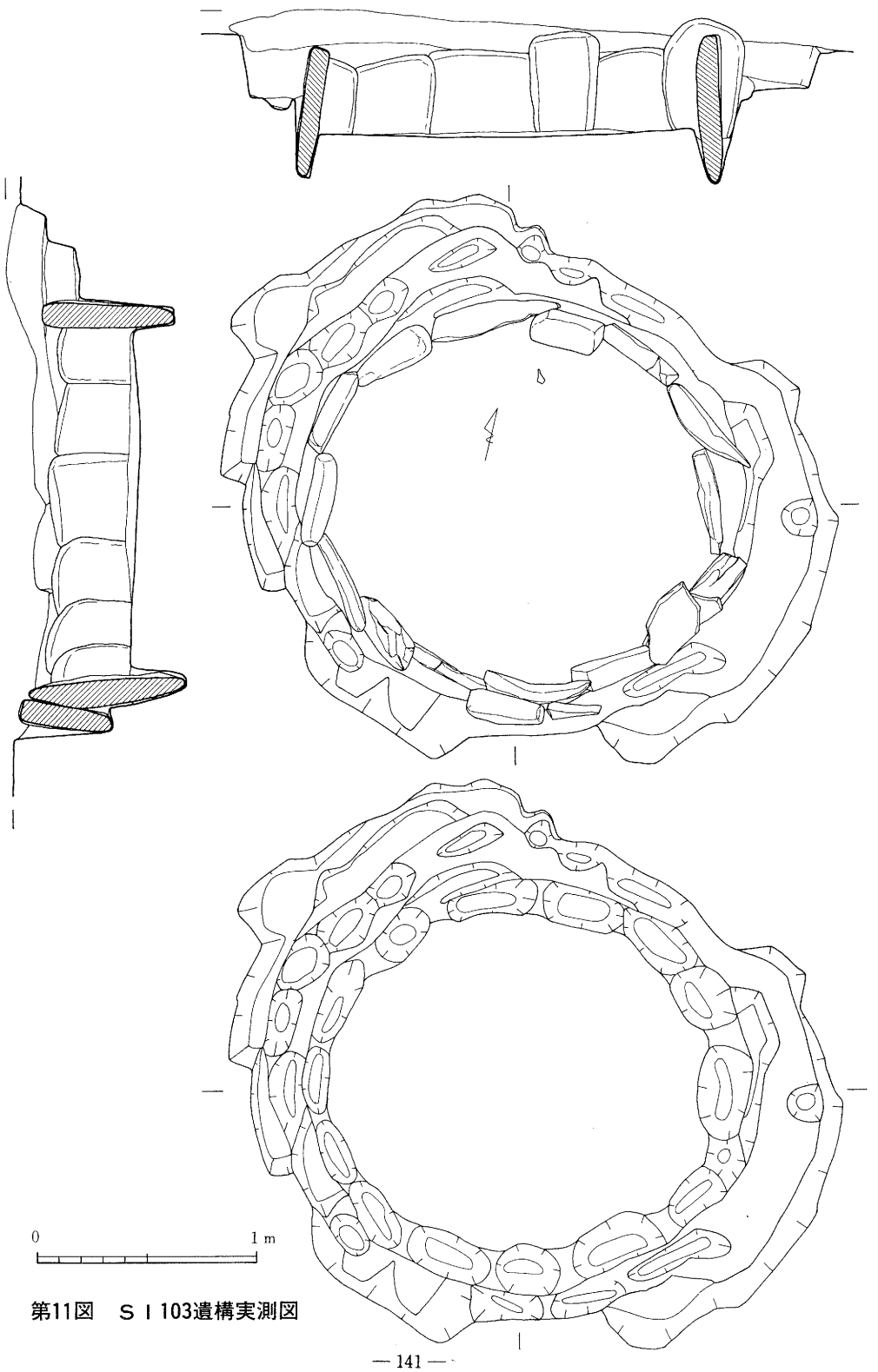
第8図　A地区板石積石室墓分布図



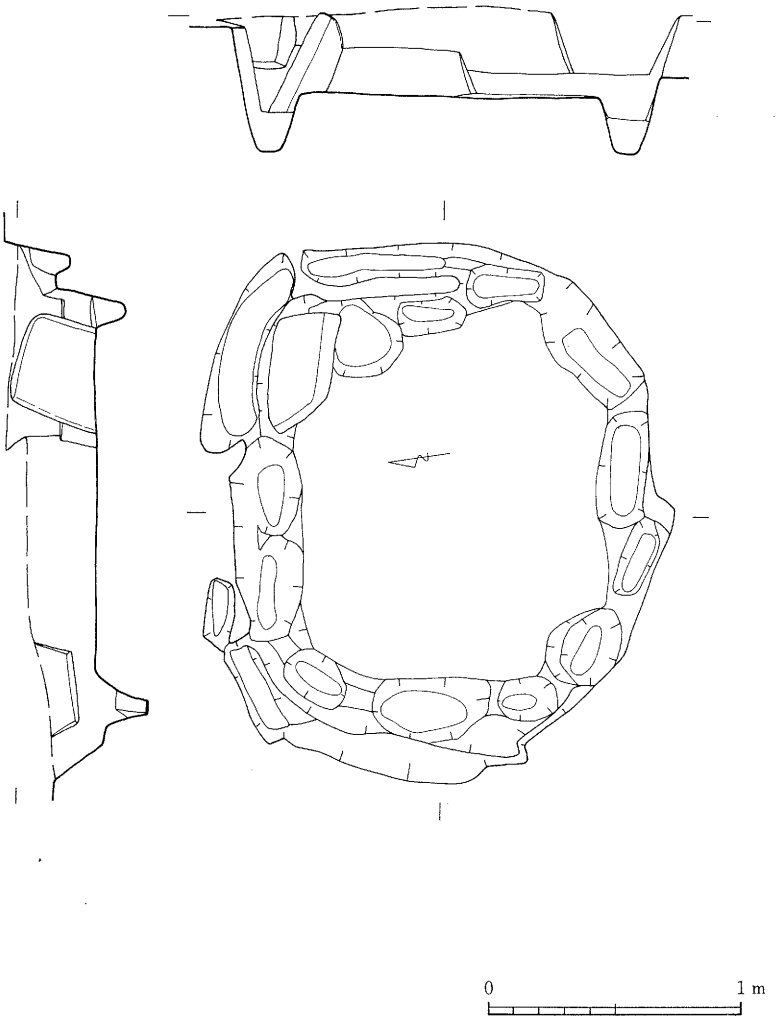
第9図　ＳＩ101遺構実測図



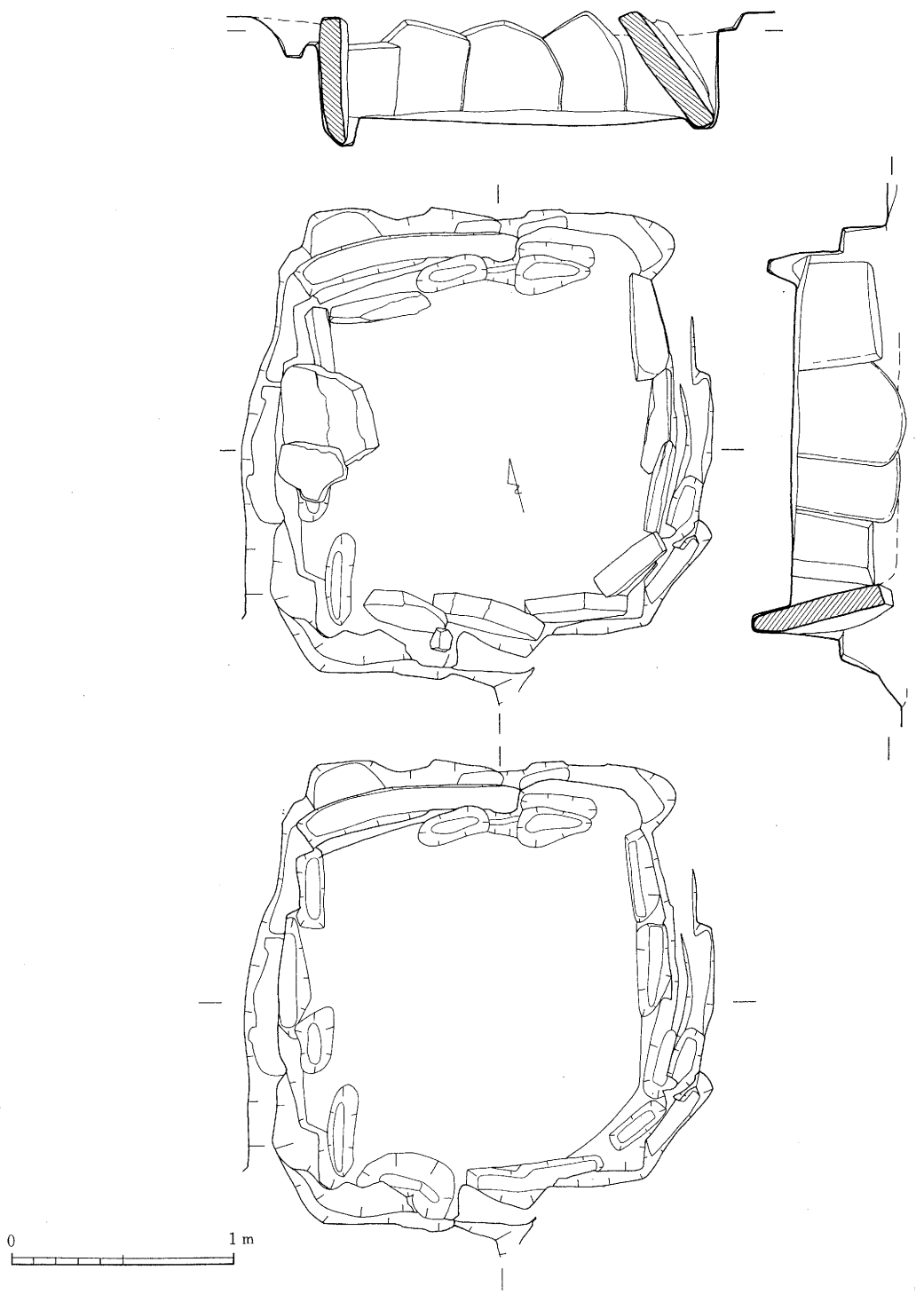
第10図　ＳＩ102遺構実測図



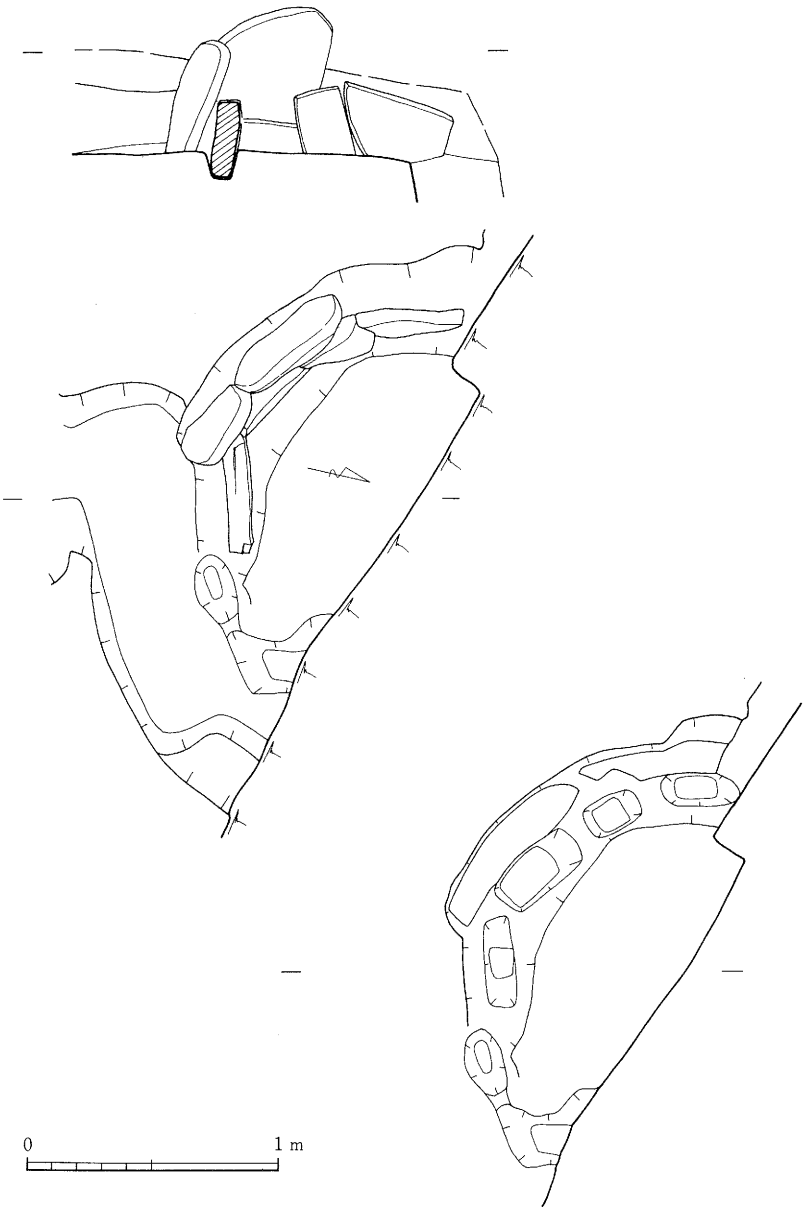
第11図　ＳＩ103遺構実測図



第12図　ＳＩ104遺構実測図

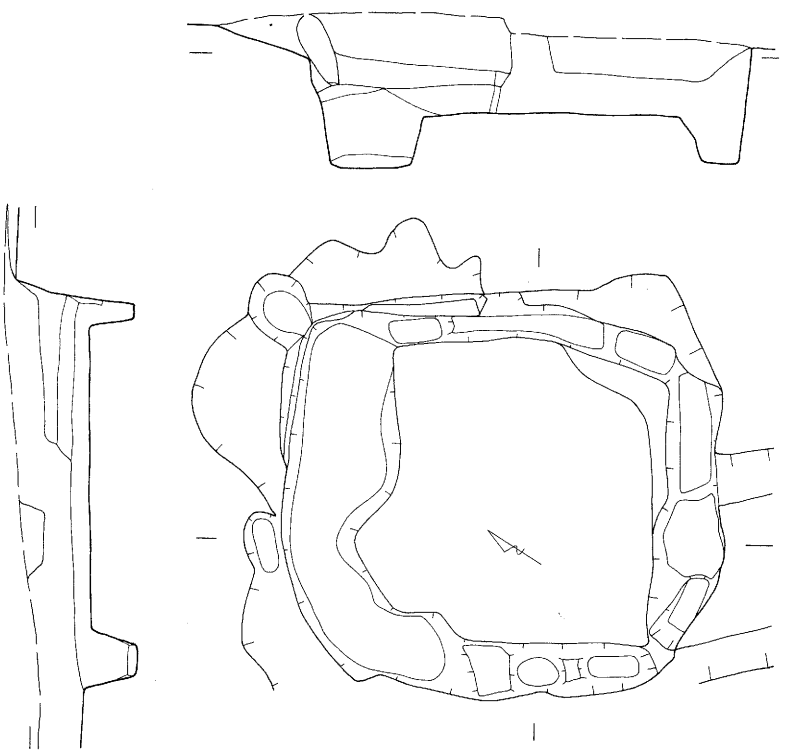


第13図　ＳＩ105遺構実測図



第14図　ＳＩ106遺構実測図

第15図　ＳＩ107遺構実測図



第16図　ＳＩ108遺構実測図

(2) 土壙墓（ＳＫ）

Ａ地区北西遺構群内に木棺墓６基と木蓋土壙墓52基の合計58基の土壙墓が分布する。多くの土壙墓が中世の遺構や近世以降の耕作によって上部を削平されている。しかし、他の墓制との切りあいは見られない。

木棺墓（ＳＫ１～ＳＫ６）

ＳＫ１（第18図）　４辺の堀り込みが検出された。長軸辺より短軸辺の堀り込みが深い。南北方向に主軸を持ち東側長軸辺の片方が短軸辺より外に張り出す。内寸は約150㎝×70㎝を測る。鏃１（第106図31）が出土している。

ＳＫ２（第18図）　長軸辺の堀り込みのみの検出である。南側は堀り込みが緩やかに傾斜する。管玉１（第106図②）と矢柄片と思われる木質部（第106図32）が出土している。

ＳＫ３（第19図）　両側の短軸辺の堀り込みと長軸辺の一部でわずかな堀り込みを確認した。内寸で約170㎝×80㎝を測る。

ＳＫ４（第19図）　短軸辺の堀り込みのみの検出である。長軸長約120㎝を測る。

ＳＫ５（第20図）　４辺の堀り込みが検出された。短軸辺の堀り込みが深く堀り込んである。長軸辺が両側とも短軸辺より外に張り出す。東側の長軸辺の立上がりの堀り込みが緩やかに傾斜する。内寸は約110㎝×50㎝を測る。南角の床面から鏃長身の鏃４（第106図18～21）が出土した。また、傾斜面などの床面近くから土器片数点が出土しているが流れ込みと思われる。

ＳＫ６（第20図）　両側の短軸辺と一部長軸辺の堀り込みが検出された。内寸約110㎝×70㎝を測る。

木蓋土壙墓（ＳＫ７～ＳＫ58）

ＳＫ７（第21図）　長方形プランで断面方形の大型土壙。角をほぼ直角に堀り込む。床面中央に剣１（第106図４）、壁際に鏃２（第106図５・６）を出土している。

ＳＫ８（第21図）　隅丸長方形プランを呈する中型土壙。断面逆台形だが一部壁が内側に傾く。

ＳＫ９（第22図）　長方形プランで断面方形の中型土壙。角ほぼ直角に堀り込む。

ＳＫ10（第22図）　長方形プランで断面方形の大型土壙。一方の角は隅丸である。

ＳＫ11（第23図）　楕円形プランで断面逆台形の小型土壙。中世の柱穴で床面壁面が破損する。

ＳＫ12（第23図）　長方形プランで断面方形の中型土壙。角をほぼ直角に堀り込む。

ＳＫ13（第24図）　長方形プランで断面方形の小型土壙。中世の柱穴のため一部壁が破損する。

ＳＫ14（第24図）　長方形プランの断面逆台形の中型土壙。

ＳＫ15（第25図）　長方形プランの断面方形の中型土壙。北壁の一部が中世の柱穴で破損する。

ＳＫ16（第25図）　長方形プランの断面台形の大型土壙。床面中央に剣１（第106図７）が出土している。

ＳＫ17（第26図）　長方形プランの断面方形の大型土壙。角をほぼ直角に堀り込む。

ＳＫ18（第26図）　隅丸長方形プランの断面逆台形の小型土壙。床面が２段になる。

ＳＫ19（第27図）　長方形プランの断面方形の中型土壙。確認面で堀り込みが見られるが中世以降のものと思われる。鏃３（第106図８～10）が出土している。

ＳＫ20（第27図）　長方形プランの断面方形の中型土壙。角をほぼ直角に堀り込む。

ＳＫ21（第28図）　歪なやや幅広長方形プランの小型土壙。断面は逆台形。

ＳＫ22（第28図）　幅広長方形プランの中型土壙。断面は方形。

ＳＫ23（第29図）　東側が直角に掘り込まれているが、西側が弧状を呈する若干隅丸長方形気味の不定型の小型土壙。東壁は中世の掘り込みで破損している。断面は逆台形を呈する。

ＳＫ24（第29図）　長方形プランの断面方形の中型土壙。

ＳＫ25（第30図）　長方形プランの断面方形の中型土壙。

ＳＫ26（第30図）　やや幅広の長方形プランの中型土壙。床面中央に剣１（第106図15）が出土している。確認面の西側に木蓋用と思われる堀り込みの一部が検出された。

ＳＫ27（第31図）　幅広の長方形プランの中型土壙。断面は方形を呈する。床面から浮いた状態で土器片１が出土している。

ＳＫ28（第31図）　楕円形気味の不定型プランの小型土壙。断面は逆台形。中央寄りの西側床面に鏃１（第106図14）を副葬している。また、北壁際では浮いた状態で土器片１が出土している。

ＳＫ29（第32図）　長方形プランの断面逆台形の中型土壙。

ＳＫ30（第32図）　やや幅広の長方形プランの大型土壙。断面は方形を呈する。北西角が中世の柱穴によって一部破損している。

ＳＫ31（第33図）　隅丸長方形プランの大型土壙。断面は袋状を呈する。

第17図　A地区土壙墓分布図

ＳＫ32（第33図）　やや幅広の長方形プランの小型土壙。断面は方形を呈している。南東壁際の床面に鏃１（第106図13）を出土している。

ＳＫ33（第34図）　やや幅広の長方形プランの小型土壙。断面は方形を呈している。

ＳＫ34（第34図）　長方形の断面台形の中型の土壙。掘り込み面の周囲に木蓋用の掘り込みが巡っている。

ＳＫ35（第35図）　長方形プランの断面逆台形の小型土壙。

ＳＫ36（第35図）　長方形プランの断面方形の中型土壙。土壙の掘り込み面に長軸132m、短軸110㎝の木蓋用の掘り込みが検出されている。南東側の掘り込みが若干広くなっている。

ＳＫ37（第36図）　長方形プランの中型土壙。断面は袋状の台形を呈する。

ＳＫ38（第36図）　楕円形プランの断面方形から台形状の大型土壙。南壁が中世の柱穴や地下式横穴墓の竪杭などによって毀損している。西寄りの床面に鏃１（第106図11）が出土している。

ＳＫ39（第37図）　長方形プランの中型土壙。断面は袋状の台形を呈する。掘り込み面に長軸125cm、短軸75cmの木蓋用の掘り込みが見られる。

ＳＫ40（第37図）　隅丸長方形プランの断面方形の中型土壙。北東角寄りの床面に鏃１（第106図16）と矢柄（第106図17）が出土している。

ＳＫ41（第38図）　長方形プランの断面方形の中型から大型にかけての土壙。北側は土取りによって崩壊している。

ＳＫ42（第39図）　幅広長方形プランの断面方形の中型土壙。

ＳＫ43（第39図）　隅丸長方形プランの断面逆台形の小型土壙。

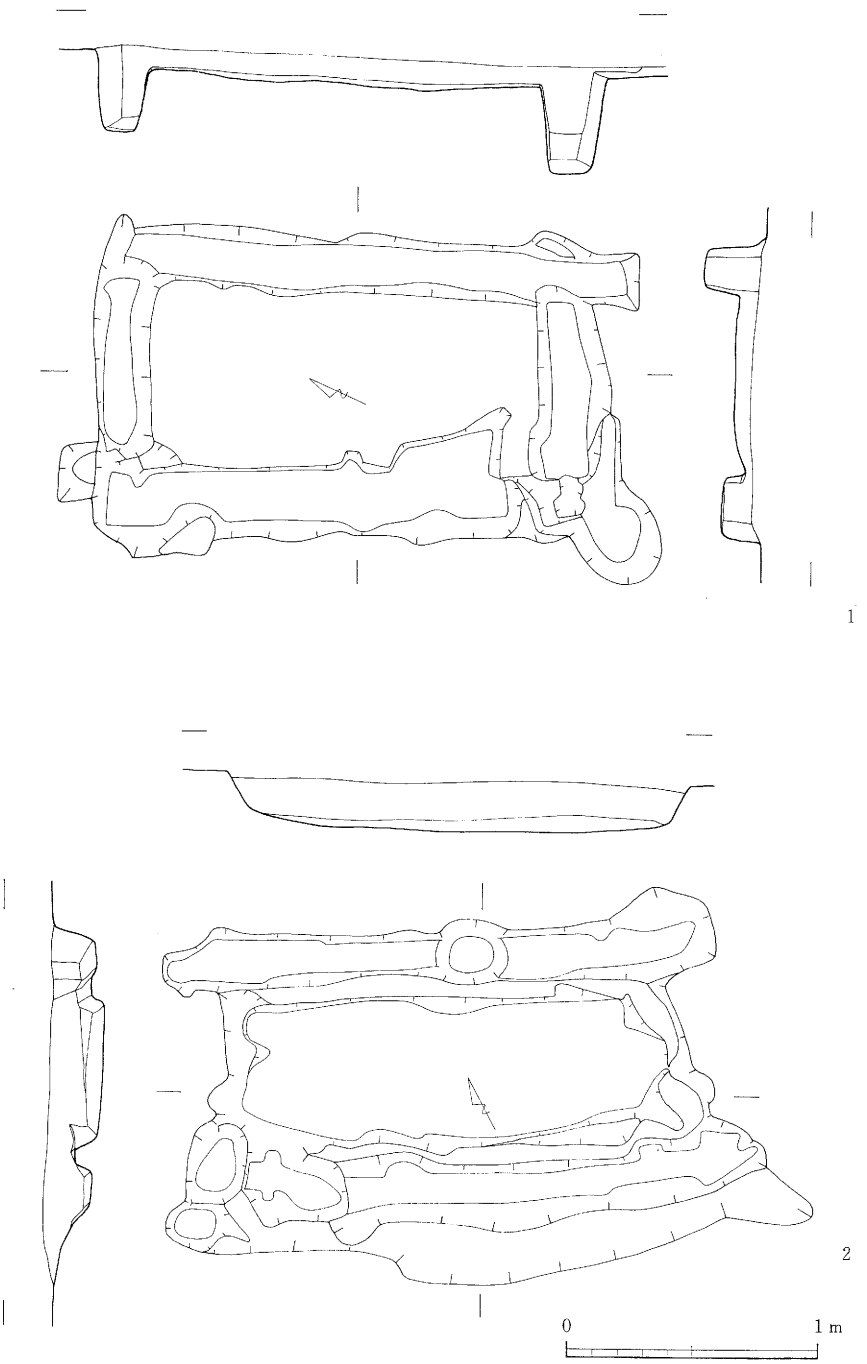
ＳＫ44（第39図）　長方形プランの断面逆台形の小型土壙。

ＳＫ45（第40図）　幅広長方形プランの断面台形の中型土壙。残存壁の状態からかなり内側へ傾く壁面が推定される。

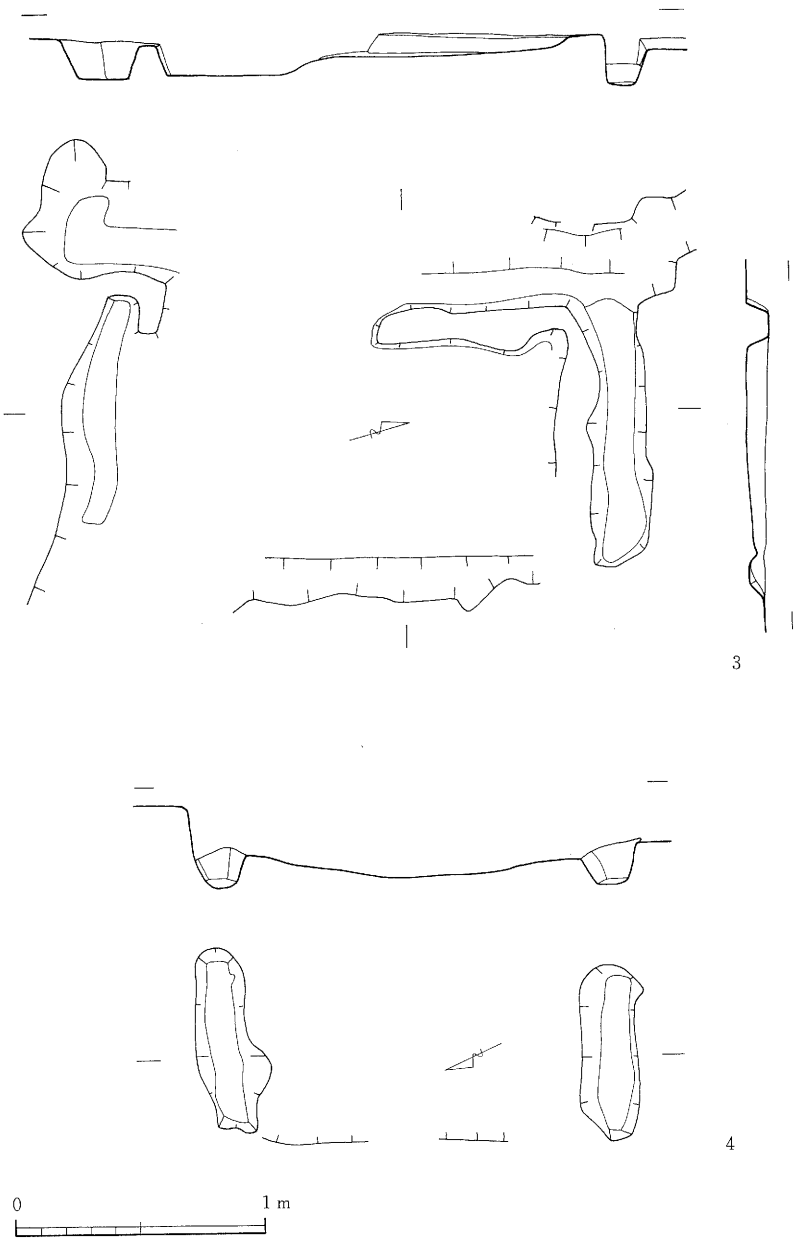
ＳＫ46（第40図）　長方形プランの大型土壙であるが北東角が崩れている。断面は一部逆台形を呈しているが基本的には方形である。

ＳＫ47（第41図）　隅丸長方形プランの断面逆台形の中型土壙。

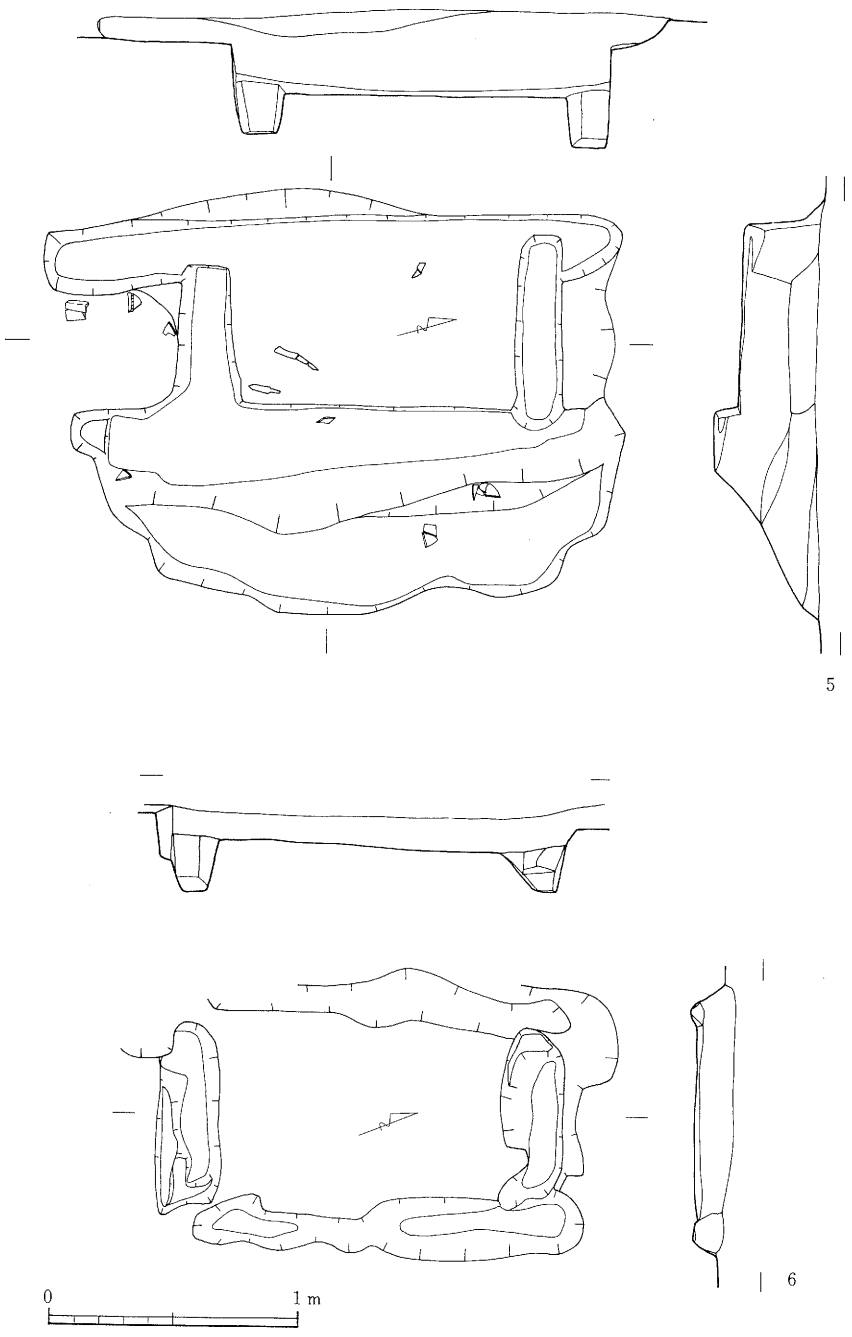
ＳＫ48（第41図）　幅広長方形プランの断面方形の小型土壙。南角や北壁際の床面を中心に鏃６（第106図22～30）が出土している。しかし、10cmほどしか壁面が残存しておらず原位置での出土かは明確ではない。



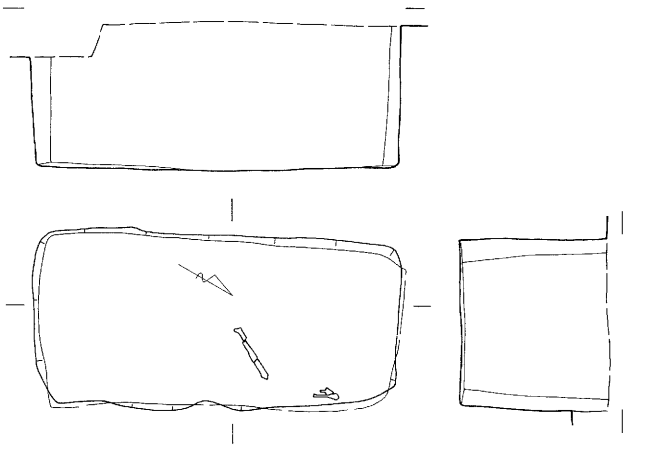
第18図　ＳＫ１，２遺構実測図

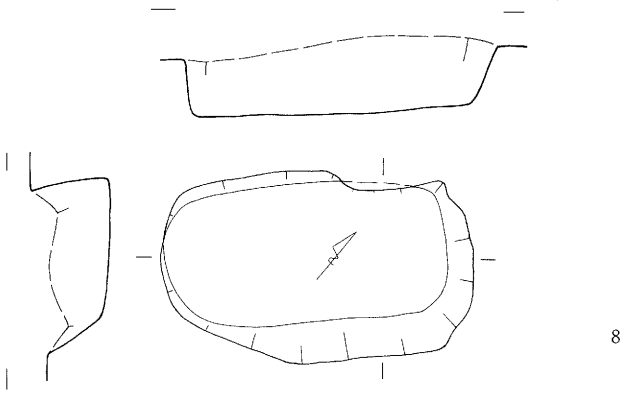


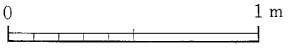
第19図　ＳＫ３，４遺構実測図



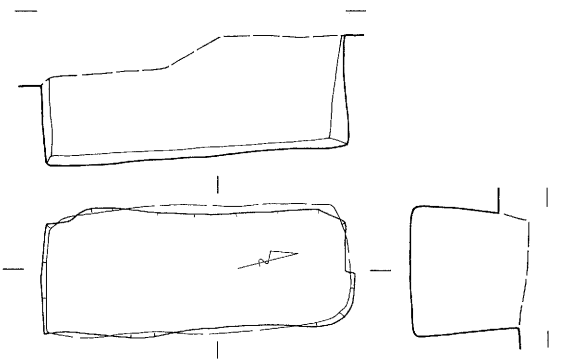
第20図　ＳＫ５，６遺構実測図

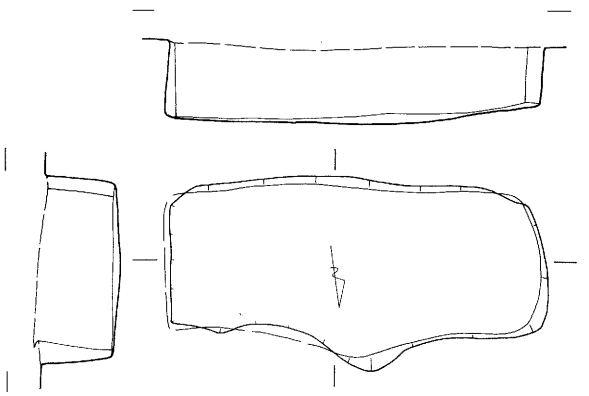


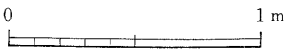




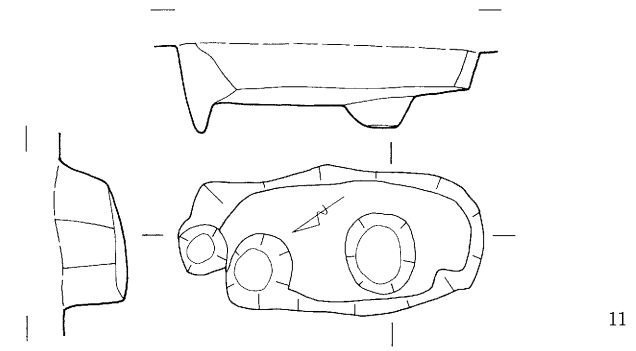
第21図　ＳＫ７・８遺構実測図

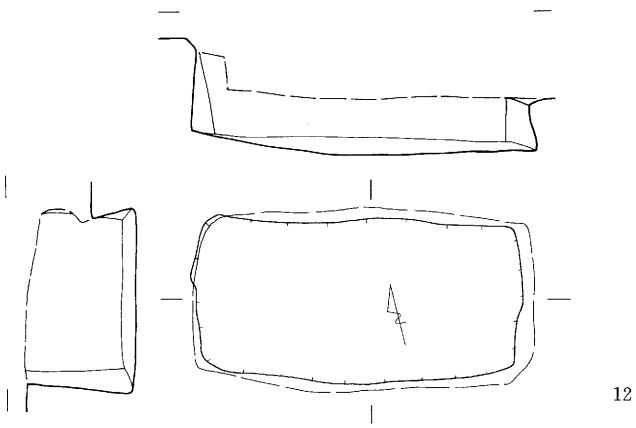




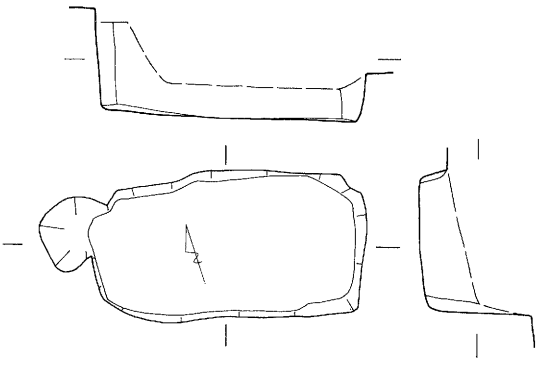


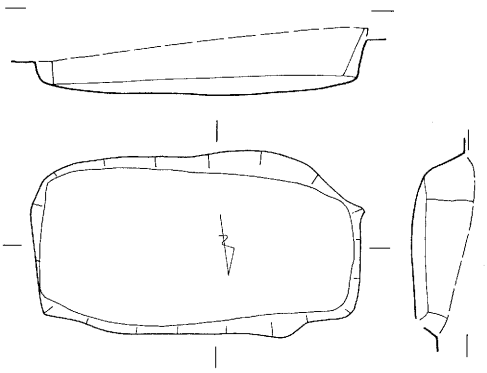
第22図　ＳＫ９・10遺構実測図



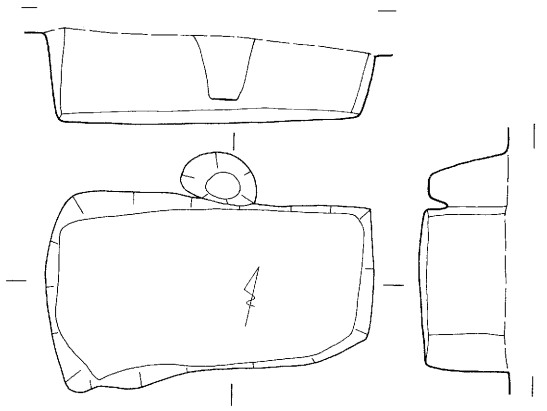


第23図　ＳＫ11・12遺構実測図

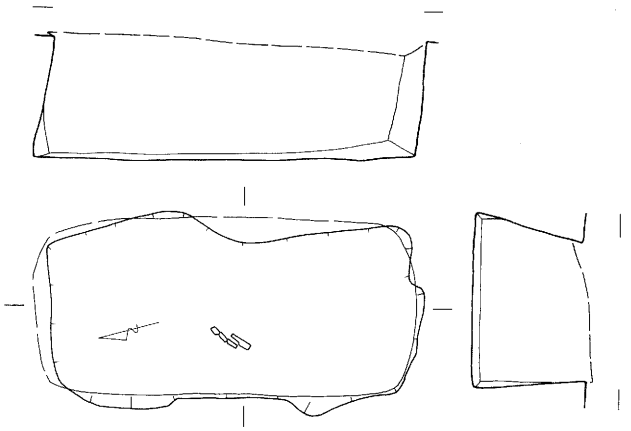




第24図　ＳＫ13・14遺構実測図

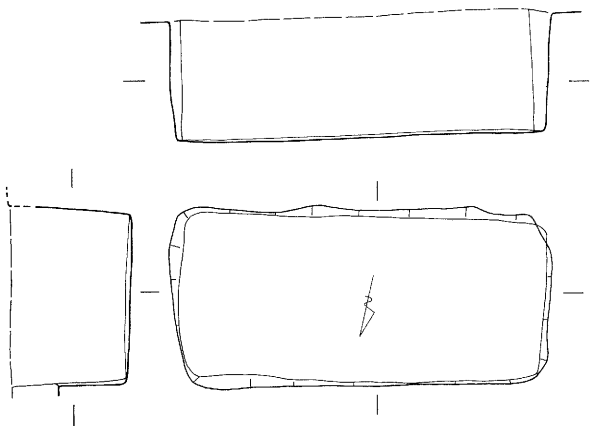


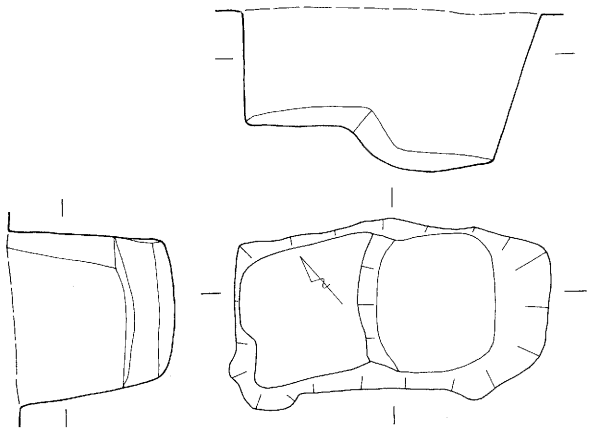
15

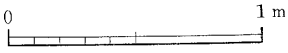


16

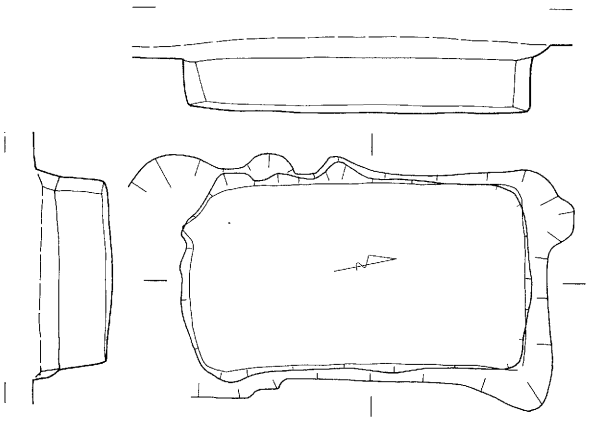
第25図　ＳＫ15・16遺構実測図

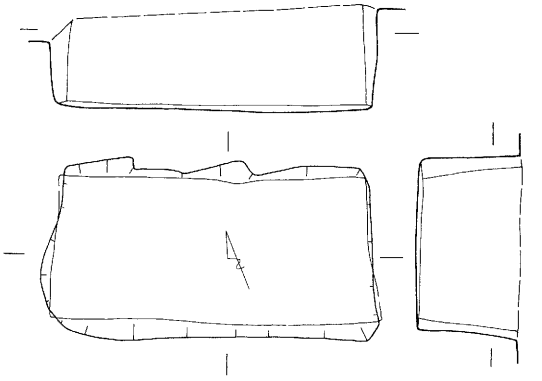


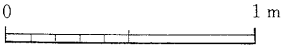




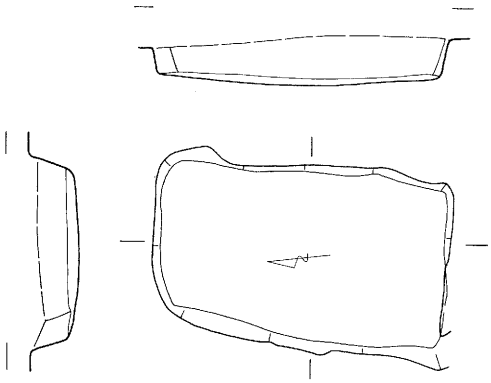
第26図　ＳＫ17・18遺構実測図

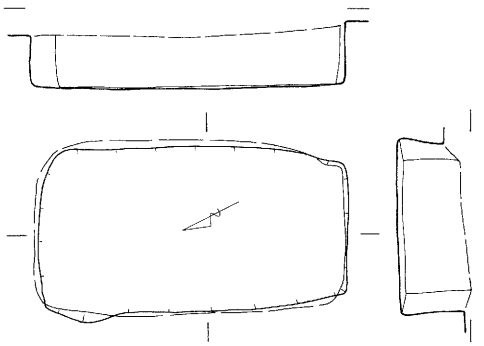


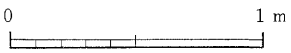




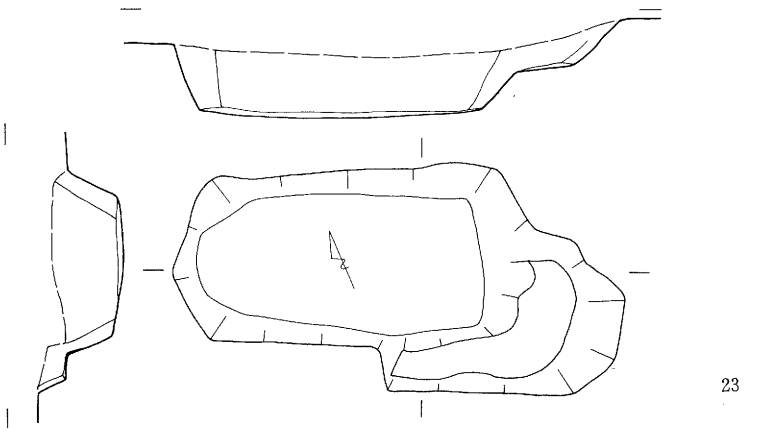
第27図　ＳＫ19・20遺構実測図

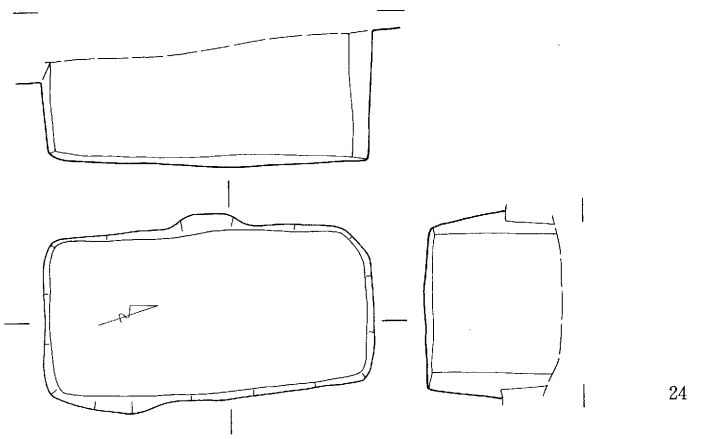


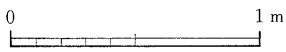




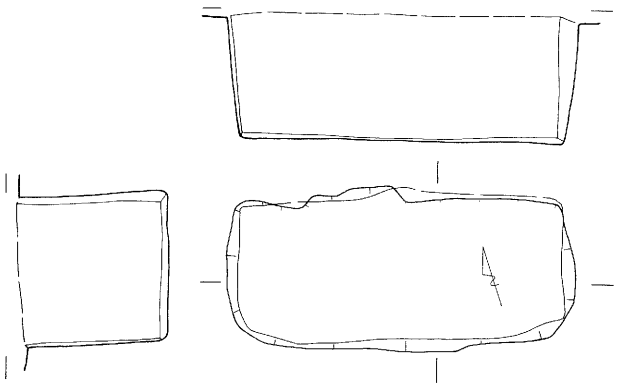
第28図　ＳＫ21・22遺構実測図

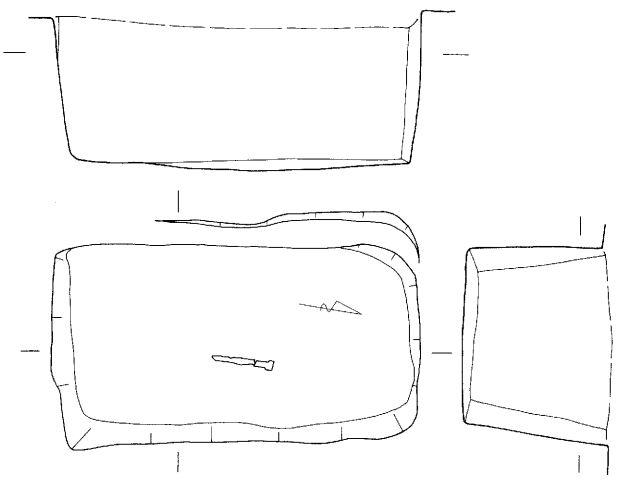




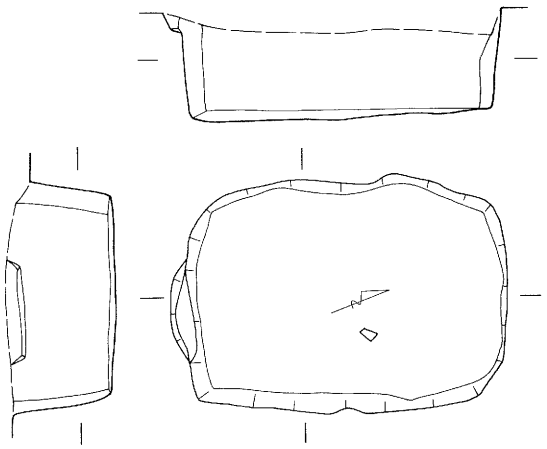


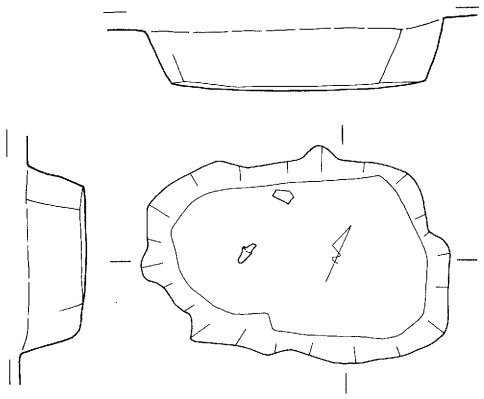
第29図　ＳＫ23・24遺構実測図



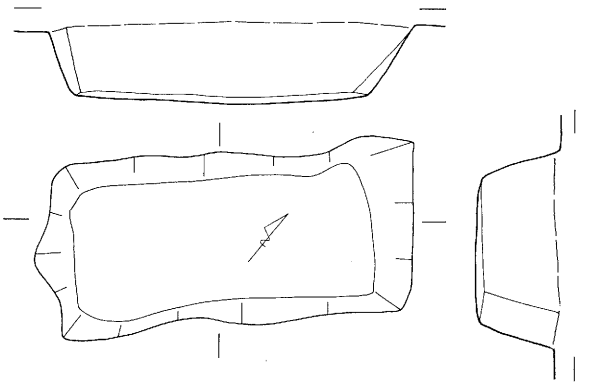


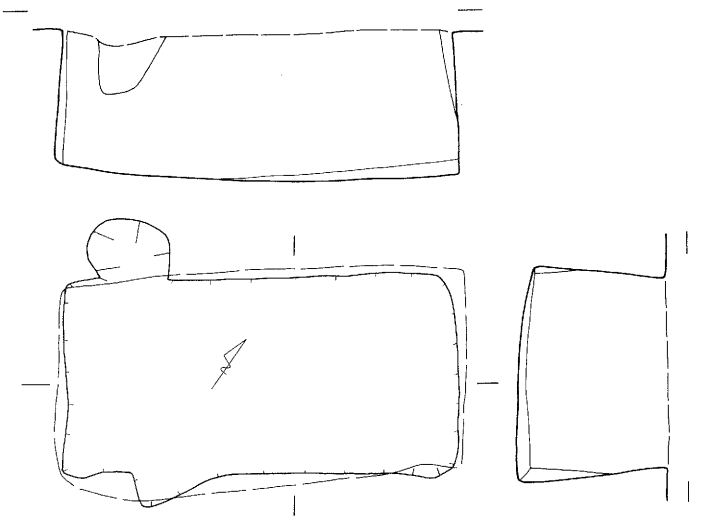
第30図　ＳＫ25・26遺構実測図

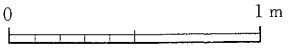




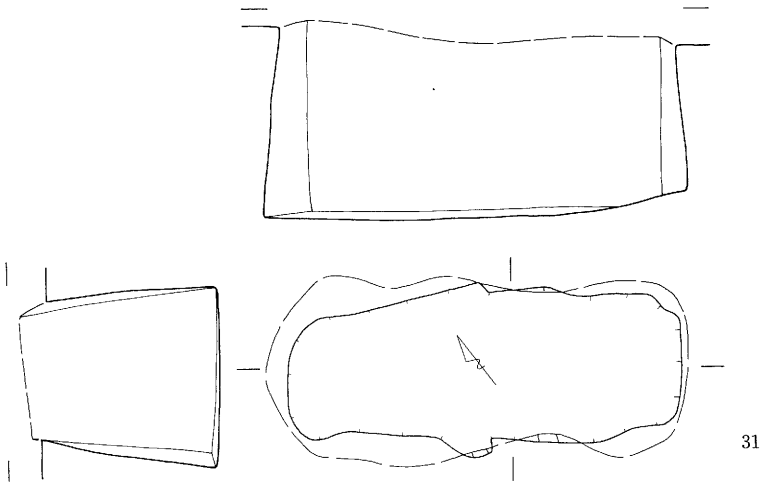
第31図　ＳＫ27・28遺構実測図

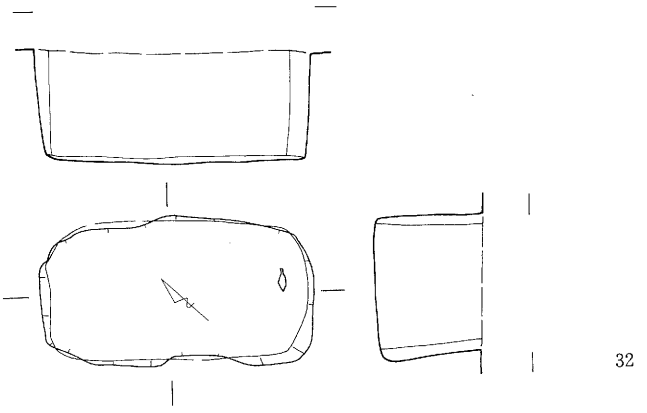




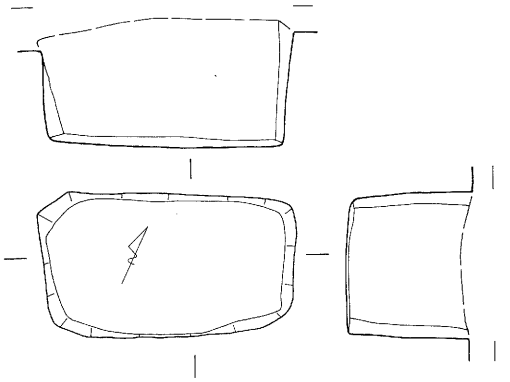


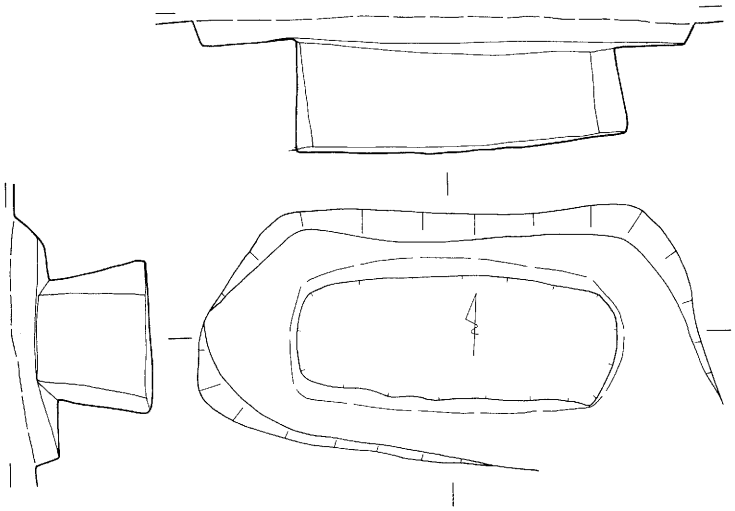
第32図　ＳＫ29・30遺構実測図

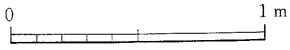




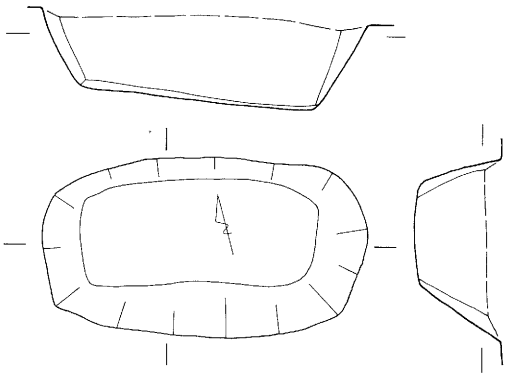
第33図　ＳＫ31・32遺構実測図



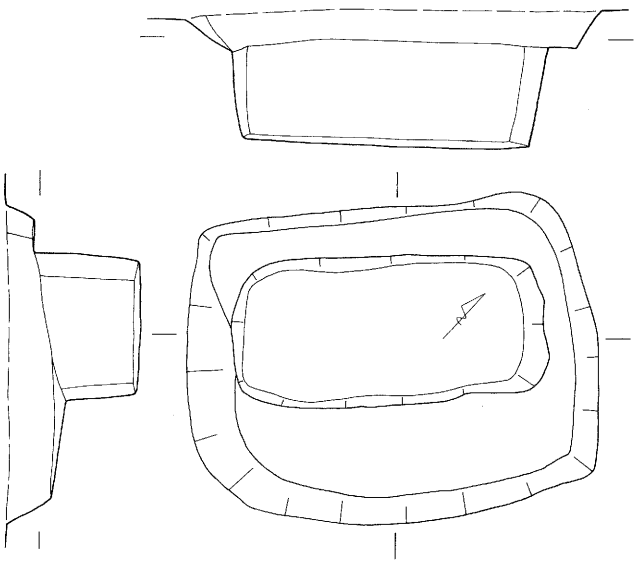




第34図　ＳＫ33・34遺構実測図



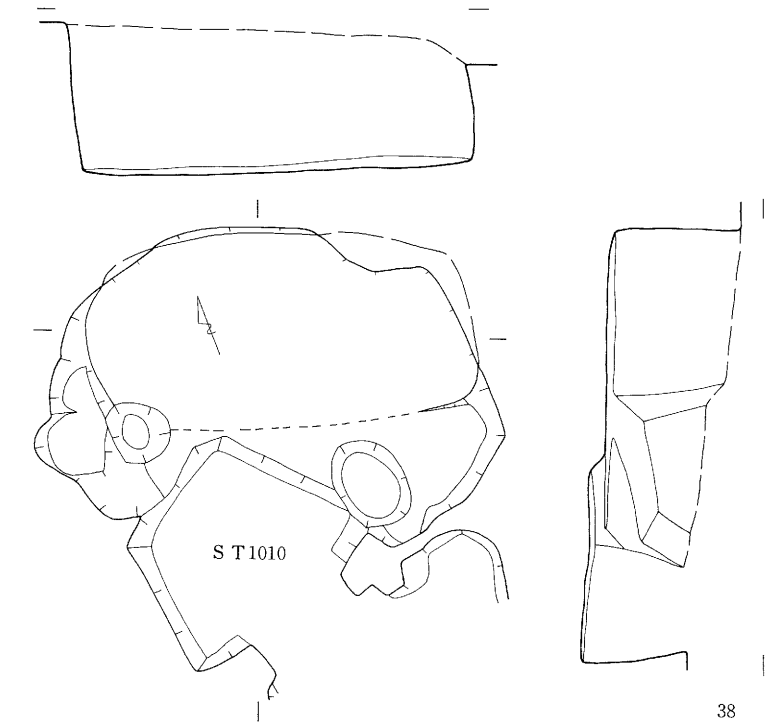
35



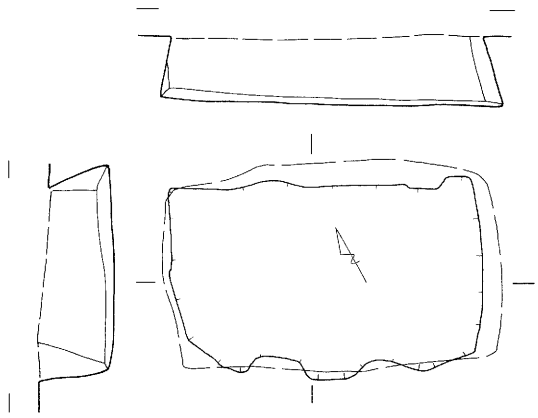
36

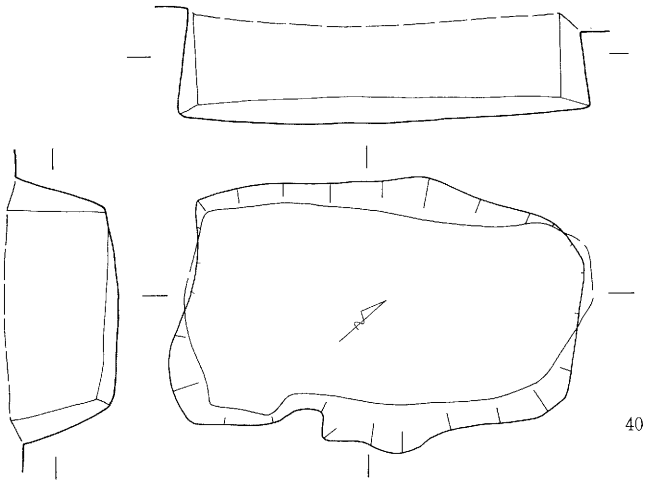
0　1 m

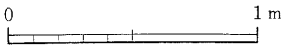
第35図　ＳＫ35・36遺構実測図



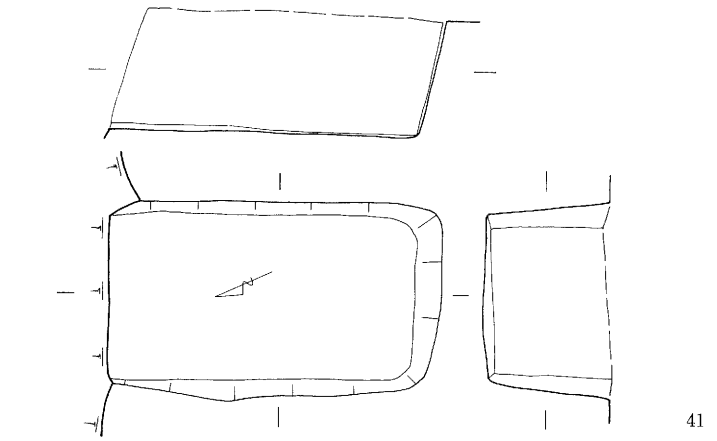
第36図　ＳＫ37・38遺構実測図

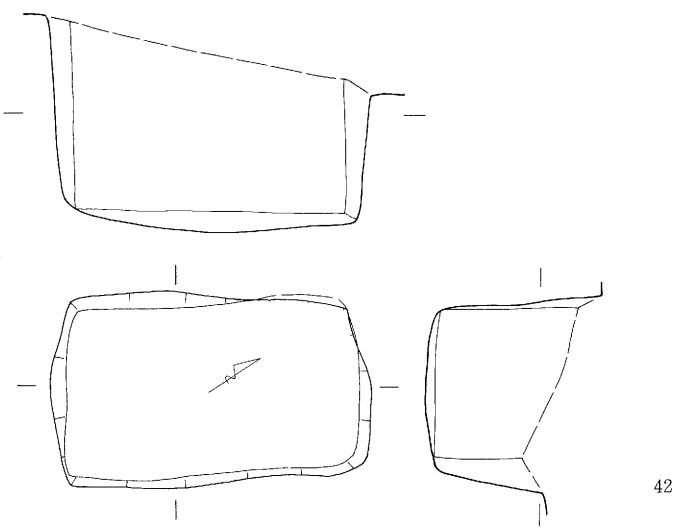


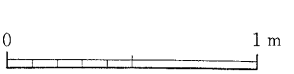




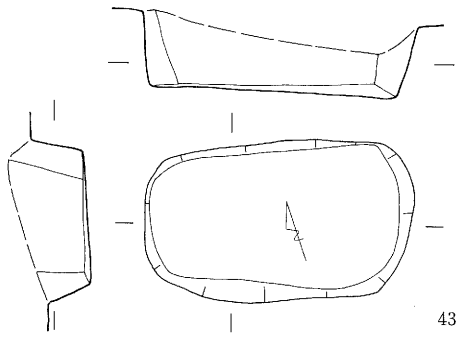
第37図　ＳＫ39・40遺構実測図

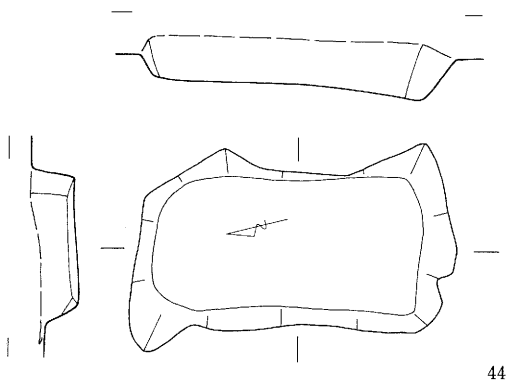


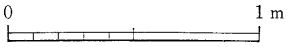




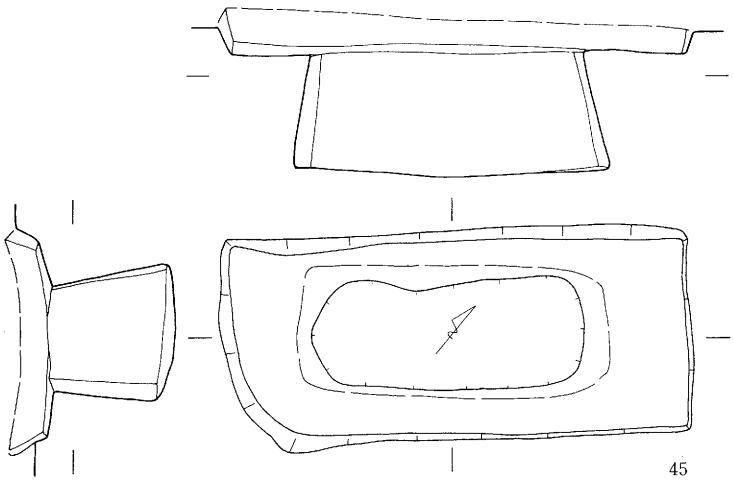
第38図　ＳＫ41・42遺構実測図

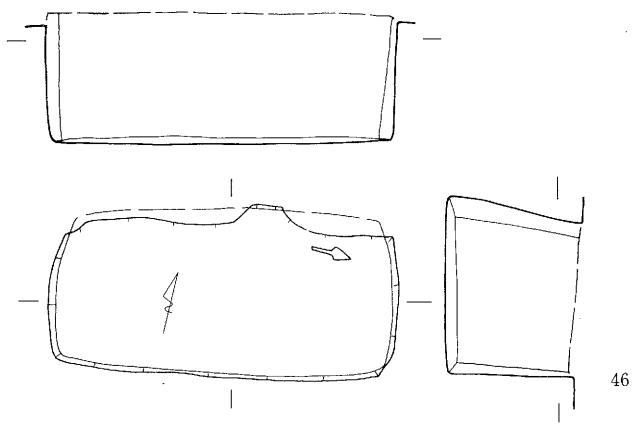


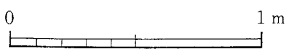




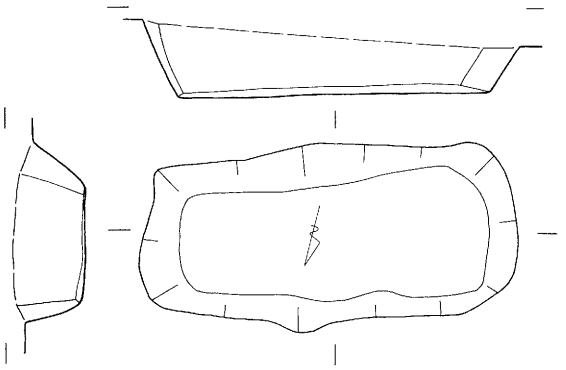
第39図　ＳＫ43・44遺構実測図

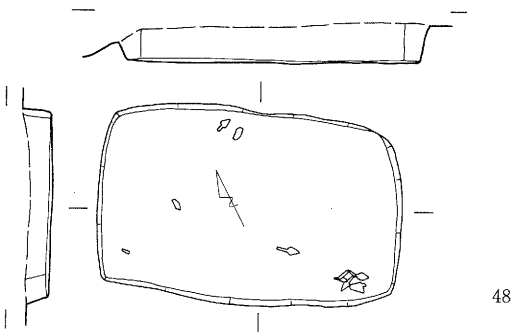


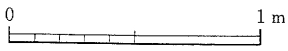




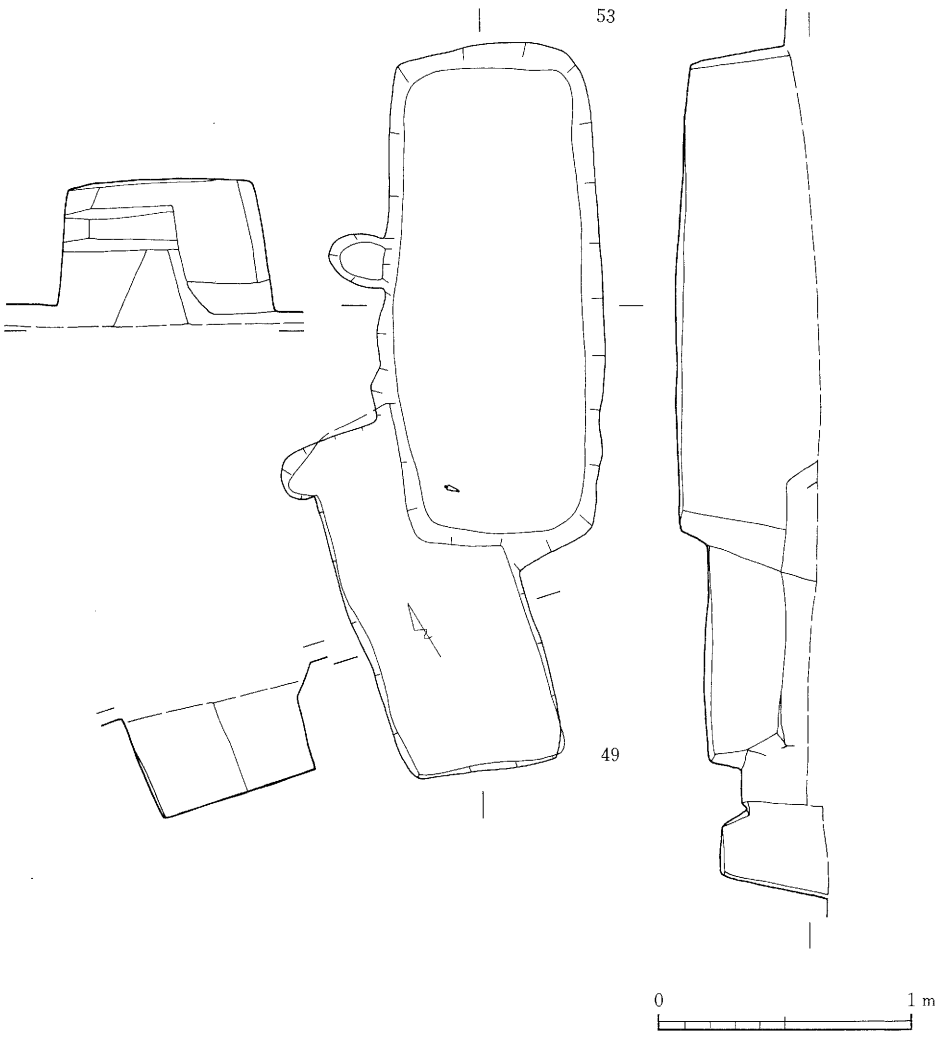
第40図　ＳＫ45・46遺構実測図



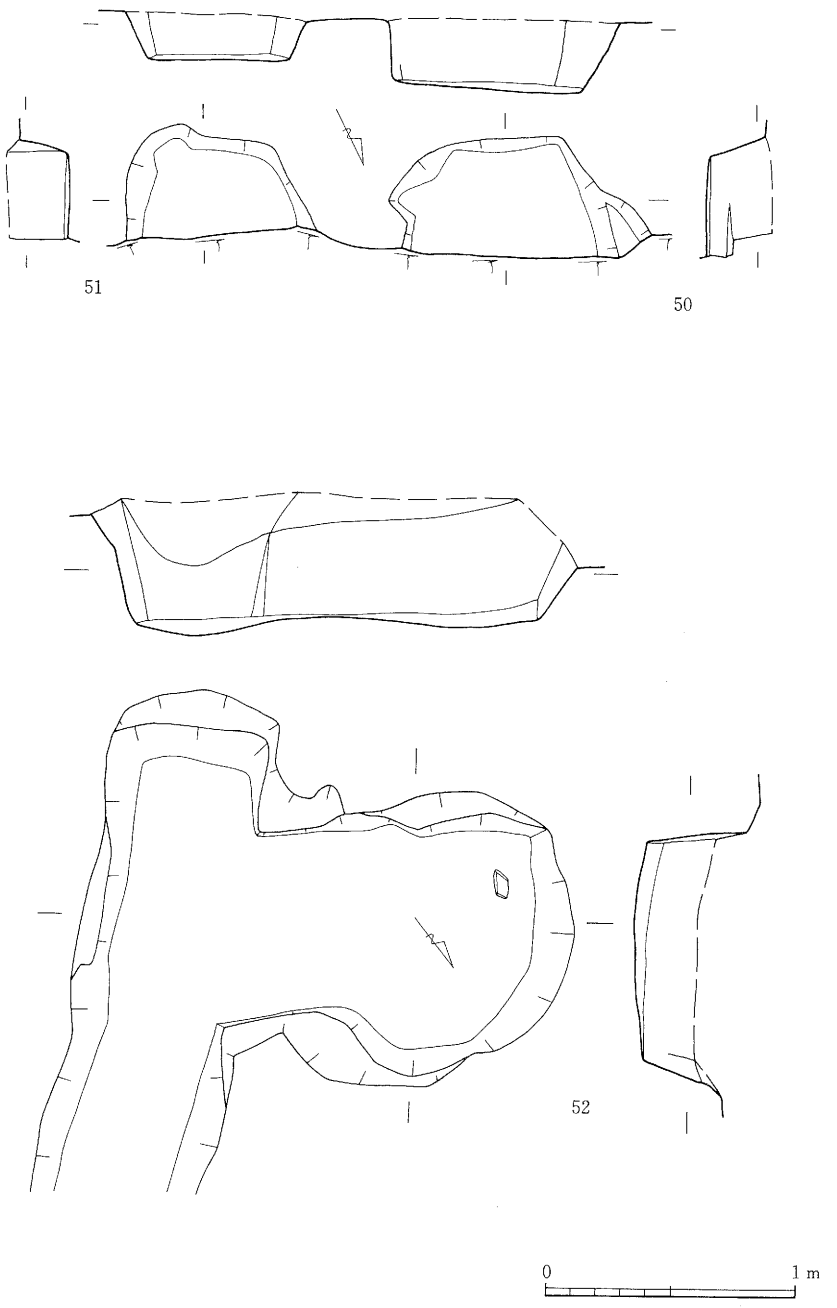




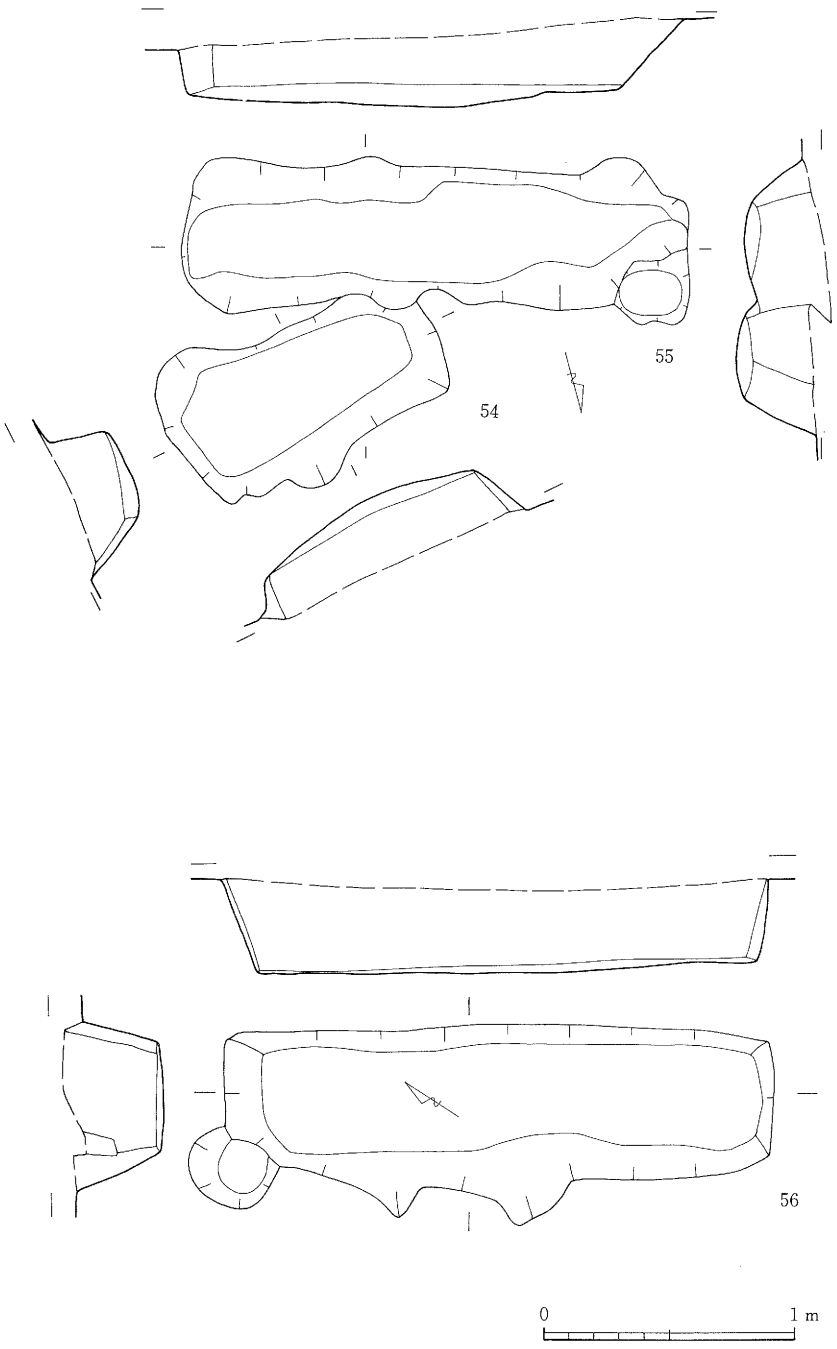
第41図　ＳＫ47・48遺構実測図



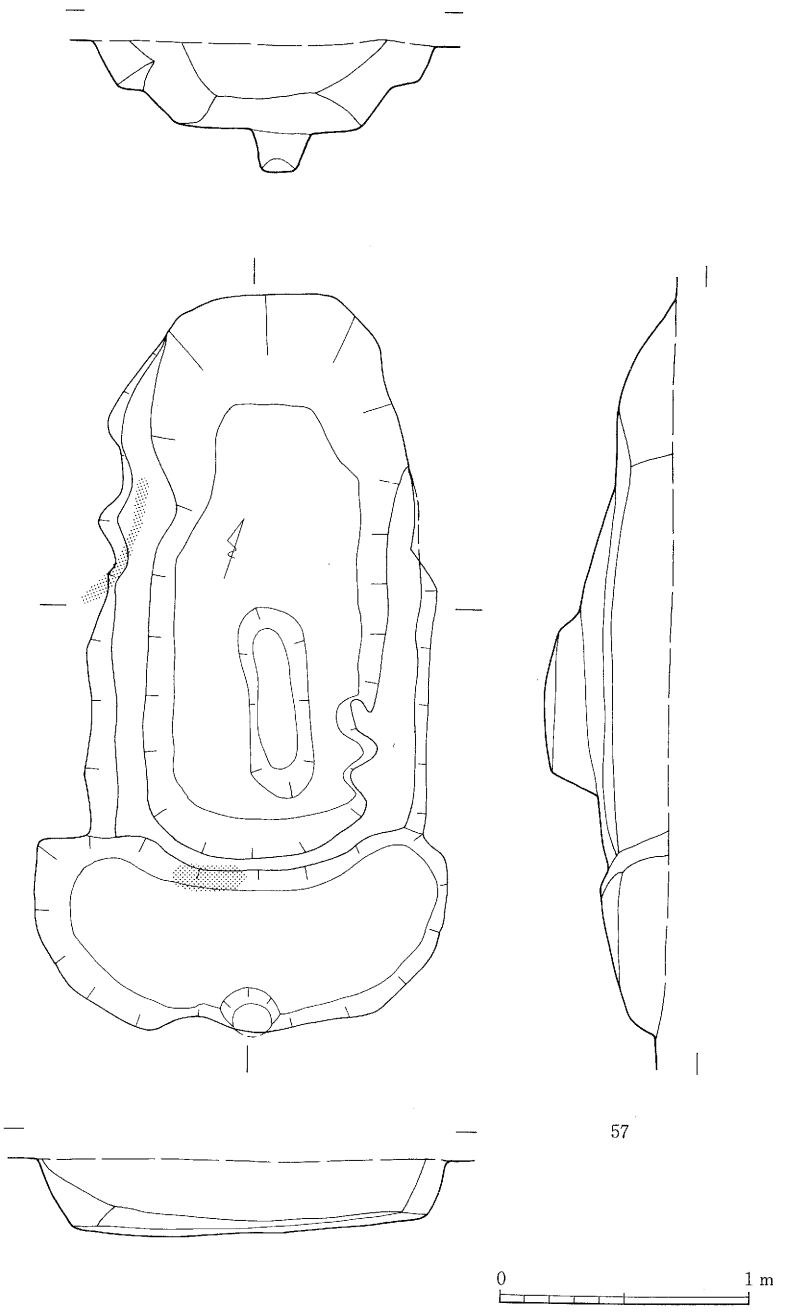
第42図　ＳＫ49・53遺構実測図



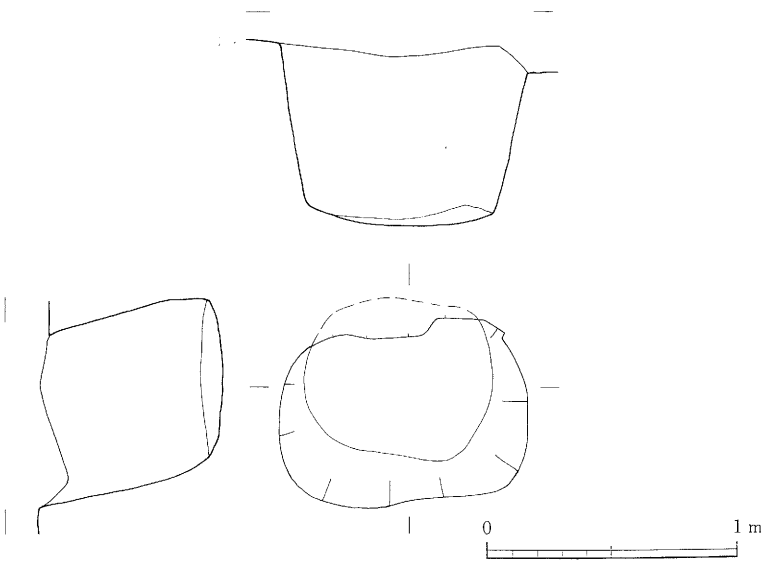
第43図　ＳＫ50・51・52遺構実測図



第44図　ＳＫ54・55・56遺構実測図



第45図　ＳＫ57遺構実測図



第46図　ＳＫ58遺構実測図

ＳＫ49（第42図）　長方形プランの断面方形の中型土壙。北側をＳＫ53によって切られている。西壁寄りの床面に欠損した剣１（第106図12）が出土している。

ＳＫ50・ＳＫ51（第43図）　いずれも北側を土取りによって大半を毀損している。

ＳＫ52（第43図）　近世以降の攪乱によって東側が毀損している。西壁際に浮いた状態で土器１が出土している。

ＳＫ53（第42図）　ＳＫ49と切りあって検出された。長方形プランでやや逆台形状の断面を呈する。埋土中に釘状の鉄片が数点見られる。

ＳＫ54（第44図）　ＳＫ55と隣接して検出された。断面逆台形の小型土壙。

ＳＫ55（第44図）　断面逆台形の大型の細長土壙。西側を中世の柱穴で破損している。

ＳＫ56（第44図）　断面逆台形の大型の細長土壙。長方形プランを呈する。

ＳＫ57（第45図）　楕円形プランを基本とする主土壙と三ヵ月形の浅い土壙の組み合わさった変形の大型土壙。主土壙は三段に掘り込まれており二段目が床面と思われる。上面では朱が検出されている。

ＳＫ58（第46図）　円形プランの小型土壙。床面は北側に入り込む形になっている。

(3) 地下式横穴墓（ＳＴ）

Ａ地区北西遺構群北側で16基、同南側で８基、Ｂ地区遺構群で43基合計69基の地下式横穴墓が検出された。

Ａ地区遺構群北側

16基の地下式横穴墓が検出された、この内８基は横口系の竪坑をもつ地下式横穴墓で、他は羨門閉塞の地下式横穴墓である。主軸に規則性は見られないが大半は微高地頂部より若干下がった同等高線上に分布し、標高の高い方向に玄室を堀り込んでいる。

ＳＴ1001（第48図）　長方形プランで断面台形の大型土壙を玄室にする。長辺中央に半円形プランの小型の横口系の竪坑を持つ。玄室は竪坑より深く堀り込まれている。竪坑と玄室の間は一段高い羨道で続く。羨門に当る位置には右側壁に板閉塞の溝が堀り込んである。羨門から玄室にかけて高坏の坏部片（第105図52）が出土した。

ＳＴ1002（第48図）　やや幅広長方形プランで断面方形の大型土壙を玄室にする。長辺中央に半円形プランの小型の横口系の竪坑を持つ。玄室は竪坑より深く堀り込んである。竪坑と玄室の間には羨道があり羨門に当る位置の床面には板閉塞の溝が堀り込んである。

ＳＴ1003（第59図）　やや幅広長方形プランで断面方形の大型土壙を玄室にする。長辺中央より右側に長方形プランの横口系の竪坑を持つ。玄室は竪坑より深く堀り込んである。竪坑と玄室の間には羨道があり羨門に当る位置の床面には板閉塞の溝が堀り込んである。床面より鏃３（第106図33～35）が出土したほか竪坑検出レベルで長頸壺（第104図39）の胴部が出土している。

ＳＴ1004（第59図）　隅丸長方形プランの玄室の長辺側に長方形の横口系の竪坑を堀り込む。羨道は細くくびれる。竪坑から羨道までの床面は同レベルで、玄室は一段下がる。

ＳＴ1005（第50図）　幅広長方形プランで断面台形の土壙を玄室にする。長辺中央に円形状の横口系の竪坑を堀り込む。羨道はわずかに見られ一段低く玄室が造られている。やや東よりの床面に紡錘車１（第106図①）が出土している。

ＳＴ1006（第50図）　幅広長方形プランの小型土壙を玄室にする。片袖気味に位置する長方形プランの横口系の竪坑は玄室より深く堀り込んでいる。玄室より一段高く短い羨道が造られている。羨門壁に板閉塞の溝が堀り込まれている。

ＳＴ1007（第51図）　平入り楕円形プランの玄室に細長い長方形プランの竪坑を持つ。板

閉塞の溝が羨門壁際に堀り込んである。

ＳＴ1008（第51図）　隅丸長方形プランの玄室の長辺側東寄りに一段高く隅丸長方形の横口系の竪坑を造る。北東角床面に剣１（第106図36）が出土している。また竪坑検出レベルの玄室上部から長頸壺（第104図37）が完形で出土した。

ＳＴ1009（第52図）　長方形プランの断面方形の玄室に方形プランの竪坑を持つ。床面は竪坑から玄室にかけてフラットである。

ＳＴ1010（第53図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井は崩壊しているがドーム形と思われる。やや東側に羨道が偏る。竪坑を攪乱で毀損する。

ＳＴ1011（第54図）　羨門閉塞のタイプ。円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井はドーム形を呈する。やや南寄りに方形プランの小型の竪坑が堀り込まれている。竪坑から玄室にかけて床面は傾斜する。奥壁際に剣１（第107図37）と鏃１（第107図38）が出土している。

ＳＴ1012（第55図）　羨門閉塞のタイプ。隅丸長方形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井はドーム形だが高さ50cmと低い造りである。右袖際に鏃１（第107図39）が出土している。

ＳＴ1013（第56図）　羨門閉塞のタイプ。円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室で天井は崩壊する。羨道は長めで竪坑から羨道にかけて床面が傾斜する。さらに玄室は一段下がって堀り込まれている。確認面全域にかけて攪乱のため上部が毀損している。

ＳＴ1014（第57図）　羨門閉塞のタイプ。隅丸長方形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井は平造りで高さ約50cmと低い。奥壁中央に鏃２（第107図40・41）が出土している。

ＳＴ1015（第58図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井部は崩壊している。羨道から玄室にかけて傾斜する。右壁際に鏃５（第107図42～46）が出土した。また、竪坑上部および南側に土器（第102図17、第104図49、第105図56・57）が集中して出土した。

ＳＴ1016（第59図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形状プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井は平造りで低い。竪坑と玄室のほぼ同規模である。羨道は玄室側に開き気味に造られている。剣１（第107図47）が出土している。

ＳＴ1017（第60図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井部はドーム形で低い造りである。中央よりやや羨門側に鏃３（第107図48～50）が出土している。

第47図　A 地区地下式横穴墓分布図

ＳＴ1018（第61図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井部は崩壊している。羨門の天井は押し潰されてしまっている。竪坑の規模が玄室より大きく堀り込まれている。剣２（第108図55・52）が出土している。

Ａ地区遺構群南側

８基が分布する。ＳＴ1019～ＳＴ1022の４基の羨門閉塞タイプの一群、羨門閉塞タイプのＳＴ1023と竪坑上部閉塞タイプのＳＴ1024、さらに竪坑上部閉塞タイプのＳＴ1025とＳＴ1026の３グループの分布が見られる。いずれも竪坑から北方向に向って玄室が構築されている。

ＳＴ1019（第62図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランでやや右寄りに両袖を持つ平入り構造の玄室。天井部はドーム造りである。右袖際に鏃１（第107図53）が出土している。

ＳＴ1020（第63図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。天井は崩壊する。羨道は若干長いが幅が狭い。竪坑は羨門に向って傾斜し、さらに玄室は一段下がって堀り込まれている。奥壁際の中央に鏃４（第107図55～58)、右角に剣１（第108図54）が出土している。天井部はドーム造りである。

ＳＴ1021（第64図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランのやや右寄りに両袖を持つ平入り構造の玄室。天井部はドーム造りである。羨道は若干細長く造られている。竪坑から羨道にかけて床面がやや傾斜する。

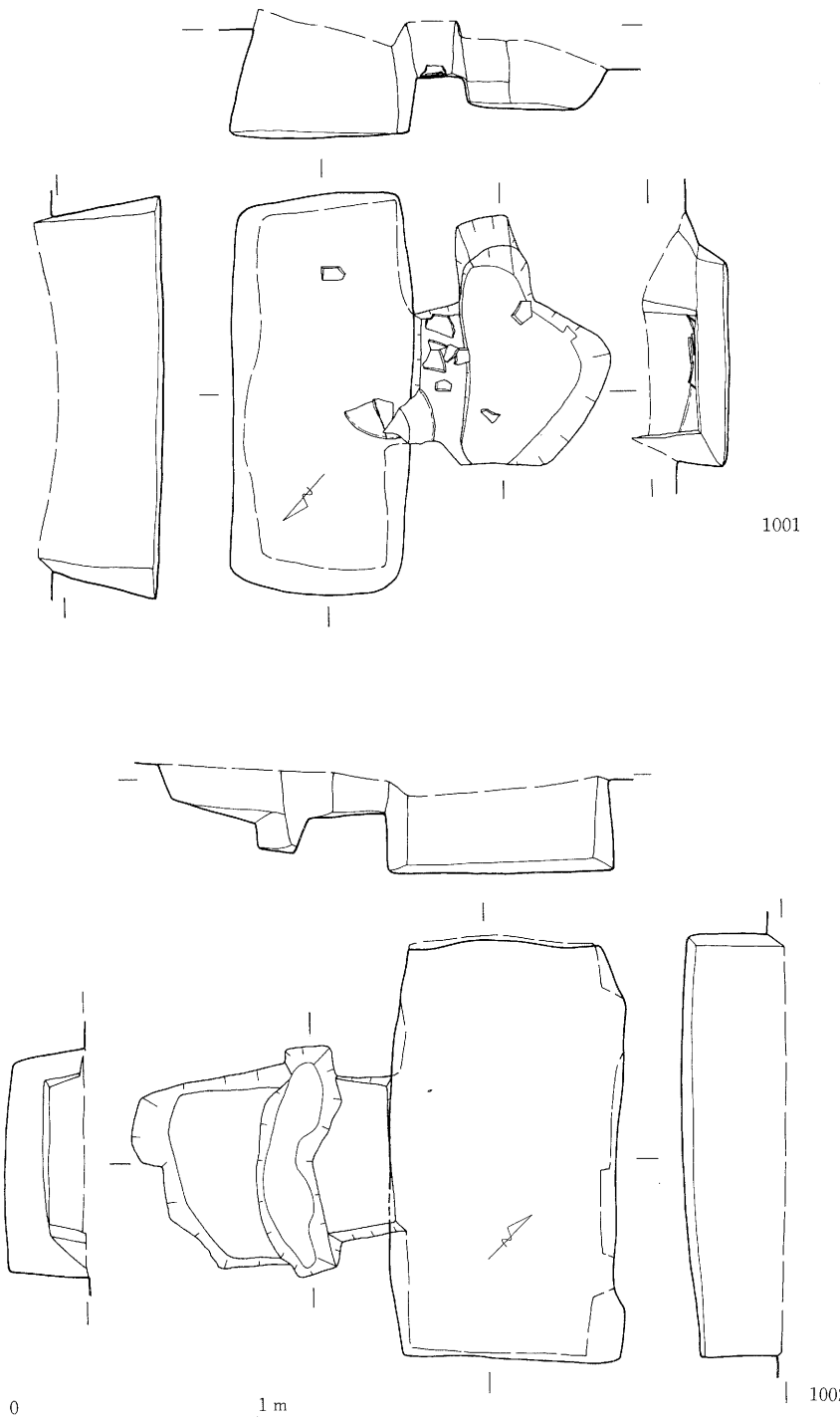
ＳＴ1022（第65図）　羨門閉塞のタイプ。隅丸長方形プランの両袖を持つ玄室。天井部は崩壊している。竪坑から羨道に向って床面が傾斜する。奥壁中央に剣１（第107図59)、右角に剣１（第107図60）が出土している。

ＳＴ1023（第66図）　羨門閉塞のタイプ。隅丸長方形プランでやや右寄りに両袖を持つ玄室。天井部は崩壊している。羨門は細長く造られている。竪坑は玄室より一段深く堀り込まれている。右壁奥で剣(第107図51)、羨門近くで剣(第107図52)、鏃が出土している。

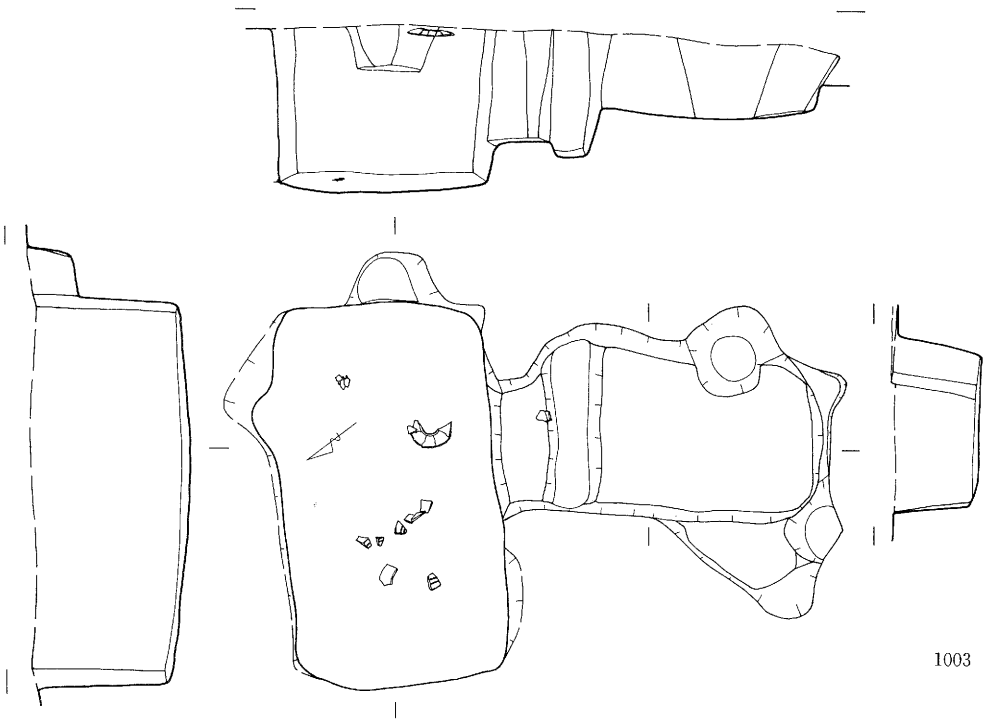
ＳＴ1024（第67図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。

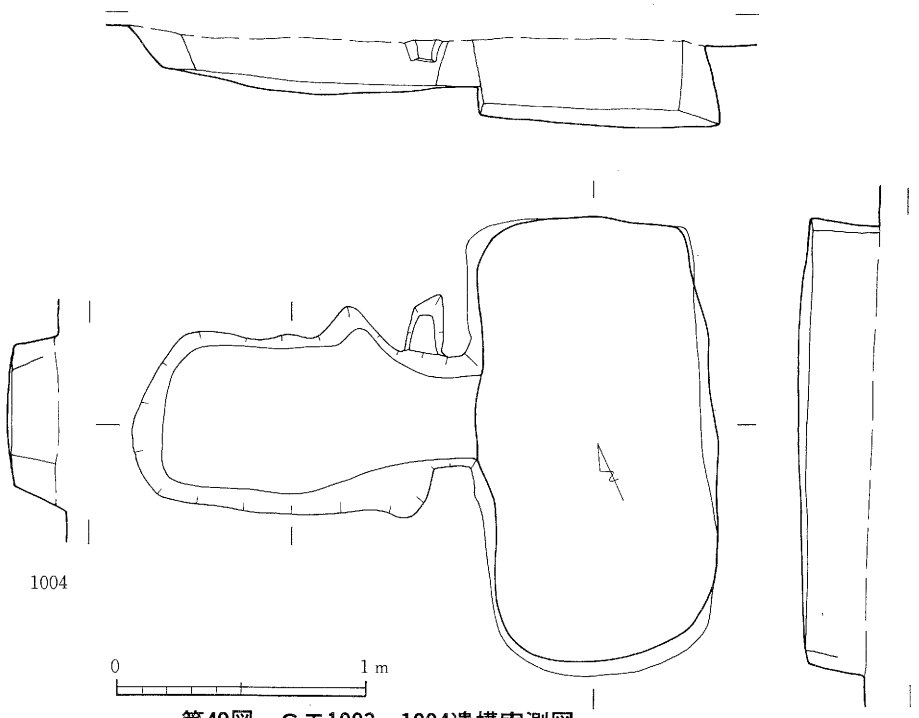
ＳＴ1025（第68図）　竪坑上部閉塞のタイプ。隅丸長方形プランの両袖を持つ玄室。天井は寄棟造りを呈する。竪抗上面には塞用の方形の堀り込みがあり２段堀りになっている。竪坑の周囲に粘土を敷き、大型の偏平石で閉塞する。さらに丸石で隙間を充填している。右壁側に剣１（第107図63)、鏃２（第107図61・62）が出土している。

ＳＴ1026（第69図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランでかなり右側に寄った両袖を

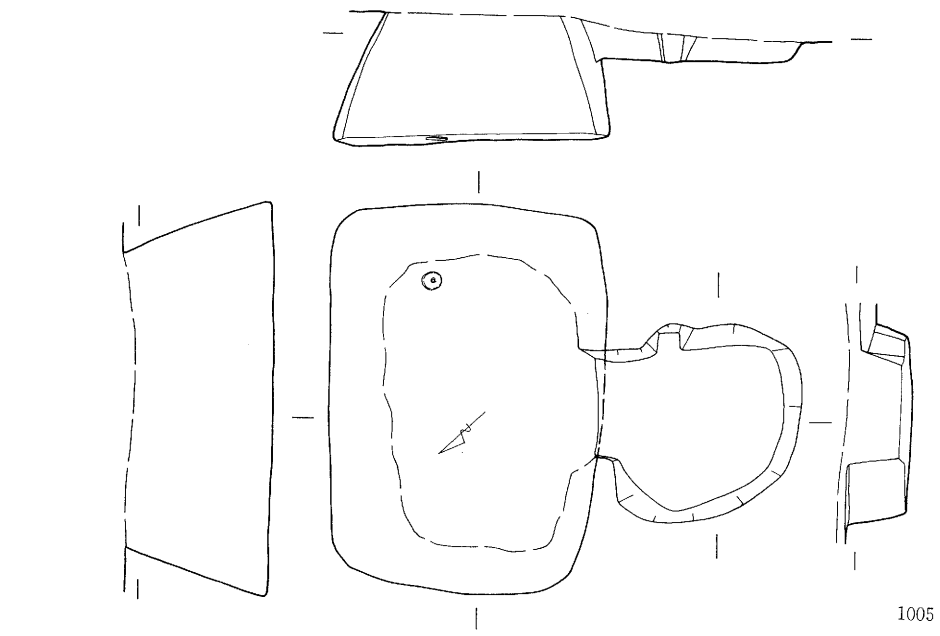


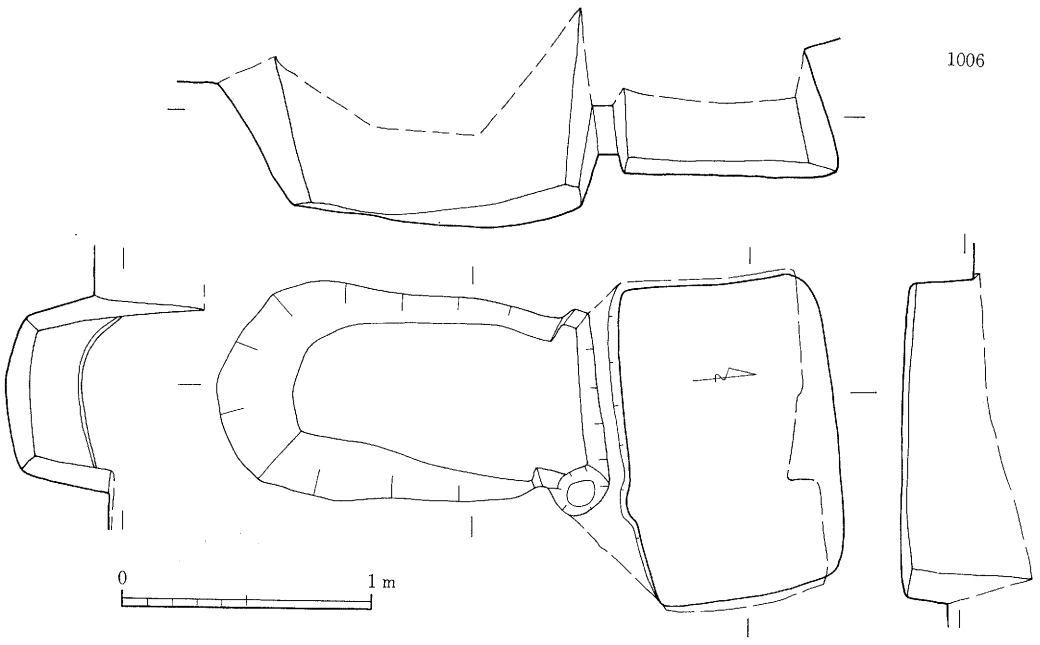
第48図　ＳＴ1001，1002遺構実測図



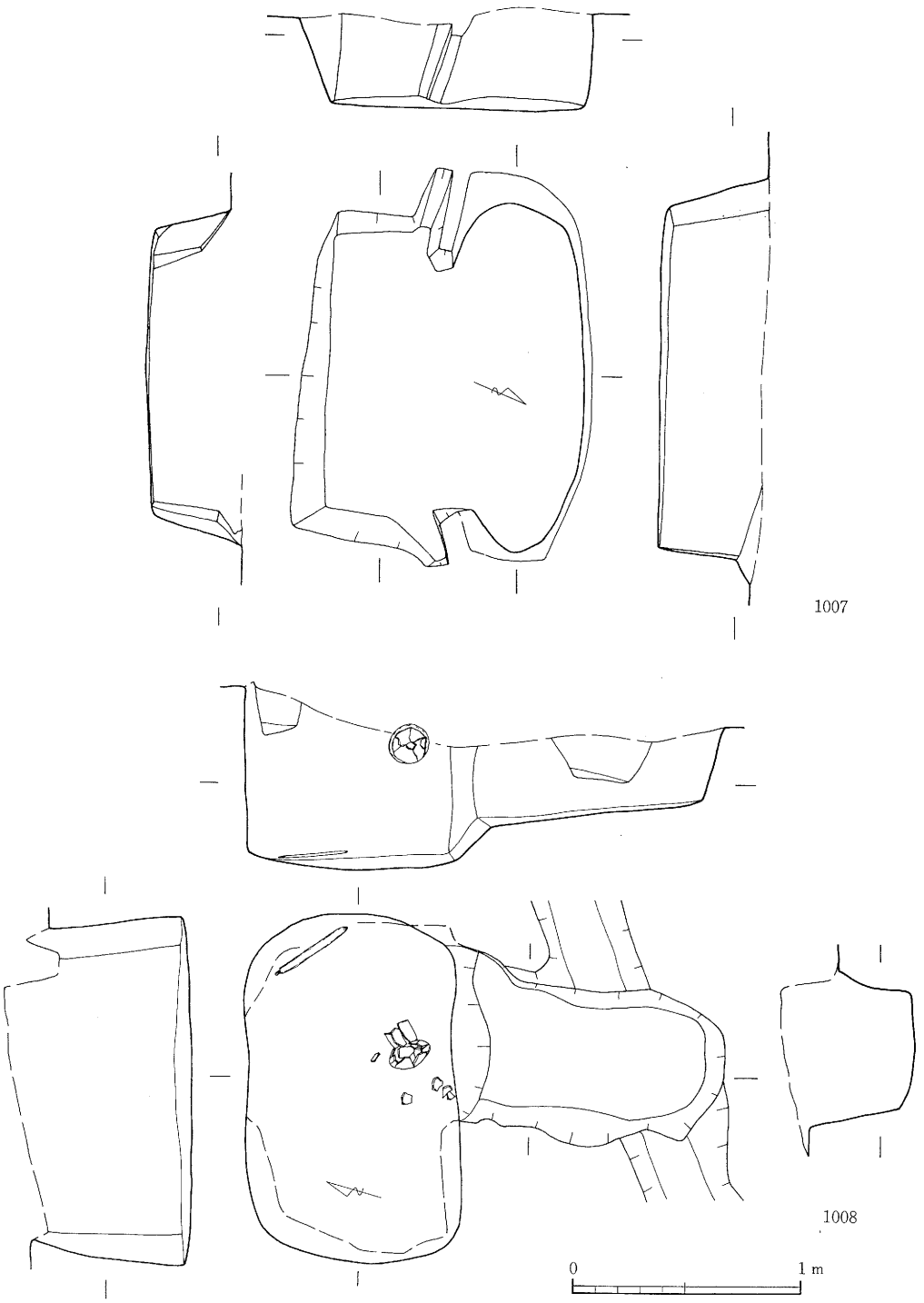


第49図　ＳＴ1003，1004遺構実測図

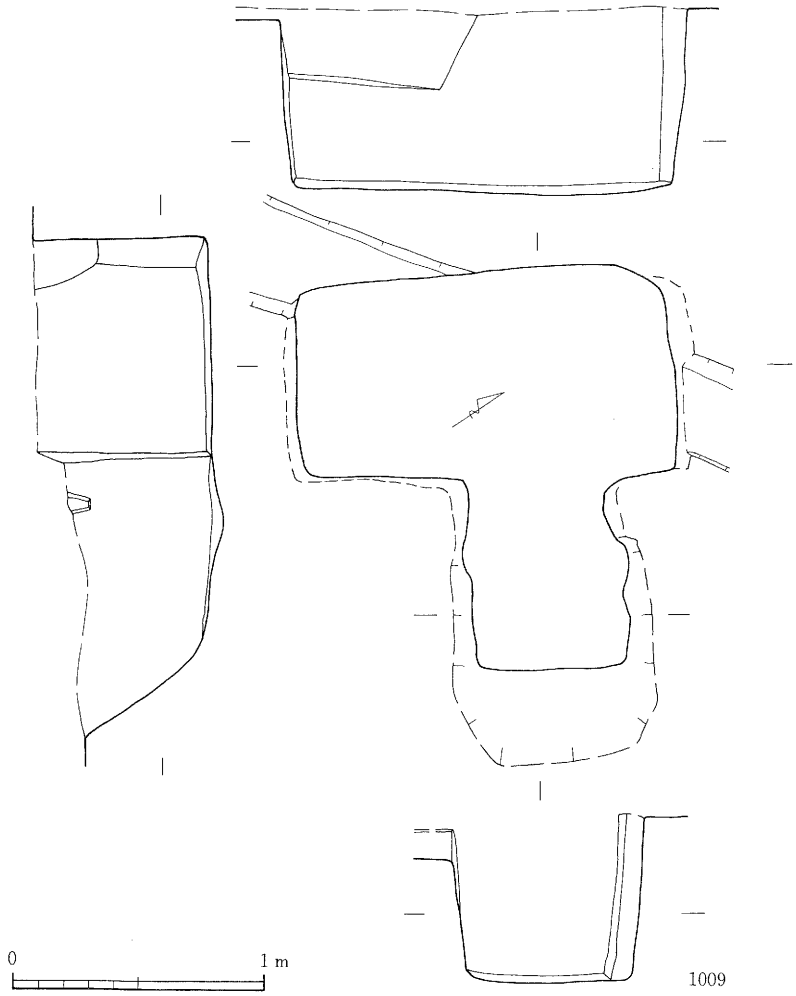




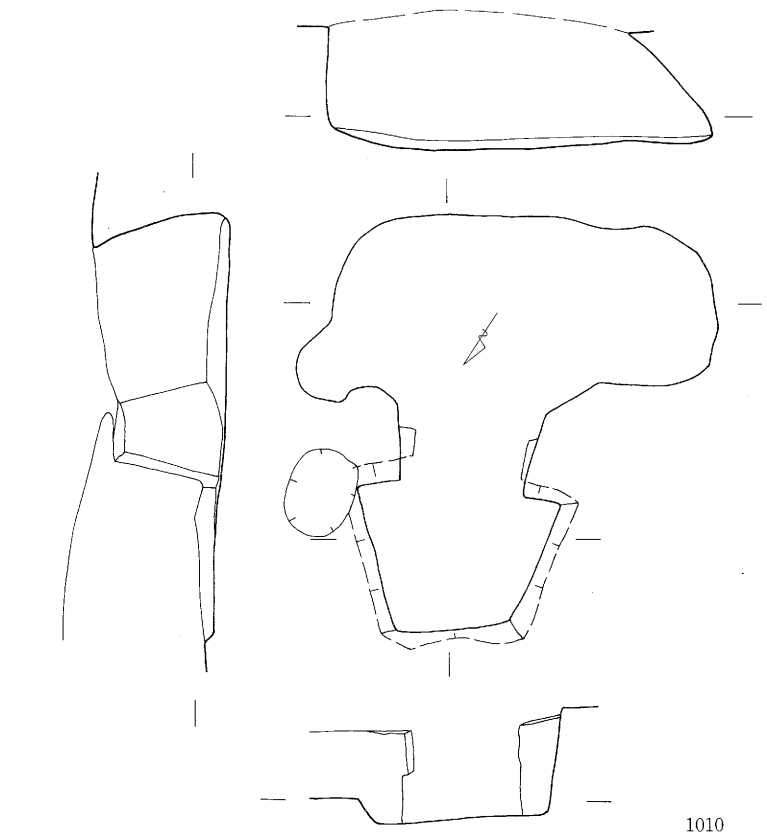
第50図　ＳＴ1005，1006遺構実測図



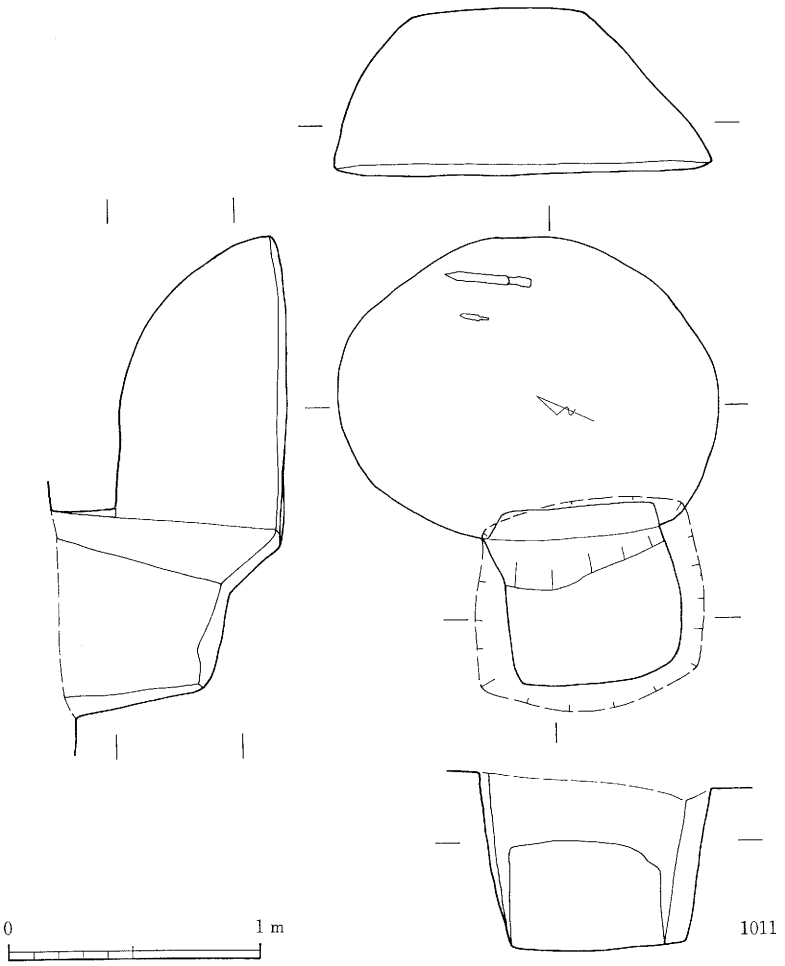
第51図　ＳＴ1007，1008遺構実測図



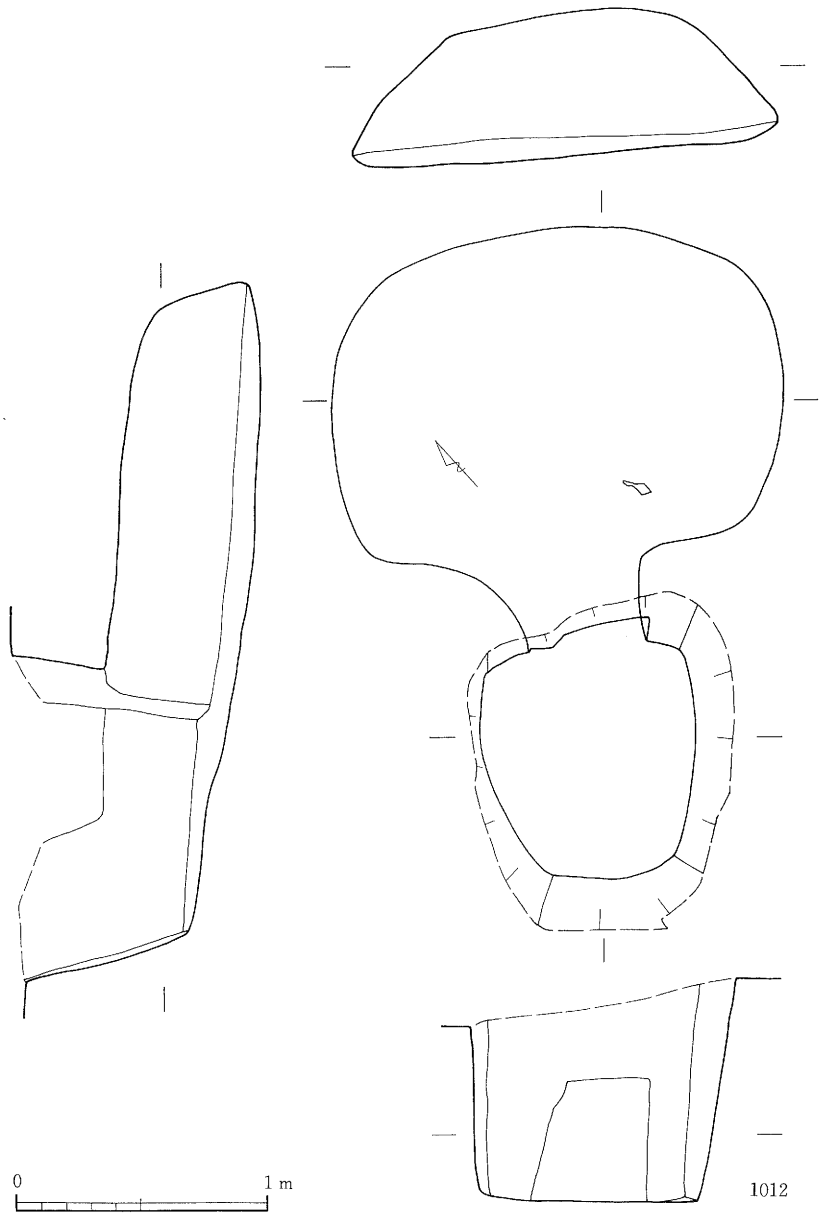
第52図　ＳＴ1009遺構実測図



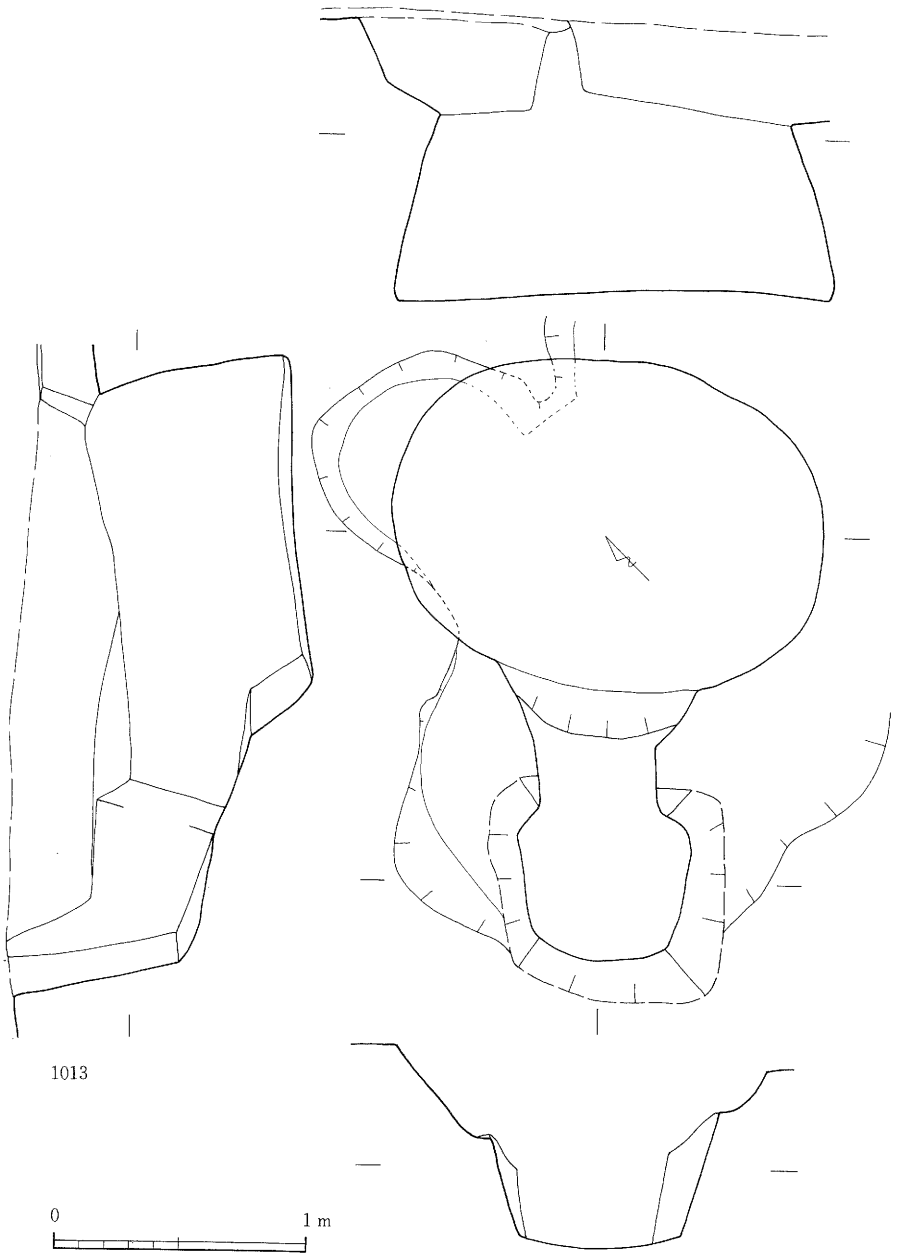
第53図　ＳＴ1010遺構実測図



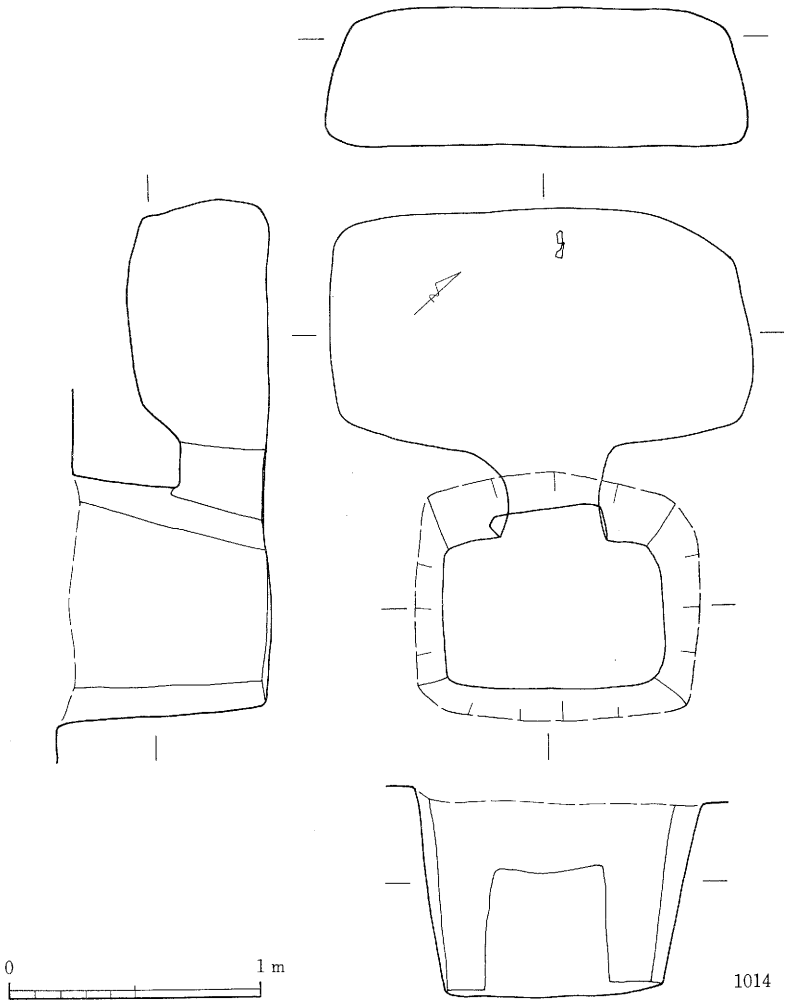
第54図　ＳＴ1011遺構実測図



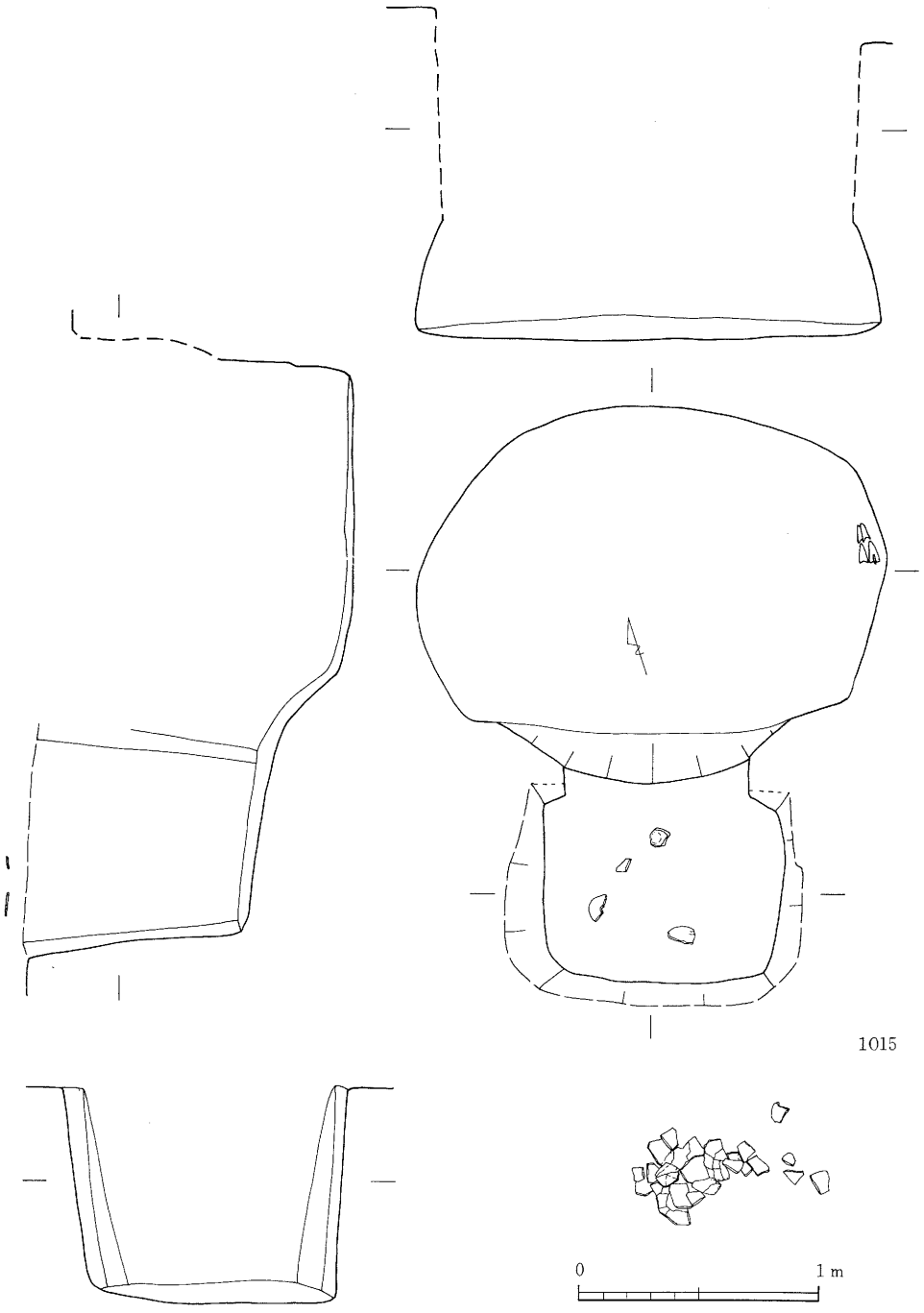
第55図　ＳＴ1012遺構実測図



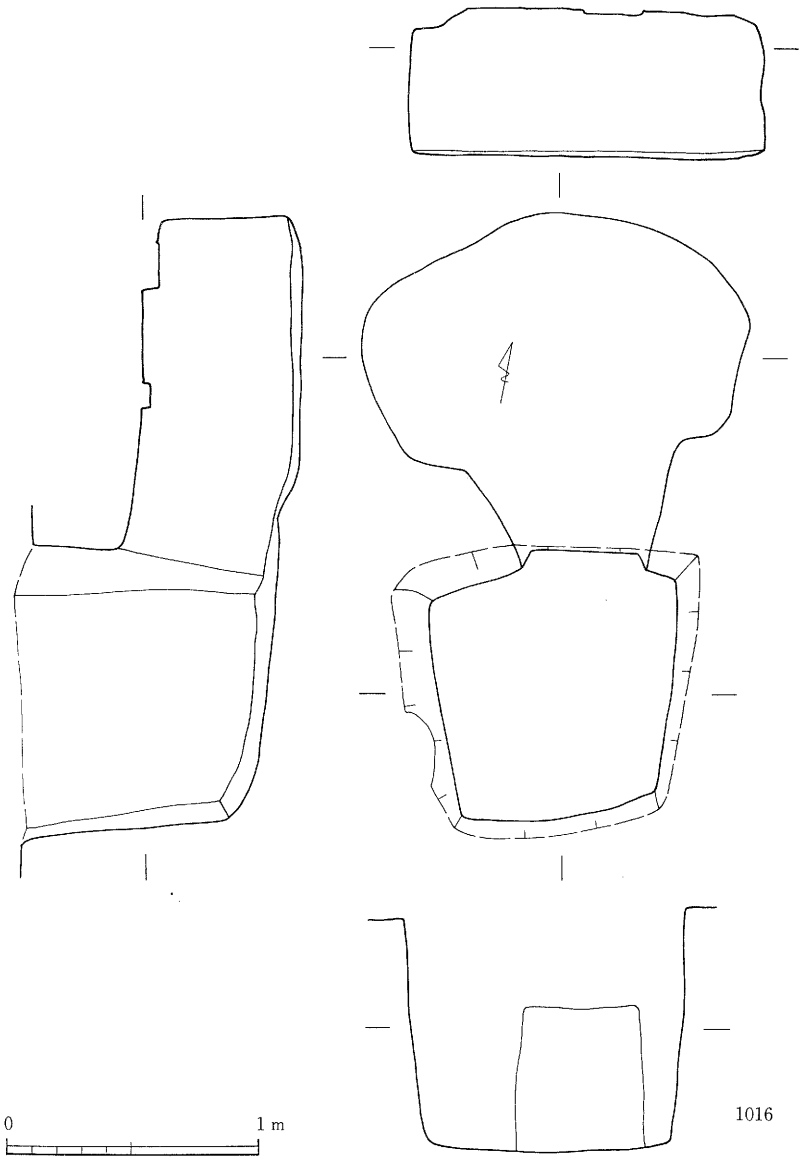
第56図　ＳＴ1013遺構実測図



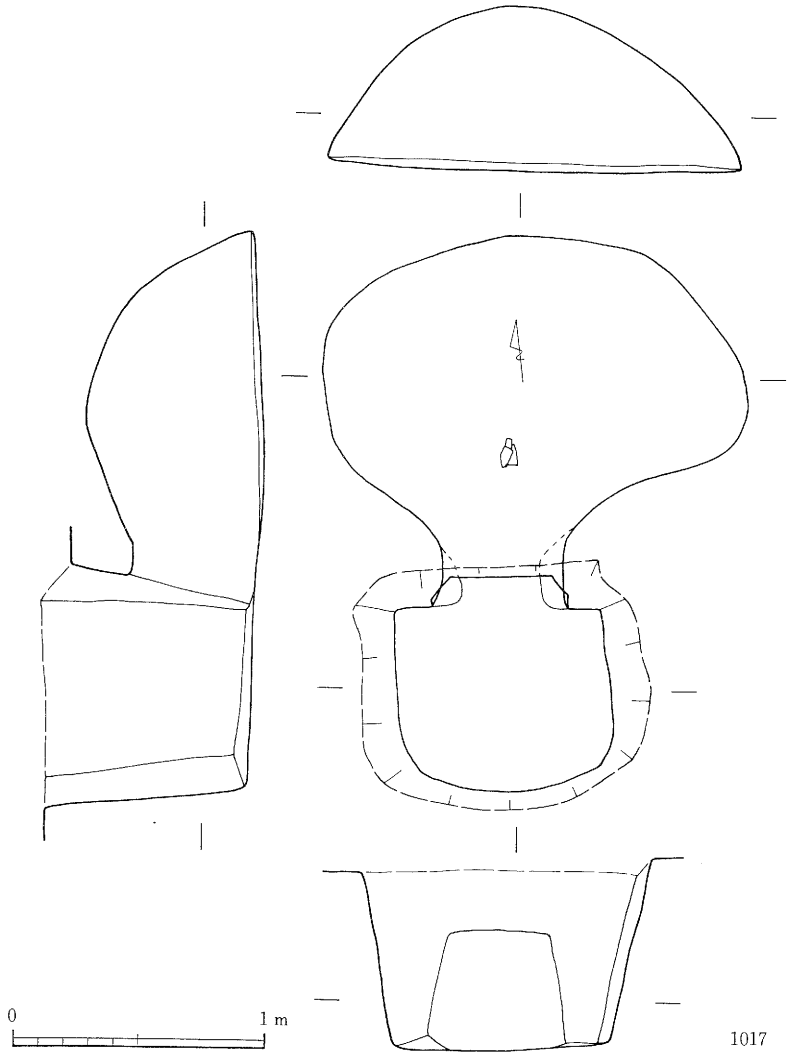
第57図　ＳＴ1014遺構実測図



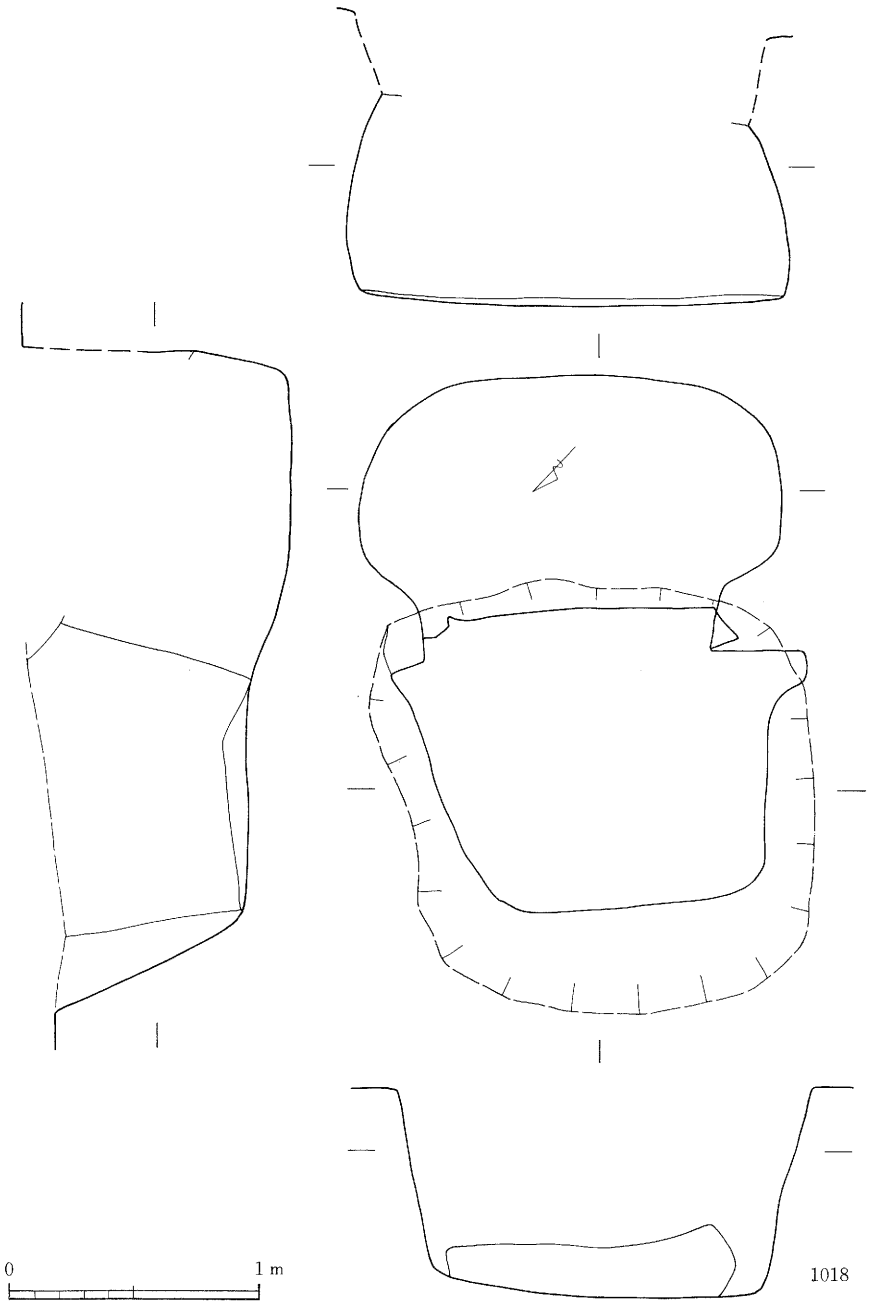
第58図　ＳＴ1015遺構実測図



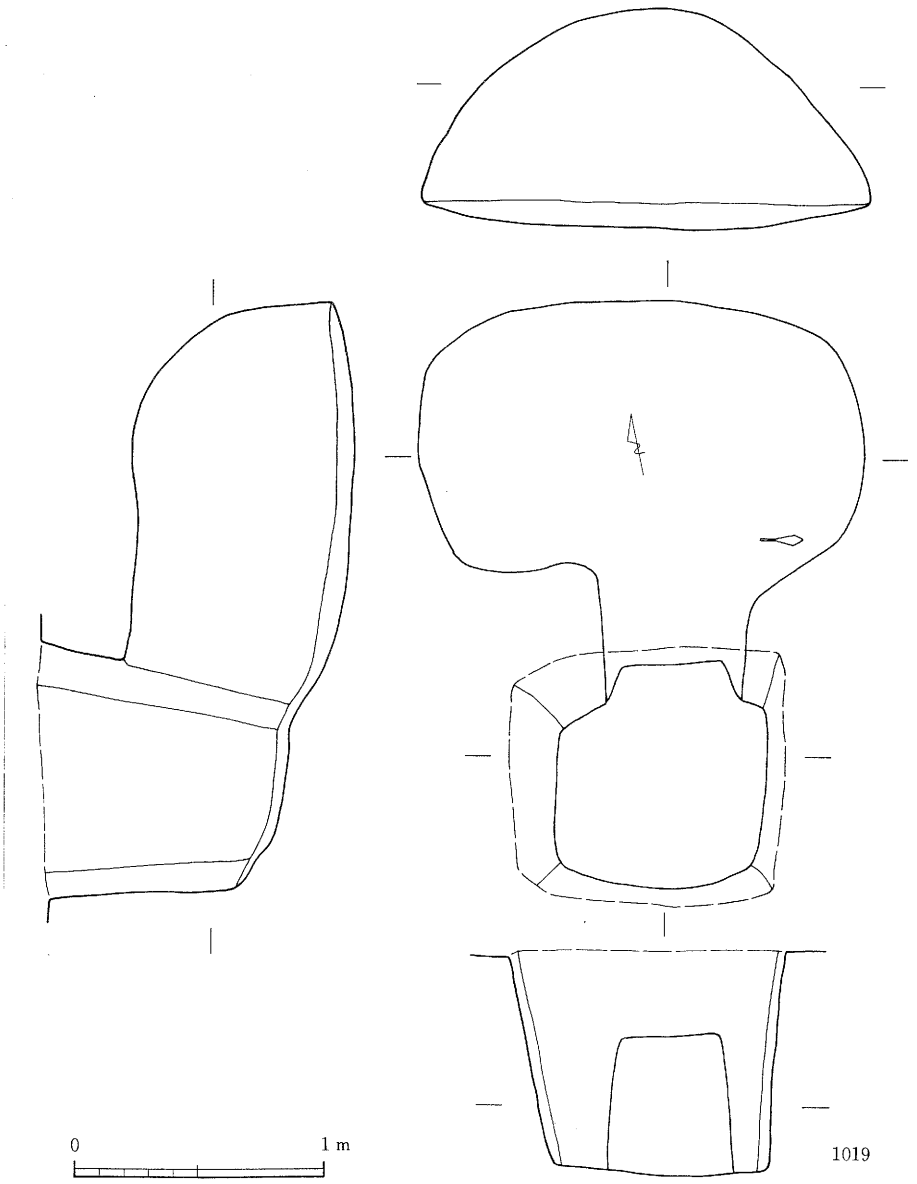
第59図　ＳＴ1016遺構実測図



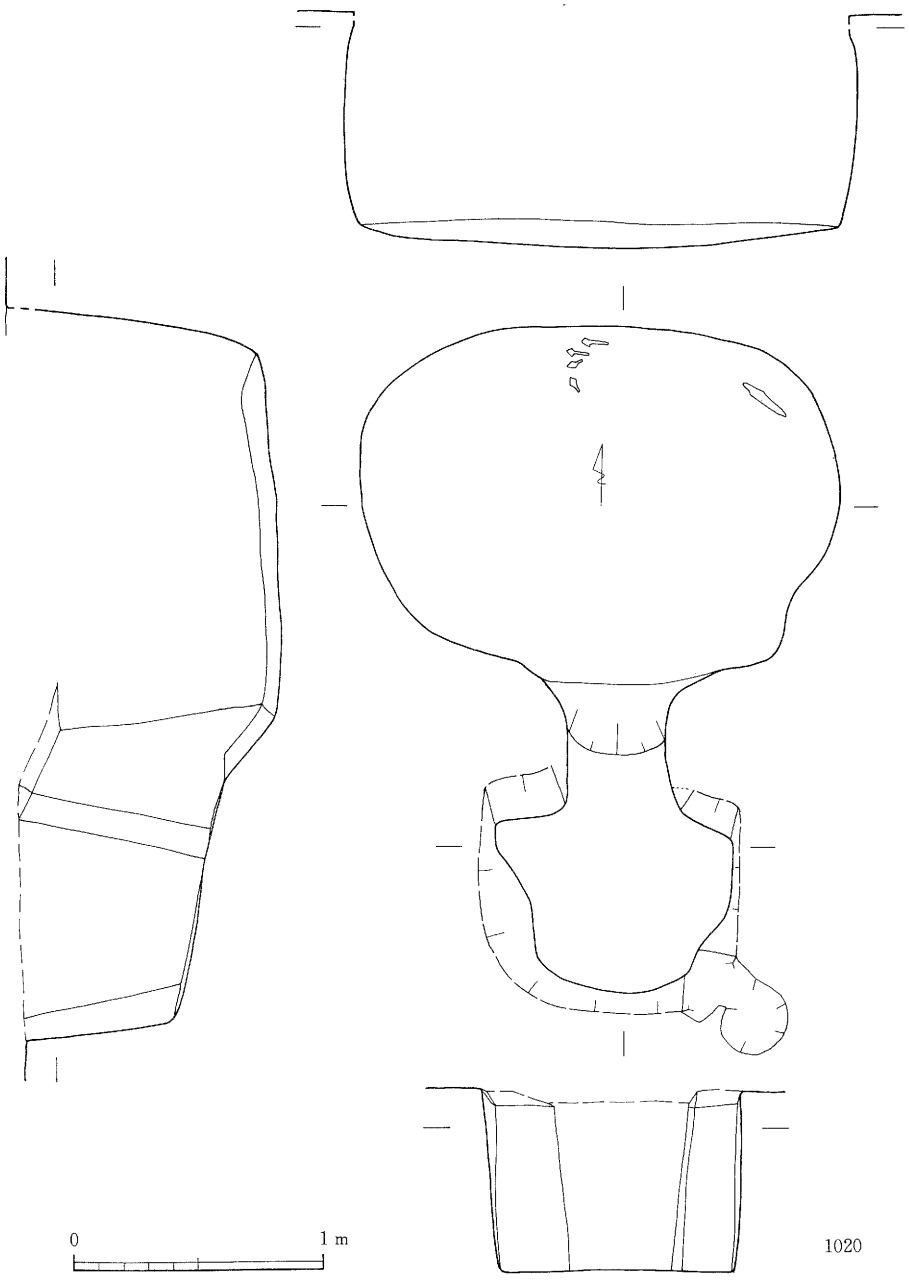
第60図　ＳＴ1017遺構実測図



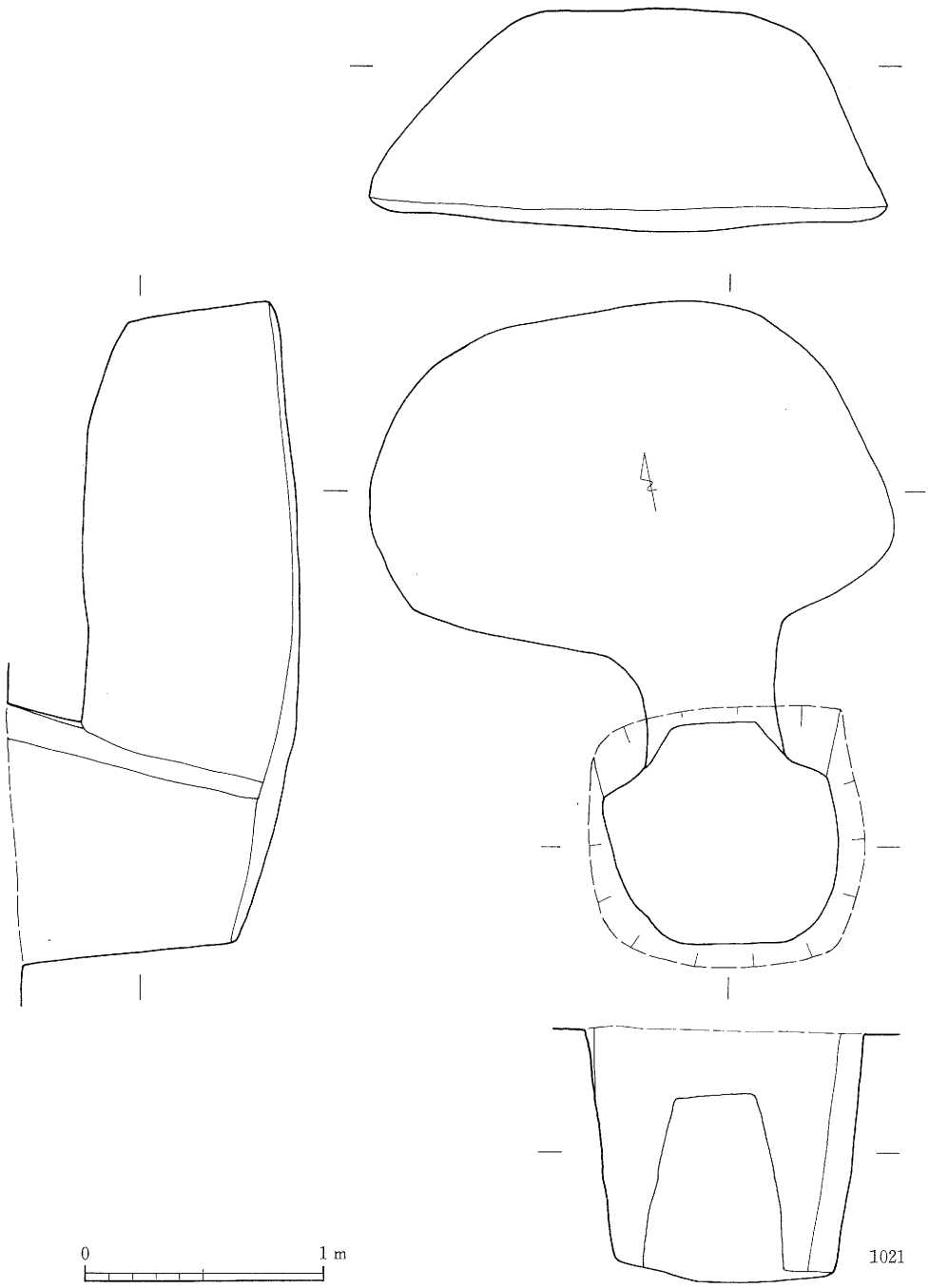
第61図　ＳＴ1018遺構実測図



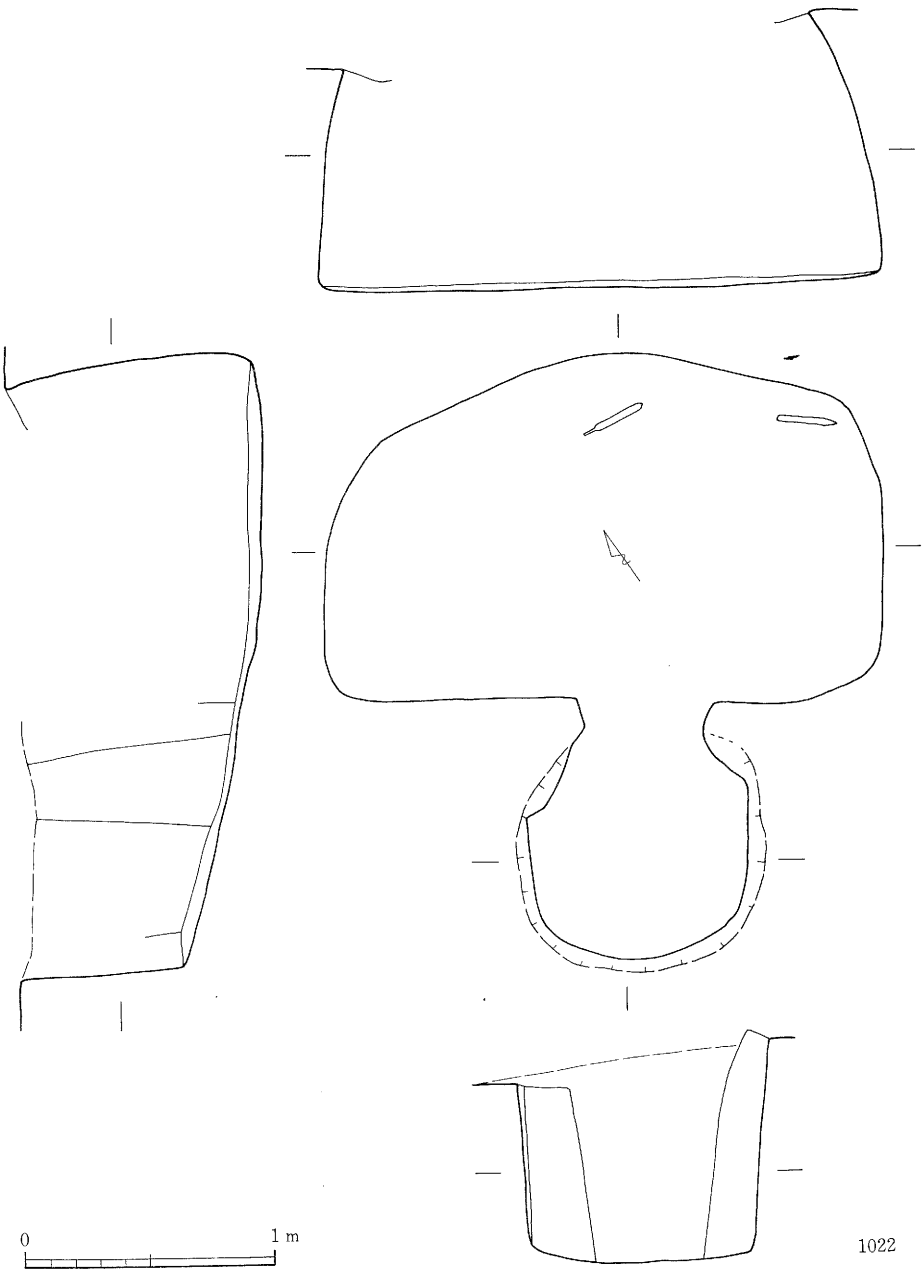
第62図　ＳＴ1019遺構実測図



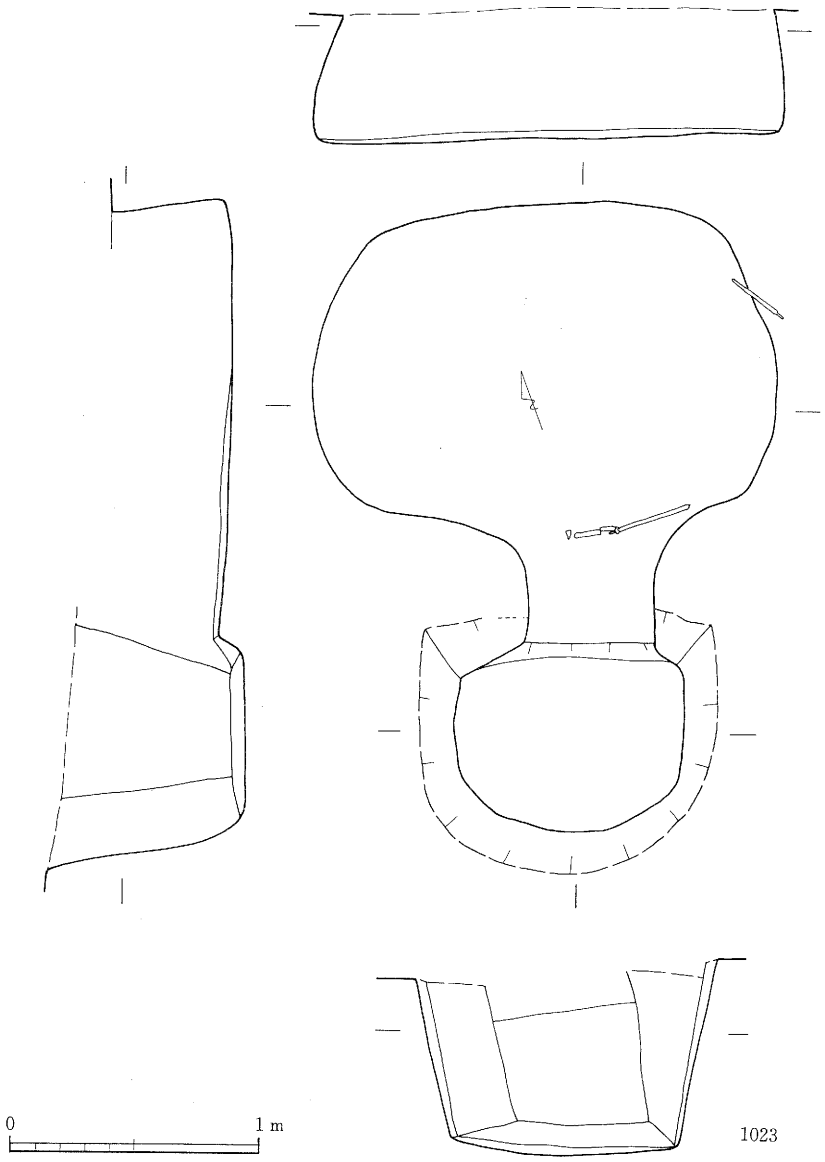
第63図　ＳＴ1020遺構実測図



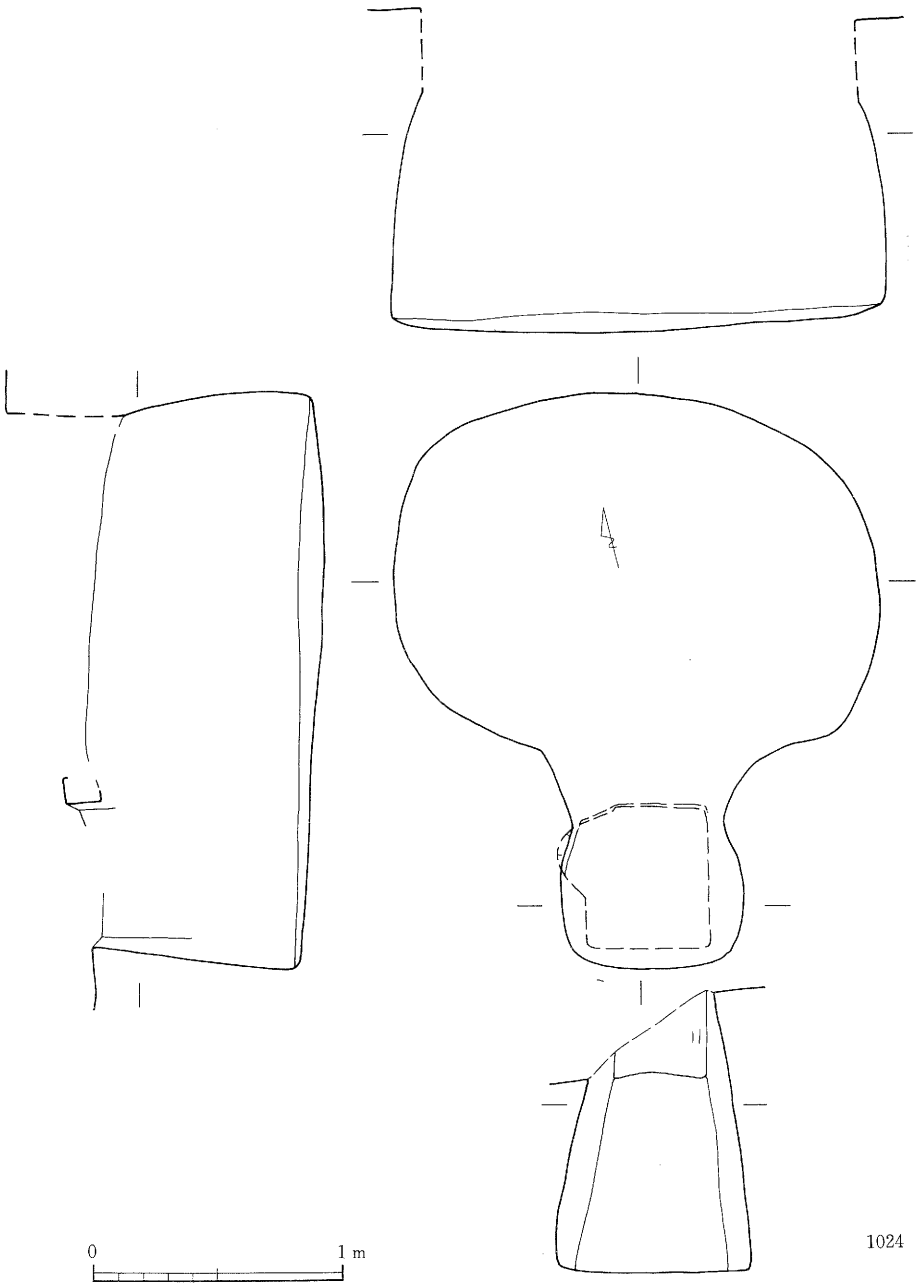
第64図　ＳＴ1021遺構実測図



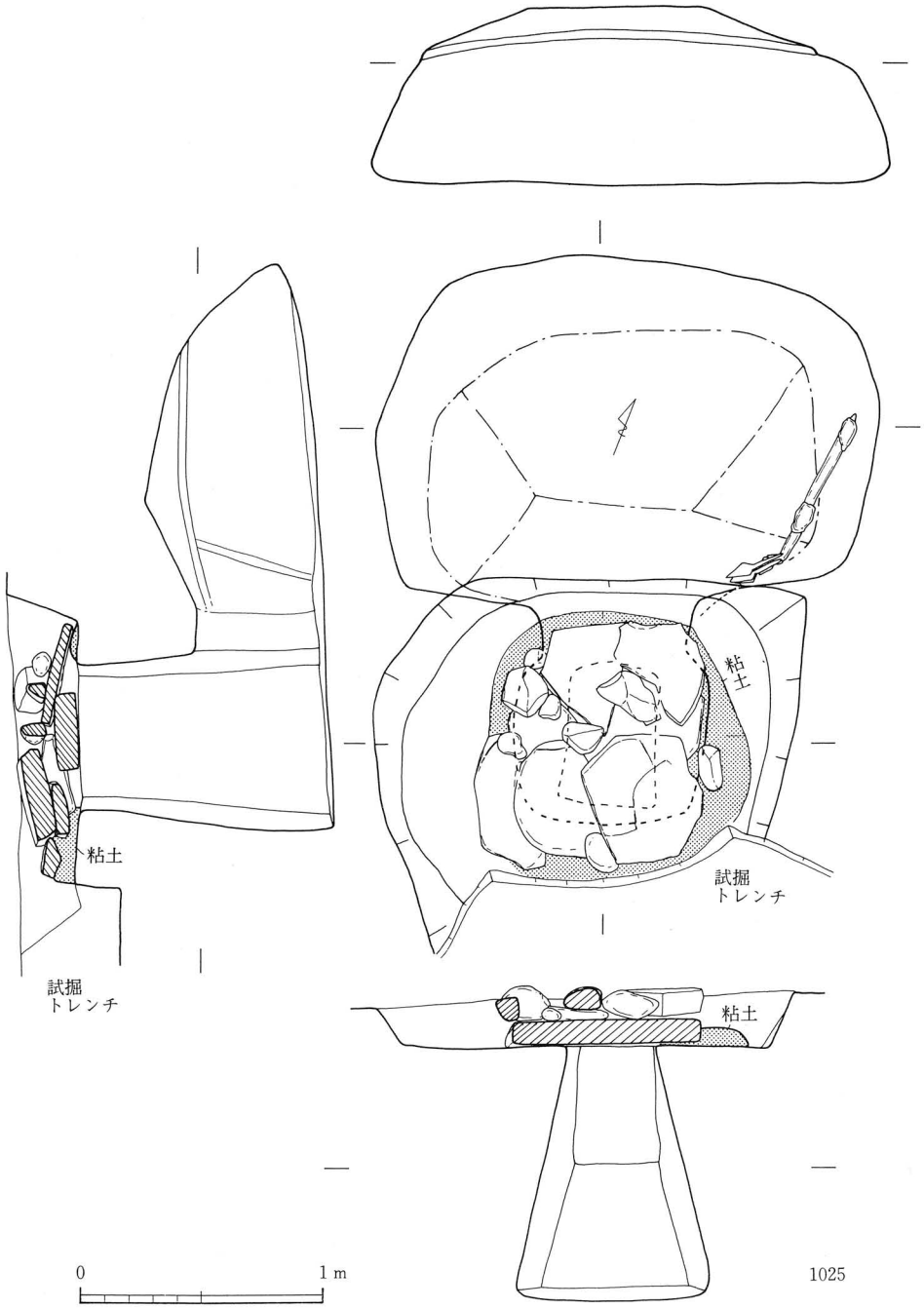
第65図　ＳＴ1022遺構実測図



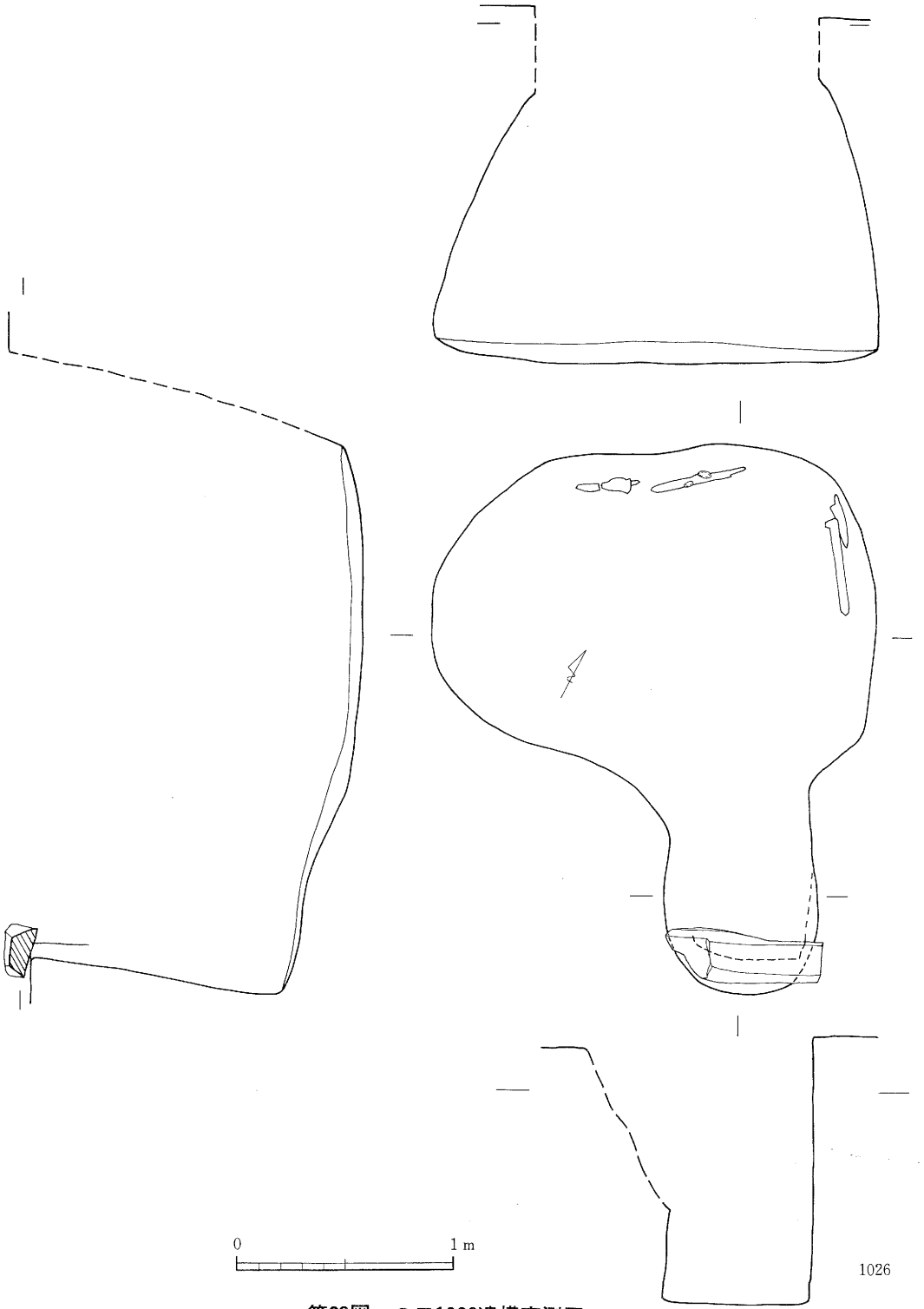
第66図　ＳＴ1023遺構実測図



第67図　ＳＴ1024遺構実測図



第68図　ＳＴ1025遺構実測図



第69図　ＳＴ1026遺構実測図

持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊する。竪坑上部で閉塞石の一部が残存する。奥壁中央に剣２（第108図62・63）、右壁際に剣２（第108図64・65）が出土している。

Ｂ地区遺構群

羨門閉塞タイプ６基、竪坑上部閉塞タイプ37基が分布する。羨門閉塞タイプは遺構群東側に集中する。羨門閉塞タイプの主軸方向は一定でないが、竪坑上部閉塞タイプは主軸を南北方向に持ちいずれも竪坑から北方向に向って玄室が構成されている。

ＳＴ2001（第71図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。奥壁際に剣１（第108図70）、鏃３（第108図68・69・71）が出土している。

ＳＴ2002（第72図）　竪坑上部閉塞のタイプ。長方形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。角は直角造られている。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊しているが、残存部から天井部は寄せ棟の構造と思われる。右壁際に剣１（第108図75）、鏃３（第108図72～74）が出土している。

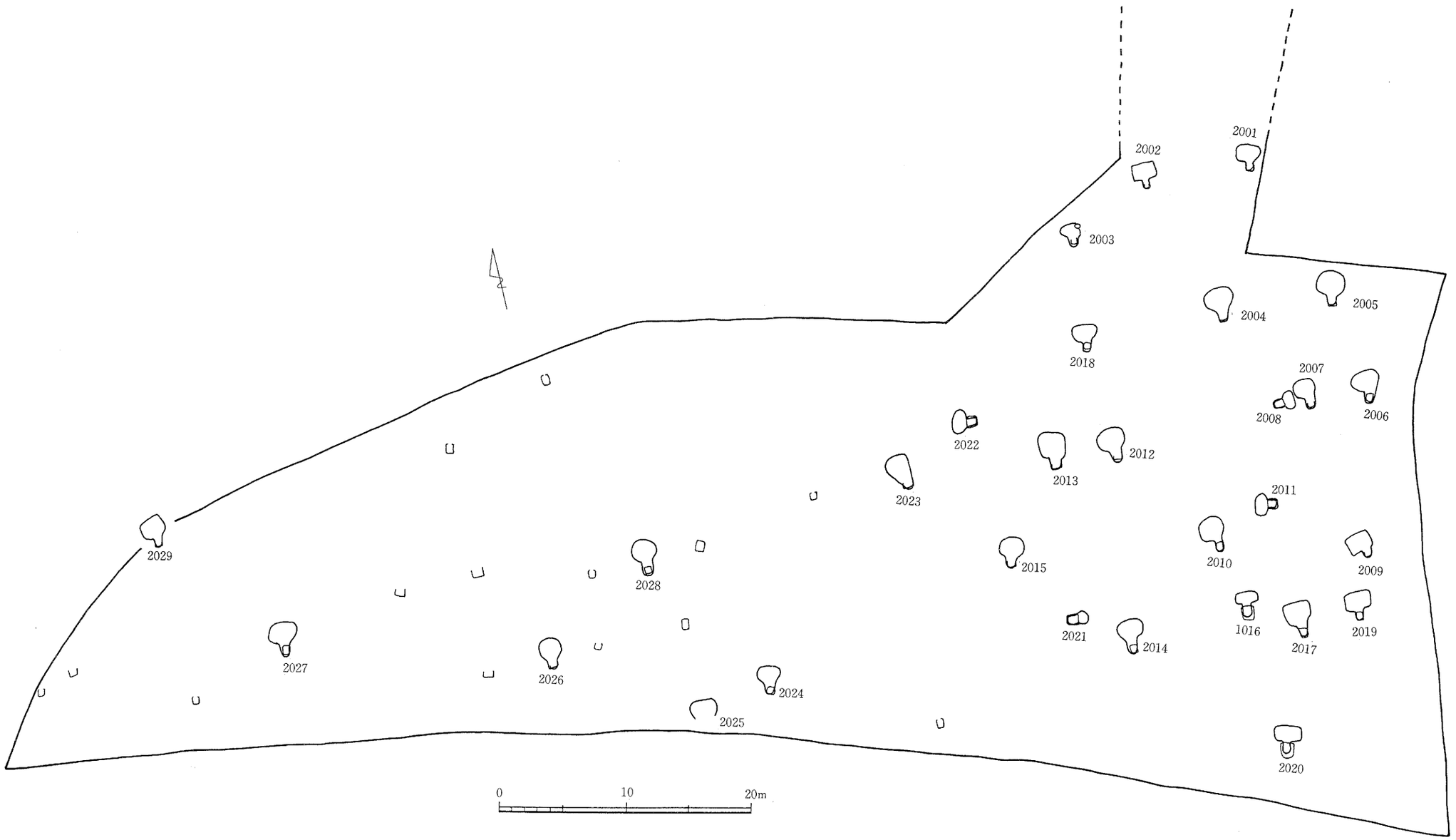
ＳＴ2003（第73図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランの崩れ気味の両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。竪坑上部の外側に閉塞石２枚が散乱している。また、玄室の右際天井に径20cmほどの円形の穴が貫通している。上部を偏平石で覆っている。鏃２（第109図86・87）が出土している。

ＳＴ2004（第74図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランのかなり肩の崩れた平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。奥壁際と中央部に剣２（第109図78・79）刀１（第109図76）、右壁側の頭骨が有ったと思われる箇所に鏃６（第109図80～85）が出土している。

ＳＴ2005（第75図）　竪坑上部閉塞のタイプ。円形に近いプランでかなり崩れた両袖の平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。

ＳＴ2006（第76図）　竪坑上部閉塞のタイプ。片袖の平入り構造の玄室を持つ。天井はドーム形を呈する。玄室プランは無袖側が長く、有袖側が狭くなる。奥壁右側に人骨片がわずかに見られた。竪坑の北側は溝によって毀損する。

ＳＴ2007（第77図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランで片袖の平入り構造の玄室を持つ。天井はドーム形を呈する。奥壁際に刀１（第109図88）、右壁際に鉾１（第109図90）、鏃６（第109図89・91～93）が出土している。竪坑上部は一部溝によって毀損する。



第70図　B地区遺構群・地下式横穴墓分布図

ＳＴ2008（第78図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。

ＳＴ2009（第79図）　竪坑上部閉塞のタイプ。台形気味の長方形プランでかなり右側に寄った両袖の平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊しているが残存部から天井は寄せ棟造りと思われる。竪坑の堀り込みは円形を呈する。右角付近に鏃１（第109図94）が出土している。

ＳＴ2010（第80図）　竪坑上部閉塞のタイプ。奥行と幅の比率の近い円形状プランでかなり右側に寄った両袖の平入り構造の玄室に細長い羨道が付く。玄室の天井部は崩壊している。玄室中央に人骨片が数点見られた。右壁際に剣１（第109図95）刀１（第109図96）鉾１（第110図97）刀子１（第110図98）鏃３（第110図99～111）が出土している。

ＳＴ2011（第78図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。残存箇所から玄室高はかなり低い。左壁際に剣１（第110図106）鉾１（第110図102）鏃３（第110図103～105）が出土している。

ＳＴ2012（第81図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランで崩れ気味の両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。奥壁中央に剣１（第110図106）鏃３（第110図108～110）、右袖付近で刀１（第110図107）鏃２（第110図111・112）などが出土している。

ＳＴ2013（第82図）　竪坑上部閉塞のタイプ。奥行と幅の比率の近い隅丸方形プランでかなり肩の崩れた両袖の平入り構造の玄室。玄室から羨道の天井部は崩壊している。玄室中央のやや奥壁寄りで骨片が若干見られた。右袖付近に剣２（第110図117・118）鏃４（第111図120～121・126・129）、奥壁中央に剣２（第111図116・119）鏃９（第111図113～115・122・124～128）が出土している。

ＳＴ2014（第83図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランで崩れ気味の両袖を持つ平入り構造の玄室。左肩がやや崩れ気味である。玄室の天井部が崩壊している。玄室中央に頭骨と思われる輪郭と骨片が見られる。奥壁中央に剣３（第111図131・133・136）鏃１（第111図132）、右壁奥に鏃５（第111図134・135・137～140）、さらに右袖付近に剣１（第111図130）が出土している。

ＳＴ2015（第84図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。玄室中央に骨片とともに剣２（第111図141・142）が出土している。

ＳＴ2016（第85図）　羨門閉塞のタイプ。長方形プランで両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。

ＳＴ2017（第86図）　竪坑上部閉塞のタイプ。奥行と幅の比率の近い隅丸方形プランで右側の肩部にわずかに袖部を持つ平入り構造の玄室。玄室の天井部は崩壊している。竪坑下部に閉塞石の一部が落ち込んでいる。右壁奥に剣１（第112図143)、左壁際に鏃２（第112図144・145）が出土している。

ＳＴ2018（第87図）　竪坑上部閉塞のタイプ。台形気味の隅丸長方形プランでかなり右側に寄った両袖の平入り構造の玄室。玄室の天井部が崩壊している。右壁奥に鏃４（第112図147～150)、右袖付近に欠損した剣１（第112図146）が出土している。

ＳＴ2019（第88図）　竪坑上部閉塞のタイプ。隅丸長方形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室の天井部が崩壊している。羨道付近に鏃６（第112図151～156）が出土している。

ＳＴ2020（第89図）　羨門閉塞のタイプ。隅丸長方形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室の天井部が崩壊しているが閉塞石は残存する。40cm～50cmの偏平な川原石を使って閉塞している。右壁に立てかけた状態で剣１（第112図157）が出土している。

ＳＴ2021（第90図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室の天井部が崩壊している。竪坑は玄室床面より一段堀り下げてある。

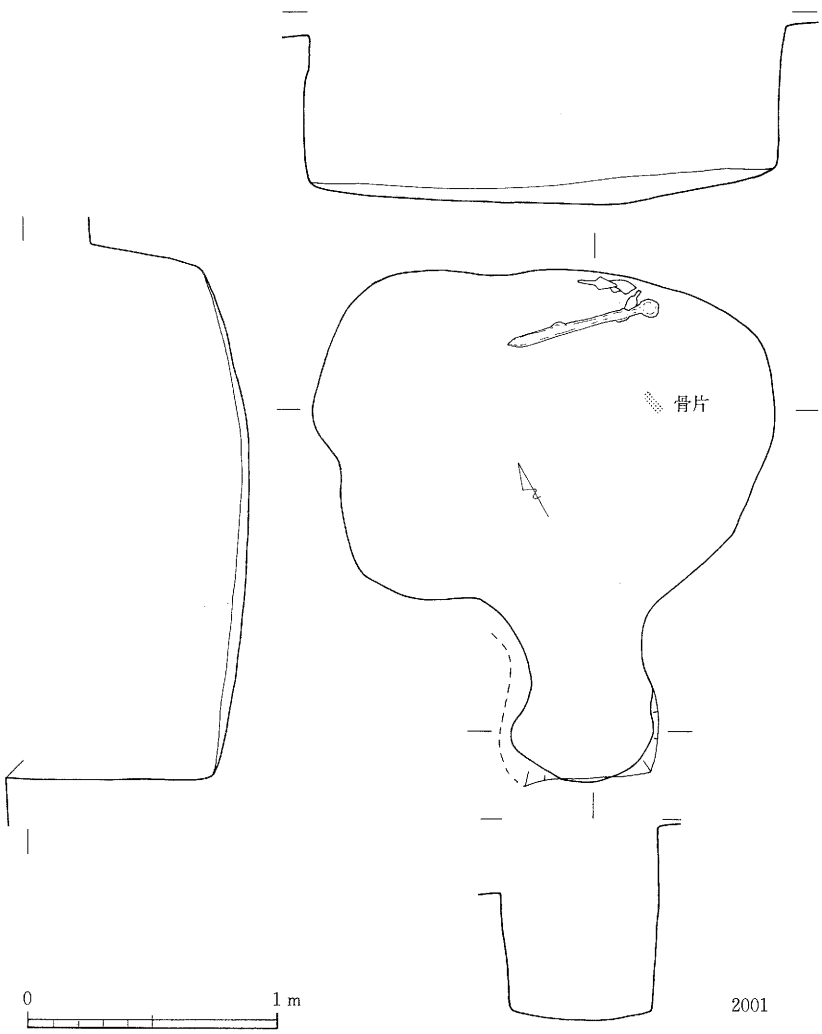
ＳＴ2022（第90図）　羨門閉塞のタイプ。楕円形プランの小型の玄室は竪坑の規模とさほど変らない。玄室の天井部が崩壊している。

ＳＴ2023（第91図）　竪坑上部閉塞のタイプ。玄室は幅より奥行が長く奥壁に向って広がる楕円形状のプランを呈する。肩部のかなり崩れた片袖を持つ。

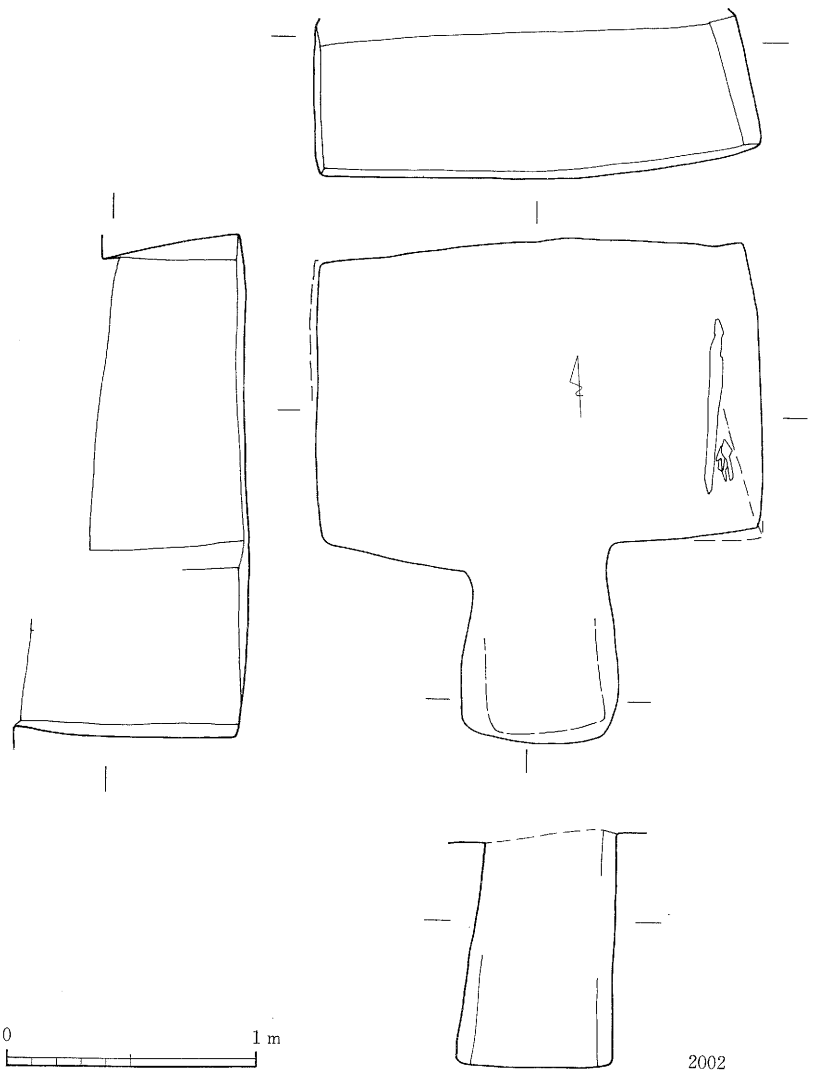
ＳＴ2024（第92図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランのやや右寄りの両袖を持つ平入り構造の玄室。右肩はかなり崩れている。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。竪坑下部に閉塞石の一部が落込んでいる。

ＳＴ2025（第93図）　竪坑から羨道にかけては道路にかかっており玄室のみの調査となった。奥壁右側に頭骨と思われる骨片、左側に大腿骨と思われる骨片が見られた。また、奥壁中央に剣３（第113図166・167・170）鏃10（第113図168・169・171～178）が出土している。竪坑上部閉塞と思われる。

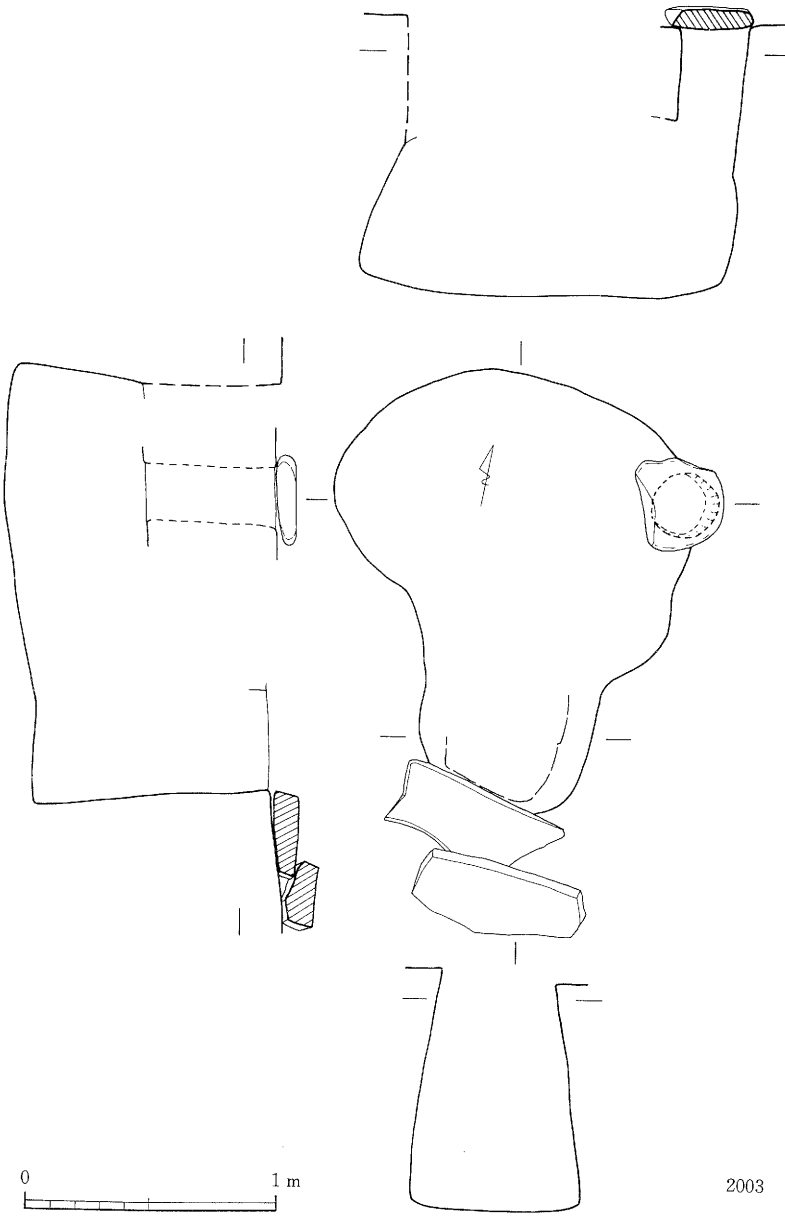
ＳＴ2026（第94図）　竪坑上部閉塞のタイプ。奥行と幅の比率がほぼ同じの円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。両袖ともかなり崩れている。玄室から羨道にかけて天井部が



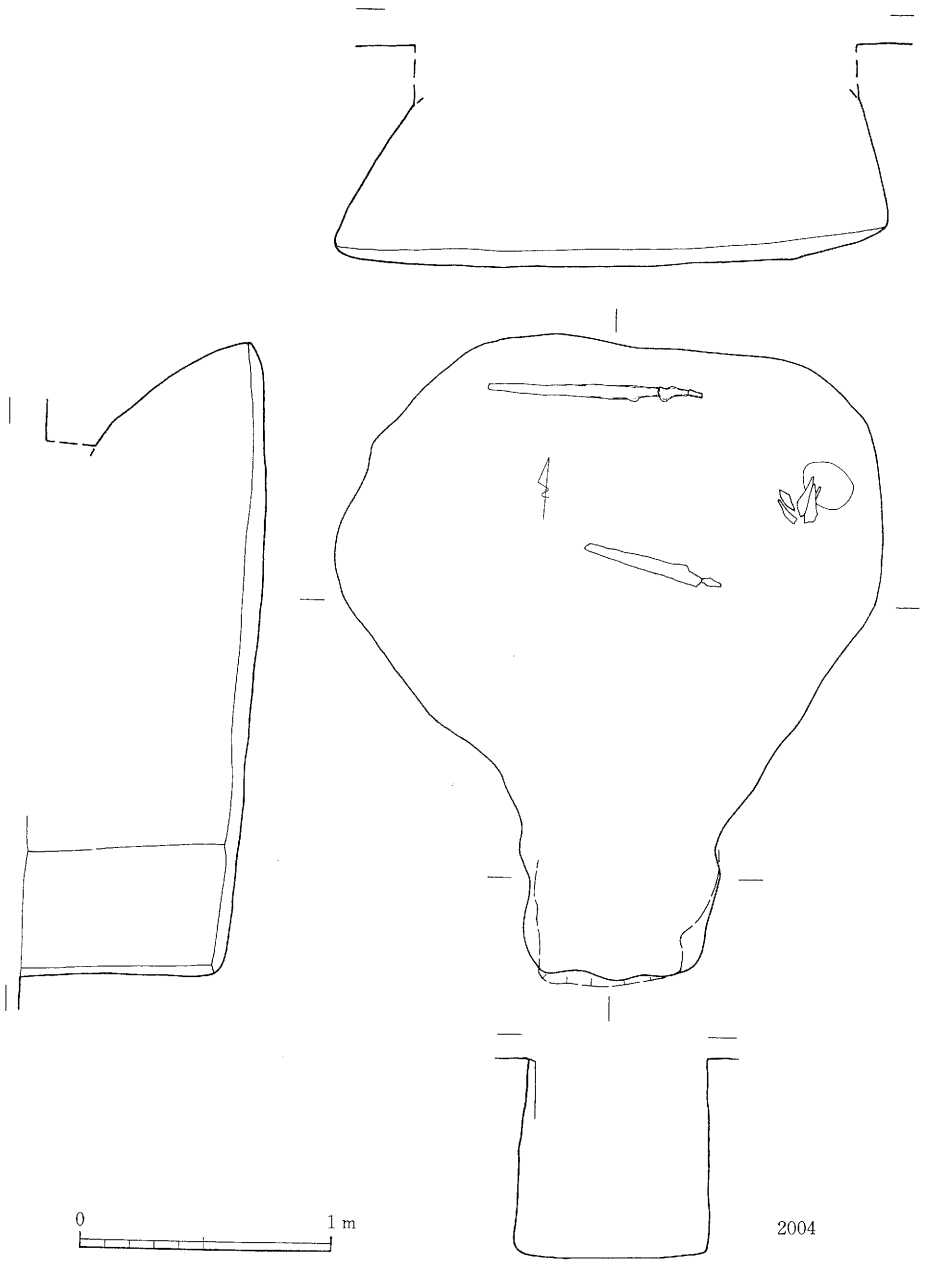
第71図　ＳＴ2001遺構実測図



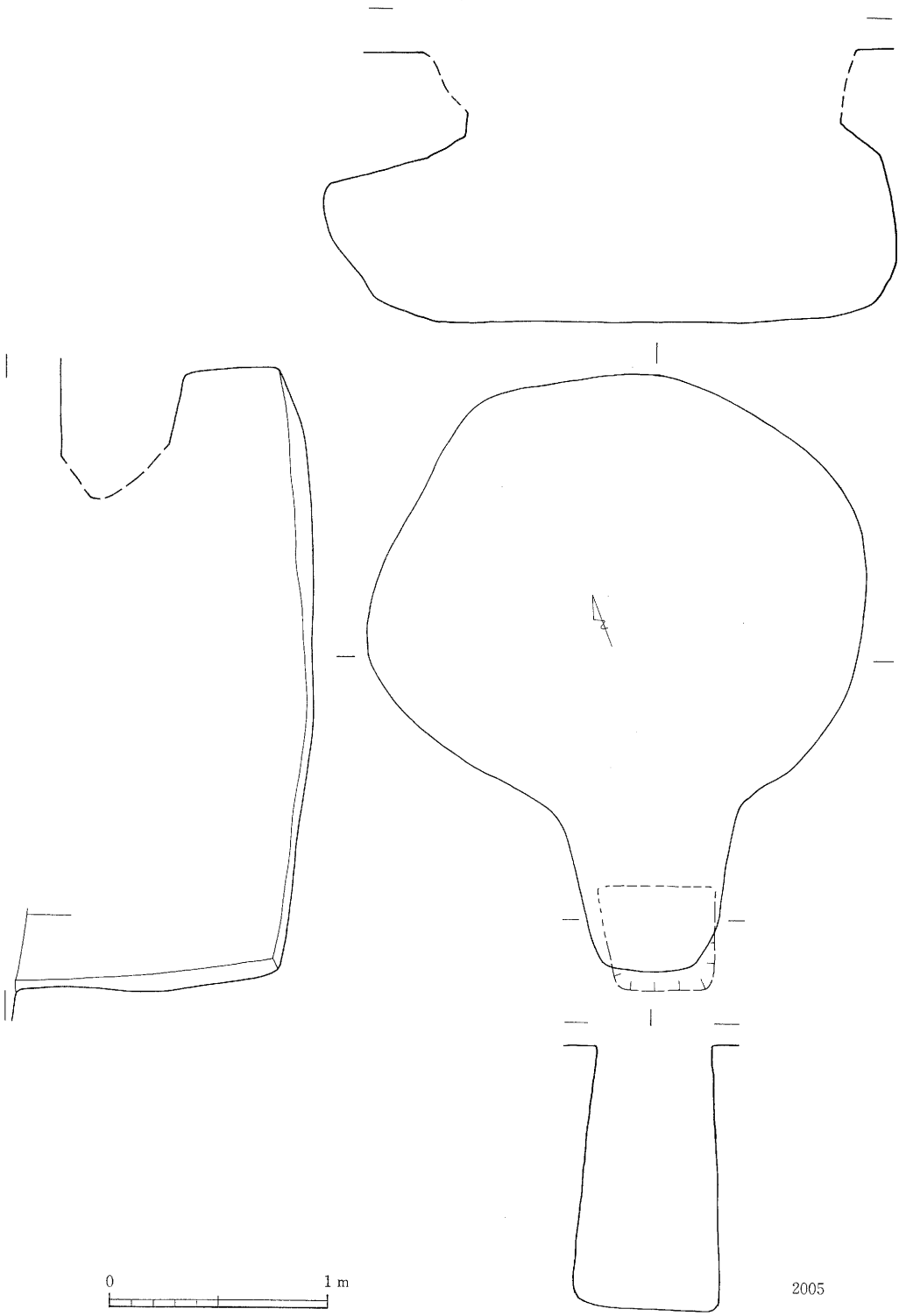
第72図　ＳＴ2002遺構実測図



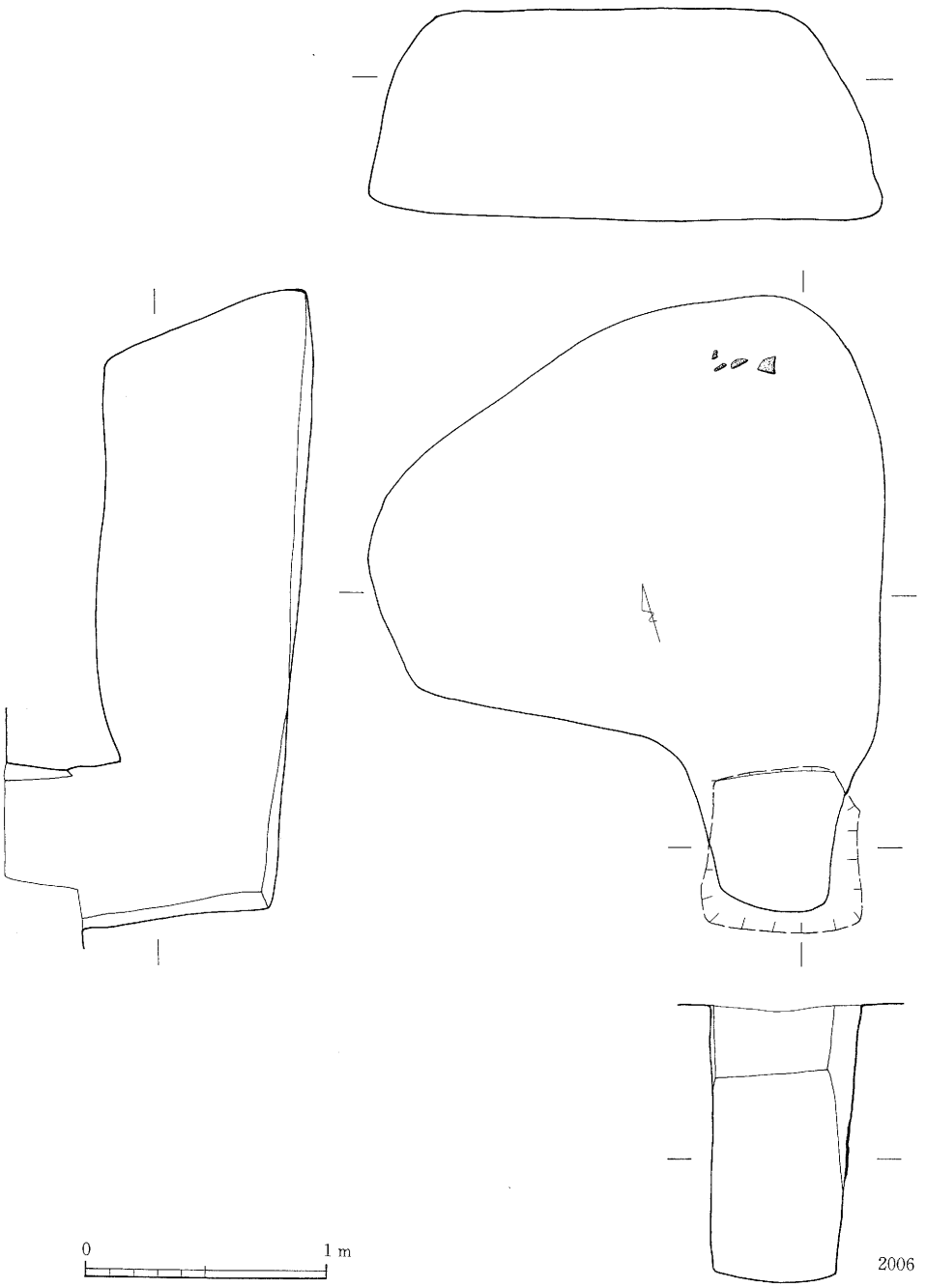
第73図　ＳＴ2003遺構実測図



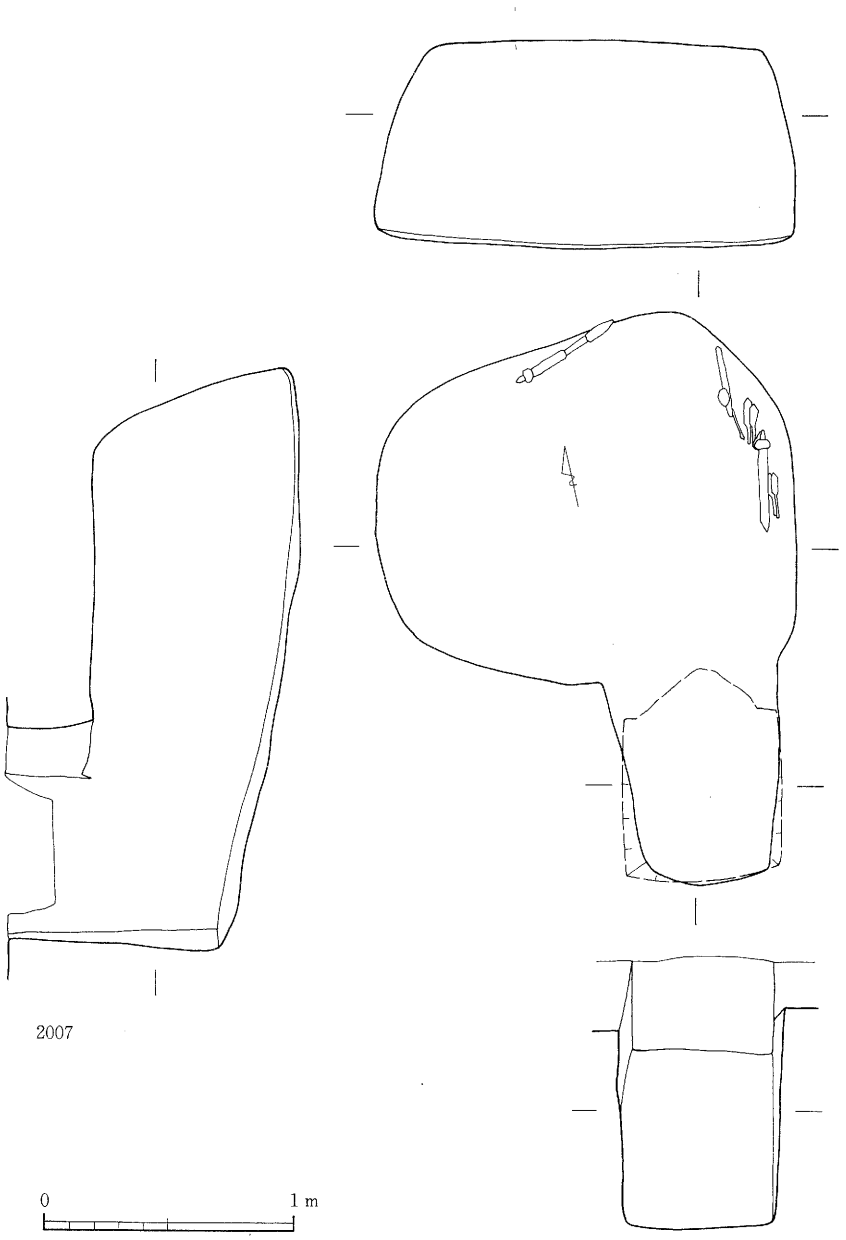
第74図　ＳＴ2004遺構実測図



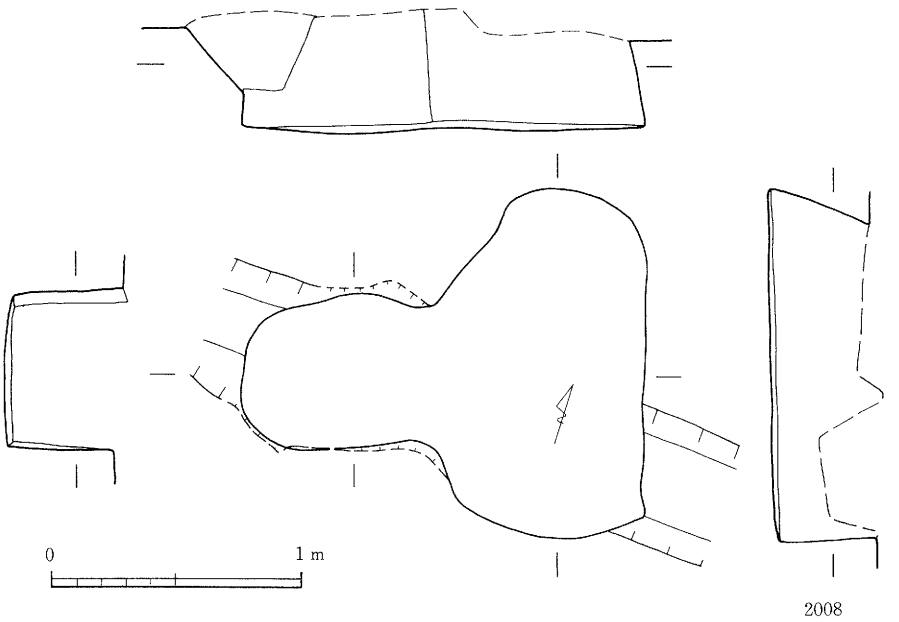
第75図　ＳＴ2005遺構実側図

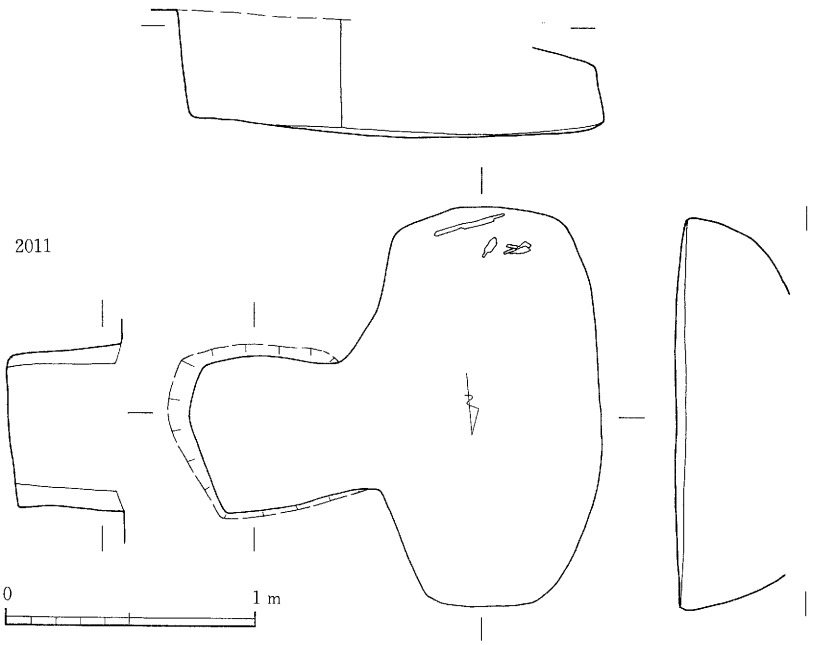


第76図　ＳＴ2006遺構実測図

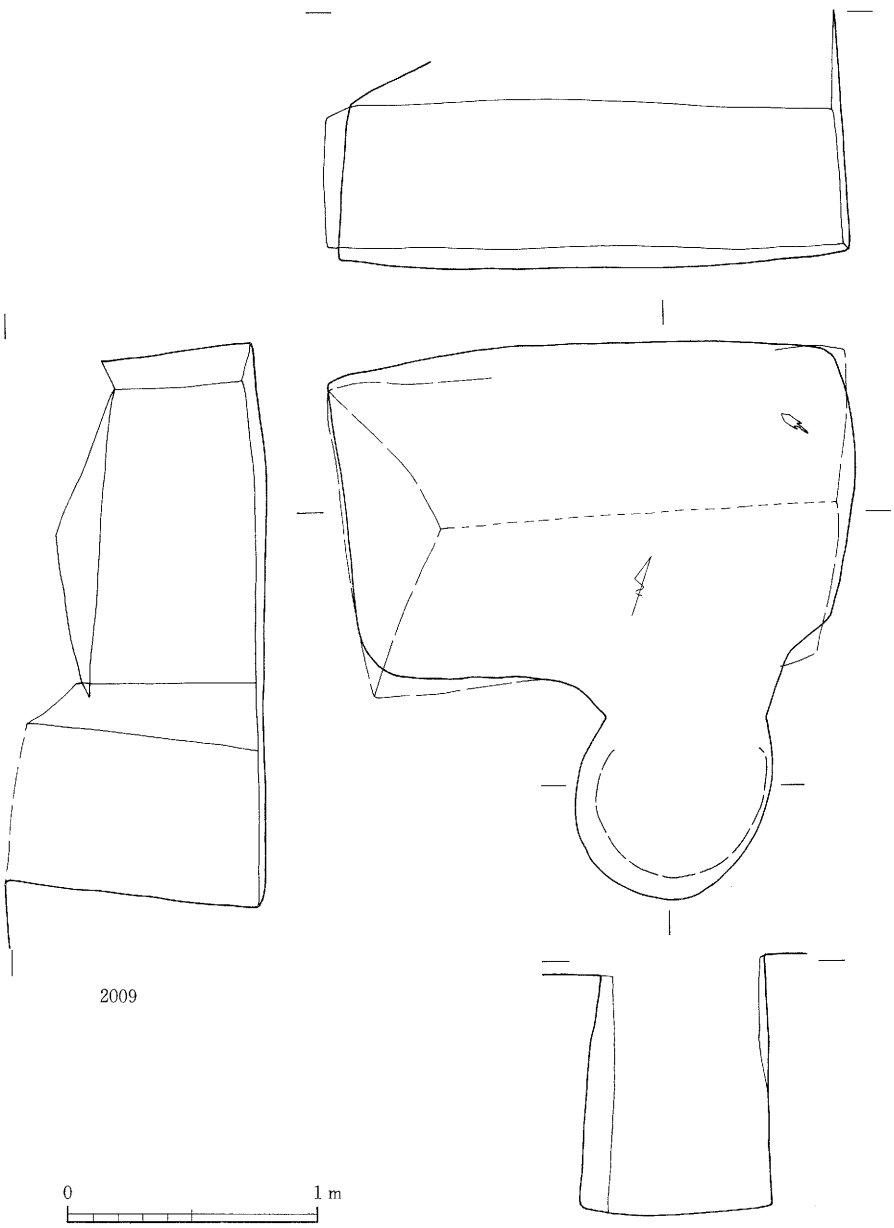


第77図　ＳＴ2007遺構実測図

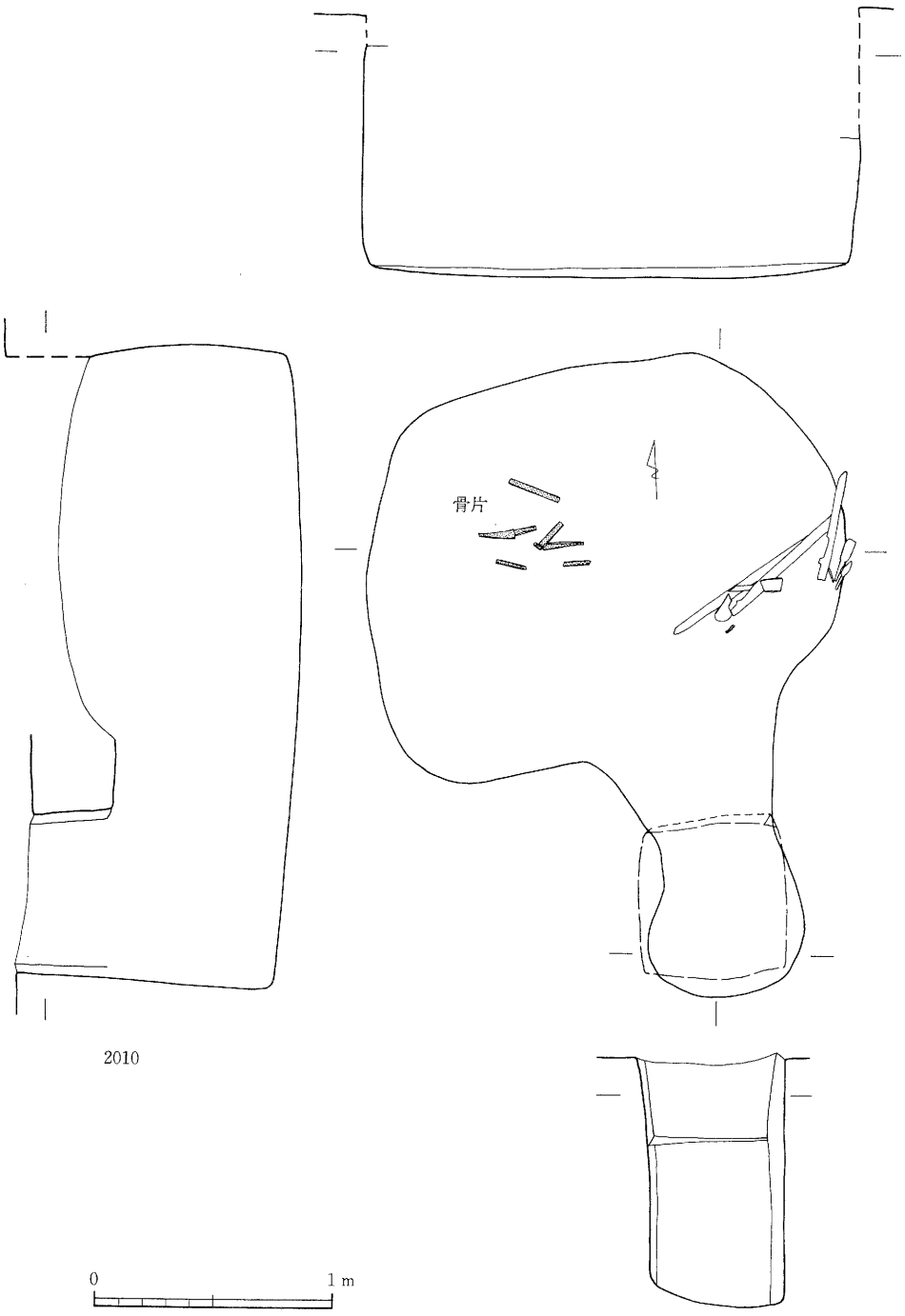




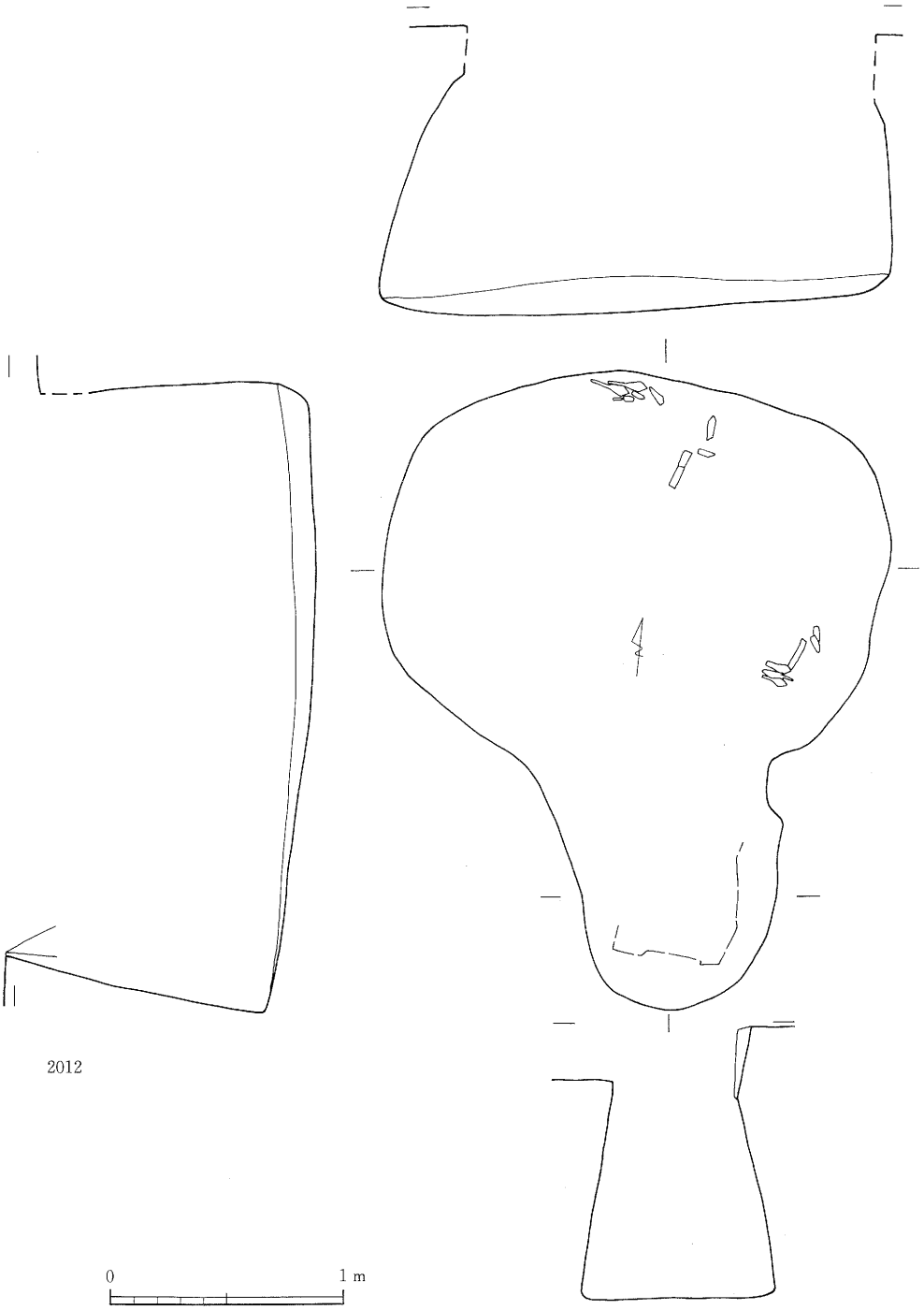
第78図　ＳＴ2008，2011遺構実測図



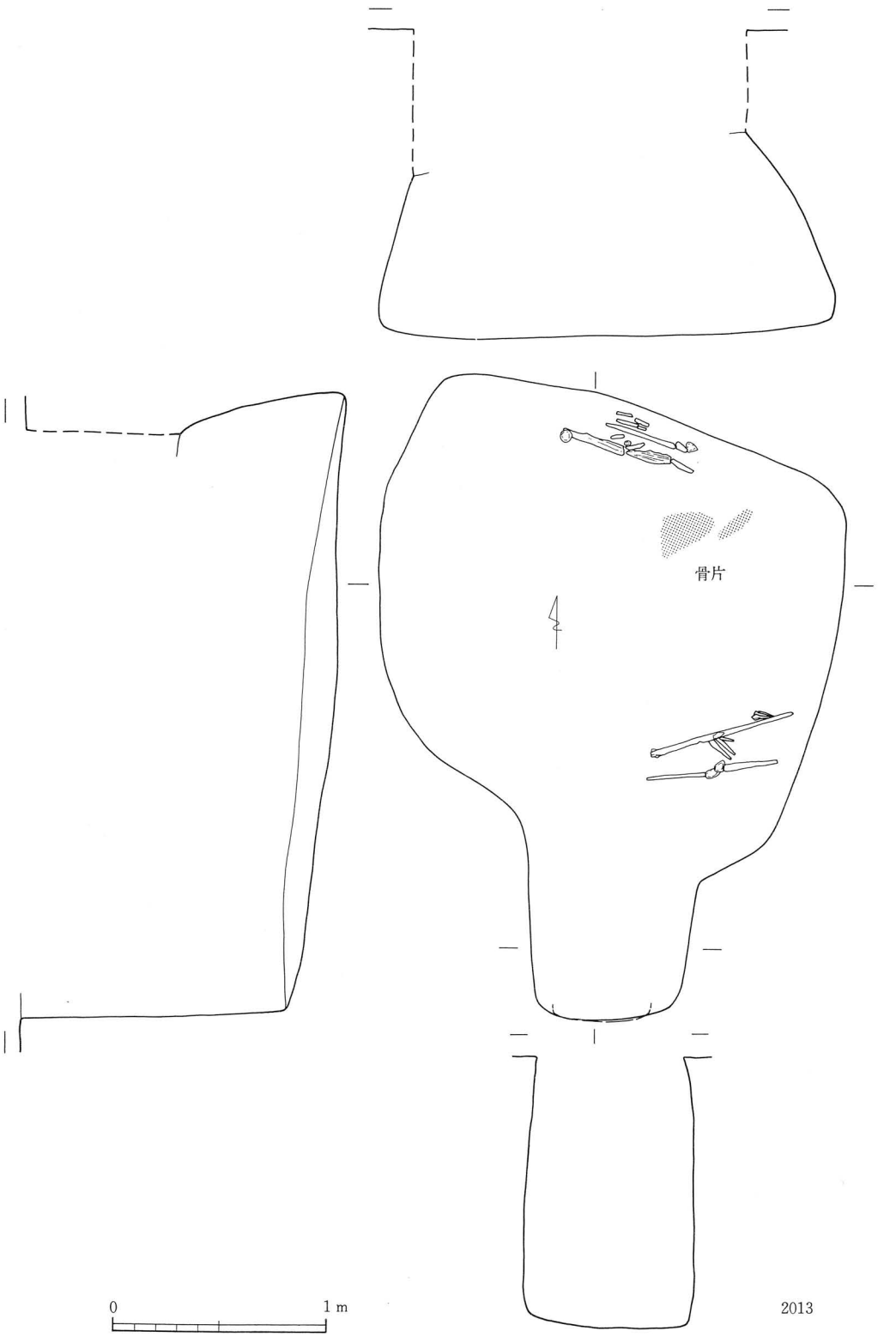
第79図　ＳＴ2009遺構実測図



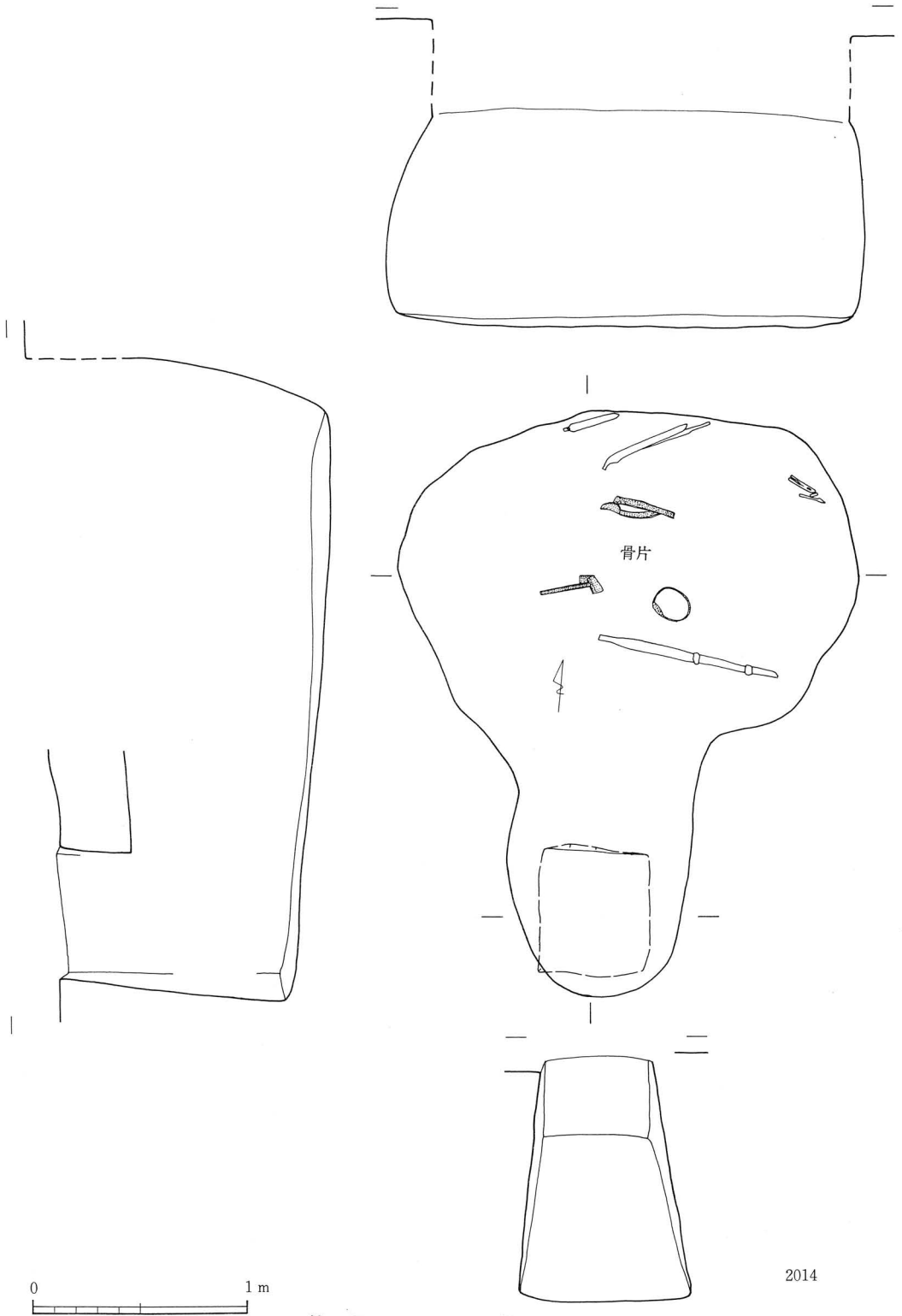
第80図　ＳＴ2010遺構実測図



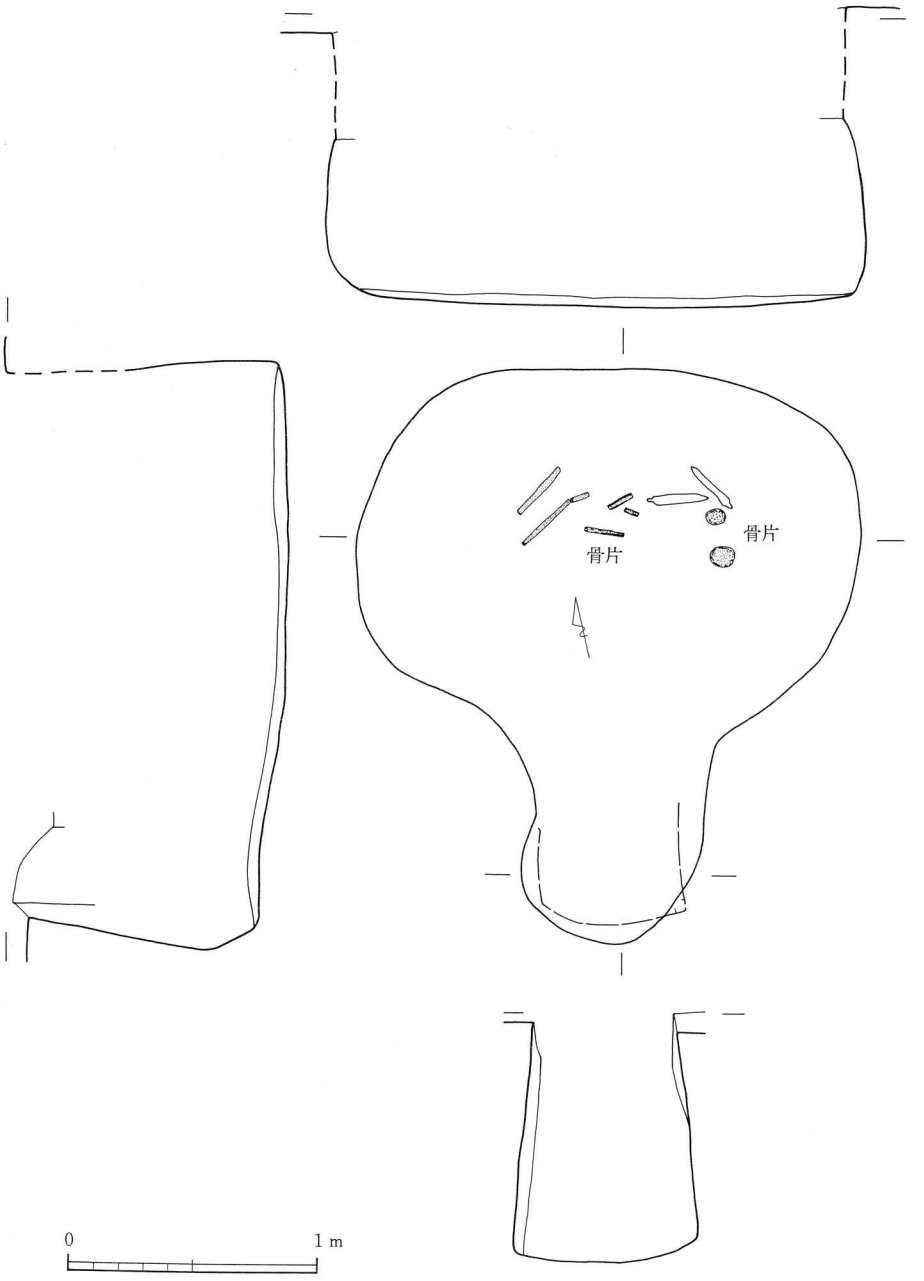
第81図　ＳＴ2012遺構実測図



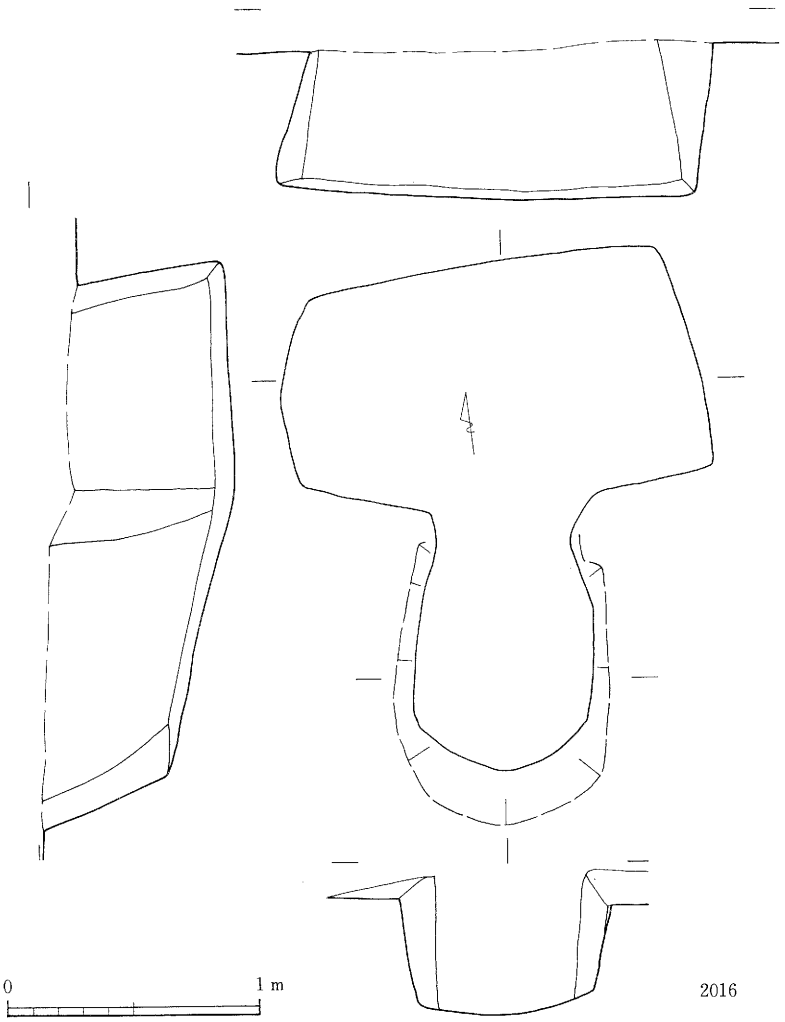
第82図　ＳＴ2013遺構実測図



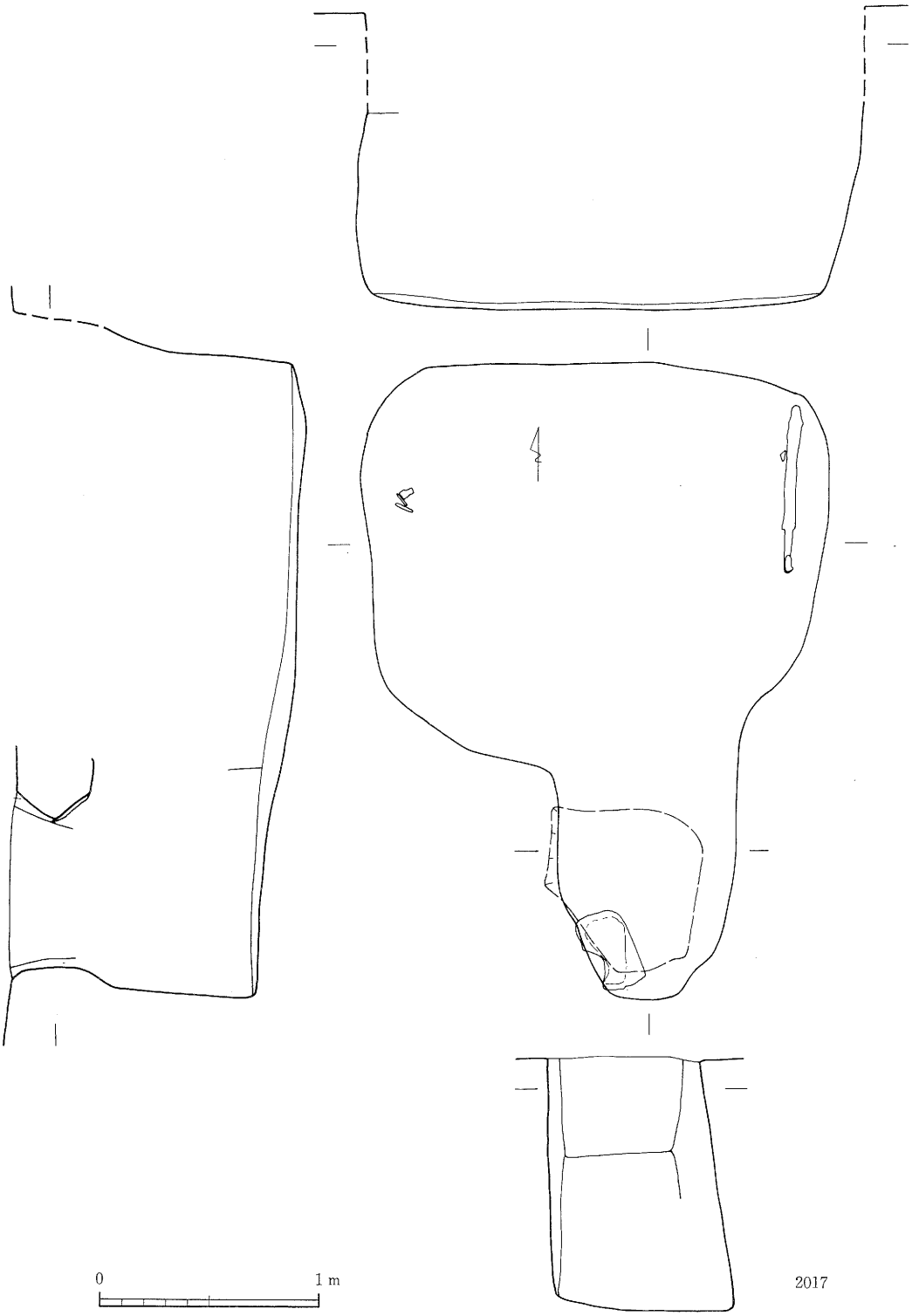
第83図　ＳＴ2014遺構実測図



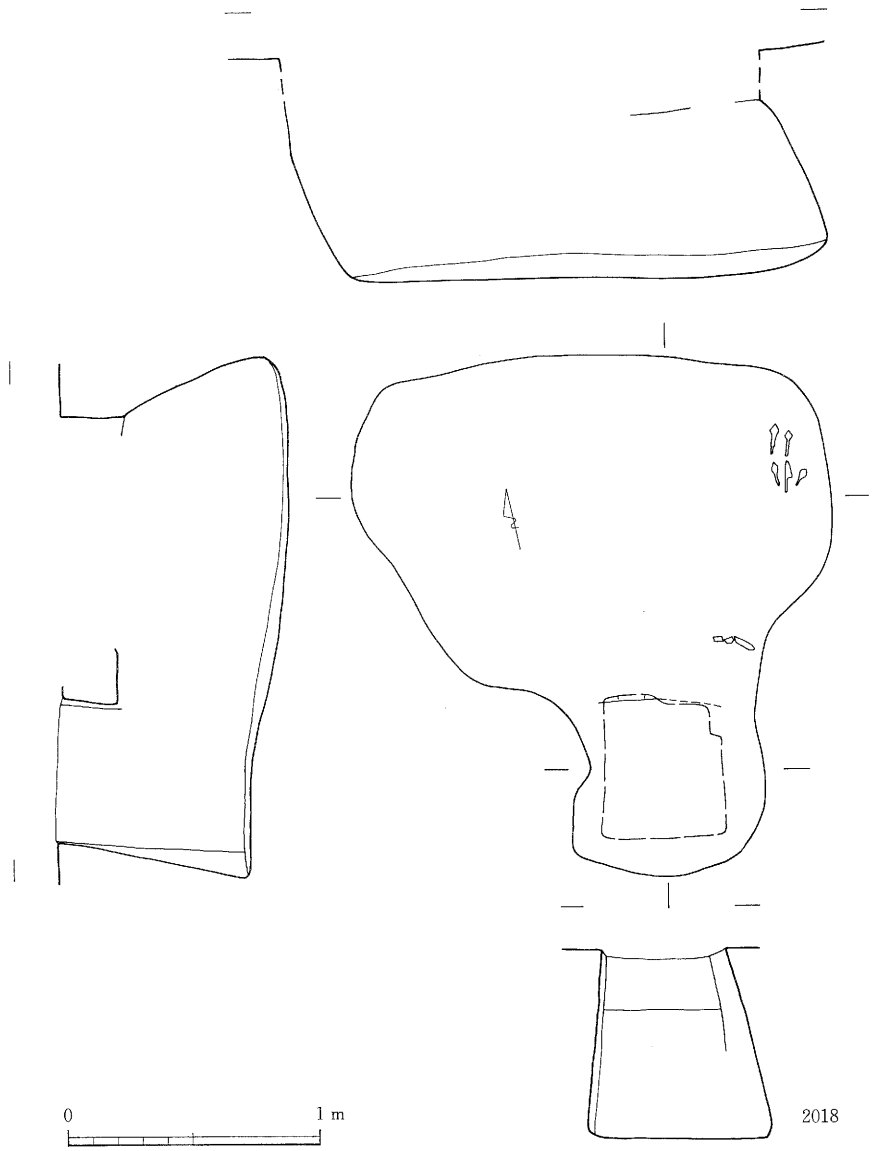
第84図　ＳＴ2015遺構実測図



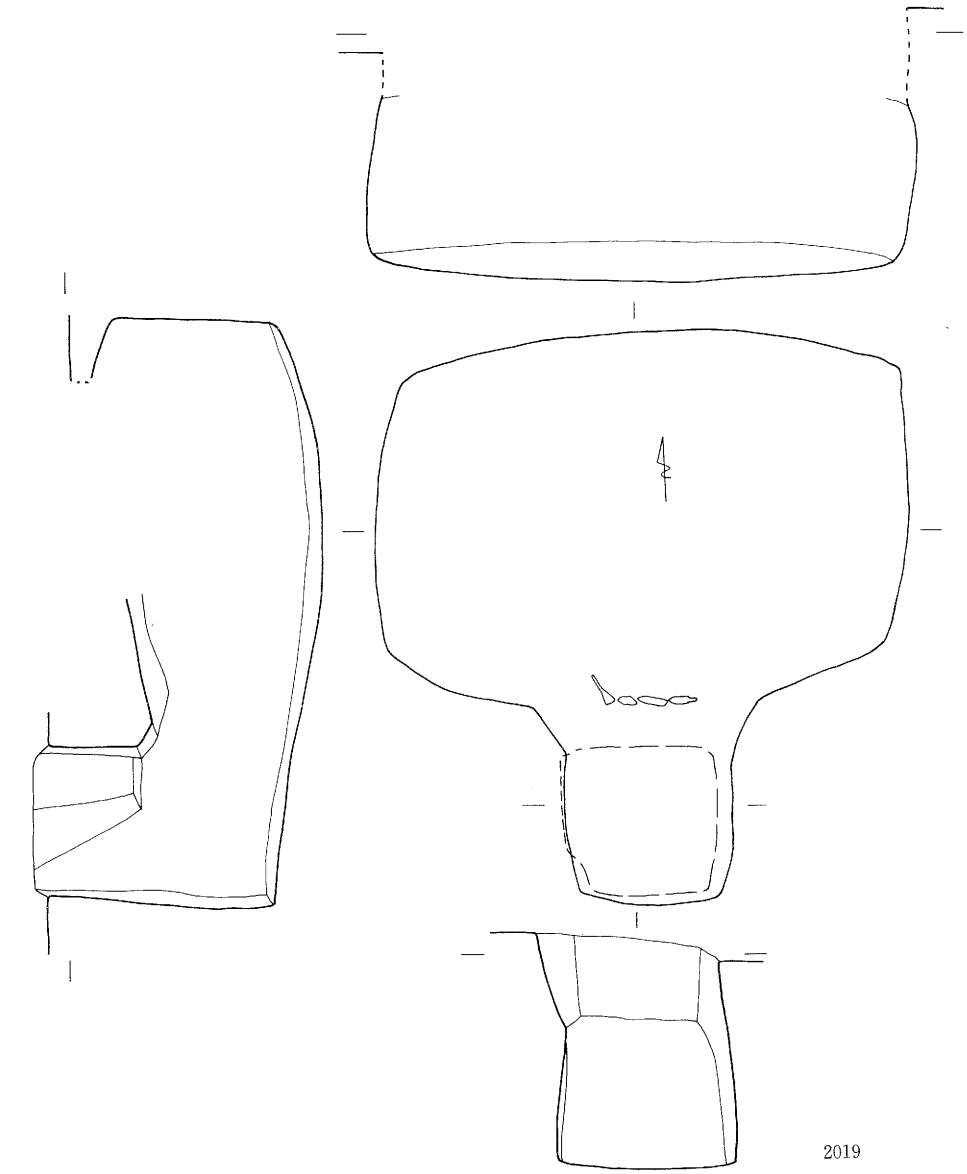
第85図　ＳＴ2016遺構実測図



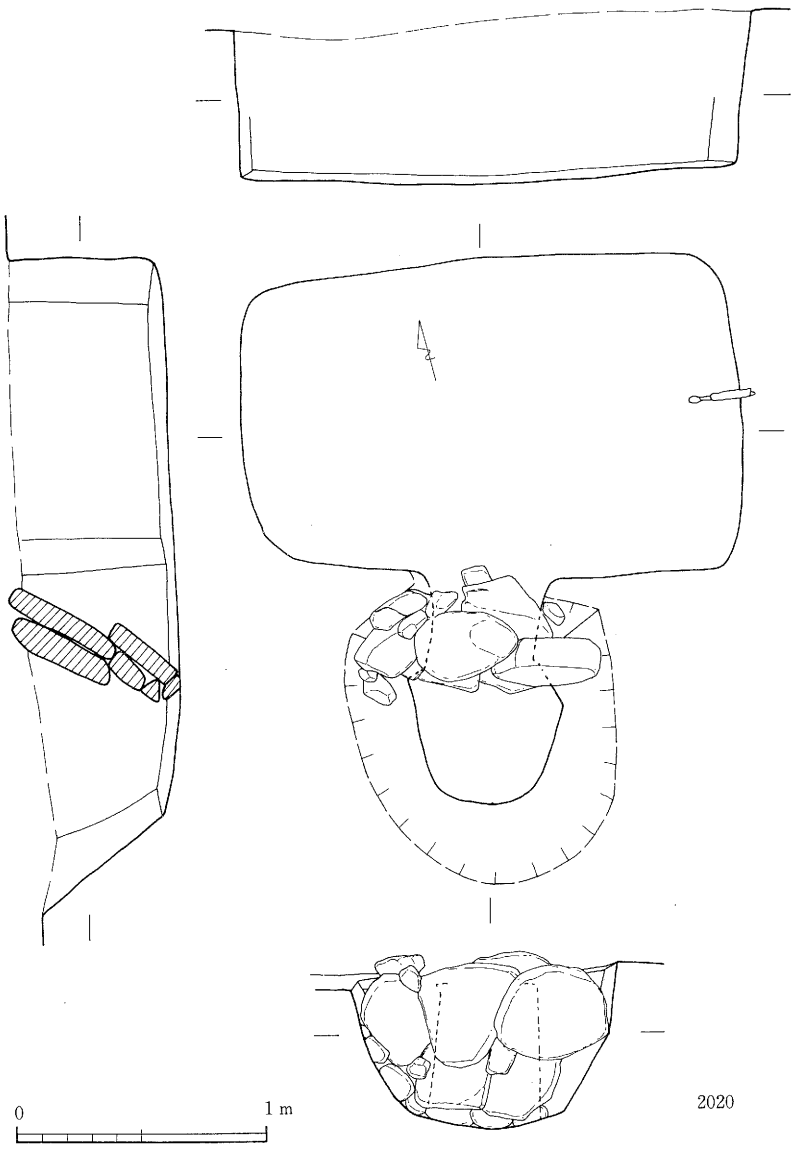
第86図　ＳＴ2017遺構実測図



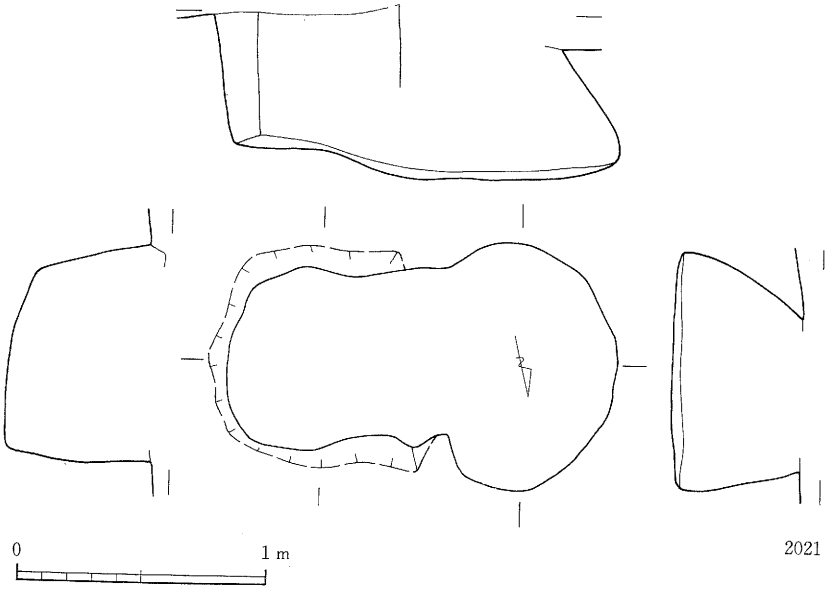
第87図　ＳＴ2018遺構実測図

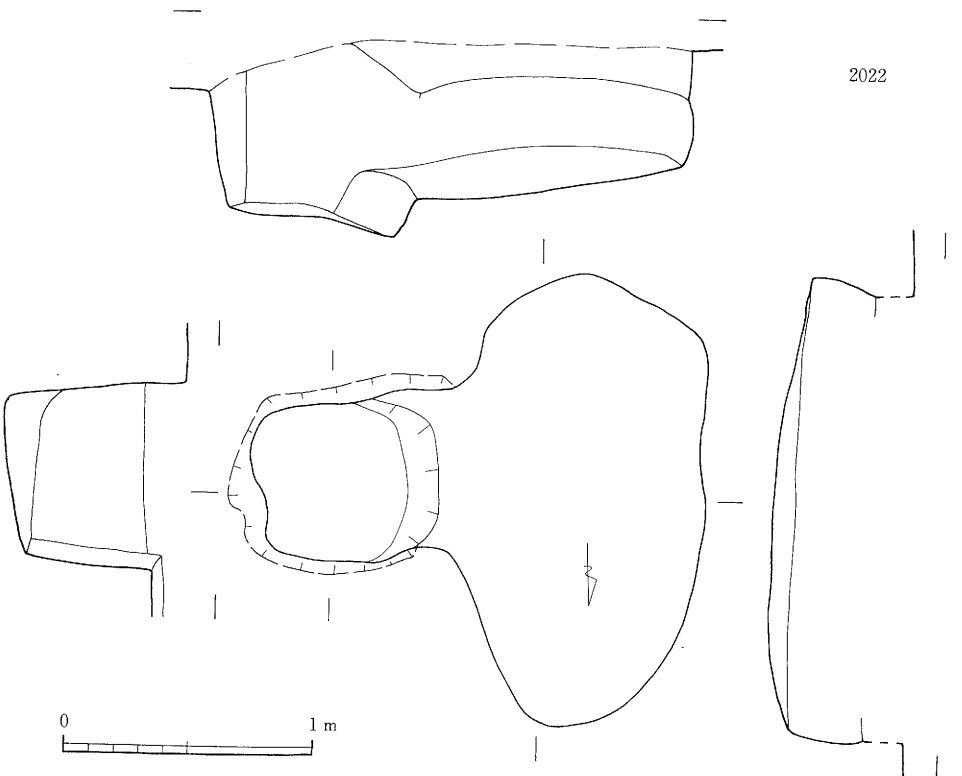


第88図　ＳＴ2019遺構実測図

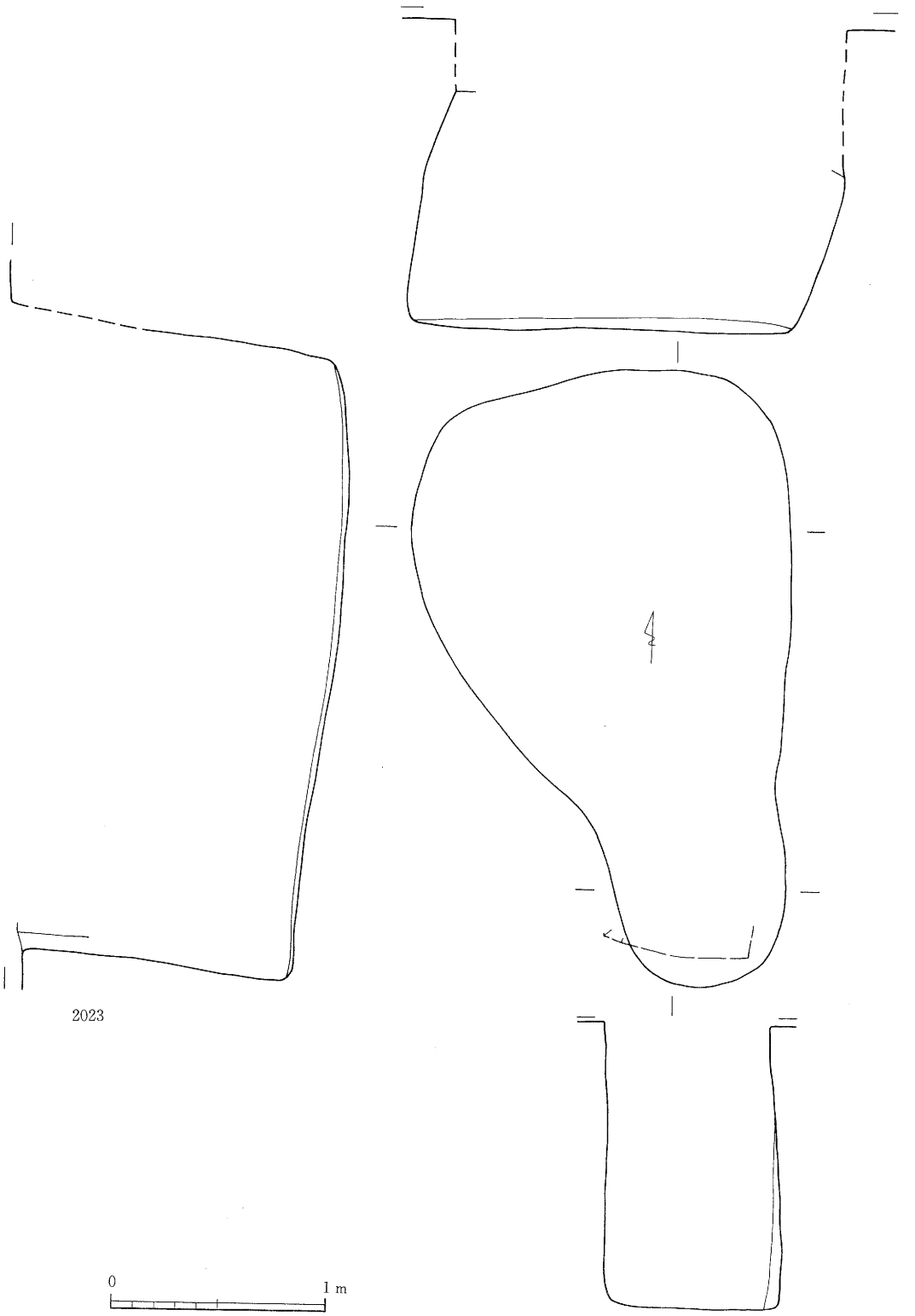


第89図　ＳＴ2020遺構実測図

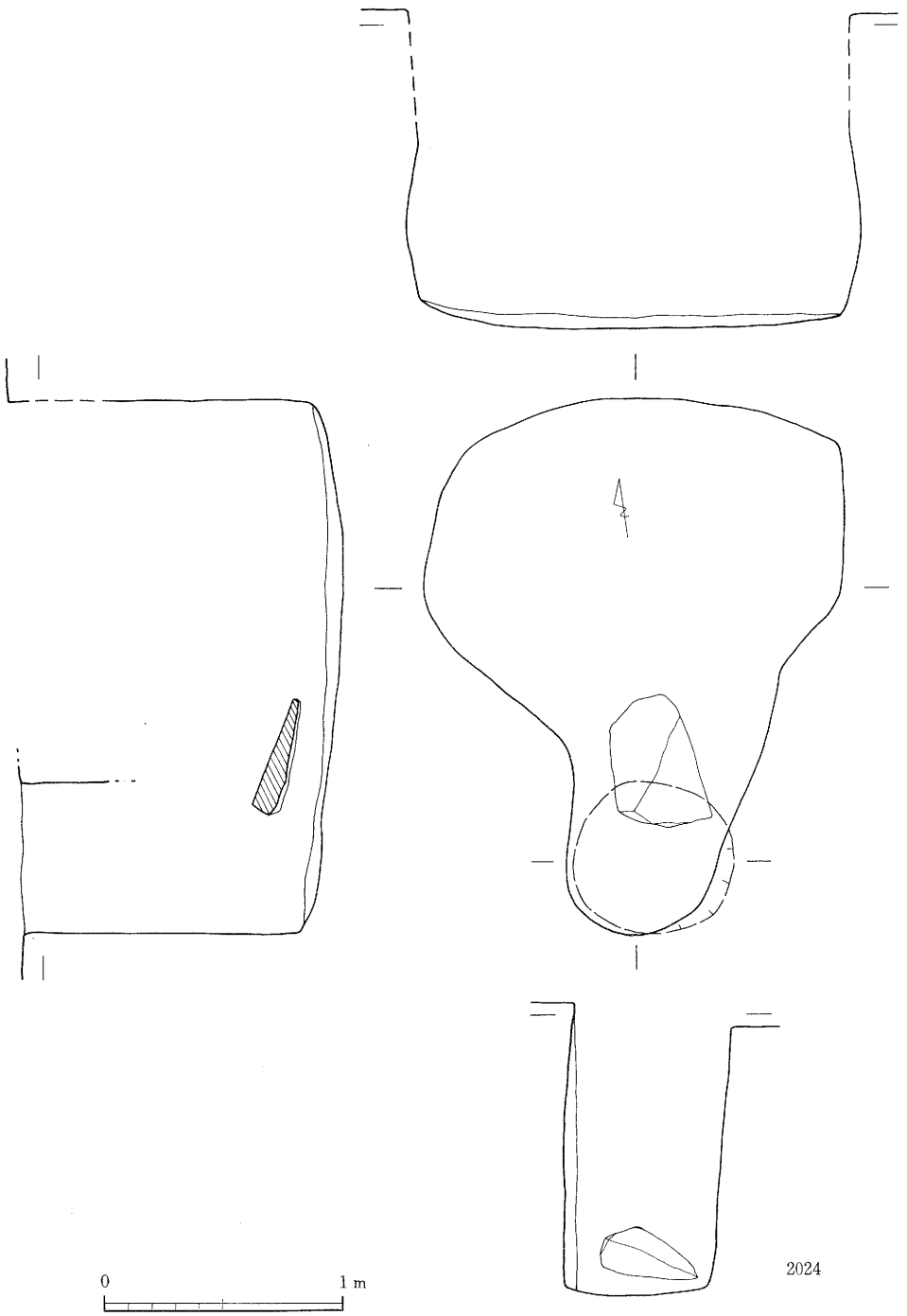




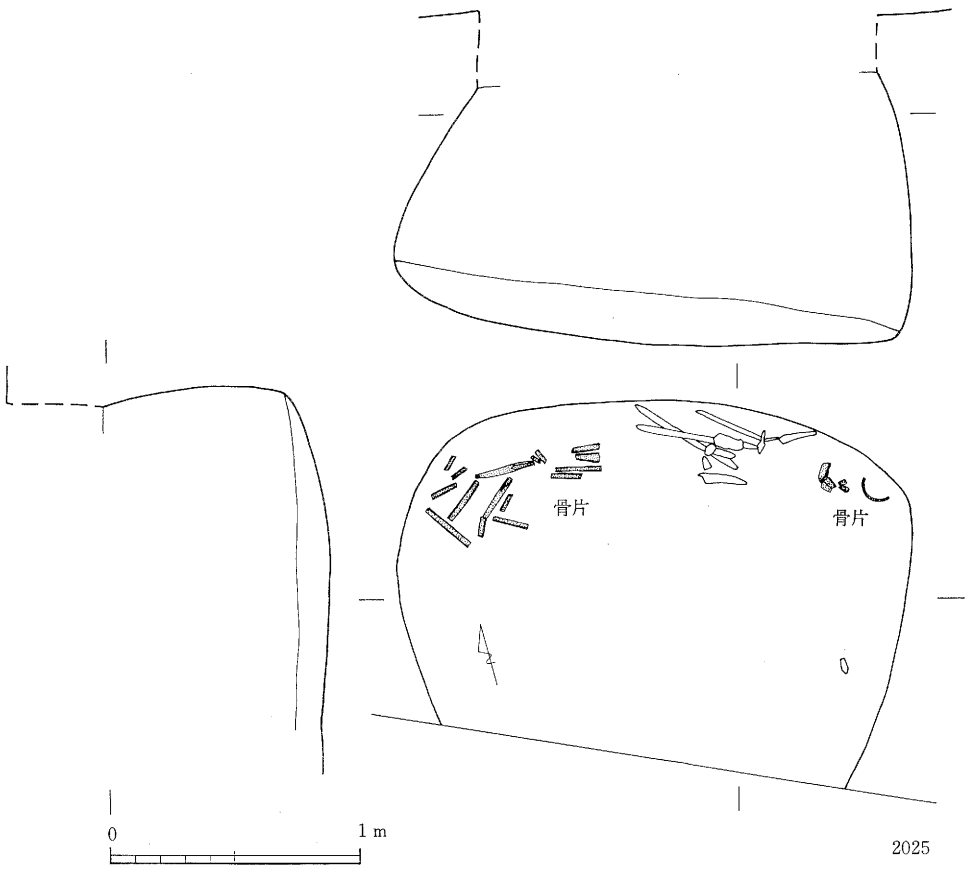
第90図　ＳＴ2021，2022遺構実測図



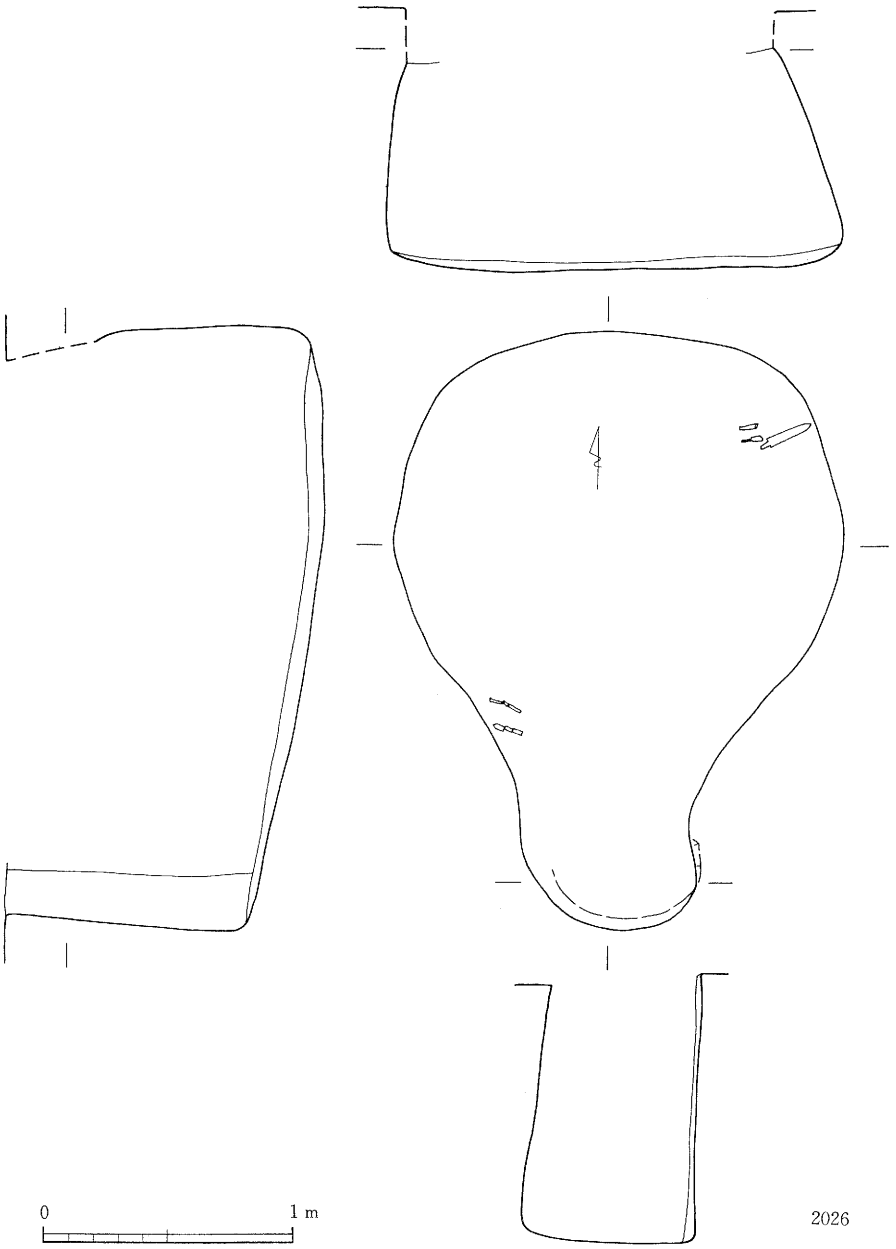
第91図　ＳＴ2023遺構実測図



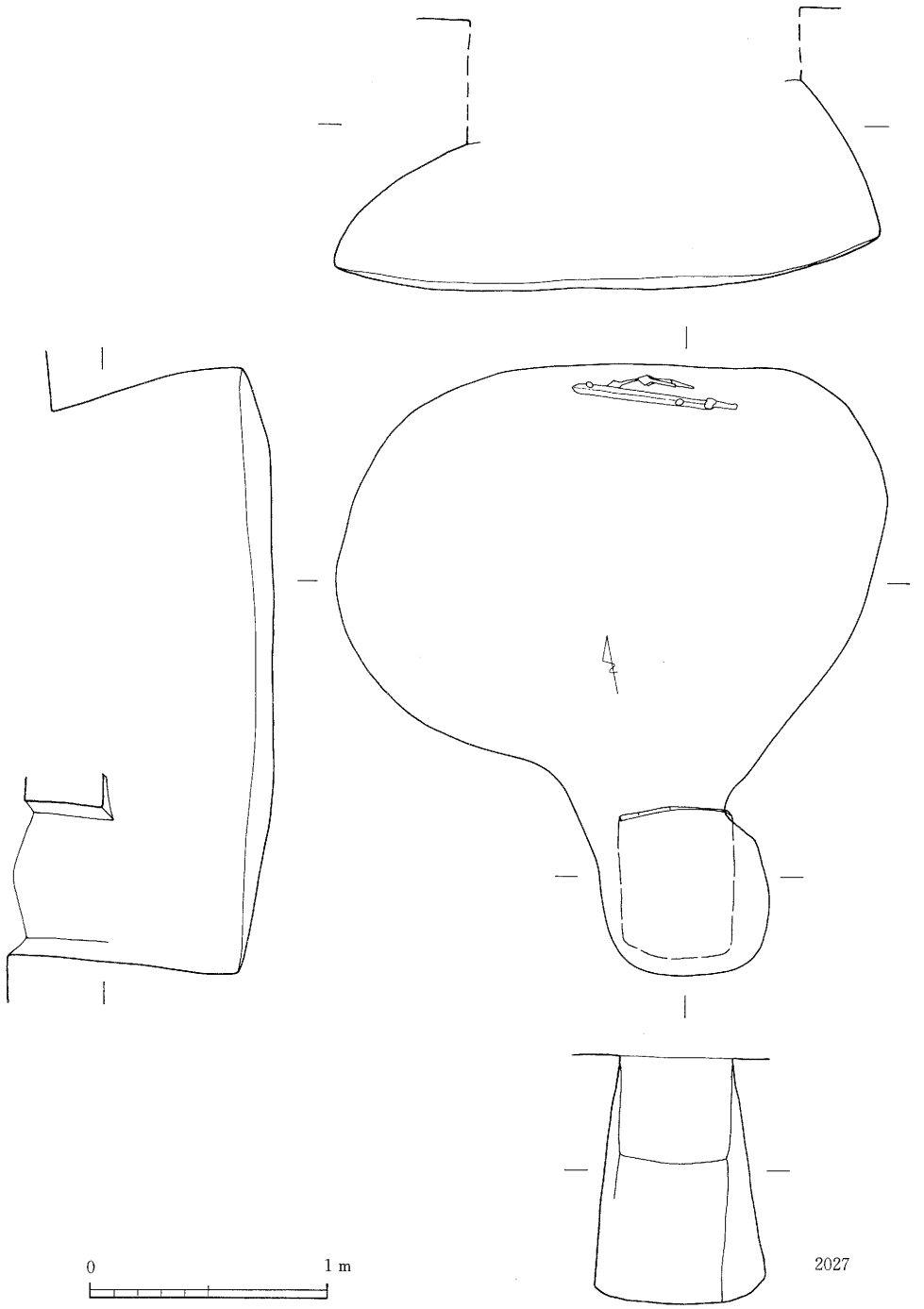
第92図　ＳＴ2024遺構実測図



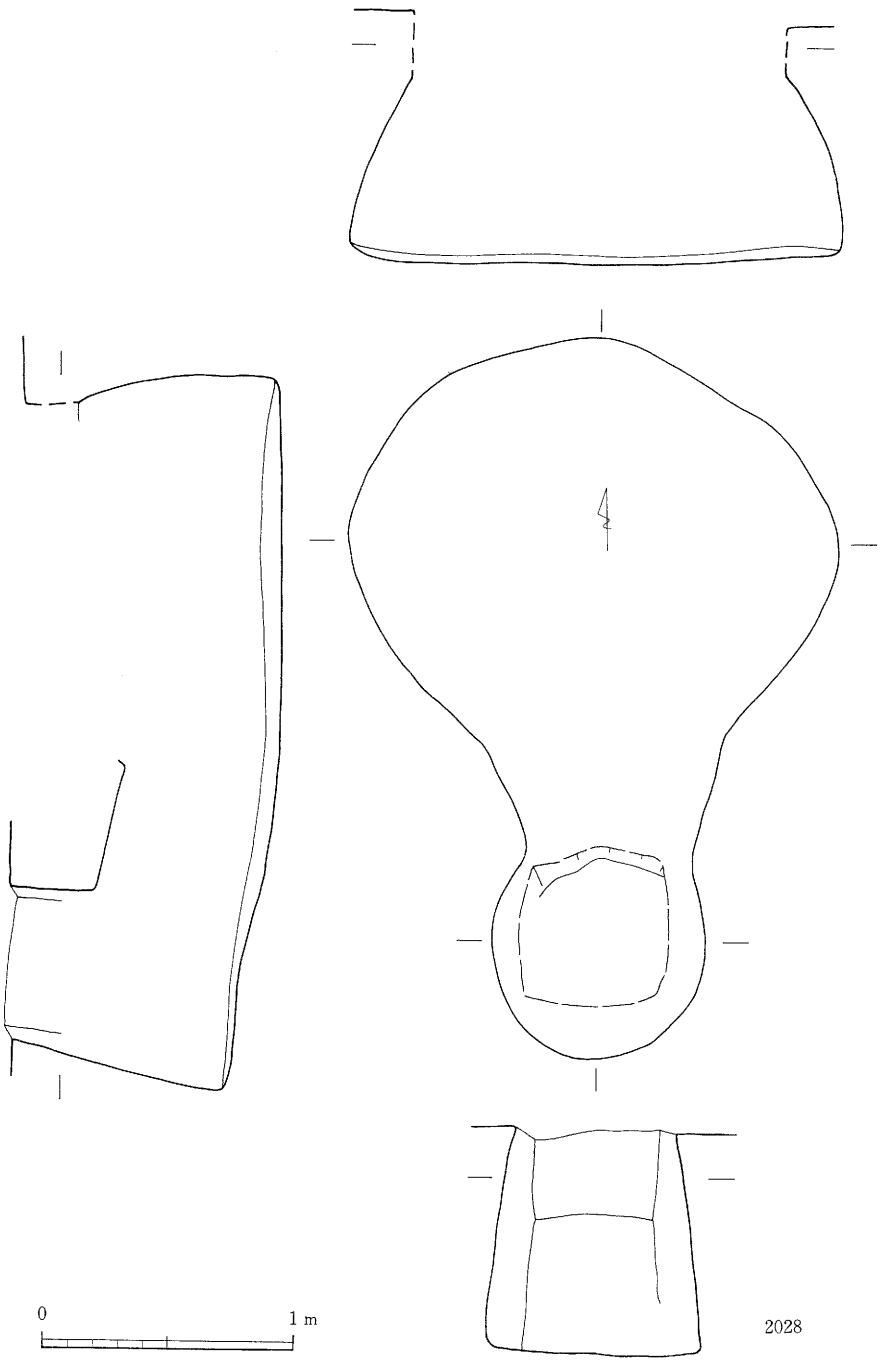
第93図　ＳＴ2025遺構実測図



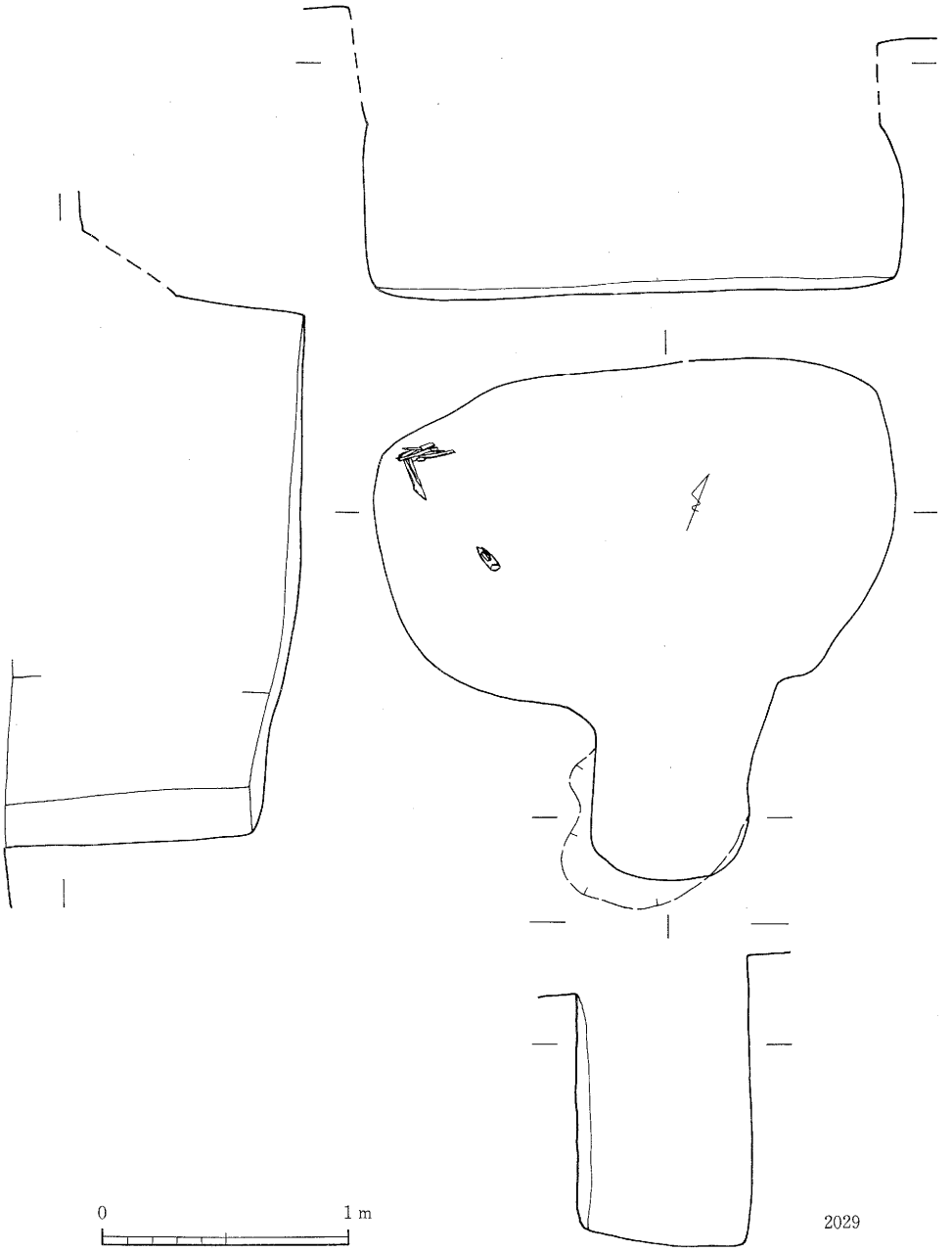
第94図　ＳＴ2026遺構実測図



第95図　ＳＴ2027遺構実測図



第96図　ＳＴ2028遺構実測図



第97図　ＳＴ2029遺構実測図

崩壊している。玄室右壁奥に剣１（第113図158）鏃１（第113図159)、左袖際に鏃４（第113図160～163）が出土している。竪坑堀り込みは円形プランを呈する。

ＳＴ2027（第95図）　竪坑上部閉塞のタイプ。楕円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。右肩はかなり崩れている。玄室の天井部が崩壊している。奥壁中央に剣３（第113図179・186・187）鏃４（第113図180～183）が出土している。

ＳＴ2028（第96図）　竪坑上部閉塞のタイプ。奥行と幅の比率がほぼ同じの円形プランの両袖を持つ平入り構造の玄室。両袖ともかなり崩れている。玄室の天井部が崩壊している。鏃１（第113図184）と鏃身を欠く茎部１（第113図185）が出土している。

ＳＴ2029（第97図）　竪坑上部閉塞のタイプ。隅丸長方形プランでやや右寄りの両袖を持つ平入り構造の玄室。玄室から羨道にかけて天井部が崩壊している。奥壁左角に鏃（第112図164・165）がかたまって出土している。

ＳＴ2030～ＳＴ2043　竪坑上部閉塞の竪坑と思われる落込みで、いづれも北方向に玄室を持つ。

２．遺　物

(1) 土師器（第98図～第105図）

土器の出土はＡ地区北西遺構群のＳＩ103・ＳＩ105周辺に土器密集地が見られるほかＳＴ1001、ＳＴ1003、ＳＴ1008、ＳＴ1005の地下式横穴墓からも出土している。

17はＳＴ1015の竪坑横、８・56・57は同じくＳＴ1015竪坑上部、37はＳＴ1008の玄室（土壙部）上部、39はＳＴ1003の玄室（土壙部）上部、52はＳＴ1001の羨道から玄室内にかけてそれぞれ検出された。36はＡ地区北西遺構群の東側に当たる６ｄグリッドで検出されている。上記以外の土器は板石積石室墓周辺の土器密集地からの出土である。

出土した土師器は壺、高杯が主である。それぞれ分類を記する。

ａ．壺

壺は単口の壺、二重口縁壺、長頸壺、刻み目突帯をもつ壺からなる。

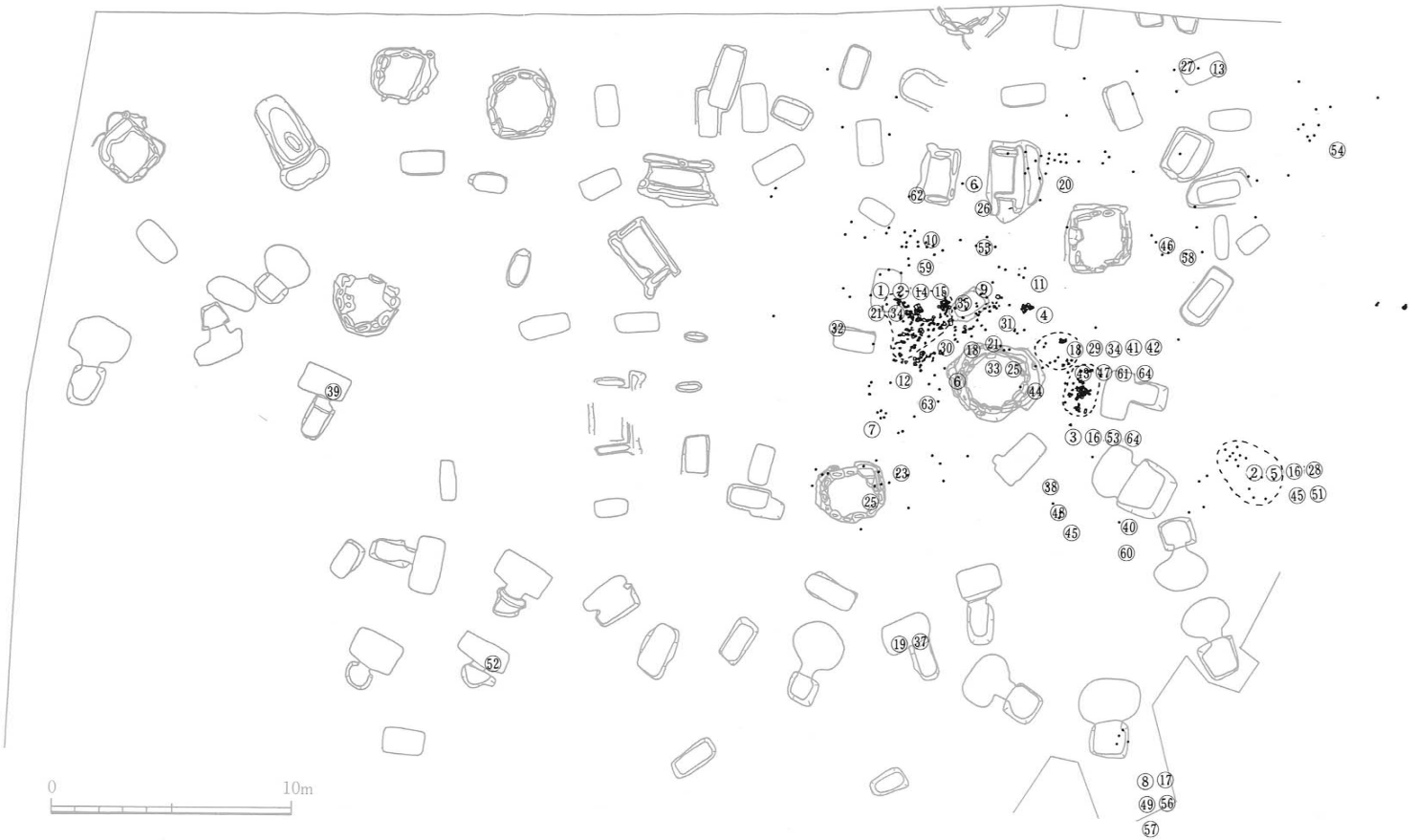
壺Ａ類　頸部が絞まり、口縁部がラッパ状に外反する壺（１～３、５～11）

Ａ－１類　最大径を胴部中位に持った胴部が楕円形の巣口の壺。頸部に刻み目突帯を施す。底部は尖り気味の丸底を呈する。（１）

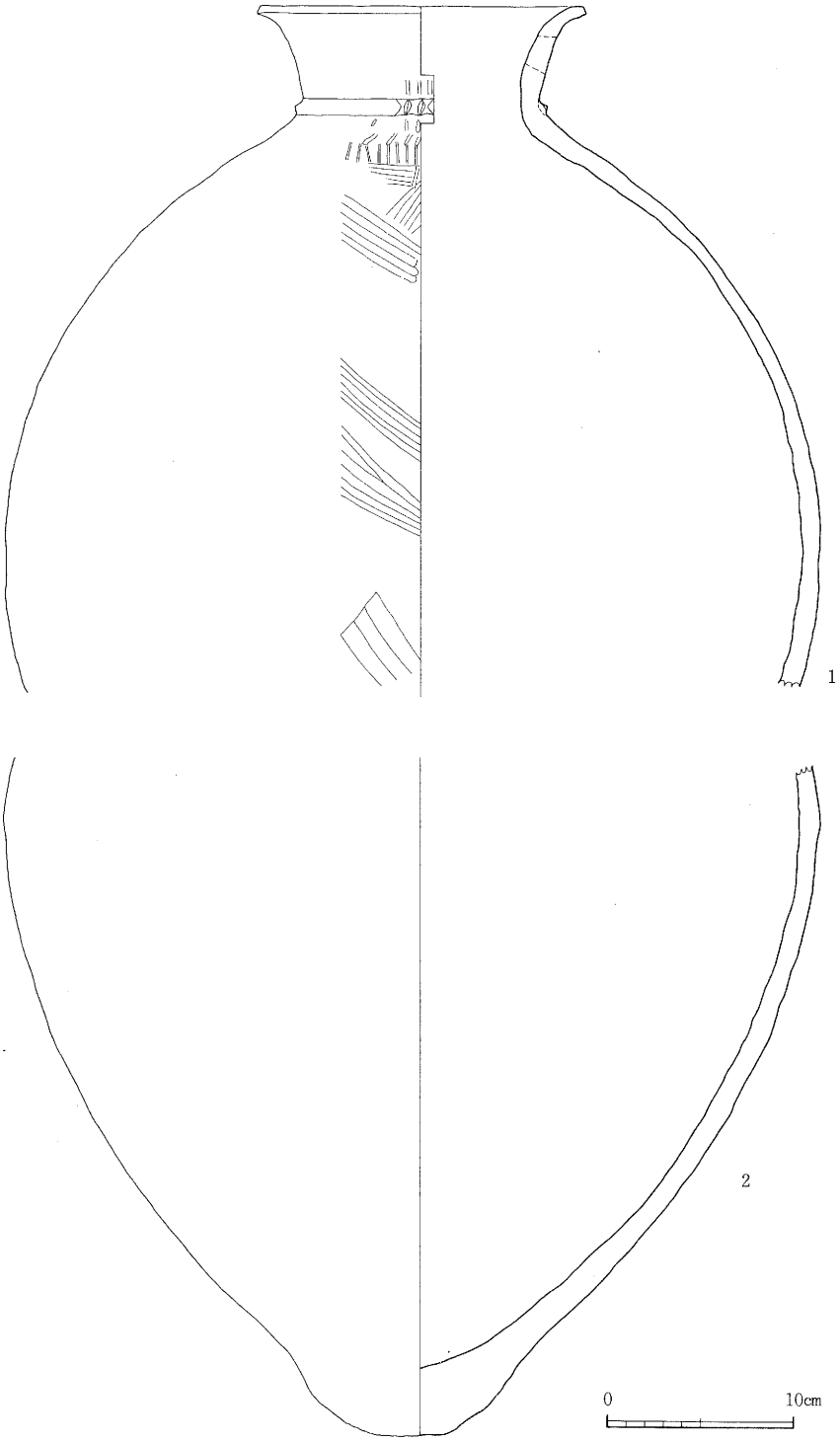
Ａ－２類　最大径を胴部上位に持つ肩の張った単口の壺。（３、５～11）

壺Ｂ類　直立気味に開く口縁部に球形の胴部を持った単口の壺。（４）

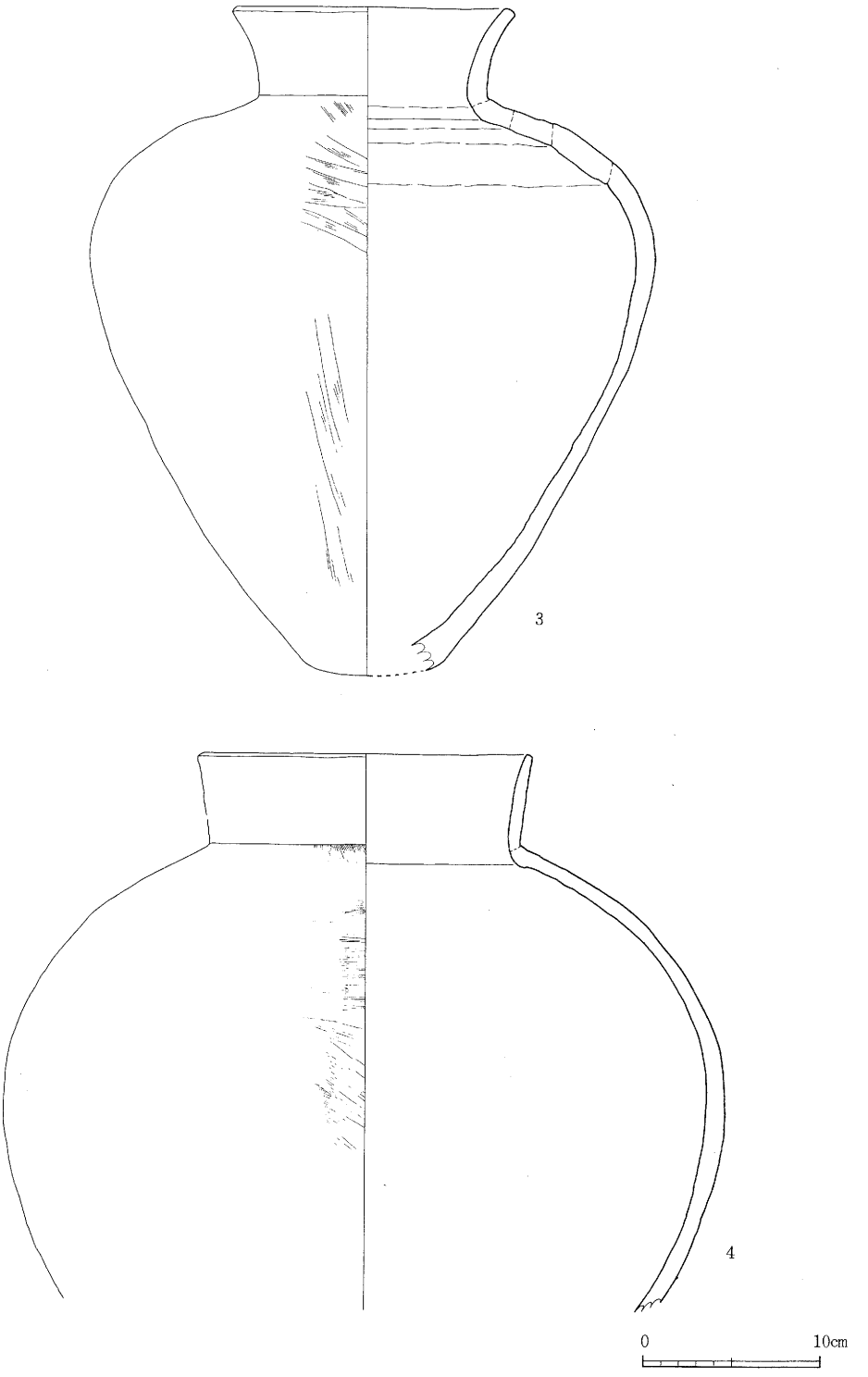
壺Ｃ類　二重口縁の壺。（12～14）



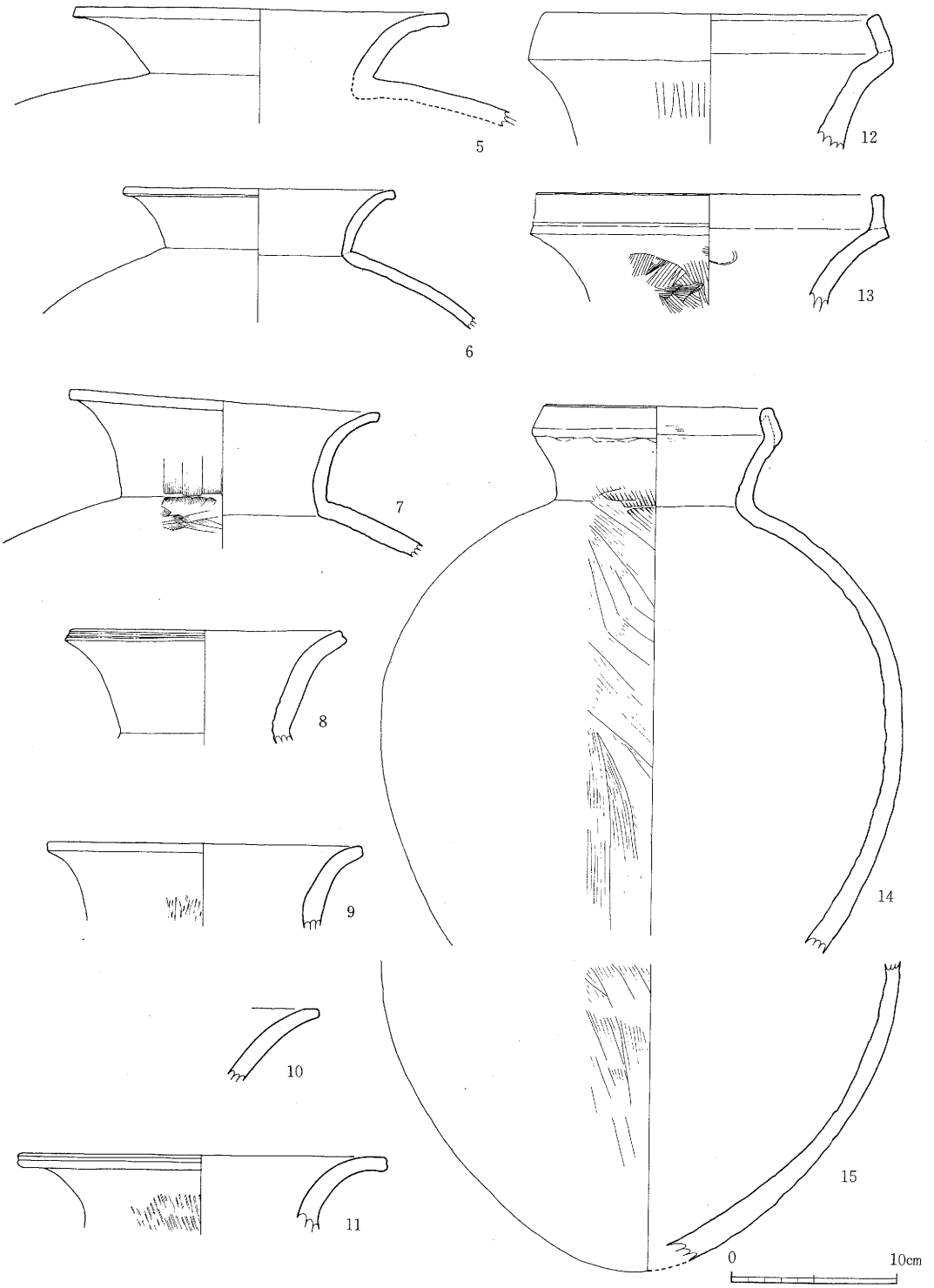
第98図　A地区北西遺構群土器出土分布図　番号は遺物番号(図面番号)



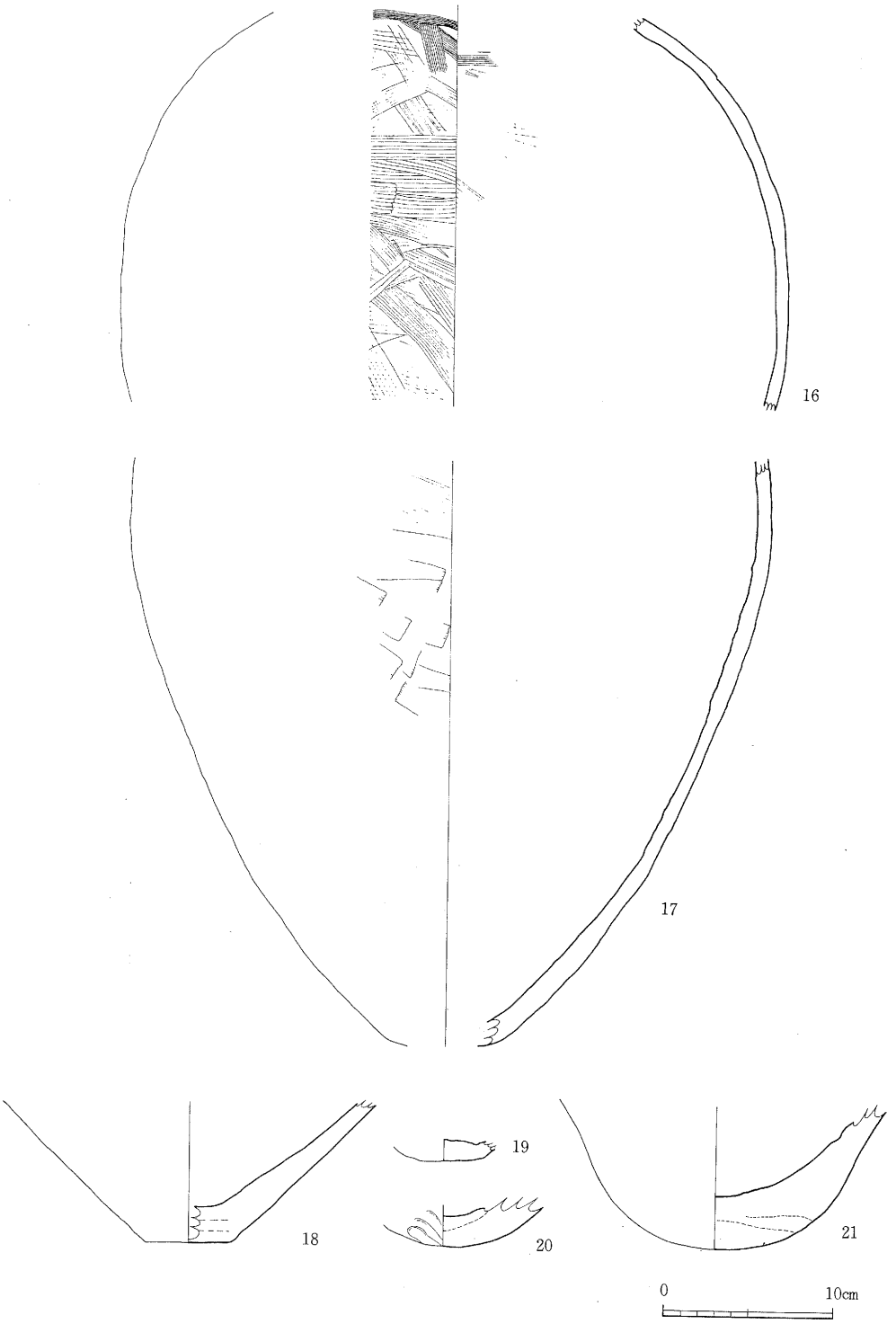
第99図　A地区北西遺構群出土土器実測図(1)



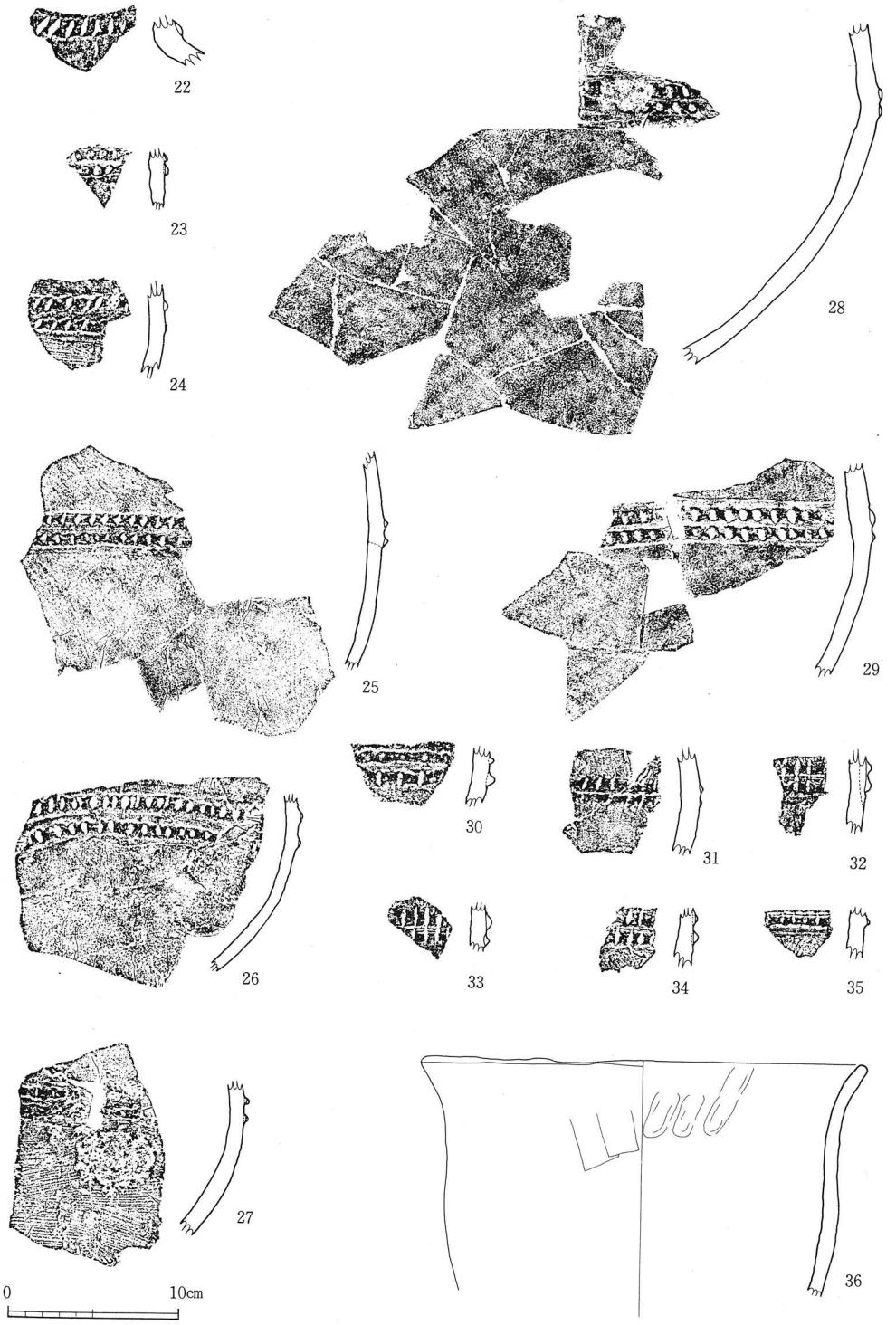
第100図　A地区北西遺構群出土土器実測図(2)



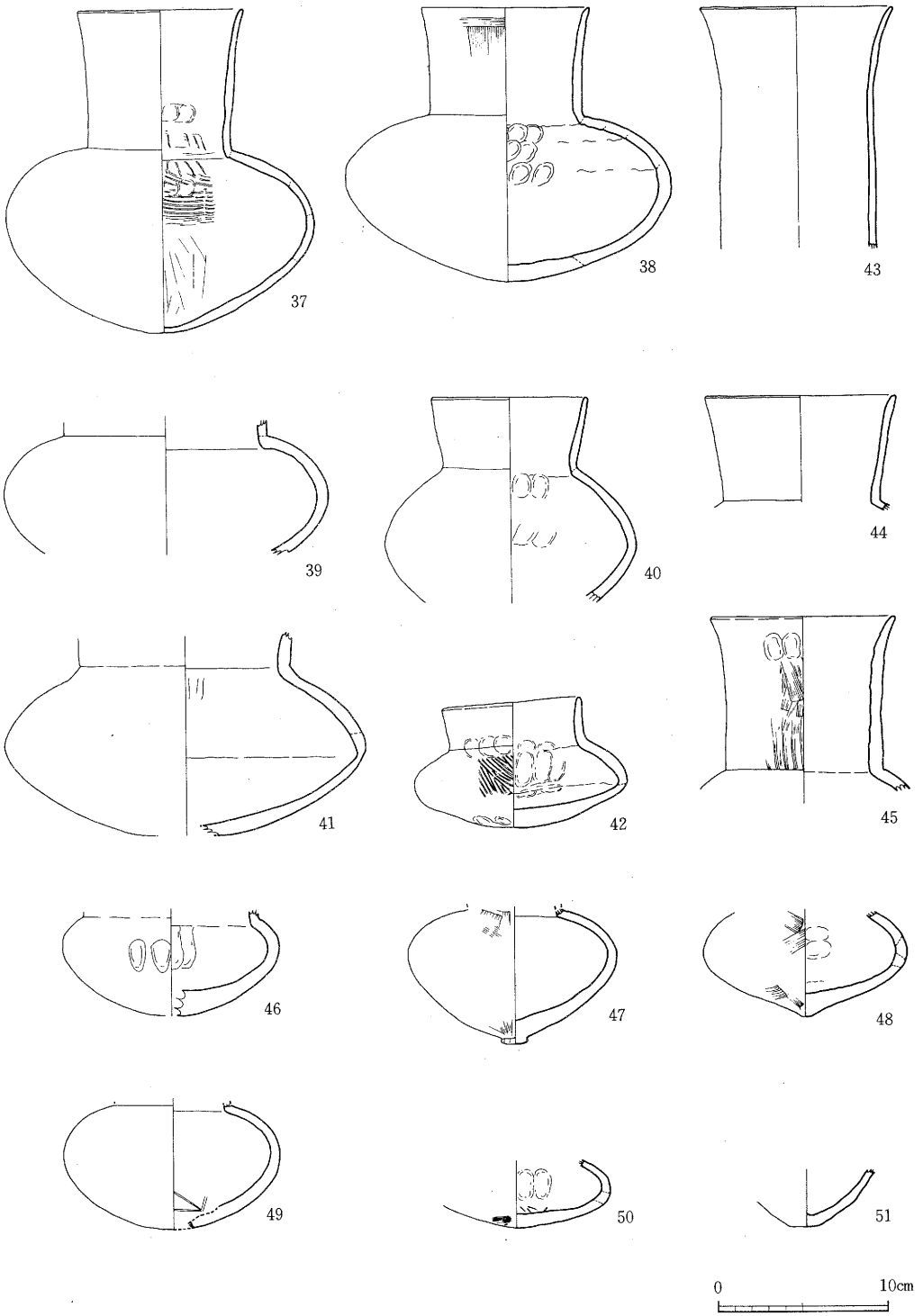
第101図　A地区北西遺構群出土土器実測図(3)（8…S T1015）



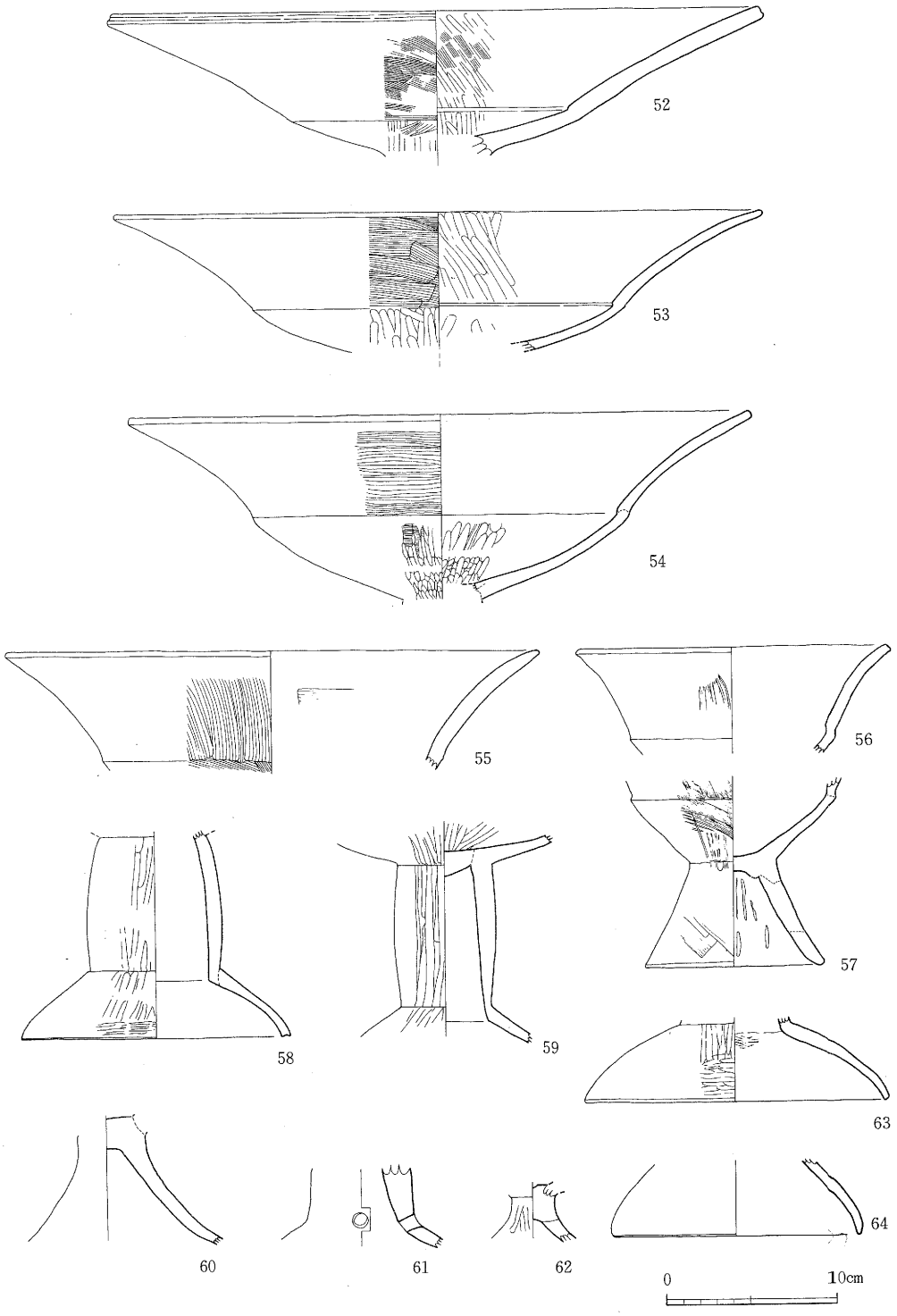
第102図　A地区北西遺構群出土土器実測図(4)（17…S T 1015）



第103図　A地区北西遺構群出土土器実測図(5) (36…6 d グリッド)



第104図　A地区北西遺構群出土土器実測図(6) (37…S T1008、39…S T1003)



第105図　A地区北西遺構群出土土器実測図(7) (52…S T1001、56･57…S T1015)

C－1類　口縁部が内湾気味に内傾する二重口縁壺。（12、14）

C－2類　口縁部が反り気味に内傾する二重口縁壺。（13）

壺D類　長頸の壺（37～51）。このうち42・46～51は小型の長頸壺である。

D－1類　最大径が若干胴部上位にあるソロバン状の胴部に底部が少し尖り気味になる長頸壺。（37～39・46・49）

D－2類　胴部中位に最大径を持ち若干膨らみのある胴部で短頸になる長頸壺。（40・41・44）

D－3類　全体的に寸詰まりの器形となる長頸壺。（42・50）

D－4類　底部が尖底気味になる長頸壺。（47・48）

壺E類　胴部に2本の刻み目突帯を施す壺。（23～35）

E－1類　個々に刻み目を施した2条の突帯を持つ土器。（24・26）

E－2類　同じ単位の刻み目を施した2条の突帯を持つ土器。（23・25・27～29）

E－3類　1本の幅広の突帯を線刻で2本に表現し施した土器。（30～35）

b．高　坏（52～64）

坏部1類　大形で浅い坏部。口縁部が大きく外反し、受部と口縁部の境に稜を持つがあまり明瞭ではない。（52～55）

坏部2類　小形で深い坏部。口縁部が外反し、受部と口縁部の境に稜を持つ。（56）

脚部1類　エンタシス状に中位が膨らみ、椀状を持つ脚部。（58・59・63・64）

脚部2類　裾部に向かってラッパ状に開く脚部。（57・60・62）

脚部3類　柱状の脚部が屈曲して裾部に開く。脚部と裾部の境に穿孔が見られる。（61）

(2) 鉄　器

a．鉄　鏃（第106図～第113図）

地下式横穴墓や土壙墓などの遺構から出土した鉄鏃142本のうち、鏃身部が残る形状の明確な約119本について大別すると圭頭鏃63本、長茎鏃約18本、腸抉柳葉鏃14本、腸抉三角鏃7本、柳葉鏃9本、無茎鏃8本からなる。鉄鏃については個々の説明は省き分類ごとの解説する。

圭頭鏃（K類）

いわゆる圭頭斧箭鏃とよばれる形式の鏃である。竪坑上部閉塞の地下式横穴墓を中心に63本と最も多く出土している。

K１～全長15cm前後の比較的大型の圭頭鏃。刃部角の鋭角な鏃は細味で、鈍角な鏃は幅広の傾向が見られる。(61・62・68・69・71・72・82～85・89・99・105・108・109・120～122・132・144・168・169・171・172・180～184)

K２～全長10cm前後の中型の圭頭鏃。刃部角は比較的鈍角である。(８・10・25・26・39・86・87・91・103・104・115・147～150・153・156・159・172・174)

K３～全長５cm前後の小型の圭頭鏃で刃部は比較的鈍角である。(３・６・10・23・31・40・41・55～58・113)

K４～全長12～13cmの鏃で片刃状に中心が扁る。(74・154)

長頸鏃（T類）

竪坑上部閉塞の地下式横穴暮から18本以上出土している。

T１～鏃身部が三角形を呈する長頸鏃。(145)

T２～鏃身部の関部が斜関化を呈する長頸鏃。(100・134・135)

T３～鏃身部の関部が無関化を呈する長頸鏃。(137・138・164・165・178)

無頸鏃（M類）

板石積石室墓、土壙墓、羨門閉塞の地下式横穴墓から８本が出土している。

M１～刺が浅い正三角形状の小型の無頸鏃。(１)

M２～逆刺が若干深めの長三角形状の細長の無頸鏃。(42・43・45・46・49・50)

M３～砲弾型を呈する柳葉状の無頸鏃。(11)

腸抉柳葉鏃（Yr類）

竪坑上部閉塞の地下式横穴墓からと土壙から１段の逆刺のものが13本、２段の逆刺のものが１本出土している。有関のものと無関のものが見られる。

Yr１～逆刺が１段で山形の関を有する腸抉柳葉鏃。逆刺が大きく外にひらく比較的大型のタイプと反りの余り大きくない中型のタイプがみられる。(80・81・94・110・111・112・114・124・125・126・127)

Yr２～逆刺が１段で無関の腸抉柳葉鏃。鏃身長10cm前後の比較的大型の鏃で逆刺が大きく外にひらく。(73・151)

Yr３～逆刺が２段で無関の腸抉柳葉鏃。鋒よりふくらを有したあと、ほぼ直線状に垂下して斜関を形成する。鏃身長が７cmと長身化した中型の鏃である。(18)

腸抉三角鏃（Ys類）

土壙墓と羨門閉塞の地下式横穴墓から７本が出土している。有関と無関のものが見られる。

Ｙｓ１～鏃身長４cm前後の無関の腸抉三角鏃。鏃身部が長三角形を呈し、逆刺が外反気味に開くタイプと直線的に下がるタイプがみられる。（22・24・33・34・35）

Ｙｓ２～鏃身長５cm以上の無関の腸抉三角鏃。鏃身部は長三角形を呈し、逆刺は直線状に下る。（44）

Ｙｓ３～鏃身長５cm以上の無関の腸抉三角鏃。台形状の大型の関を有し、鏃身部は長三角形を呈する（38）

柳葉鏃（Ｒ類）

土壙墓と羨門閉塞の地下式横穴墓から９本が出土している。

Ｒ１～刃部先端から鏃身関部にかけて内湾しながら緩やかな円弧状を呈する。関部は不明瞭で茎に至る。鏃身長から小型と大型のものが見られる。（５・９・13）

Ｒ２～刃部先端から鏃身関部にかけて内湾しながら緩やかな円弧状を呈するが、楕円形に近い形状の小型鏃である。鏃身関部紋り気味の撫関である。（28・48）

Ｒ３～鋒よりふくらを有したあと、ほぼ直線状に垂下して斜関を形成する。鏃身長が７～９cmと長身化した比較的大型の鏃である。（19・20・21）

Ｒ４～鋒よりふくらを有したあと、緩やかに茎部まで至る。（101）

ｂ．剣（第106図～第113図）

総数42本を数える。土壙墓をはじめ羨門閉塞および竪坑上部閉塞の両タイプの地下式横穴墓から出土している。

４（ＳＫ７）は茎胴部を欠く。目釘穴が１つ開く。７（ＳＫ16）は鋒先を欠く。両角関である。12（ＳＫ16）は刃部下半を欠く。15（ＳＫ26）は茎のみを欠く。両角関である。刃部全長は約30cmを測る。鋒先に鞘の木質部がわずかに残る。

36（ＳＴ1008）は茎のみを欠く。斜角の両関である。刃部全長は約30cmを測る。関付近に鞘の木質部がわずかに残る。

37（ＳＴ1011）は刃部下半を欠く。47（ＳＴ1016）は茎先端を欠く。両角関である。51・52（ＳＴ1018）のうち51は完形。関は角をなさない。目釘穴が２つ開く。52は茎部を欠く。鋒先と関付近に木質が残る。51・52とも刃部全長22～23cmを測る。59・60（ＳＴ1022）のうち59は完形で刃部全長おおよそ30cmを測る。斜角の両関である。60は刃部下位を欠くが刃部全長は50cmを超す。63（ＳＴ1025）には鏃２本（61・62）が錆着している。茎部に木質が残る。64～67（ＳＴ1026）のうち67は刃部中央を欠くが64～66は完形である。64の刃部全長は

おおよそ35cmで関は~~矢~~角をなさない。鞘の木質部がかなり遺存する。65・66は刃部下位から関部に向って広がる。斜角の両関である。67は斜角の両関で目釘穴が1つ開く。関部から茎部にかけて鹿角製の装具が装着されている。刃部全長は35cm前後と推定される。70（ＳＴ2001）は関部は角の崩れた両関である。目釘穴が1つ開く。57（ＳＴ2002）はほとんど鞘の木質部が遺存しており本体は肉眼では判明しない。木質部には樹皮の付着が見られる。関部には鹿角製の装具が装着されている。目釘穴が1つ開く。刃部全長は50cmを超える。79（2004）には剣（77）と刀子（78）が錆着している。79は完形で関は角をなさない。鞘や茎に木質部が残る。刃部全長はおおよそ45cmを測る。78は関部付近から下位を欠く。推定の刃部全長は20cm以下である。95(ＳＴ2010)は刃部全長50cmを超える。木質は鞘では部分的に、茎には全面に残る。斜角の両関でやや片側に寄る。目釘穴が1つ開く。106(ＳＴ2012）は関付近から下位を欠く。117・118・119(ＳＴ2013）のうち117は刃部中ごろを欠く。斜角の片関で関部には鹿角製の装具が装着されている。また、茎部の木質部には樹皮の付着が見られる。目釘穴が1つ開く。刃部全長はおおよそ50cmを測る。118は完形で関部には鹿角製の装具が装着されている。また、茎部の木質部には樹皮の付着が見られる。119は関は角をなさない。茎はやや曲る。関から刃部中ごろにかけての鞘に木質部が遺存する。一部に木質部には樹皮の付着が見られる。鋒先は錆のため判明しない。130・131・133・136（ＳＴ2014）はいずれも完形である。130は刃部全長がおおよそ50cmである。関の周辺は錆のため良く判明でないが両関を持つ。131は刃部全長約35cmで鞘や茎に木質部が遺存する。鞘には木質部には樹皮の付着が見られる。133は刃部全長約36～37cmで斜角の両関である。136は両関を持ち、刃部下位から関に向って幅広になる。茎に木質部と目釘1が遺存する。刃部全長約21cmを測る。141・142（ＳＴ2015）のうち141は両角関で刃部下位から関に向って幅広になる。茎に木質部が一部遺存する。刃部全長は約20cmを測る。142は鋒を欠く。関は角をなさない。鋒周辺に鞘の木質部が遺存する。刃部の推定全長は20cm程になる。157(ＳＴ2020）は刃部全長約33cmで両関を持つ。全体に木質部が遺存する。158(ＳＴ2026）は刃部下位から関にかけて幅が広がる。目釘穴が1つ開く。刃部全長約20cmを測る。166・167・170(ＳＴ2025）はいずれも錆のため関の形状が不明である。166は完形で刃部50cm程度である。167は関から茎を欠く。推定刃部長は50cmを超える。170は完形で関は角をなさない。刃部長30cm程を測る。179・186・187(ＳＴ2027）のうち186・187はほとんど欠損する。179は完形で刃部は60cm程の長さを測る。斜角の両関である。

c．刀（第109図・第110図・第112図）

いずれもＢ地区の竪坑上部閉塞の地下式横穴墓から５本出土している。76（ＳＴ2004）は完形で接合の関係か胴部下位と茎でやや屈曲する。茎尻は隅を弧状に抉り落としている。関は直角と思われる。96（ＳＴ2010）は完形で目釘穴が一つ開く。関は撫角を呈し茎端は曲線をなす。107(ＳＴ2012）は完形。刃部全長が20cm弱と短い。茎には木質部が遺存する。116(ＳＴ2013）完形で鏃３（113～115）が錆着している。鞘には木質部が遺存しており茎は錆が全面を覆っている。刃部全長は25cm程度である。143(ＳＴ2017）は鋒と茎尻を欠く。関は鹿角製装具が遺存しており不明だが、直角の片関で関近くでやや幅広を呈する。

d．鉾（第109図・第110図）

いずれもＢ地区の竪坑上部閉塞の地下式横穴墓から３本出土している。90（ＳＴ2007）の刃部は短い。袋部近くになると刃部に丸みを持つ。関は撫角で袋部端を欠く。内部に木質が遺存する。97（ＳＴ2010）は完形で刃部断面は両鎬造りを呈する。関は斜角を呈する。袋部は端部に２ヵ所に抉りが入る。内部には木質が遺存する。102(ＳＴ2011）は完形である。関は直角を呈しており袋部は端部に２ヵ所抉りが入る。内部には木質が遺存する。

e．刀子（第109図・第110図）

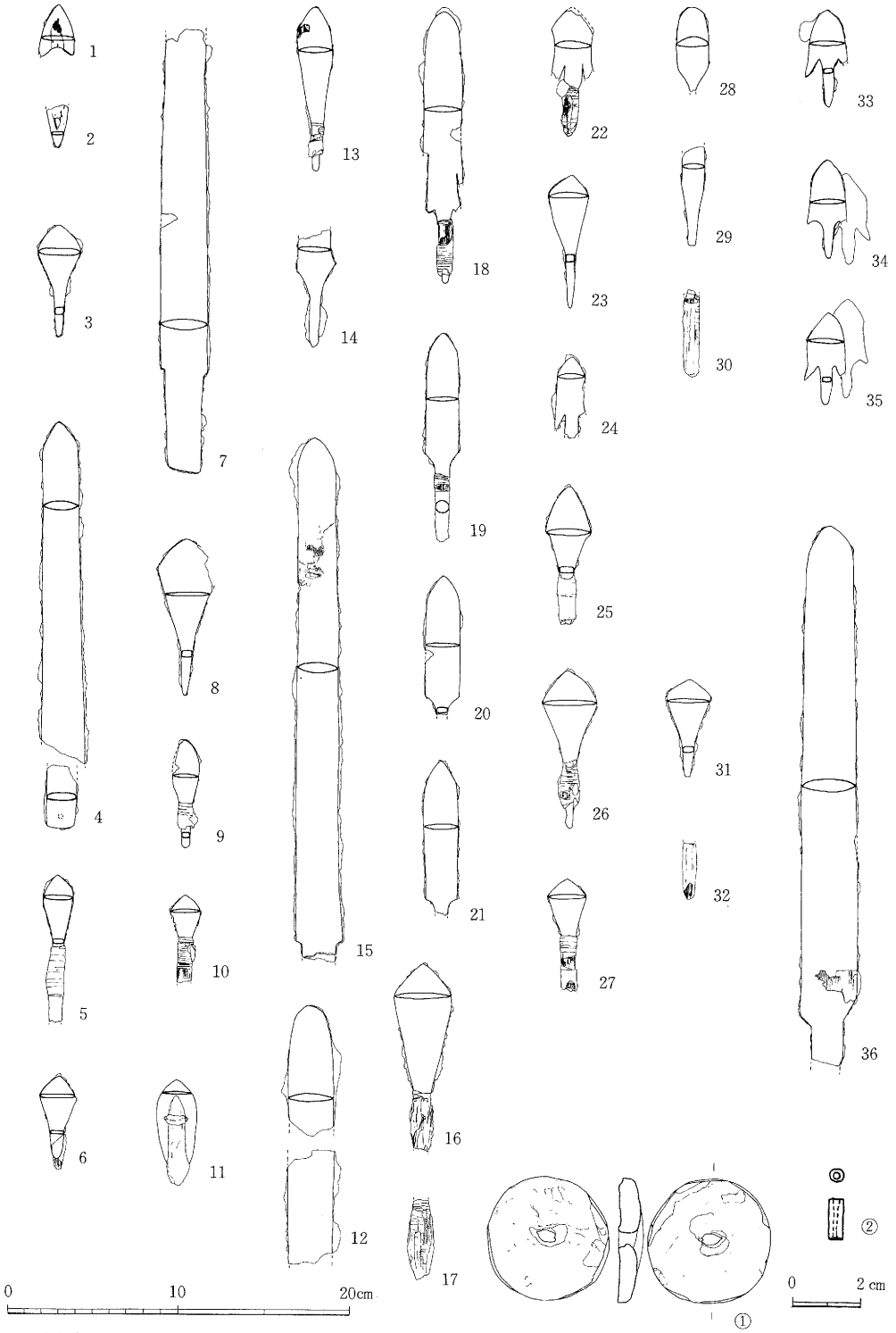
いずれもＢ地区の竪坑上部閉塞の地下式横穴墓から２本出土している。77（ＳＴ2007）は錆のため群細は不明である。刃部の先端と思われる。98（ＳＴ2010）は刃部幅のある刃子である。茎は端部を欠くが鹿角製の装具で覆われている。

(3) 玉（第106図②）

ＳＫ２より出土の管玉である。長さ1.2cm、径0.4cmを測る。1.5cmの穿孔が見られる。

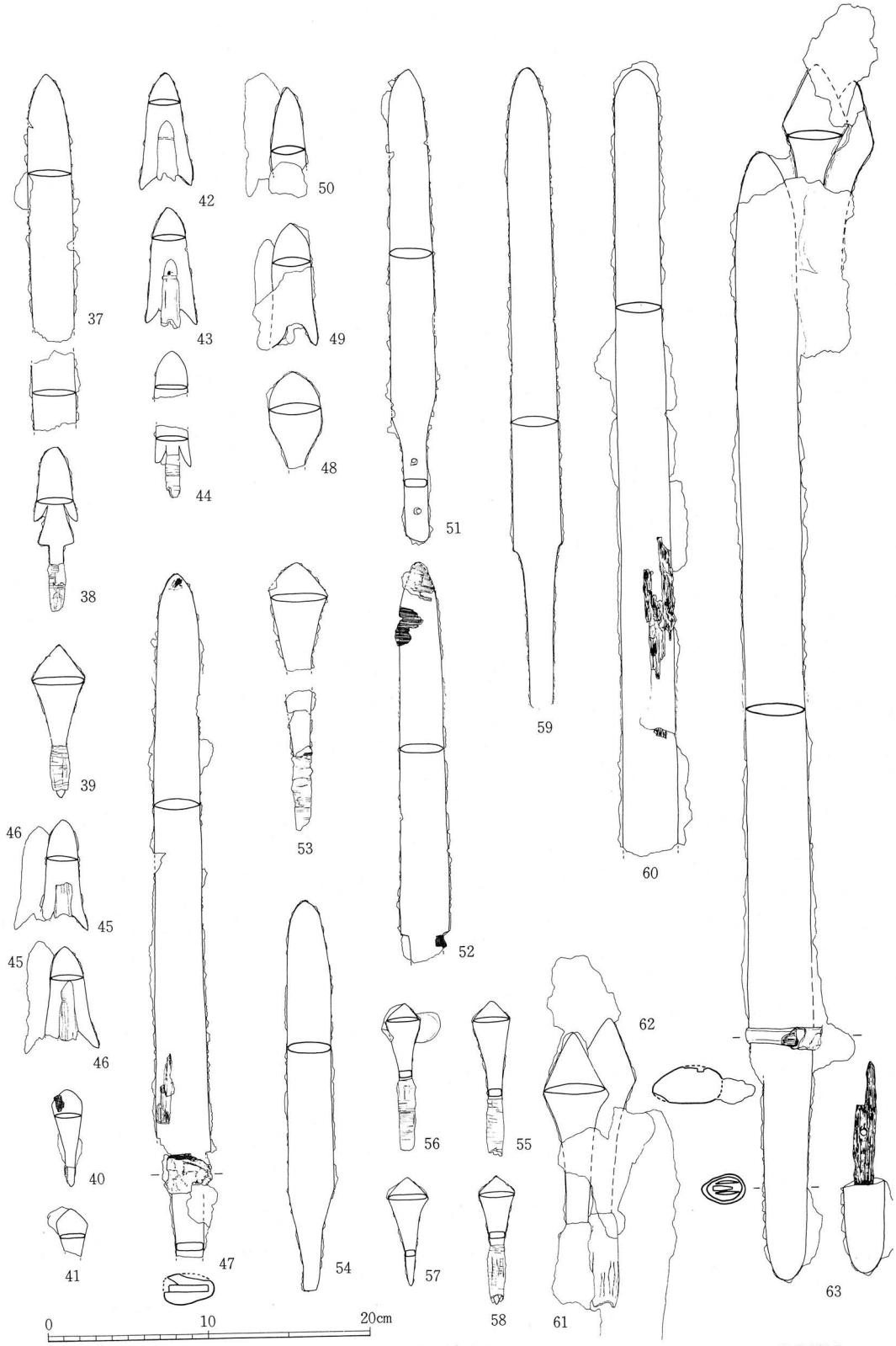
(4) 紡錘車（第106図①）

ＳＴ1008より出土の石製の紡垂車。径７.１cm、厚み４mm～７mmを測る。中央に４mm～５mmのやや楕円形の穿孔がある。



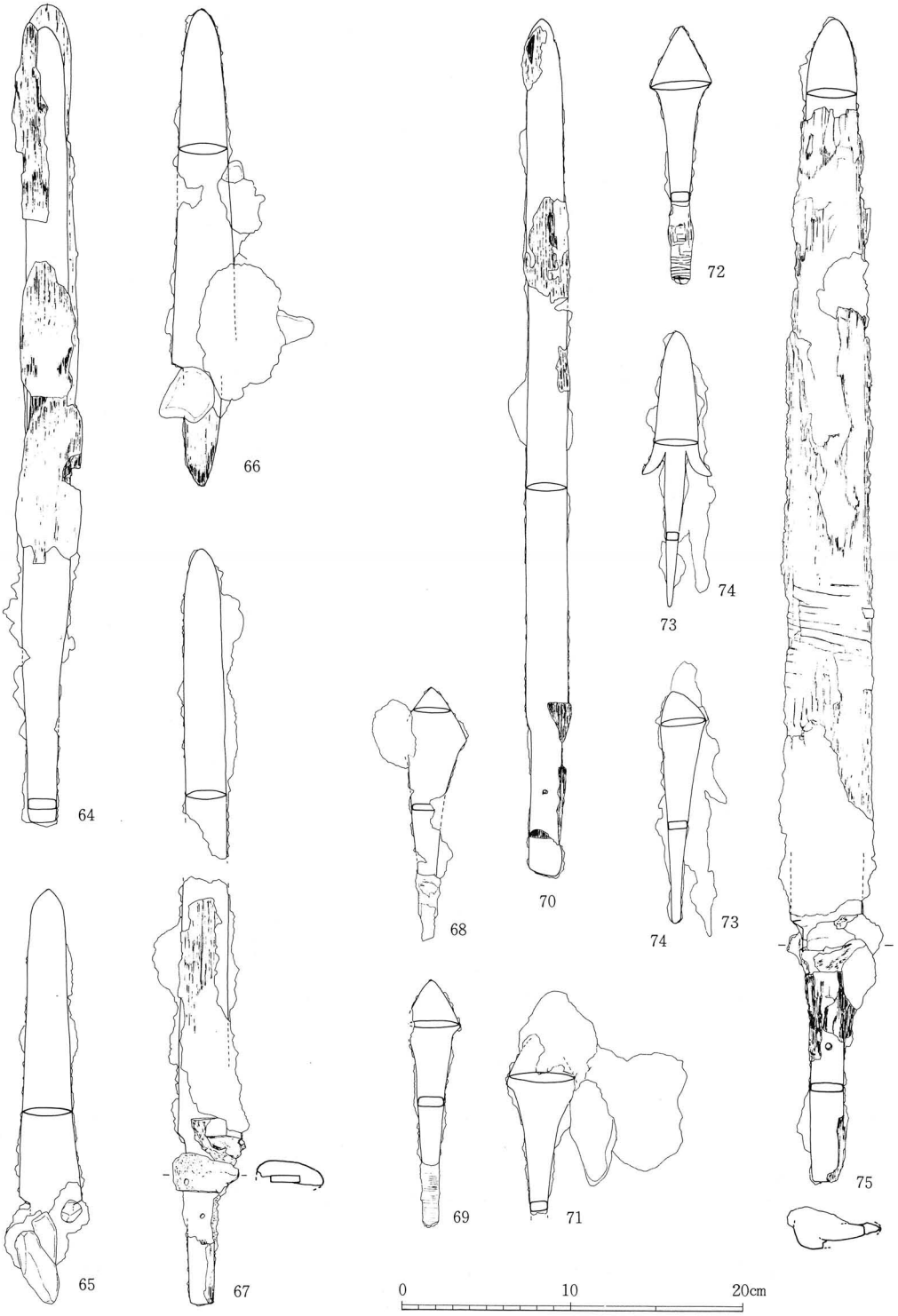
1・2…SI102、3…SI103、4～6…SK7、7…SK16、8～10…SK19、11…SK38、12…SK49
13…SK32、14…SK28、15…SK26、16・17…SK40、18～21…SK5、22～30～SK48、31…SK1、
32…SK2、33～35…ST1003、36…1008、①…ST1005、②…SK2

第106図　A地区土壙墓・板石積石室墓・地下式横穴墓出土遺物



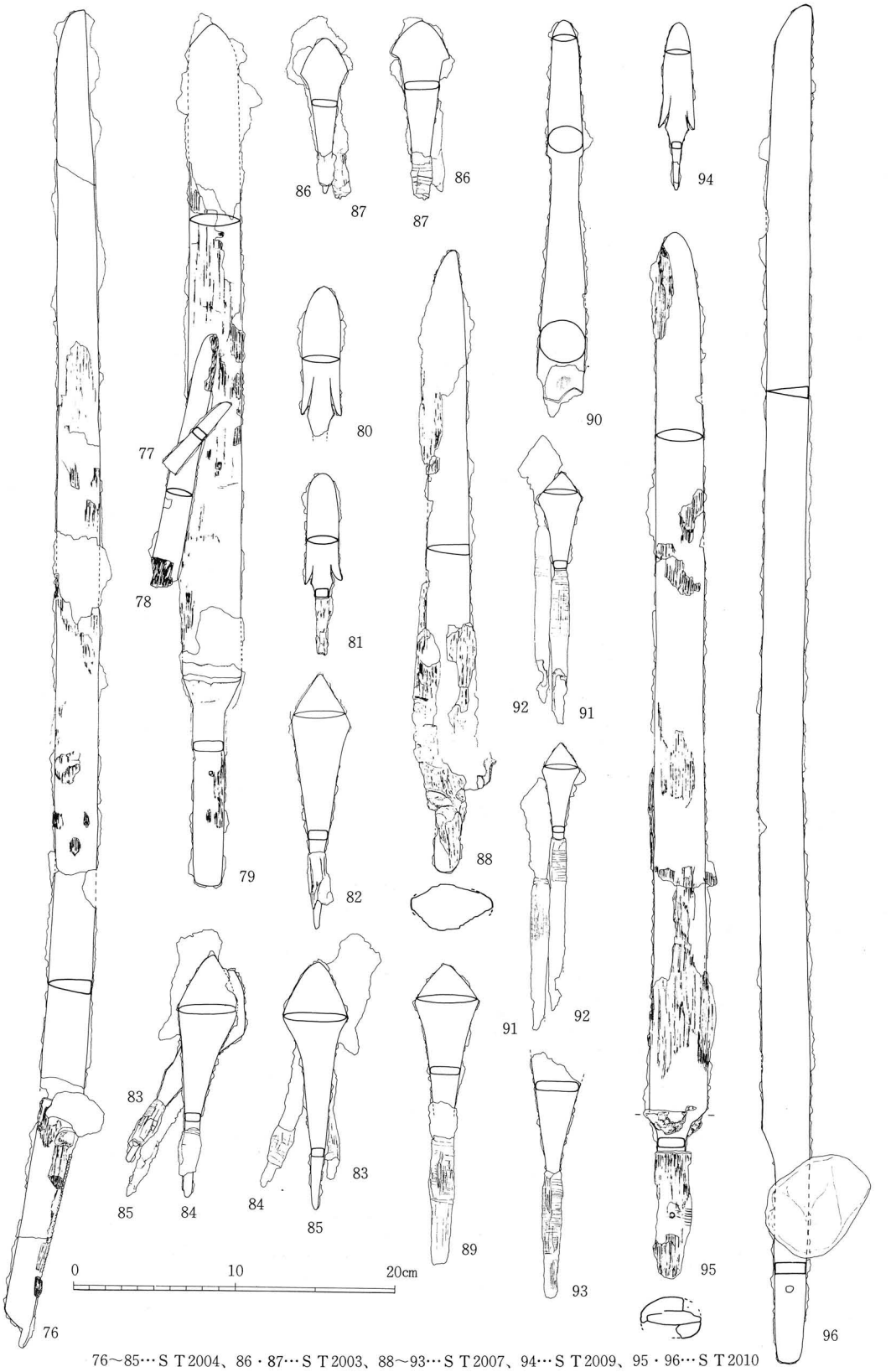
37・38…ＳＴ1011、39…ＳＴ1012、40・41…ＳＴ1014、42～46…ＳＴ1015、47…ＳＴ1016、48～50…ＳＴ1017、
51・52…ＳＴ1023、53…ＳＴ1019、54～58…ＳＴ1020、59・60…ＳＴ1022、61～63…ＳＴ1025

第107図　Ａ地区地下式横穴墓出土鉄器



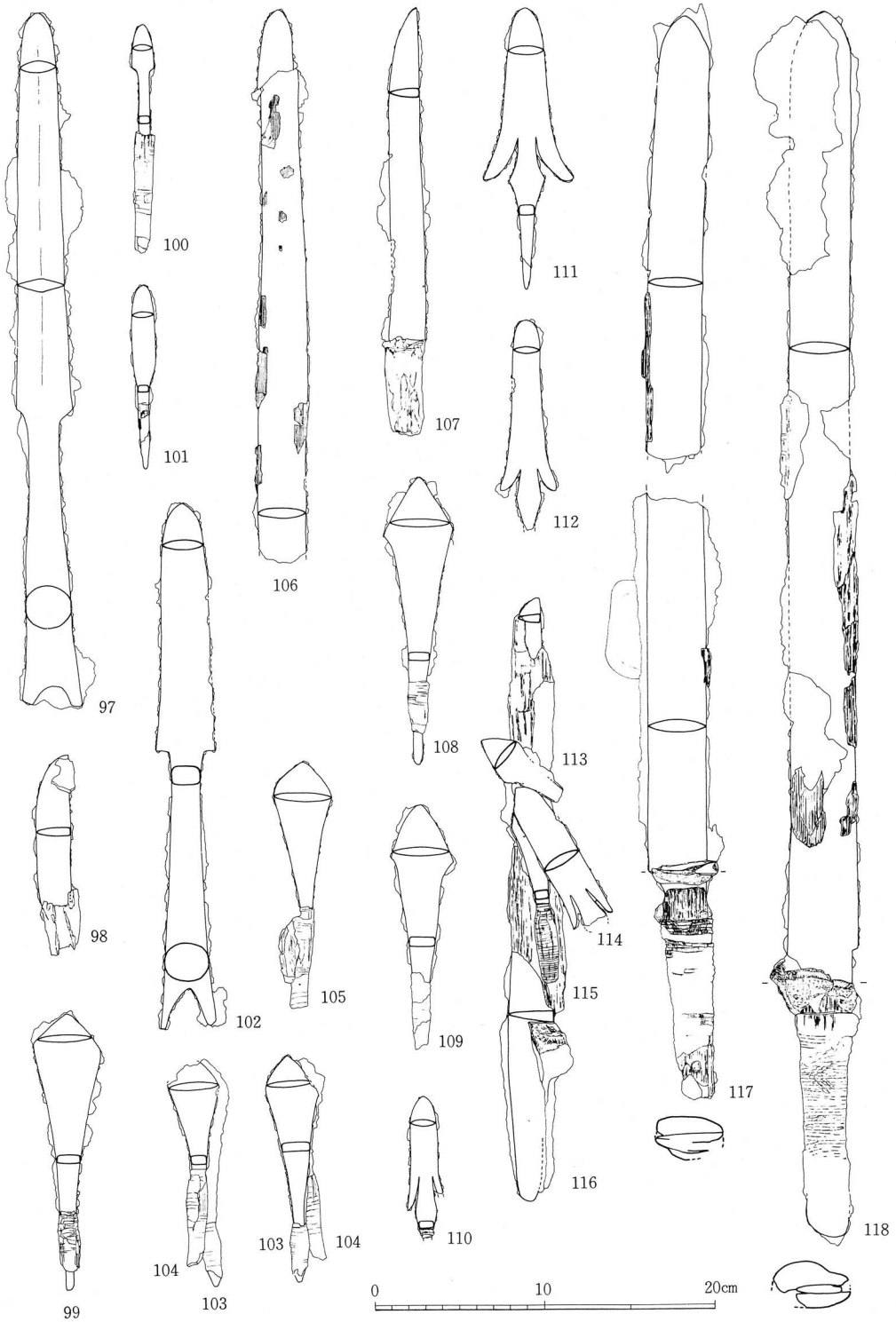
64～67…ＳＴ1026、68～71…ＳＴ2001、72～75…ＳＴ2002

第108図　Ａ地区及びＢ地区地下式横穴墓出土鉄器



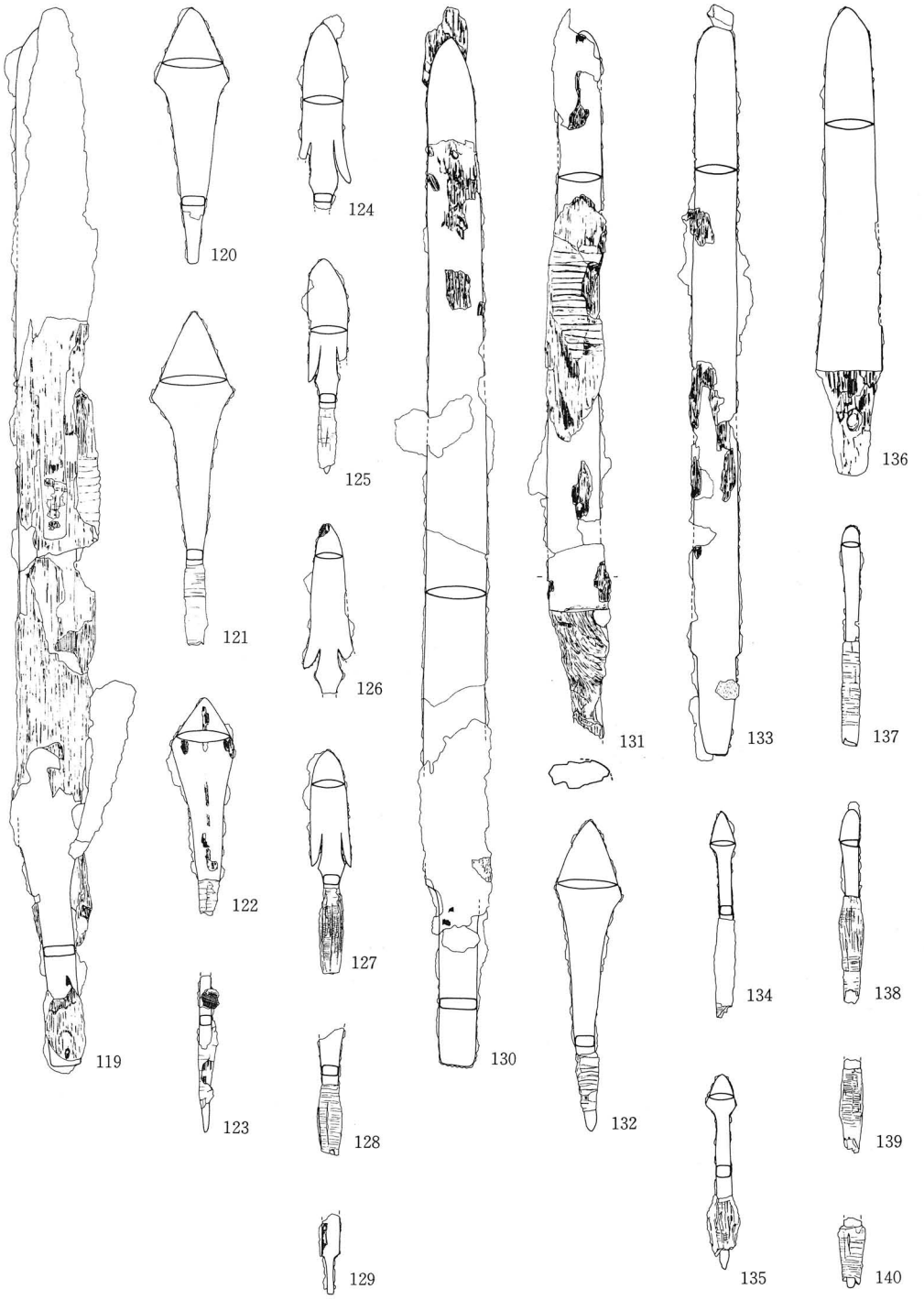
76～85…ＳＴ2004、86・87…ＳＴ2003、88～93…ＳＴ2007、94…ＳＴ2009、95・96…ＳＴ2010

第109図　Ｂ地区地下式横穴墓出土鉄器(1)



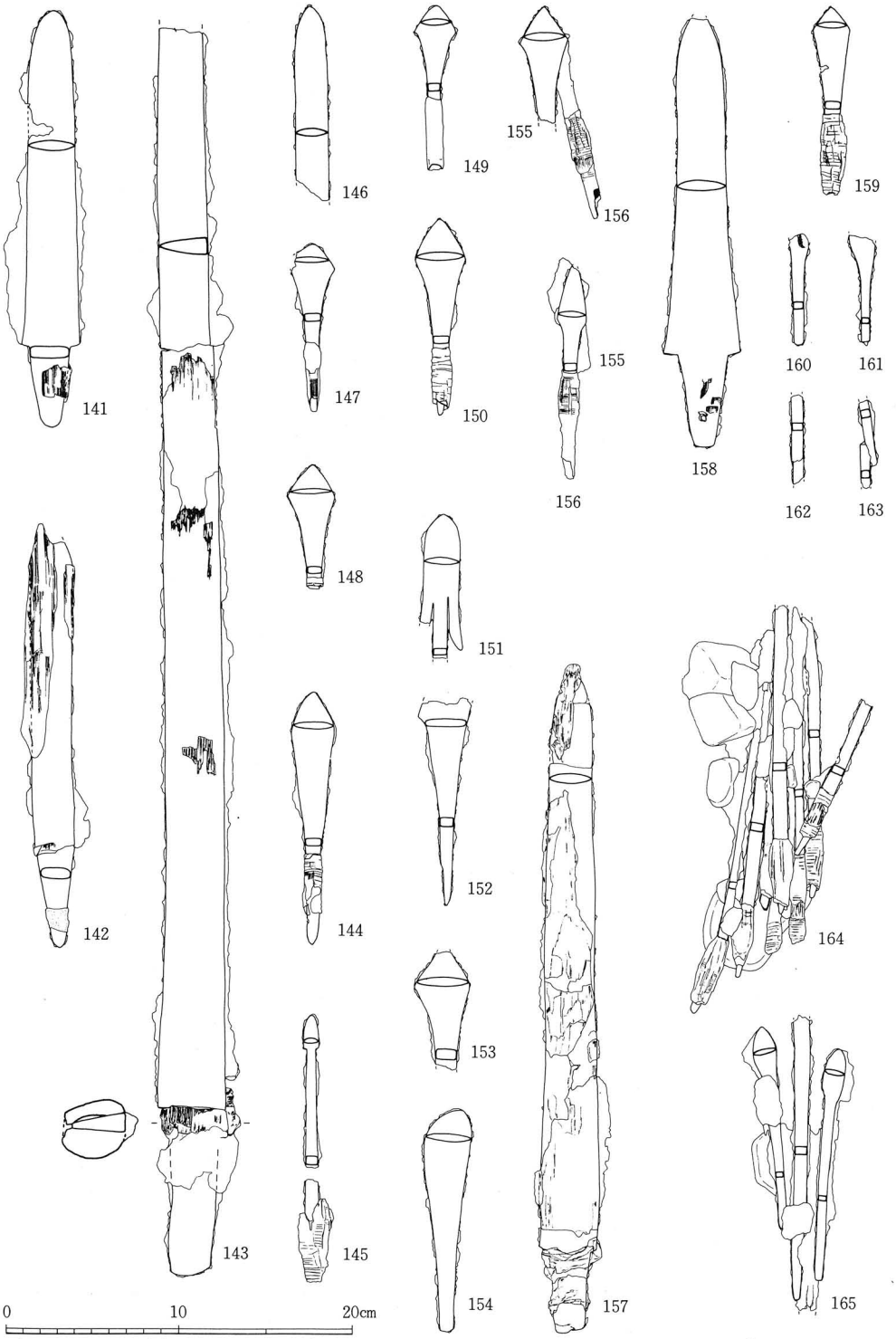
97～101…ＳＴ2010、102～105…ＳＴ2011、106～112…ＳＴ2012、113～118…ＳＴ2013

第110図　Ｂ地区地下式横穴墓出土鉄器(2)



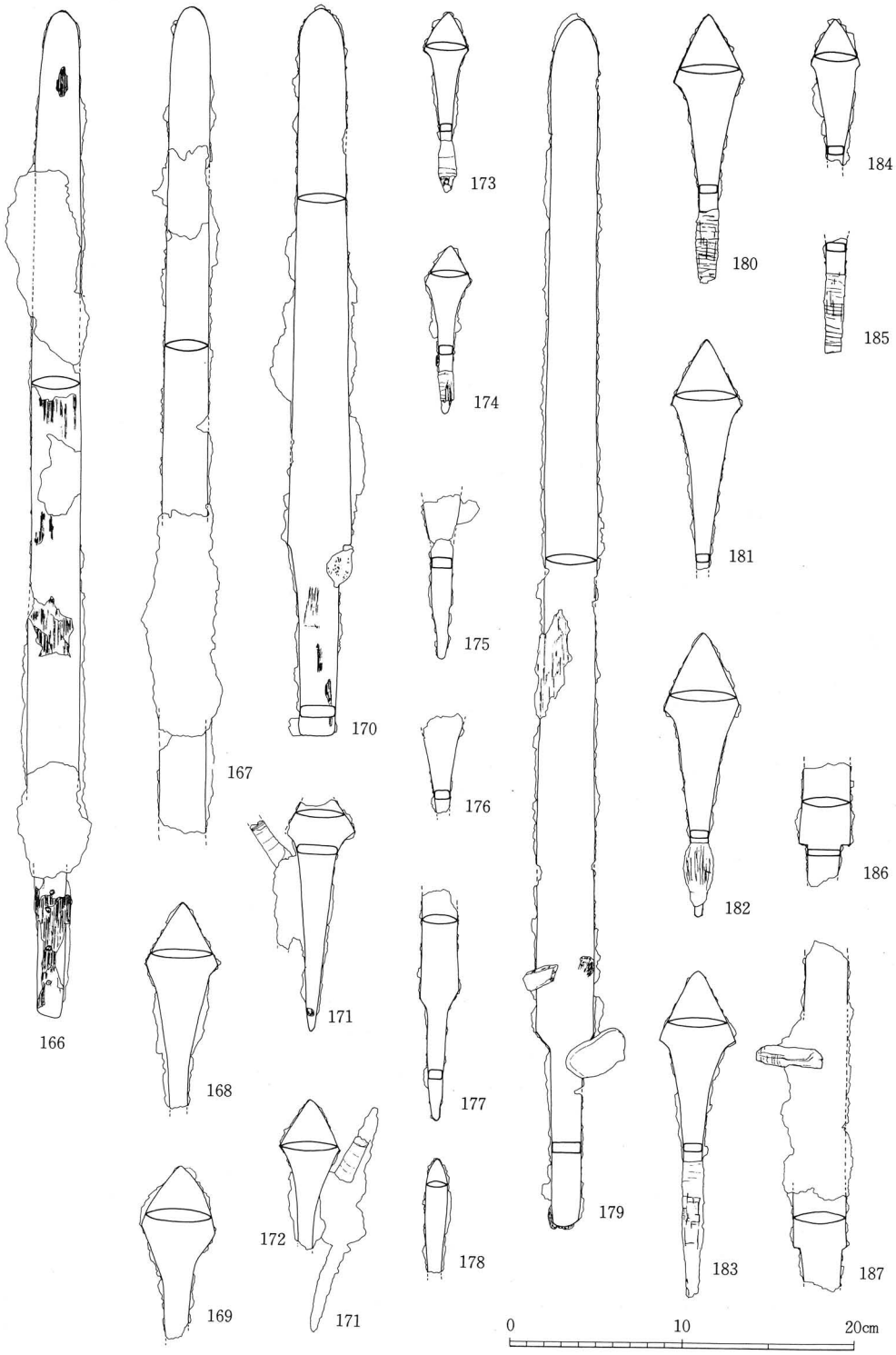
119～129…ＳＴ2013、130～140…ＳＴ2014

第111図　Ｂ地区地下式横穴墓出土鉄器(3)



141～142…S T2015、143～145…S T2017、146～150…S T2018、151～156…S T2019、157…S T2020
158～163…S T2026、164・165…S T2029

第112図　B地区地下式横穴墓出土鉄器(4)



166～178…ＳＴ2025、179～183・186・187…ＳＴ2027、184・185…ＳＴ2028

第113図　Ｂ地区地下式横穴墓出土鉄器(5)

第２節　歴史時代の遺構と遺物

Ａ地区を中心に中世から近世の時期の遺構・遺物が検出されている。

Ａ地区北東遺構群

調査区北東部の微高地を中心に中世の時期と思われる10数条の溝条遺構と５棟の堀立柱建物（ＢＳ１～ＢＳ５）を検出した。また、周辺には100本近くの柱穴も検出されている。南側はＢ地区の地下式横穴墓群と一部重なる。遺物も糸切り底の土師器の坏・皿、青磁の碗・蓋、砥石などが出土している。

Ａ地区北西遺構群

調査区北西部の土壙墓や板石積石室墓、地下式横穴墓が分布する微高地を中心に10数条の溝条遺構と300を越える柱穴が検出されている。また、竪穴状遺構２基も検出されている。遺物も糸切り底の土師器の坏・皿、青磁の碗、備前の摺り鉢などが出土している。

Ａ地区南西遺構群

調査区南西部の地下式横穴墓ＳＴ1024とＳＴ1025の分布する細長い調査区。Ａ地区北西遺構群の溝条遺構と関連する７本の~~溝条遺条~~遺構と堀立柱建物２棟（ＢＳ６・ＢＳ７）が検出されている。遺物は近世陶磁器や石鍋などが出土している。

Ｂ地区遺構群

表土から近世を中心に陶磁器類が出土している。

１．遺　構

(1)　堀立柱建物跡（ＳＢ）

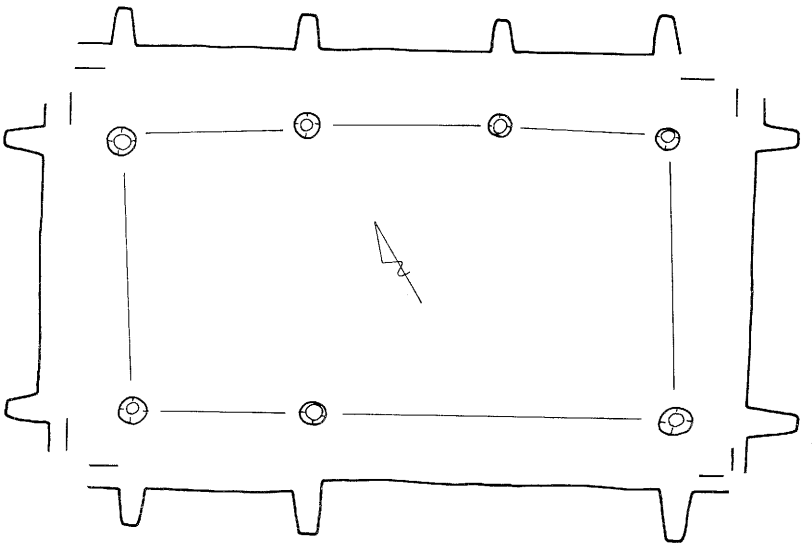
ＳＢ１（第116図）　Ａ地区北東遺構の北側に所在する。柱間１間×３間の堀立柱建物。建物規模は桁行6.1ｍ、梁行3.2ｍ、柱間寸法は桁行1.6～1.8ｍ、梁行2.5～2.7ｍを測る。主軸方向はＮ―60°―Ｗである。

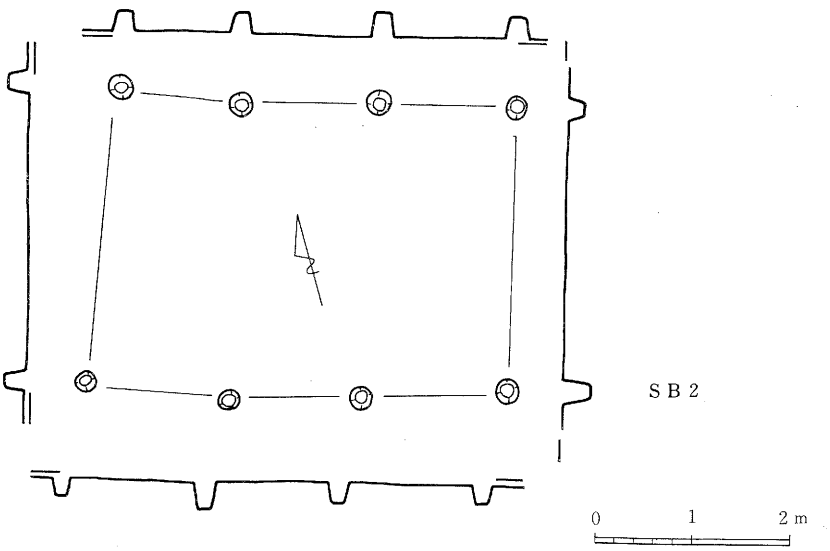
ＳＢ２（第116図）　Ａ地区北東遺構群の北側に所在し、ＳＢ１の東に隣接して並ぶ。柱間１間×３間の堀立柱建物。建物規模は桁行4.4～4.7ｍ、梁行3.2～3.4ｍ、柱間寸法は桁行1.0～1.3ｍ、梁行2.7～2.9ｍを測る。主軸方向はＮ―70°―Ｗである。

ＳＢ３（第117図）　Ａ地区北東遺構群の南側に所在する。西側は未調査。梁方向に３本、桁方向に４本の柱穴が検出されている。柱間は桁行２間、梁行３間以上の総庇の堀立柱建物。建て替えが見られる。建物規模は梁行3.6～3.8ｍ、柱間寸法は桁行1.4～1.6ｍ、梁行1.4

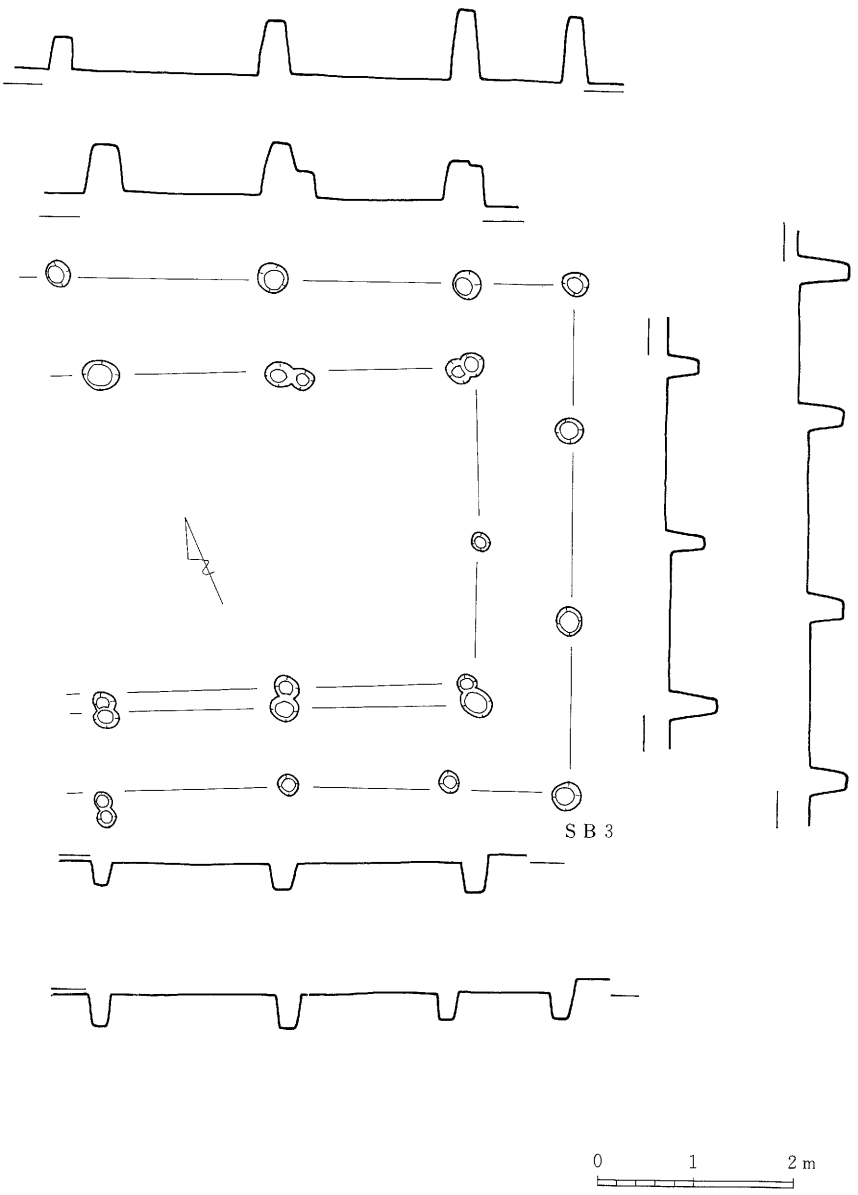
第114図　A地区北東遺構群

第115図　A地区北西遺構群

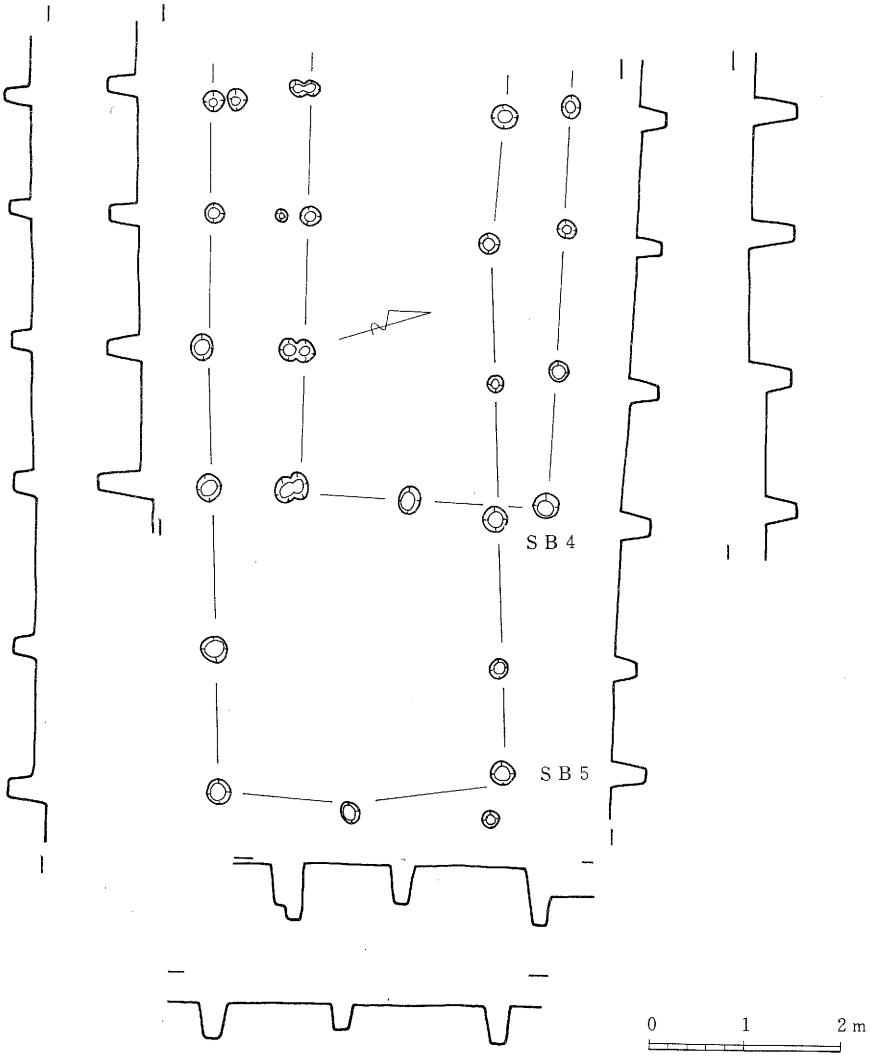




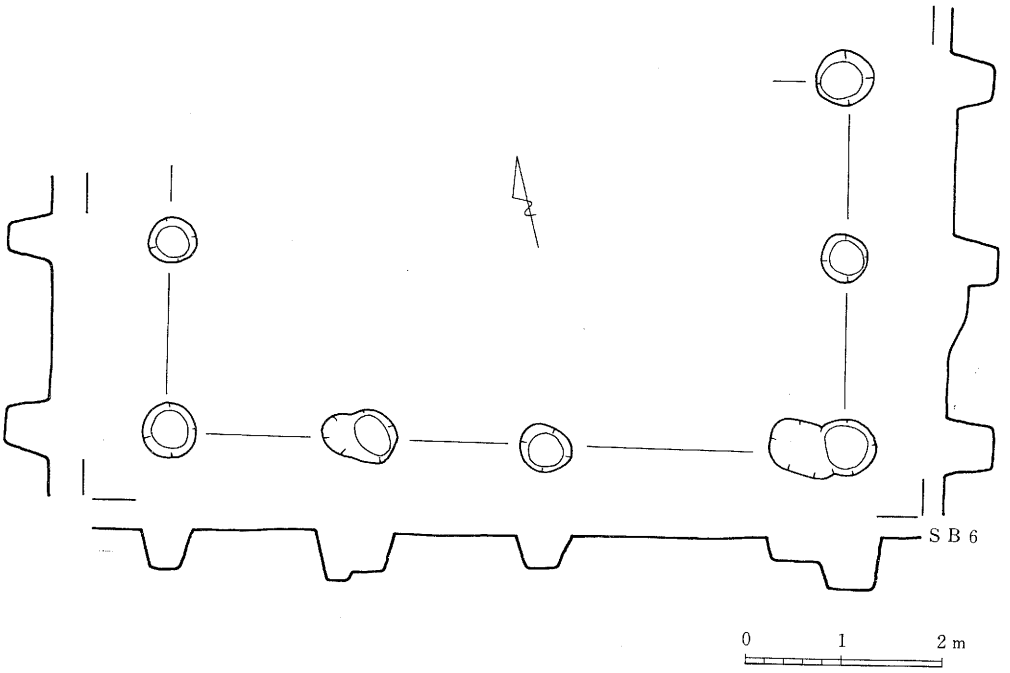
第116図 ＳＢ１・２　遺構実測図



第117図　ＳＢ３，４遺構実測図



第118図　ＳＢ４，５遺構実測図



第119図　ＳＢ６遺構実測図

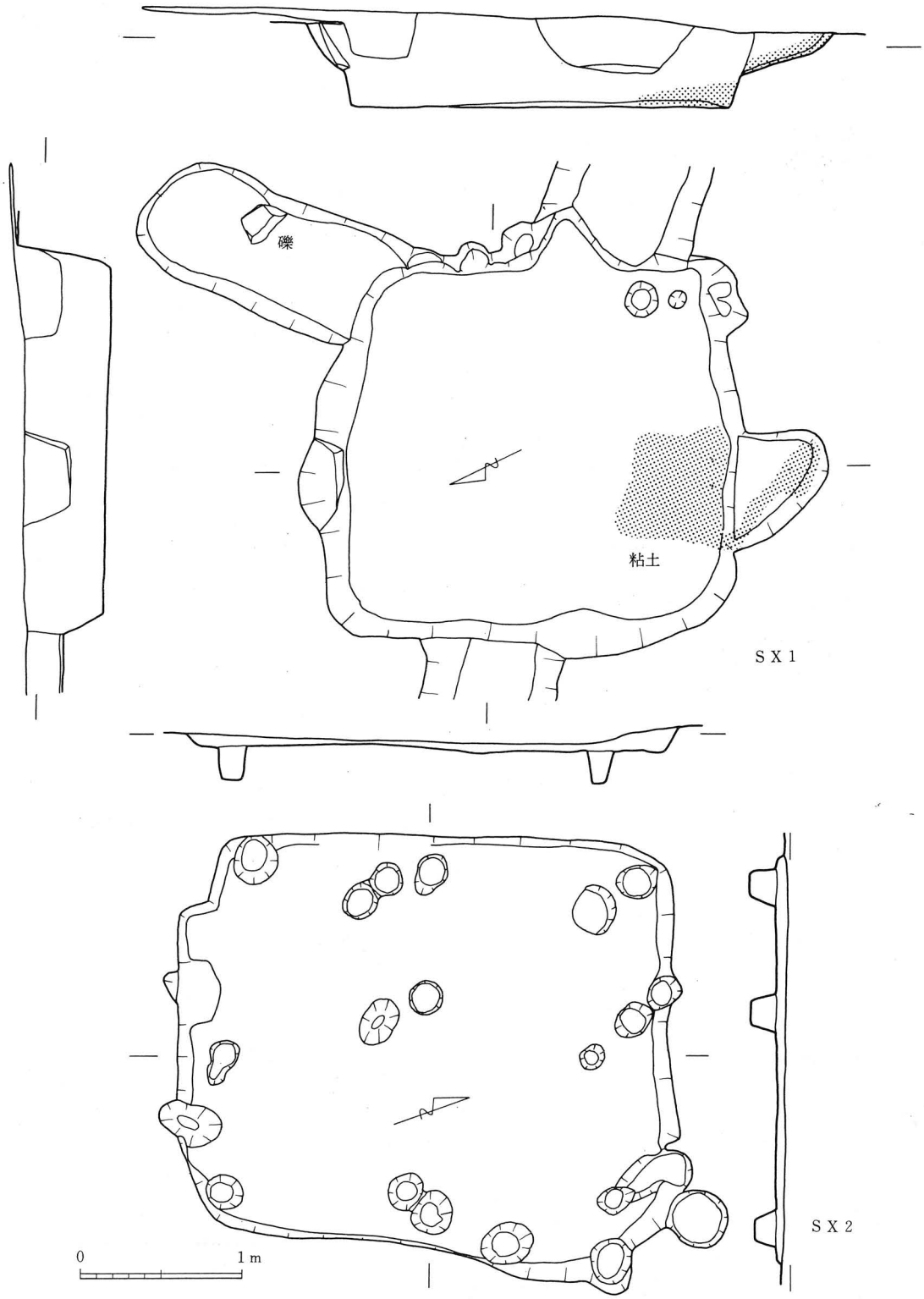
～1.7ｍを測る。主軸方向はＮ―70°―Ｗである。

ＳＢ４（第118図）　Ａ地区北東遺構群の南側に所在し、ＳＢ３の南に隣接して並ぶ。西側は未調査。梁方向に３本、桁方向に６本の柱穴が検出されている。柱間は桁行２間、桁行３間以上の堀立柱建物。建て替えが見られる。建物規模は梁行3.0ｍ、柱間寸法は桁行0.9～1.2ｍ、梁行1.0～1.2ｍを測る。主軸方向はＮ―73°―Ｗである。

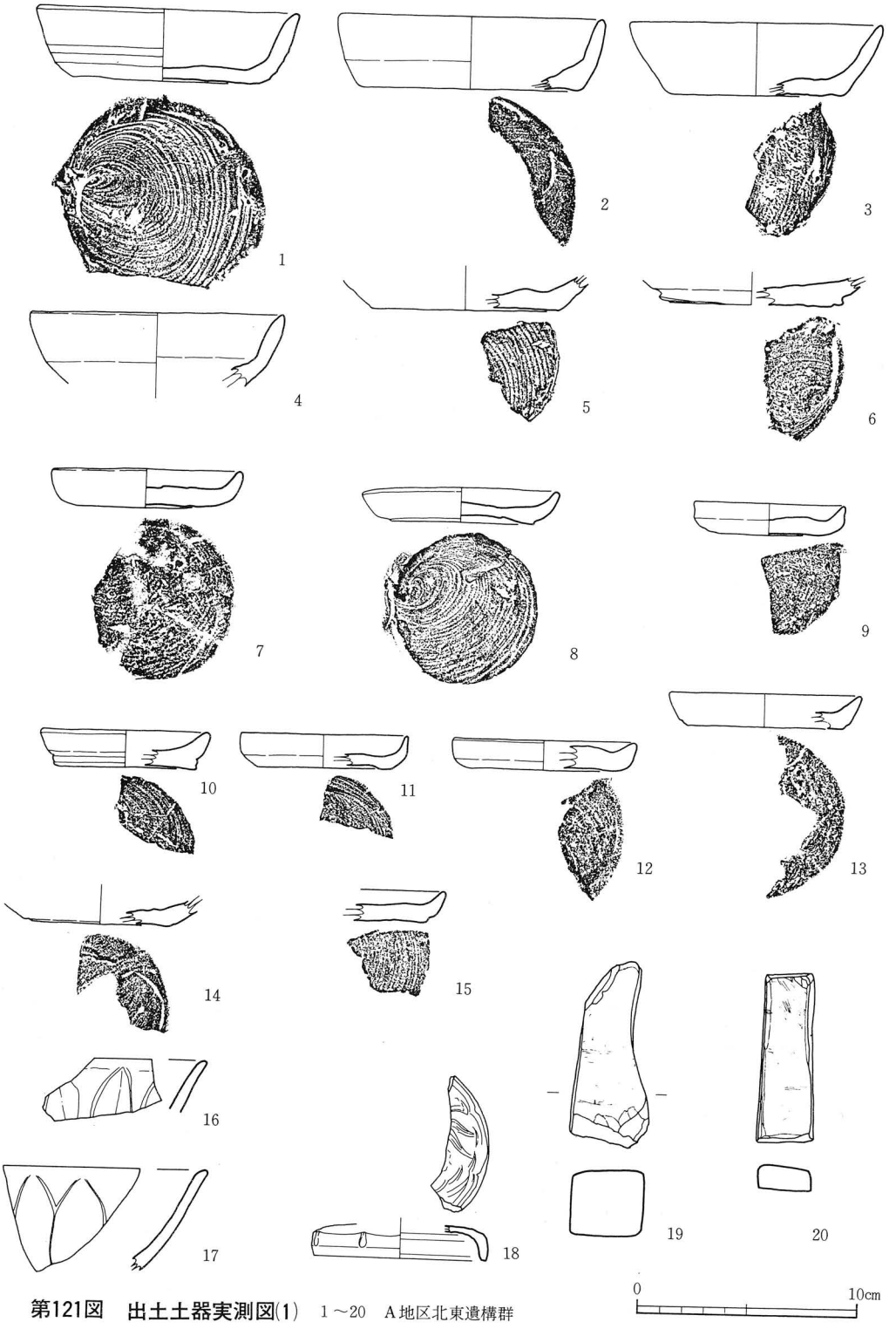
ＳＢ５（第118図）　Ａ地区北東遺構群の南側に所在し、ＳＢ４と切り合って並ぶ。西側は未調査。梁方向に柱３本、桁方向に柱３本の柱穴が検出されている。柱間は桁行２間、梁行５間以上の堀立柱建物。建て替えが見られる。建物規模は梁行3.2ｍ、柱間寸法は桁行1.0～1.4ｍ、梁行1.3～1.4ｍを測る。主軸方向はＮ―73°―Ｗである。

ＳＢ６（第119図）　Ａ地区西遺構群に所在する。柱間２間×３間の堀立柱建物。柱穴の径が50～60㎝と他の堀建柱建物に比べると大型の柱穴である。建物規模は桁行7.7ｍ、梁行4.5ｍ、柱間寸法は桁行1.3～2.5ｍ、梁行1.4ｍを測る。主軸方向はＮ―75°―Ｗである。

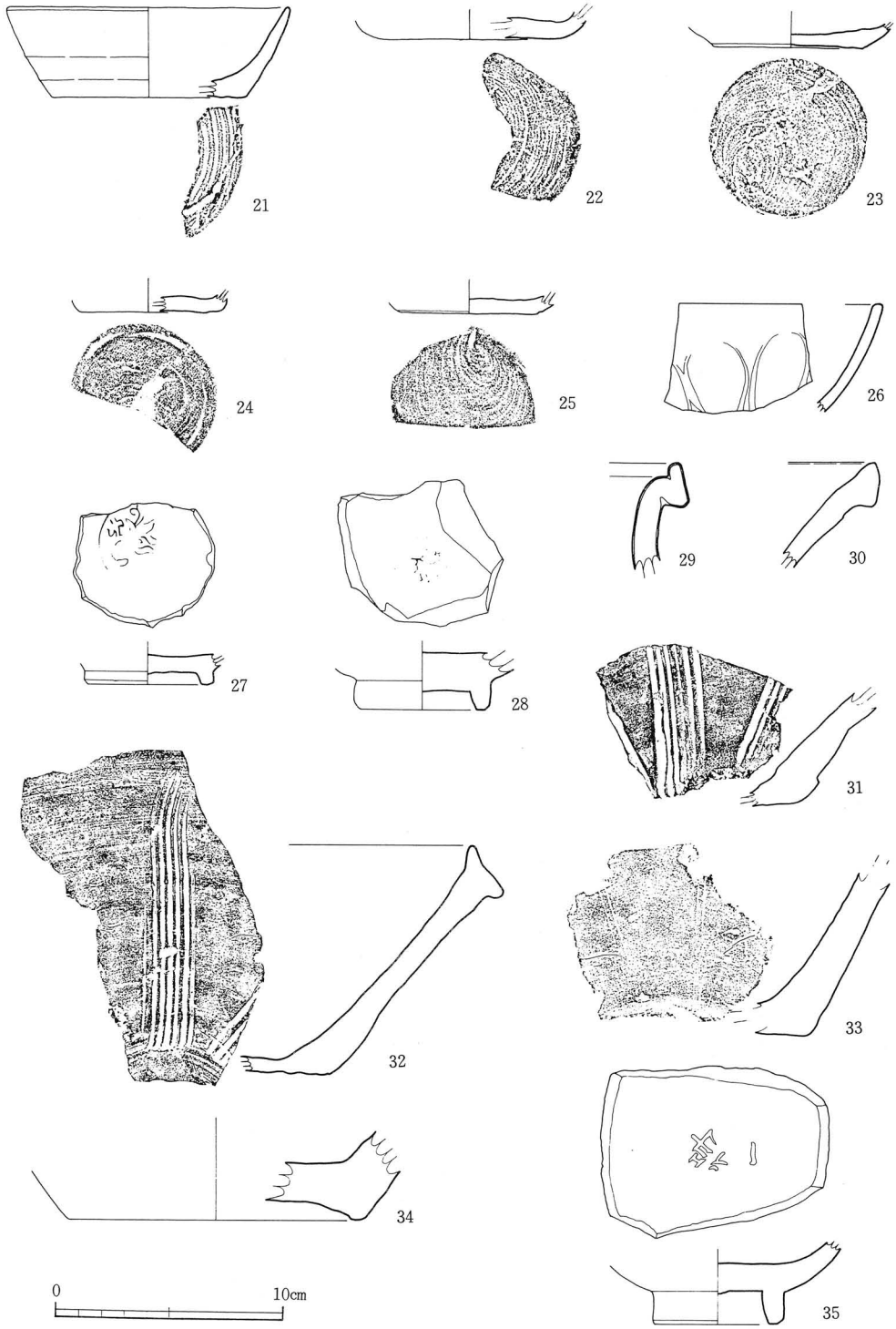
ＳＢ７　Ａ地区西遺構群に所在し、ＳＢ６の南に隣接して並ぶ。柱間１間×２間の堀立柱建物。建物規模は桁行4.8ｍ、梁行3.2ｍ、柱間寸法は桁行1.7～2.0ｍ、梁行2.5～2.6ｍを測る。主軸方向はＮ―75°―Ｗである。



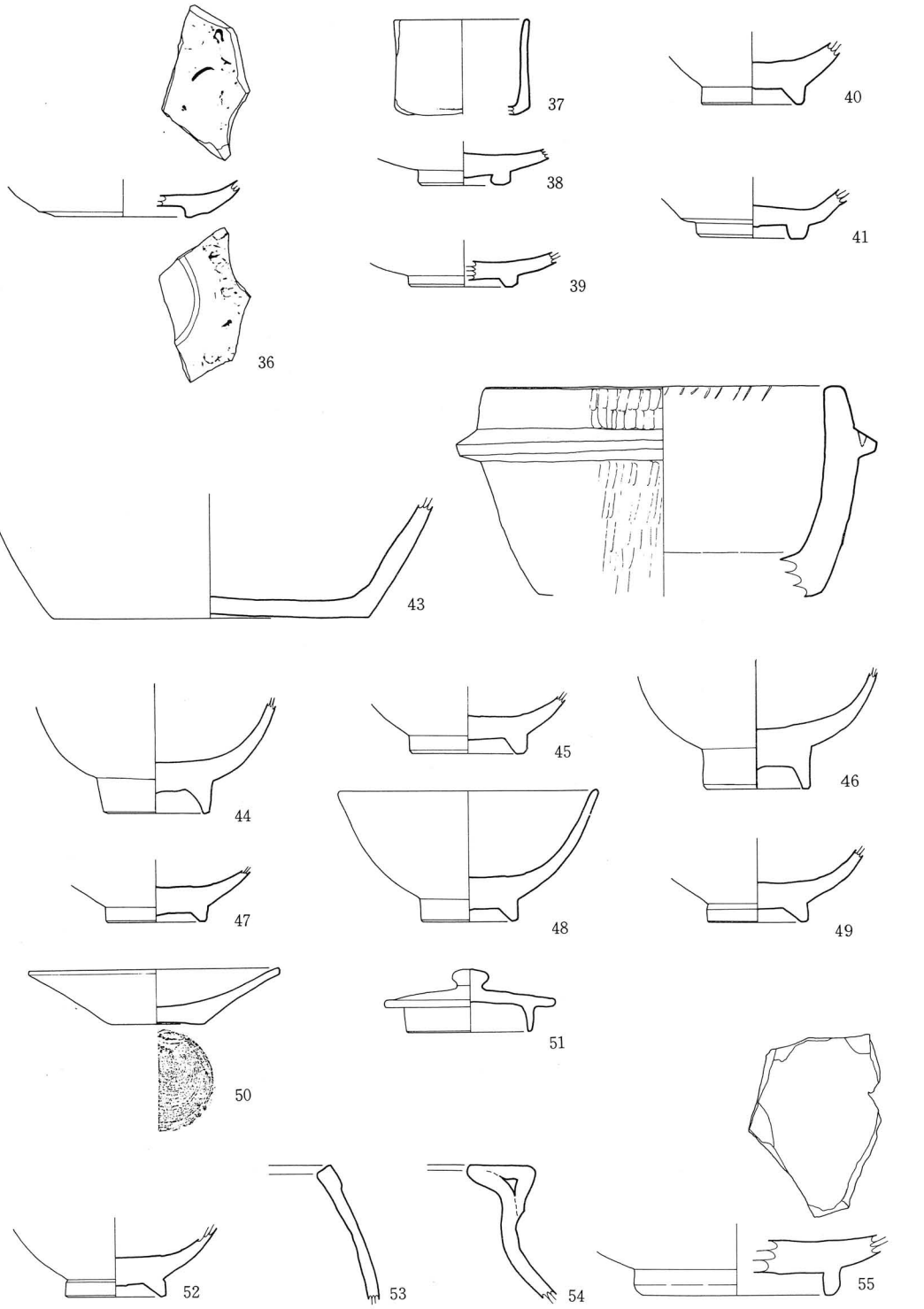
第120図　ＳＸ１・２遺構実測図



第121図　出土土器実測図(1)　1～20　A地区北東遺構群



第122図　出土土器実測図(2)　21～35　A地区北西遺構群



36～41　A地区北西遺構群
43～51　A地区南西遺構群
52～55　B地区遺構群

0　10cm

第123図　出土土器実測図(3)

(2) 竪穴状遺構（ＳＸ）

Ａ地区北西遺構群の北西角付近に２基の竪穴状遺構が検出されている。

ＳＸ１（第120図）．長軸2.3m、短軸2.1mのほぼ方形プランを呈する。北東角に床面が30cmの所に長さ1.5ｍ、幅0.5～0.6mの断面台形の溝が堀り込まれている。また、南壁際にも0.5×0.7mの三角形の堀り込みが有り竪穴の床面にかけて粘土が流れ込んでいる。検出面からの深さ0.5mを測る。明確な柱穴や遺物は検出されなかった。主軸はＮ―25°―Ｅである。

ＳＸ２（第120図）　長軸2.8～2.9m、短軸2.4～2.6mの方形に近いプランを呈する。検出面からの深さは10cm以下と浅い。柱穴は20本近く検出されているが遺構に伴う柱穴は確認できなかった。また遺物の検出もなかった。主軸はＮ―20°―Ｅである。

(3) 溝状遺構（ＳＥ）

Ａ地区北東遺構群で10数条、Ａ地区北西遺構群で10数条、Ａ地区西遺構群で７条の溝状遺構が検出されている。Ａ地区北東遺構群では南北方向の溝が多く見られる。また掘立柱建物（ＳＢ３）を囲む溝も見られる。Ａ地区北西遺構群では微高地から低地に向って堀られた排水用の溝が多く、微高地の際を堀り込んだ溝も見られる。溝の中から土師器片や陶磁器片が流れ込んでおり、いずれも中世から近世の溝と思われる。溝は確認面での計測値で幅0.4～1.0m、深さ0.2～0.5mと幅の狭い溝が多く見られる。

２．遺　物

土師器、際磁器、砥石、石鍋などが出土している。

(1) 土師器（第121図１～15、第122図21～25）

坏と皿が見られる。坏は口径11cm前後、皿は口径７～８cm前後の法量である。１～３、５、６、21～23、25は糸切り底の坏。７、８、11、12、14、15は糸切り底の皿。９、13はヘラ切り底の皿。24はヘラ切り底の坏。10はナデ仕上の皿である。

(2) 陶磁器（第121図16～18、第122図26～41、第123図44～53）

青磁、染付、備前焼、薩摩焼が見られる。16、17、26～28、55は青磁碗、18は青磁の蓋。29、30、34、43、53、54は備前の甕、31～33は備前の摺鉢。36、37は染付。38～41、44～49、52が薩摩の碗、50が皿、51が蓋である。

(3) 石製品（第123図42、第121図19、20）

砥石と石鍋が出土している。19、20は砥石である。42は底部を欠く滑石製石鍋である。径16cmと小型である。

第3章　ま　と　め

今回調査した小木原遺跡蕨地区は古墳時代の墓地と中世の集落からなる複合遺跡である。特に古墳時代の墓地については、土壙墓・板石積石室墓・地下式横穴墓の異なった墓制が混在することが確認され大きな成果を得ることができた。本章ではこれらの墓制についてそれぞれまとめてみたい。

1．板石積石室について

(1)　分　類

小木原遺跡蕨地区で検出された板石積石室墓は、平面プランが方形を呈するタイプ(1類)と円形を呈するタイプ（2類）の2タイプに分けられる。いずれも石材の長軸を縦方向に置き、石材間の隙間があまり見られない構造である。

1類は1ヵ所の角を丸く弧状に組んだ変形の方形プランを呈するタイプで方形プランから円形プランへの過渡期のものとも考えられる。都城盆地北部の香禅寺遺跡でも見られるが、その他の地域からは今のところ発見されておらず加久藤盆地から都城盆地の限られた地域で見られる板石積石室墓と思われる。2類は加久藤盆地や大口盆地、さらに人吉盆地などの内陸部で見られるもので、えびの市の灰塚遺跡で検出された2基の板石積石室墓もこのタイプである。

(2)　副葬品

副葬品はきわめて少ない。鉄鏃のみでＳＩ102(2類）からは無頸鏃、ＳＩ103(2類）からは幅広で小型の柳葉鏃が副葬品として検出されている。このうち無頸鏃は古手のものであるが弥生時代まで遡る程ではないと思われる。また、ＳＩ103やＳＩ105の周辺からは多量の土師器片が出土している。その出土状況から見て板石積石室墓の供献土器と思われる。検出された土器のうち高杯は宮崎平野部に系譜の見られるもので宮崎学園都市遺跡群前原南遺跡9号住居や新富町川床遺跡15号周溝出土のものに近い。頸部や胴部に刻目突帯を巡らす大型の壺は鹿児島地方の特徴を持つ成川系の壺で加久藤盆地西部の吉松町永山遺跡10号墓周溝出土の壺に近い。いずれも布留式の時期に相当する土器を伴っており古墳時代前期（4世紀代）のものと思われる。また、個体数の多い長頸壺のうち器壁の薄いタイプは、近辺地域での資料の把握はまだ行なっておらず、北部九州で類例がみられる。福岡市西新町遺跡Ｄ－4住出土の壺と類似する。布留系土器の時期と対比している。

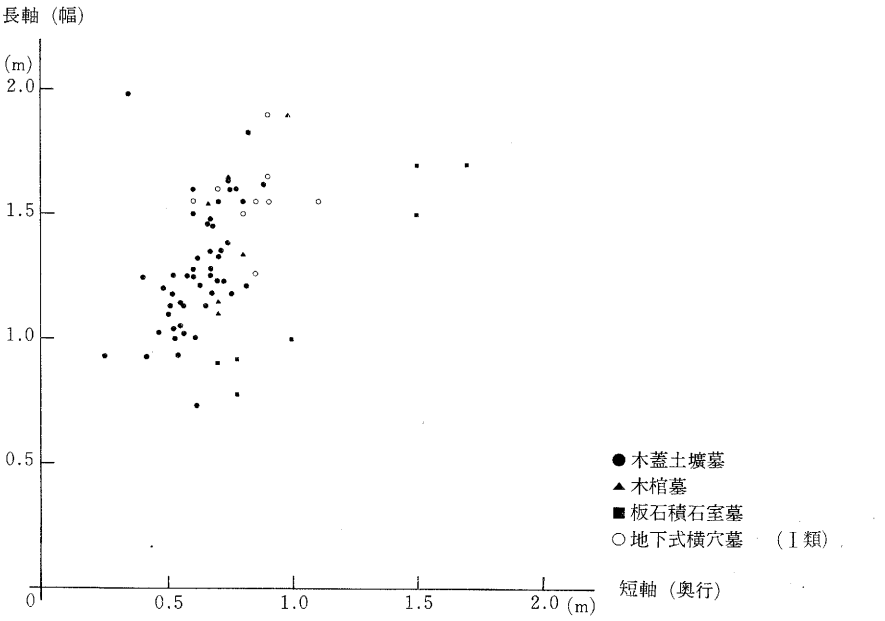


表１ 土壙墓・板石積石室墓・地下式横穴墓（１類・２類）規模分布表

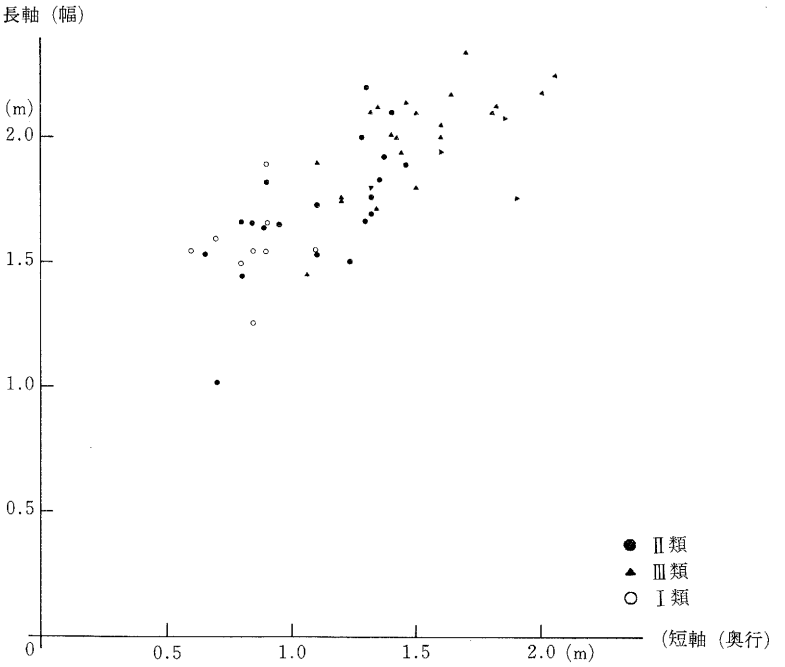


表２　地下式横穴墓規模分布表

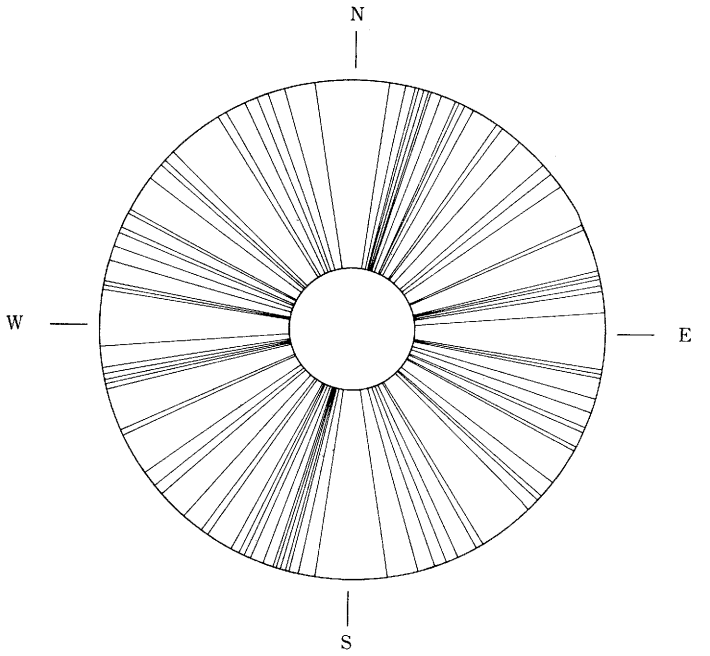


表 3 土壙墓主軸分布表

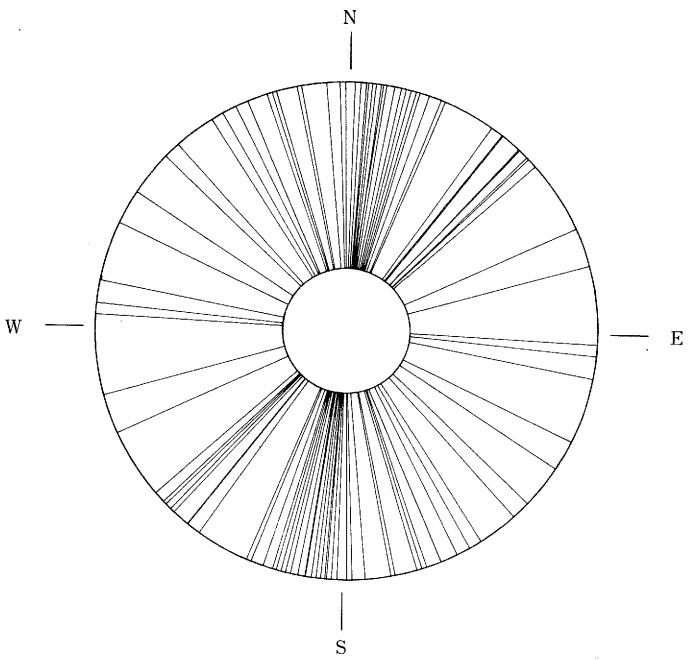


表 4 地下式横穴墓主軸分布表

(3) 群構造

板石積石室墓はA地区に1類と2類が混在して分布する。このうちＳＩ101、ＳＩ102、ＳＩ107、ＳＩ108とＳＩ103～ＳＩ106がそれぞれ等高線にそったグループ構成が想定されるが、検出遺構が8基と少なく群構造を考える良好な状況とは言えない。また、平面プランの違いによるグループ構成も見られない。板石積石室墓の分布は北側の削平地域に広がると思われる。なお、木崎原氏の調査でも板石積石室墓と思われる石組跡が確認されている。

(4) 時　期

ＳＩ102出土の無頸鏃は古い様相を持つ。しかし、鉄鏃から時期を判断するには出土数も少なく時期決定も決め手と成り得る資料とは言えない。一方、板石積石室墓群内で検出された供献土器と思われる土器群のなかには4世紀後半と思われる土器が見られる。また、1類の板石積石室墓は方形プランから円形プランへの過渡期のものと思われることなどから古墳時代前半（4世紀中葉～後半）にあたる。なお、板石積石室墓は、その成立過程から方形プランから円形プランへの変遷が考えられているが、蕨地区で見られる両タイプの板石積石室墓にはさほどの時期差は考えられず同時期に営まれていた可能性もある。

2．土壙墓について

(1) 分　類

木棺墓は、長側板と小口板の両方の溝を掘り込んだ組合せ式の木棺墓で小口板が長側板の内側に入り込むタイプのものである。このうちＳＫ2は床面近くまで削平されており断言はできないが小口板を掘り込まないタイプとも考えられる。

一方、木蓋土壙墓は、まず土壙の長軸（主軸長）からその規模を見ると180～190cm台の超大型クラス、150～170cm台の大型クラス、110～140cm台の中型クラス、90～100cm台の小型クラスの土壙に分けられる。また、土壙床面の平面プランでは長方形、隅丸長方形、楕円形、細長の長方形の4タイプに分けられる。次に、土壙の断面プランでは壁面を垂直に掘り込む方形、掘り込み面から床面にかけて壁面を袋状に掘り込む台形、床面から壁面を外に広げて掘り込む逆台形のプランに分けられる。

大型の土壙墓には長方形プランで断面方形（ＳＫ7、10）、断面台形（ＳＫ16、30、46、49）、隅丸長方形プランで断面台形（ＳＫ31、38）のものが見られる。中型の土壙墓には長方形プランで断面方形（ＳＫ9、15、19、20、22、24～27、36、41～43、48、53）、断面台形（ＳＫ12、34、37、39、45）、断面逆台形（ＳＫ14、21、29、44）、隅丸長方形プランで断面台形（ＳＫ40）、

断面逆台形（ＳＫ23、47）のものが見られる。なお中型の中には土壙確認面の周囲に木蓋用の掘り込みを持つものも見られる（ＳＫ34、36、45)。小型の土壙墓には長方形プランで断面方形（ＳＫ13、32、33)、逆台形（ＳＫ35)、隅丸長方形プランで断面方形（ＳＫ43)、断面逆台形（ＳＫ18)、楕円形プランで断面逆台形（ＳＫ11、28）のものが見られる。なお、超大型クラスのＳＫ55とＳＫ56、ＳＫ55と切り合うＳＫ54、さらに３段掘り込みの見られるＳＫ57、斜めに掘り込んである円形プランの小型のＳＫ58については、掘り込みや床面の状態が大半の土壙墓とは異なり土壙墓として扱うには疑問の残る遺構である。

(2) 副葬品

58基の土壙墓のうち約22%にあたる13基から副葬品が出土している。１基あたりの副葬品の数は約２本である。副葬品をもつ土壙墓はほとんどが長方形プランで断面が台形ないしは方形を呈するものである。副葬品は剣や鏃の鉄器類と管玉である。剣は30cm前後の短剣で、副葬する４基のうち３基が剣１本のみ副葬する土壙墓である。（ＳＫ13、ＳＫ16、ＳＫ26）鉄鏃を副葬する土壙墓は９基で圭頭鏃、柳葉鏃、無頸鏃、腸抉鏃で総数22～23本を数える。鉄鏃のみを副葬する土壙墓は８基で、ＳＫ１(圭頭鏃)、ＳＫ28(不明)、ＳＫ32（柳葉鏃)、ＳＫ38（無頸鏃）では各１本、ＳＫ40（圭頭鏃＋矢柄）では２本、ＳＫ19（柳葉鏃＋圭頭鏃）では３本、ＳＫ５（柳葉鏃＋腸抉鏃）では４本、ＳＫ48（柳葉鏃＋圭頭鏃＋腸抉鏃）では８本を数える。ＳＫ５では剣と鉄鏃（圭頭鏃と柳葉鏃）の組み合わせがみられる。また、ＳＫ２では管玉１点と矢柄片が出土しており鉄鏃との組み合わせが考えられる。

(3) 群構造

土壙墓群の軸方向はＮ－80°～60°－Ｗに14基、Ｎ－50°－Ｗに４基、Ｎ－30°～10°－Ｗに７基、Ｎ－10°～30°－Ｅに13基、Ｎ－30°～60°－Ｅに９基、Ｎ－65°－Ｅに２基、Ｎ－15°～５°－Ｅに６基と示すようにほぼ全方向に見られるため主軸方向による群構造の検討は困難である。また、土壙墓の規模や平面プラン、断面プランによるグループ化も認められない。分布上の特徴としては木棺墓のＳＫ１とＳＫ２、ＳＫ３とＳＫ４、ＳＫ５とＳＫ６はそれぞれ対で分布していると思われる。この傾向は木蓋土壙墓も見られる。ＳＫ12とＳＫ13、ＳＫ10とＳＫ14、ＳＫ16とＳＫ49、ＳＫ33とＳＫ46、ＳＫ34とＳＫ36、ＳＫ43とＳＫ44、ＳＫ50とＳＫ51などが考えられる。

(4) 時　期

何点か出土遺物に土器が見られるがいずれも板石積石室墓に伴う土器群からの流れ込みとおもわれる。また、副葬品も鉄鏃と剣であり時期決定も困難である。鉄鏃の中には弥生時代

まで遡るものは見られない点や地下式横穴墓出土の鉄鏃群のうちA地区の1類や羨門閉塞の副葬品の鉄鏃と近いものも見られることから4世紀代の土壙墓群と思われる。しかし、群の成立と終焉については明確な資料は得られなかった。

3．地下式横穴墓について

(1) 分　類

検出された地下式横穴墓は閉塞方法の違いによって羨門閉塞の地下式横穴墓と竪坑上部閉塞の地下式横穴墓、さらに横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓に分けられる。

横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓（Ⅰ類）

Ⅰ類－A　横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓で平入り・両袖で長方形もしくは隅丸長方形の玄室を持つ。玄室は大型の長方形プラン土壙墓の規模とほぼ同じで長軸辺側（横）に入口を持ち板閉塞である。竪坑から羨道までの幅が一定で、成形された段を有し一段下に玄室を造る。竪坑は小型の半円形や長方形プランを呈する。閉塞溝の有無によってさらに小分類される。

A－a　閉塞溝を床面に掘るタイプ（ＳＴ1002、ＳＴ1003）

A－b　閉塞溝を側壁に掘るタイプ（ＳＴ1001）。プラン的にはＳＴ1002と類似する。

A－c　閉塞溝を持たないタイプ（ＳＴ1004、ＳＴ1005）。ＳＴ1004はプラン的にはＳＴ1003と類似する。

Ⅰ類－B　横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓に類似しており平入りで隅丸長方形の玄室を持つ。羨門は片袖気味に造られており、長方形プランの竪坑を持つ。プラン的にはＳＴ1003と類似する（ＳＴ1006、ＳＴ1008）。

羨門閉塞の地下式横穴墓（Ⅱ類）

Ⅱ類－A　羨門閉塞の地下式横穴墓で平入り・両袖・楕円形プランの玄室を持つ。玄室と竪坑の規模がほぼ同一で板閉塞の溝が羨門両壁に掘り込んである。（ＳＴ1007）

Ⅱ類－B　羨門閉塞の地下式横穴墓で平入り・両袖・隅丸方形プランの玄室を持つ。玄室の天井はアーチ状になる。

B－a　竪坑から玄室までの床面がフラットなタイプ（ＳＴ1017）。

B－b　羨道で段を有し緩やかな傾斜で玄室に向って下がるタイプ（ＳＴ1012、ＳＴ1019）。

B－c　竪坑から羨道にかけて傾斜するタイプ（ＳＴ1021、ＳＴ1022）。

B－d　B－cのタイプだが竪坑が玄室より大きい（ＳＴ1018）。

Ⅱ類—C　羨門閉塞の地下式横穴墓で平入り・両袖・隅丸方形プランの玄室を持つ。玄室の天井が平らになる。竪坑から玄室までの床面がフラットである。（ＳＴ1010、ＳＴ1014、ＳＴ1016、ＳＴ2020)。

Ⅱ類—D　羨門閉塞の地下式横穴墓で平入り・両袖・円形ないし楕円形プランのを持つ。玄室の天井はアーチ状になると思われる。羨道部で不成形な段が有り玄室が一段下がる。（ＳＴ1011、ＳＴ1013、ＳＴ1015、ＳＴ1020)

Ⅱ類—E　羨門閉塞の地下式横穴墓で平入り・両袖で長方形ないし隅丸長方形プランの玄室を持つ。竪坑と羨道の幅がほぼ一定である。

Ｅ—a　玄室までの床面がフラットなタイプ（ＳＴ1009、ＳＴ2008、ＳＴ2011、ＳＴ2016)。

Ｅ—b　竪坑が玄室より低いタイプ（ＳＴ2022)。

Ⅱ類—F　小型の羨門閉塞の地下式横穴墓で竪坑と玄室の規模がほぼ同じ。（ＳＴ2021)

竪坑上部閉塞の地下式横穴墓（Ⅲ類)

Ⅲ類—A　竪坑上部閉塞の地下式横穴墓で平入り・両袖・長方形プランの玄室を持つ。（ＳＴ1025、ＳＴ2002、ＳＴ2009、ＳＴ2012、ＳＴ2013、ＳＴ2017、ＳＴ2019)。このうち、天井の残るＳＴ1025、ＳＴ2002、ＳＴ2009の３基は天井が屋根型を呈する。

Ⅲ類—B　竪坑上部閉塞の地下式横穴墓で平入り・両袖・楕円形プランの玄室を持つ。（ＳＴ1024、ＳＴ1026、ＳＴ2001、ＳＴ2003～ＳＴ2005、ＳＴ2012、ＳＴ2014、ＳＴ2015、ＳＴ2018、ＳＴ2024、ＲＴ2026、ＳＴ2027～ＳＴ2029)。ＳＴ1026とＳＴ2010は片袖タイプである。

Ⅲ類—C　竪坑上部閉塞の地下式横穴墓で平入り・楕円形プランの玄室を持つ。玄室の天井がアーチ状になる。片袖に近いタイプである。（ＳＴ2006、ＳＴ2013)

Ⅲ類—D　竪坑上部閉塞の地下式横穴墓で平入り・片袖・長方形ないしは台形プランの玄室を持つ。玄室の天井が平造りとなる。（ＳＴ2006、ＳＴ2007、ＳＴ2023)

(2)　副葬品

Ａ地区では26基の地下式横穴墓のうち約58％にあたる15基に副葬品が見られる。このうち、Ⅰ類・Ⅱ類の地下式横穴墓では23基のうち13基で見られる。Ｂ地区では29基のうち約65％にあたる19基で見られる。このうちⅢ類の地下式横穴墓では23基のうち17基にあたる。蕨地区全体ではⅠ類とⅡ類の29基のうち15基（約52％)、Ⅲ類の26基のうち19基（約73％）で見られる。１基あたりの副葬品の数量はⅠ類とⅡ類で約2.4本であるのに対してⅢ類で約6.8本と圧倒的に多い。

また、器種別で見ると蕨地区全体では鏃が最も多く71%、剣が22%、刀が3%、鉾が2%、刀子が2%となる。これをⅡ類とⅢ類の別でみると、Ⅱ類では鏃が71%、剣が29%で刀・鉾・刀子は0%となる。一方、Ⅲ類では鏃が71%、剣が21%、刀が4%、鉾が2%、刀子が2%となる。このうち、鉄鏃は圭頭鏃、無頸鏃、柳葉鏃、腸抉鏃、長頸鏃が見られる。器形の判別できる108点（Ⅱ類23点、Ⅲ類85点）についてその割合を見ると、圭頭鏃が50%（Ⅱ類40%、Ⅲ類53%)、無頸鏃が6%（Ⅱ類28%、Ⅲ類0%)、柳葉鏃が3%（Ⅱ類12%、Ⅲ類0%)、腸抉鏃が16%（Ⅱ類16%、Ⅲ類16%)、長頸鏃が23%（Ⅱ類0%、Ⅲ類29%)、その他2%（Ⅱ類0%、Ⅲ類2%）と言う結果が出た。この結果から見るとⅡ類・Ⅲ類とも割合の最も多い鉄鏃は圭頭鏃で50%前後を占めている。次に、Ⅱ類では無頸鏃の比率が多く柳葉鏃や腸抉鏃も見られる。一方、Ⅲ類では圭頭鏃のつぎに長頸鏃が多く腸抉鏃を含めた3種類でほとんどを占める。Ⅱ類で見られた無頸鏃や柳葉鏃は全く含まれていない。

次に、副葬品の組み合わせを見ると、Ⅱ類では鉄鏃のみ（4基）や剣のみ（5基）など1種類の鉄器を副葬するものが多く見られる。その他、鉄鏃と剣（2基)、鉄鏃と鉾（1基）など2種類の鉄器を副葬するものも見られる。一方、Ⅲ類では鉄鏃のみ（5基）や剣のみ（2基）のものも見られるが、鉄鏃と剣との組み合わせが9基と最も多い。鉄鏃と刀との組み合わせは1基と少ない。また、鉄鏃・剣・刀（2基）の組み合わせ。鉄鏃・刀・鉾（1基）の組み合わせ。鉄鏃・剣・刀・刀子・鉾（1基）の組み合わせなど多種類の副葬も見られる。

(3) 群構造

まず、地下式横穴墓の主軸方向について見ると、Ⅲ類の分布に規則性が見られる。A地区・B地区ともN—30°—WからN—20°—Eにかけての磁北を中心とした約50°の幅に集中している。つまりA地区では北側が微高地になっているため低位に竪坑を掘り込み高位方向に玄室を造る。一方、B地区では南側が微高地となっているため高位に竪坑を掘り込み低位方向に玄室を造る構造となっている。

Ⅱ類ではⅢ類で見られる様な主軸方向に規則性は見られないが、A地区では磁北を中心にN—50°—WからN—50°—Eの間の約100°の幅に主軸方向を持つものが多く見られる。地形的には標高の低い方に竪坑を掘り込み標高の高い方向に玄室を造る形となる。B地区では6基のうちそれぞれ2基づつが西方向（W—0°—N～W—10°—N)、東方向（E—20°—W～E—10°—S)、北方向（N—0°—W～N—20°—W）に主軸方向を持つ。

次に分布状況を見ると、A地区ではⅡ類の地下式横穴墓に3つのグループ化が見られる。第1グループは北西遺構群の西側にST1010～ST1012、ST1001～ST1005、ST1007の

9基が属するがグループの東側にⅠ類の地下式横穴墓6基(ＳＴ1001～ＳＴ1005、ＳＴ1007)が集中する。また、Ⅰ類の分布のなかでＳＴ1003とＳＴ1004、ＳＴ1002とＳＴ1001といった組み合わせで同型の地下式横穴墓がそれぞれ隣接する。第2グループは東側にＳＴ1013～ＳＴ1018、ＳＴ1006、ＳＴ1008、ＳＴ1009の9基が属する。グループ内に並列する形でⅠ類の地下式横穴墓2基（ＳＴ1006とＳＴ1008）が混在する。また、Ⅱ類の地下式横穴墓の中にもＳＴ1016とＳＴ1017が向い合って隣接しておりおそらく同一の盛土を共有していたと思われる。遺構群の南側に分布する第3グループにはＳＴ1019～ＳＴ1022の4基が属する。4基ともⅡ類の地下式横穴墓で主軸を北方向にする。

B地区ではⅡ類とⅢ類の地下式横穴墓が混在するがⅢ類が主軸をほぼ北を向くのに対して、Ⅱ類は遺構群の東側に固まっており主軸も北、東、西と3方向に持つことなどからⅢ類のグループとは別のグループと思われる。一方、Ⅲ類の分布のなかではⅢ類—CやⅢ類—Dが東側に見られるがⅢ類—AやⅢ類—Bは全体に分布する。これを鉄鏃の組み合わせで見ると、圭頭鏃のみのものが遺構全域で見られるが、腸抉鏃だけのもの、腸抉鏃と圭頭鏃の組み合わせのもの、さらには圭頭鏃と長頸鏃の組み合わせのものは東側にしか見られない。長頸鏃のみのＳＴ2029は遺構群の西端に見られる。西側については未掘の地下式横穴墓も多く分布の状況については明確ではない。東側については全体的な群構造の状況は判断し難いがＳＴ2029とＳＴ2019、ＳＴ2004とＳＴ2005、ＳＴ2007とＳＴ2006など地下式横穴墓の構造や副葬品の組み合わせの類似する2基から3基の一群が数箇所に見られる。

(4) 時　期

地下式横穴墓の時期の判定には玄室上部や竪坑および周辺出土の土器や副葬品の鉄鏃がキーワードになる。

地下式横穴墓関連出土の土器にはＳＴ1001の高坏（第105図52)、ＳＴ1003の長頸壺（第104図39)、ＳＴ1007の長頸壺（第104図37)、ＳＴ1015の壺（第101図8・第102図17）・高坏（第105図56・57）がある。これら土器から地下式横穴墓の時期を判断すると、ＳＴ1001・ＳＴ1003・ＳＴ1007出土の土器が板石積石室墓周辺の土器群と類似しており板石積石室墓との関係が考えられる。このうち長頸壺は全体的に土器群出土のものに近いが、高坏については土器群出土のものより坏部の底が浅く口縁部の広がりの反りも見られなくなるなど新しい様相が見られ、4世紀後半の時期に相当すると思われる。ＳＴ1015出土の土器群の中には、かなり深い坏部を持つ高坏や比較的とがり気味の丸底を持つ壺など5世紀代の様相を持つ土器が見られる。

副葬される鉄鏃から地下式様穴墓の時期を判断すると、A地区では無頸鏃と小型の腸抉鏃を副葬する羨門閉塞の地下式横穴墓の一群（a群）がある。B地区では竪坑上部閉塞の地下式横穴墓の中に長めの腸抉鏃と中型の圭頭鏃を副葬する一群（b群)、小型の圭頭鏃と中型の圭頭鏃を副葬する一群（c群)、中型の圭頭鏃と長頸鏃を副葬する一群（d群)、さらに長頸鏃のみを副葬する一群（e群）等がある。副葬されている鉄鏃の組み合わせからa群→c群・b群→d群→e群という変遷も考えられる。

4．蕨地区における古墳時代墓制について

土壙墓は縄文時代から見られるごく一般的な墓制、板石積石室墓は4～5世紀に熊本県南部の球磨川流域以南から鹿児島県北部の川内川流域以北に分布する特異な墓制、また、地下式横穴墓も5世紀後半から6世紀代に宮崎県中央部の一ツ瀬川流域以南から鹿児島県東部の大隅地方の一部に見られる特異な墓制である。小木原遺跡の位置する加久藤盆地は前方後円墳や横穴の分布は見られないが、板石積石室墓分布圏の東限であり、また地下式横穴墓分布圏の西限として両墓制が共存する地域として注目されている。しかし、これまで、両墓制が同一遺跡から発見された例は少なく、今回の小木原遺跡蕨地区での発見は両墓制の研究に良好な資料と言える。しかも、土壙墓も混在して発見されており弥生時代から古墳時代にかけての墓制を考える上で重要な資料である。しかし、副葬品が鉄器のみであり、土壙墓や板石積石室墓の中には副葬品を持たないものも多く見られることなど時期判定が困難である。

A地区に分布する土壙墓群の時期は副葬品の中に弥生時代に見られる古手の鉄鏃が見られないことから古墳時代前期（4世紀）のものと思われる。

A地区に分布する板石積石室墓群の時期は供献土器や無頸鏃（ＳＩ 103)、方形プランと円形プランの混在、円形プランへの移行期をうかがわせる方形プランの存在などから古墳時代前期（4世紀中葉）のものと思われる。

A地区とB地区に分布する地下式横穴墓群のうち、A地区では羨門閉塞（Ⅱ類）のタイプが3つのグループに分れて分布しており、第1、第2グループでは横口系の竪坑を持つⅠ類のタイプが混在する。Ⅰ類のタイプを除くA地区の羨門閉塞の地下式横穴墓は副葬品に無頸鏃のほか小型の腸抉鏃や柳葉鏃が見られる一方長頸鏃や中型の圭頭鏃が全く見られないことや第2グループ内のＳＴ1015号出土の土器の時期などから古墳時代中期後半（5世紀後半）に形成されはじめたと思われる。一方、Ⅰ類のタイプは出土土器が板石積石室墓群の供献土器に類似するが若干新しい様相を合せ持っている点や鉄鏃に同じA地区のⅡ類の地下式

横穴墓群に副葬される鉄鏃と極端な違いが認められないことなどから古墳時代前期後半（4世紀後半）には成立していたものと思われる。

B地区に分布する竪坑上部閉塞（Ⅲ類）の地下式横穴墓群はB地区全域に分布しており、無頸鏃のほか小型の腸抉鏃や柳葉鏃などA地区のⅡ類の地下式横穴墓群で見られる鉄鏃が全く副葬されていないことからA地区のⅡ類の地下式横穴墓群より若干新しい様相が考えられる。また、副葬品の中に長頸鏃や中型の圭頭鏃、さらに大型の腸抉鏃が見られることからB地区の竪坑上部閉塞の地下式横穴墓群は古墳時代中期後半から後期前半（5世紀終末から6世紀）に形成されたものと思われる。

以上、各墓制とそれぞれの分布域の時期設定を行なってみたが蕨地区A・B地区における墓域の変遷としては4世紀代を通じてA地区において土壙墓群が形成される。その中葉には土壙墓群内に板石積石室墓が導入されるが墓群の形成は短期間で終了する。A地区の墓制は土壙墓群や板石積石室墓群に代わって4世紀後半には横口系の竪坑を持つⅠ類の地下式横穴墓が形成される。その後、5世紀後半になると土壙墓群や板石積石室墓群の南側にⅡ類の地下式横穴墓群が形成され墓域はさらにA地区の南へと延びていく。そして一部はB地区の東側にもⅡ類の地下式横穴墓群が形成される。そして5世紀末から6世紀~~後半~~にかけてB地区とA地区の南端の一部にⅢ類の地下式横穴墓群が形成される。その中でB地区の墓域は東側から西側に形成されていく傾向が見られる。

小木原地下式横穴墓群では墓域の西部に小木原1号地下式（5世紀後半）・小木原3号地下式（5世紀後半～末）・小木原古墳（5世紀末～6世紀初頭）など首長クラスの墓が分布する支群がある。蕨地区は墓群域の東端にあたり、副葬品から見ても現段階では有力家長父クラスの突出の見られない均質的な群集墓としての位置付けができることから、墓群西部の首長墓クラスを擁する支群とは別の蕨支群の形成も考えられる。小木原地下式横穴墓群の南には6世紀前半を中心とする馬頭地下式横穴墓群と6世紀中頃を中心とする久見迫地下式横穴墓群が分布しており小木原地下式横穴墓群→馬頭地下式横穴墓群→久見迫地下式横穴墓群という墓群の成立過程の変遷がうかがわれる。

5．おわりに

今回の報告で「横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓」として取上げた墓制は、概要報告では長方形もしくは隅丸長方形の土壙の長軸辺側に長方形や半円形の横口をもつ遺構を仮称ではあるが「横口式土壙」とした。いわいる福岡平野を中心に弥生時代中期後半から後期前半の

カメ棺墓の中に見られる「横口式土壙」との関連が考えられたからである。しかし、基本的には地下式横穴墓の構造を有しており、福岡平野を中心に見られる「横口式土壙」と名称の混乱を避けるため本報告では「横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓」として地下式横穴墓の一形式とした。この地下式横穴墓は玄室の形式が大型の長方形プランの土壙墓と同規模である点。玄室より上段に設けた竪坑は玄室の後に掘り込んである点。玄室床面のレベルが他の地下式横穴墓より浅く土壙墓の床面と同レベルである点。玄室内の埋土中に天井部の落込みと思われる土塊や層が見られず天井部の板蓋閉塞も考えられる点などから羨門閉塞や竪坑上部閉塞の地下式横穴墓とは別の一形式とした。しかし、地下式横穴墓の祖元と考えるにはあまりにも早急で、資料的に貧弱である。現段階では、熊本地方に源流の見られる板石積石室墓の分布圏に加久藤盆地が含まれるように、北部九州に見られる「横口式土壙」、「九州型横穴式石室」、「竪穴系横口式石室」や熊本地方に見られる「肥後型横穴式石室」などの影響を受けた地域的な墓制と考えたい。さらに、この「横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓」は乙益重隆氏の地下式横穴墓分類のなかの「大隅半島や大口盆地にしばしば見られる退化した形態」として捉えられているV型のタイプと類似点も見られることから従来の分類の範疇にはいる可能性も残している。また、出土した高杯や長頸壺などからこのタイプの時期設定をしだが、その出土状況について流れ込みの可能性も十分に考えられることから、今後、類例の資料の増加を待ってこのタイプの位置付けと時期設定を考えてみたい。

参考文献

(1) 石川恒太郎「地下式古墳の源流」『考古学研究』30—2　1983

(2) えびの市教育委員会「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第1集　1985

(3) えびの市教育委員会「永田原遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第2集　1988

(4) えびの市教育委員会「小木原遺跡跡群・蕨地区」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第3集　1988

(5) えびの市教育委員会「小木原遺跡群蕨・久見迫・地主原地区」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第4集　1989

(6) 大宇陀町教育委員会「北原古墳」『大宇陀町文化財調査報告書』第1集　1986

(7) 大口市教育委員会「瀬ノ上遺跡、平田遺跡」『大口市埋蔵文化財調査報告書』第2集　1986

(8) 小郡市教育委員会「横隈狐塚遺跡Ⅱ」『小郡市文化財調査報告書』第27集　1985

(9) 乙益重隆「南九州における部族と墓制　古墳時代の終焉にむけて」『えとのす31　古代日向人の生活空間』1986

(10) 川南町教育委員会「上ノ原遺跡」川南町文化財調査報告4　1986

(11) 木崎原操「小木原古墳群調査報告」第2報～第7報『えびの』第2号～第8号　1971～1975
(12) 茂山護「二段逆刺を有する鉄鏃について」『宮崎県立総合博物館研究紀要』第5集　1980
(13) 新富町教育委員会「川床遺跡」『新富町埋茂文化財調査報告書』第3集　1985
(14) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集第八』1988
(15) 高木恭二「圭頭斧箭鏃再考」『肥後考古』第2号　1982
(6) 西健一郎「地下式板石積石室墓の基礎的研究」『九州文化史研究所紀要第33号』1988
(17) 西健一郎「地下式板石積石室墓出土鉄鏃の編年的検討」『鹿児島考古』第22集　1988
(18) 西谷正「日向の古墳文化における大陸系要素」『えとのす31　古代日向人の生活空間』1986
(19) 日高正晴「日向地方における地下式墳の編年的考察」『考古学叢考』下巻　吉川弘文館　1988
(20) 福岡市教育委員会「西新町遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第79集　1982
(21) 北郷泰道「南境の民の墓制」『えとのす31　古代日向人の生活空間』1986
(22) 宮崎県教育委員会「香禅寺遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第4輯　1959
(23) 宮崎県教育委員会「久見迫、馬頭遺跡」「小木原遺跡」「小木原古墳、地下式A号墳」「灰塚遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(1)　1972
(24) 宮崎県教育委員会「えびの町真幸、島ノ内地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第12輯　1967
(25) 宮崎県教育委員会「えびの町平松の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第14輯　1969
(26) 宮崎県教育委員会「えびの市島ノ内地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集　1971
(27) 宮崎県教育委員会「大萩遺跡(1)」「大萩遺跡(2)」『瀬戸ノ口地区特殊農地保全事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』1974、1975
(28) 宮崎県教育委員会「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集　1977
(29) 宮崎県教育委員会「平松地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集　1978
(30) 宮崎県教育委員会「平松地下式古墳発掘調査」「日守地下式横穴発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集　1980
(31) 宮崎県教育委員会「日守地下式横穴発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第23集　1981
(32) 宮崎県教育委員会「日守地下式横穴発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集　1982
(33) 宮崎県教育委員会「前原南遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集　1988
(34) 宮崎県考古学会、鹿児島考古学会「地下式横穴墓から見た古墳時代」資料　1986
(35) 森下浩行「九州型横穴式石室考」『古代学研究』115号

表5　板石積石室墓（ＳＩ）一覧表

No.	プラン	規模 (cm)			使用石材	石材板数	主軸	出土品	備考
		長軸	短軸	深さ				鉄鏃	
101	円形？	100	100	(20)	—	—	—		
102	円形	170	170		長軸縦置き	13	—	1	
103	円形	170	150		長軸縦置き	14	—	1	
104	長方形	92	78	(23)	長軸縦置き(？)	13～14	N－80°－W		
105	方形	150	150		長軸縦置き	13～14	—		
106	円形？	(90)	—	—	長軸縦置き	—	—		
107	方形	90	70	(10)	—	—	—		
108	方形	78	78	(20)	—	—	—		

表6　土壙墓（ＳＫ）一覧表(1)

No.	種類	プラン	主軸	規模 (cm)			副葬品			備考 (仮番号)
				長軸	短軸	深さ	鏃	剣	その他	
1	木棺墓	長方形	N－25°－W	154	66	(10)	1			(12)
2	〃	〃	N－62°－W	165	74	(20)	1		管玉	(13)
3	〃	〃	N－24°－E	134	(80)	(30)				(19)
4	〃	〃	N－17°－E	190	98	(10)				(23)
5	〃	〃	N－16°－W	115	(75)	(35)	4		土師器？	(30)
6	〃	〃	N－23°－W	110	70	(12)				(34)
7	木蓋土壙墓	長方形	N－30°－W	145	68	(58)	2	1		(1)
8	〃	隅丸長方形	N－40°－E	113	56	(30)				(4)
9	〃	長方形	N－15°－E	118	52	(46)				(5)
10	〃	〃	N－80°－W	150	60	(30)				(6)
11	〃	楕円形	N－35°－E	102	46	(13)				(7)
12	〃	長方形	N－72°－W	138	74	(40)				(9)
13	〃	長方形	N－75°－W	104	52	(46)				(8)
14	〃	〃	N－82°－W	125	60	(23)				(10)
15	〃	長方形	N－77°－E	121	63	(34)				(11)
16	〃	〃	N－14°－E	152	70	(48)		1		(14)
17	〃	〃	N－75°－E	148	67	(48)				(15)
18	〃	隅丸長方形	N－48°－W	105	55	(47～63)				(16)
19	〃	長方形	N－11°－E	133	70	(30)	3			(17)
20	〃	〃	N－67°－W	125	58	(42)				(18)
21	〃	〃	N－7°－E	113	65	(20)				——
22	〃	〃	N－27°－E	123	70	(20)				(21)

表7　土壙墓（ＳＫ）一覧表(2)

No.	種　種	プラン	主　軸	規　模（cm）			副　葬　品			備　考
				長軸	短軸	深　さ	鏃	剣	その他	(仮番号)
23	木蓋土壙墓	隅丸長方形	N－67°－W	114	55	(23)				(22)
24	〃	長　方　形	N－19°－E	125	67	(50)				(25)
25	〃	〃	N－72°－W	128	60	(50)		1		(28)
26	〃	〃	N－9°－W	135	71	(50)				(29)
27	〃	長　方　形	N－22°－E	121	81	(56)				(31)
28	〃	楕　円　形	N－65°－E	100	61	(40)	1			(32)
29	〃	長　方　形	N－45°－W	120	48	(23)				(33)
30	〃	長　方　形	N－54°－E	162	88	(44)				——
31	〃	隅丸長方形	N－53°－W	160	60	(58)				(35)
32	〃	長　方　形	N－50°－E	102	56	(70)	1			(38)
33	〃	長　方　形	N－64°－E	93	54	(32)				(39)
34	〃	〃	N－85°－E	132	62	44				木蓋用堀り込み有　(41)
35	〃	長　方　形	N－75°－W	93	41	34				(42)
36	〃	長　方　形	N－47°－E	113	51	40				木蓋用堀り込み有　(43)
37	〃	長　方　形	N－11°－E	128	67	(54)				(40)
38	〃	隅丸長方形	N－68°－W	155	80	(60)	1			(24)
39	〃	長　方　形	N－50°－E	125	52	52				木蓋用掘り込み有　(44)
40	〃	隅丸長方形	N－76°－E	135	67	(52)	1～2			(45)
41	〃	長　方　形	N－25°－E	(120)	66	46		1		(48)
42	〃	〃	N－33°－E	118	67	(84)				(49)
43	〃	隅丸長方形	N－80°－W	100	53	(30)				(50)
44	〃	長　方　形	N－13°－E	110	50	(16)				(51)
45	〃	〃	N－60°－W	123	72	(24)				(52)
46	〃	長　方　形	N－40°－E	160	77	(40)				(53)
47	〃	隅丸長方形	N－78°－E	125	40	(28)				(56)
48	〃	長　方　形	N－63°－W	118	75	(15)	8～9			(60)
49	〃	〃	N－16°－E	146	66	(42)				(42)
50	〃	——	(N－16°－E)	——	60	(26)				(47)
51	〃	——	(N－26°－E)	——	71	(18)				(46)
52	〃	——	N－49°－W	155	70	(48)				(27)
53	〃	長　方　形	N－33°－E	183	82	(57)				——
54	〃	隅丸長方形	N－80°－E	93	43～26	(27)				——
55	〃	細長長方形	N－75°－W	(192)	31	(26)				——
56	〃	〃	N－32°－W	198	35	(36)				——
57	〃	楕　円　形	N－20°－W	164	74	(20～50)				——
58	〃	円　形		74	62	(70)				——

表8　地下式横穴墓（ＳＴ）一覧表(1)Ａ地区

No.	閉塞	主軸	玄室プラン			天井プラン	玄室規模（cm）			出土品							備考（仮番号）	
							奥行	幅	高さ	刀子	刃	剣	鏃	鉾	土師	紡錘車		
1001	横口系	S－48°－W	平入り	両袖	長方形	×	70	160	(35)						高坏1		板閉塞痕有り（壁）	(62)
1002	横口系	S－45°－W	〃	〃	〃	×	90	165	(70)								〃（床）	(61)
1003	横口系	N－65°－W	〃	〃	〃	×	85	155	(70)				3		壺1		〃（床）	(3)
1004	横口系	S－38°－W	〃	〃	〃	×	90	180	(35)									(2)
1005	横口系	S－43°－W	〃	〃	〃	×	110	155	(50)							1	板閉塞痕有り（壁？）	(63)
1006	横口系	S－8°－W	〃	〃	〃	×	85	126	(50)								〃（床）	(65)
1007	羨門	S－23°－E	〃	〃	楕円形	×	60	155	(45)								〃（壁）	(59)
1008	横口系	S－15°－E	〃	〃	長方形	×	90	155	(80)			1			壺1			(64)
1009	羨門	S－57°－E	〃	〃	〃	×	80	150	(70)									(37)
1010	羨門	N－33°－W	〃	〃	楕円形	×	65	153	—									(1001)
1011	羨門	S－65°－W	〃	〃	円形	ドーム	123	150	65			1	1					(1002)
1012	羨門	S－42°－W	〃	〃	楕円形	ドーム	132	176	52				1					(1003)
1013	羨門	S－45°－W	〃	〃	〃	×	132	169	—									(1004)
1014	羨門	S－47°－E	〃	〃	長方形	ドーム	95	165	56				2					(1005)
1015	羨門	S－18°－W	〃	〃	楕円形	×	137	192	—				5					(1006)
1016	羨門	S－11°－E	〃	〃	〃	平	110	153	56			1						(1007)
1017	羨門	S－7°－W	〃	〃	〃	ドーム	129	166	68				3					(1008)
1018	羨門	N－43°－W	〃	〃	〃	×	84	166	—									(1009)
1019	羨門	S－12°－W	〃	〃	〃	ドーム	110	173	86				1					(1010)
1020	羨門	S－2°－E	〃	〃	〃	×	146	189	—			1	4					(1011)
1021	羨門	S－8°－W	〃	〃	〃	ドーム	140	210	90									(1012)
1022	羨門	S－35°－W	〃	〃	〃	×	130	220	—			2						(1013)
1023	羨門	S－21°－W	〃	〃	〃	×	135	183	—			2						(1014)
1024	竪坑	S－15°－W	〃	〃	〃	×	144	194	—									(1015)
1025	竪坑	S－17°－E	〃	〃	〃	寄棟	142	200	70			1	2					(1016)
1026	竪坑	S－27°－E	〃	〃	〃	×	160	200	—			4						(1017)

表9　地下式横穴墓（ＳＴ）一覧表(2)Ｂ地区

No.	閉塞	主軸	玄室プラン			天井プラン	玄室規模（cm）			出土品						備考
							奥行	幅	高さ	刀子	刃	剣	鏃	鉾	その他	
2001	竪坑	S－30°－E	平入り	両袖	楕円形	×	132	180	—			1	3			
2002	竪坑	S－5°－W	〃	〃	長方形	切妻？	120	176	—			1	3			
2003	竪坑	S－12°－E	〃	〃	楕円形	×	106	145	—				2			
2004	竪坑	S－5°－E	〃	〃	〃	×	180	210	—	1	1	2	5			
2005	竪坑	S－22°－W	〃	〃	〃	×	205	225	—							
2006	竪坑	S－16°－W	〃	片袖	台形	平	185	208	86							
2007	竪坑	S－13°－W	〃	〃	〃	〃	134	171	82			1	4	1		
2008	羨門	S－74°－W	〃	両袖	長方形	×	80	144	—							
2009	竪坑	S－18°－E	〃	〃	〃	寄棟？	160	205	—							
2010	竪坑	S－4°－W	〃	〃	楕円形	×	132	210	—	1	1	1	3	1		
2011	羨門	S－85°－E	〃	〃	長方形	×	88	164	—				3	1		
2012	竪坑	S－1°－W	〃	〃	楕円形	×	164	217	—		1	1	5			
2013	竪坑	S－6°－W	〃	〃	〃	×	200	218	—		1	3	10～12			
2014	竪坑	S－3°－W	〃	〃	〃	×	146	214	—			4	5～7			
2015	竪坑	S－14°－W	〃	〃	〃	×	140	201	—			2				
2016	羨門	S－6°－W	〃	〃	長方形	×	92～80	166	—							
2017	竪坑	S－1°－W	〃	〃	楕円形	×	182	213	—		1					
2018	竪坑	S－13°－W	〃	〃	〃	×	110	190	—			1	6			
2019	竪坑	S－3°－W	〃	〃	長方形	×	150	210	—				4			
2020	羨門	S－14°－W	〃	〃	〃	×	128	200	—			1				
2021	羨門	S－80°－E	〃	〃	不定形	×	70	102	—							
2022	羨門	S－88°－E	〃	〃	楕円形	×	90	182	—							
2023	竪坑	S－2°－E		片袖	〃	×	190	176	—							
2024	竪坑	S－8°－W	平入り	両袖	〃	×	120	175	—							
2025	竪坑	—	〃	—	〃	×	—	200	—			3	10			
2026	竪坑	S－1°－E	〃	両袖	〃	×	150	180	—			1	1～6			
2027	竪坑	S－10°－W	〃	〃	〃	×	170	235	—			1	4			
2028	竪坑	S－2°－W	〃	〃	〃	×	160	194	—				1			
2029	竪坑	S－19°－E	〃	〃	〃	×	135	212	—				10～			

表10　刀子、剣、刀、鉾一覧表(1)

図面番号	遺構名	種類	全長	刃部			柄部及茎部			備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
4	SK7	剣	(23.9)	(20.1)	2.9	0.5	柄 茎 3.8	2.0	0.4	
7	SK16	〃	(26.3)	(20.5)	2.6	0.6	柄 茎 5.8	2.0	(1.0)	
15	SK26	〃	(30.8)	27.8	2.4	0.6	柄 茎 (1.2)	2.0	0.5	
12	SK49	〃	(15.0)	(15.0)	3.0	0.4				
36	ST1008	〃	(31.9)	26.6	3.1	0.7	柄 茎 (8.3)	1.9	0.4	
37	ST1011	〃	(21.8)	(21.8)	2.7	0.4				
47	ST1016	〃	(43.0)	36.4	3.2	0.7	柄 (2.5) 茎 (6.6)	(3.1) 1.8	(2.0) 0.5	
51	ST1023	〃	29.7	20.5	2.6	0.6	柄 茎 9.2	1.5	0.5	
52	ST1023	〃	(25.2)	23.3	2.8	0.5	柄 茎 (1.9)	(2.1)	(0.7)	
54	ST1020	〃	24.5	18.4	3.8	0.6	柄 茎 6.1	1.0	0.3	
59	ST1022	〃	40.2	30.4	3.0	0.6	柄 茎 9.8	1.7	0.4	
60	ST1022	〃	(49.3)	(49.3)	3.4	0.6	柄 茎			
63	ST1025	〃	70.8	55.0	3.9	0.7	柄 15.8 茎	2.8	1.9	
64	ST1026	〃	47.5	35.9	3.0	0.3	柄 茎 11.6	1.7	0.6	
65	ST1026	〃	(22.5)	18.8	3.6	0.4	柄 茎 (3.7)			
66	ST1026	〃	(28.5)	18.4	3.4	0.5	柄 (10.1) 茎	2.1	1.6	
67	ST1026	〃	(43.7)	(33.2)	2.9	0.5	柄 7.6 茎 (10.5)	4.0 1.5	1.2 0.4	
70	ST2001	〃	51.0	40.7	2.5	0.5	柄 (8.2) 茎 10.3	2.8 1.8	0.4 1.5	
75	ST2002	〃	69.3	53.8	4.2	0.8	柄 (7.0) 茎 15.5	(4.2) 2.0	(2.3) 0.5	
76	ST2004	直刀	84.1	68.0	2.8	0.7	柄 (11) 茎 14.8	2.0	0.6	
77	ST2004	剣		14.5	1.7	0.4	柄 (1.8) 茎	1.5 1.0	1.3 0.4	
78	ST2004	刀子	(5.6)	(5.6)	2.1	0.5	柄 茎			
79	ST2004	剣	54.4	4.3	3.7	0.7	柄 茎 13.2	1.8	0.7	
88	ST2007	直刀	39.3	30.6	2.8	0.6	柄 (9.3) 茎 8.7	5.2 1.6	(2.9) 0.5	
90	ST2007	鉾	25.1	8.5	2.2	0.9	柄 茎 16.6	3.0	2.7	
95	ST2010	剣	66.1	55.4	3.6	0.8	柄 茎 10.7	1.7	0.6	鹿角：長さ(1.4)　幅 3.8　厚さ 2.7 木質：長さ 1.1　幅 2.2　厚さ 1.1
96	ST2010	直刀	85.0	71.2	3.1	0.8	柄 茎 14.6	2.2	0.7	
97	ST2010	鉾	41.6	23.7	3.3	0.7	柄 茎 17.8	3.4	2.6	
98	ST2010	刀子	12.0	9.0	2.0	0.5	柄 3.5 茎 2.5	2.3	1.8 0.3	
102	ST2011	鉾	31.2	14.7	3.4	0.9	柄 茎 16.5	3.2	3.3	

表11　刀子、剣、刀、鉾一覧表(2)

図面番号	遺構名	種類	全長	刃部			柄部及茎部			備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
106	ＳＴ2012	剣	(33.1)	33.1	2.9	0.5	柄 茎			
107	ＳＴ2012	直刀	25.5	19.8	2.2		柄 5.8 茎 5.7	2.5	1.5 0.5	
116	ＳＴ2013	剣	35.9	25.1	2.7	0.7	柄 2.0 茎 10.7	3.0	1.8	
117	ＳＴ2013	〃	62.4	49.0	3.5	0.5	柄 茎 13.4	1.8	0.4	鹿角部分：長さ 1.4　幅 3.9　厚さ 2.6 木質 〃 ：長さ11.8　幅 3.0　厚さ 1.9
118	ＳＴ2013	〃	73.4	55.9	3.6	0.6	柄 茎			鹿角部分：長さ 2.8　幅 5.5　厚さ 2.8 木質部分：長さ13.8　幅 3.8　厚さ 2.5
119	ＳＴ2013	〃	55.2	47.0	3.2	0.6	柄 5.6 茎 12.8	3.5 2.0	2.0 0.4	
130	ＳＴ2014	〃	59.3	48.8	3.5	0.7	茎 11.5	2.2	0.6	
131	ＳＴ2014	〃	40.8	33.5	3.0	0.6	柄 7.3 茎	4.5 1.1	1.8 0.2	
133	ＳＴ2014	〃	42.0	36.2	2.6	0.6	柄 茎 (5.9)	2.2	0.8	
136	ＳＴ2014	〃	27.1	21.0	3.3	0.5	柄 6.1 茎	3.8	1.1	
141	ＳＴ2015	〃	24.4	19.5	3.2	0.5	柄 茎 4.9	2.3	0.7	
142	ＳＴ2015	〃	(23.7)	(17.6)	2.4	0.5	柄 6.1 茎 6.1	2.5 2.1	1.1 0.5	
143	ＳＴ2017	〃	72.8	62.9	3.9	1.0	柄 9.9 茎	4.2	3.4	
146	ＳＴ2018	〃	(11.4)	(11.4)	1.8	0.4	柄 茎			
157	ＳＴ2020	〃	(38.5)	33.4	3.3	0.6	柄 (4.0) 茎 (5.1)	3.5 1.8	1.7 0.7	
158	ＳＴ2026	〃	(25.2)	(19.6)	4.4	0.6	茎 5.6	2.7	1.0	
166	ＳＴ2025	〃	58.6	49.6	3.1	0.7	柄 7.0 茎 9.0	2.0 1.5	1.0 0.4	
167	ＳＴ2025	〃	(48.1)	(48.1)	2.7	0.5	柄 茎			
170	ＳＴ2025	〃	42.2	31.2	3.7	0.5	柄 茎 11.0	2.4	0.6	
179	ＳＴ2027	〃	70.3	59.0	3.4	0.7	柄 茎 11.3	1.8	0.5	

表12　鉄鏃一覧表(1)

図面番号	遺構名	鉄鏃形式	全長(cm)	鏃身			頸部			茎部			矢柄径	重さ(g)	備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ			
1	SI102	M1	3.1	3.1	2.1	0.2								3	
2	SI102	——	(2.5)				(2.5)							(1)	
3	SI103	K3	6.6	3.5	2.5	0.3				3.0	0.5	0.4		9.5	
5	SK7	R1	8.8	4.3	1.7	0.3				4.5	0.8	0.8	0.8	8.5	
6	SK7	K3	5.6	2.8	2.2	0.2				2.1	0.7	0.2		5.5	
8	SK19	K2	9.3	5.8	(1.9)	0.3				3.4	0.6	0.4		11.0	
9	SK19	R1	6.4	3.7	1.6	0.2				2.6	0.5	3.5	0.8	6.5	
10	SK19	K3	5.1	2.5	1.8	0.3				2.6	0.6	0.5	0.8	5.5	
11	SK38	M3	6.2	4.9	2.4	0.1							1.1	8	
13	SK32	R1	9.8	6.1	2.0	0.3				3.6	0.6	0.4	0.8	11.5	
14	SK28	——	(7.0)	(3.1)	2.2	0.3				3.8	0.6			(10.0)	
16	SK40	K2	(11.0)	7.5	3.3	0.3				(3.5)	(0.6)	(0.4)	1.1	(22.5)	
17	SK40	——	(4.8)							2.9			1.0	(13.5)	
18	SK5	Yr3	16.1	12.0	2.2	0.4				3.7	0.7	0.4	0.9	36.0	頸部不明
19	SK5	R3	12.3	7.8	2.0	0.2				4.6	(0.5)	(0.5)	0.8	14.0	
20	SK5	R3	(8.2)	8.2	2.0	0.2								(11.0)	
21	SK5	R3	(9.1)	8.9	2.0	0.3								(14.0)	
22	SK48	Ys1	(7.7)	(4.3)	(2.5)	0.4	1.6	1.0		2.9	0.9	0.45	0.9	(12.0)	
23	SK48	K3	7.8	4.4	2.3	0.3				3.5	0.6	0.5		8.0	
24	SK48	Ys1	(4.9)	4.3	1.6	0.3	1.4	0.8	0.3					(12)	重さ、別個体付着
25	SK48	K2	8.2	5.2	2.6	0.4				2.9	0.4	0.4	1.0	11.5	
26	SK48	K2	9.3	5.4	3.2	0.3				3.8	0.6	0.5	0.9	9.3	
27	SK48	K3	6.6	3.3	2.2	0.2				3.3	0.5	0.4	8.5	9.0	
28	SK48	R2	(5.0)	4.7	1.9	(0.6)							0.5	(8.0)	
29	SK48	——	(6.0)	(3.1)	1.3	0.2				2.9	0.6	0.5		(6.0)	
30	SK48	——	(5.2)								0.5	0.5	0.9	(3.5)	軸だけ
31	SK1	K3	5.8	3.4	2.5	0.2				2.4	0.6	0.3	0.9	6.0	
32	SK2	Ys1	(3.5)										0.8	(2.0)	
33	ST1003	Ys1	(5.9)	4.0	2.2	0.3	1.0	0.6	0.3	1.9	0.6	0.5	0.6	(8.5)	重さ石付着
34	ST1003	Ys1	5.9	(3.3)	2.2	0.3	0.7	0.8	0.6	1.6	0.5	0.4	0.6	(8.0)	

表13　鉄鏃一覧表(2)

図面番号	遺構名	鉄鏃形式	全長	鏃身			頸部			茎部			矢柄径	重さ	備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ			
35	ＳＴ1003	——	5.5	4.0	2.2	0.3	1.1	0.7	0.5	1.3	0.4	0.4	0.6	8.0	
38	ＳＴ1011	Ｙｓ３	13.0	4.6	2.3	0.4	2.4	1.9	0.5	2.4	0.8	0.5	0.9	22.0	関部幅 2.2
39	ＳＴ1012	Ｋ２	9.5	6.2	3.3	0.4				3.3	0.6	0.4	0.9	26.5	
40	ＳＴ1014	Ｋ３	6.1	4.0	1.9	0.3				2.1	0.6	0.4	0.6	(10.0)	
41	ＳＴ1014	Ｋ３	(3.0)	(3.0)	1.9	0.2								(3.0)	
42	ＳＴ1015	Ｍ２	7.3	7.3	3.2	0.4							1.2	18.0	
43	ＳＴ1015	Ｍ２	7.4	7.4	3.0	0.4							2.1	21.0	
44	ＳＴ1015	Ｙｓ２	(7.4)	(5.5)	2.0	0.3	0.7	0.7	0.3	2.7	0.6	0.4	0.8	(10.0)	
45	ＳＴ1015	Ｍ２	7.0	7.0	2.5	0.3								11.5	
46	ＳＴ1015	Ｍ２	6.4	6.4	3.0	0.3							1.0	11.5	
48	ＳＴ1017	Ｒ２	(6.1)	(6.1)	3.0	(1.0)								(26)	
49	ＳＴ1017	Ｍ２	(7.1)	7.1	2.5	0.5								(15)	
50	ＳＴ1017	Ｍ２	(6.8)	6.8	2.1	0.4								(15)	
53	ＳＴ1019	Ｋ１	(15.5)	11.6	3.5	0.4				4.0	1.1	0.4	1.1	(40.0)	
55	ＳＴ1020	Ｋ３	9.7	6.2	2.3	0.3				2.5			1.0	(18.5)	石付着
56	ＳＴ1020	Ｋ３	9.3	4.8	2.1	0.3				3.4		0.4	1.0	(20.0)	石付着
57	ＳＴ1020	Ｋ３	8.1	4.3	2.2	0.3				3.7	(0.6)	0.4	1.0	11.0	
58	ＳＴ1020	Ｋ３	6.8	4.4	2.5	0.3				2.4	0.6	0.4		9.0	
61	ＳＴ1025	Ｋ１	(17.0)	12.0	3.8	0.6									
62	ＳＴ1025	Ｋ１	(18.3)	12.3	4.0	0.5							1.5		
68	ＳＴ2001	Ｋ１	15.1	11.2	(4.0)	0.4							1.0	(59.0)	
69	ＳＴ2001	Ｋ１	14.7	11.0	(2.7)	0.5				3.6	0.7	0.6	1.0	(38.9)	
71	ＳＴ2001	Ｋ１	(10.8)	10.8	(4.0)	(0.5)								(20.6)	
72	ＳＴ2002	Ｋ１	15.4	11.8	3.5	0.5				3.5	(0.7)	0.6	1.1	52.0	
73	ＳＴ2002	Ｙｒ３	16.4	8.6	2.1	0.4	1.9	1.2	0.7	7.4	0.7	0.5		(39.5)	関部幅 1.8
74	ＳＴ2002	Ｋ４	(13.8)	(10.0)	2.7	0.4				3.7	0.7	0.7		(39.5)	
80	ＳＴ2002	Ｙｒ１	(9.5)	8.1	2.3	0.5	2.6	2.2	0.5	1.2	0.8	0.4		(24.0)	関部幅 1.6
81	ＳＴ2002	Ｙｒ１	11.4	7.0	2.0	0.5	1.9	1.1	(0.5)	(4.6)	0.6	0.5	1.1	30.0	
82	ＳＴ2002	Ｋ１	16.2	11.3	(3.6)	0.5				4.9	0.7	0.5	1.1	51.0	
83	ＳＴ2002	Ｋ１	(14.1)	(6.0)	(2.8)	0.6	3.5		0.5	6.1	0.7	0.5	1.0	(51.3)	関部幅 1.5

表14　鉄鏃一覧表(3)

図面番号	遺構名	鉄鏃形式	全長	鏃身			頸部			茎部			矢柄径	重さ	備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ			
84	ＳＴ2004	Ｋ１	15.1	10.7	3.6	0.6				4.4	0.7	0.5	1.1	(51.3)	
85	ＳＴ2004	Ｋ１	15.7	10.9	4.0	0.5				4.8	0.8	0.6		(51.3)	
86	ＳＴ2003	Ｋ２	9.7	7.4	2.9	0.4				2.6	0.6	0.4	1.0	(27.5)	
87	ＳＴ2003	Ｋ２	(12.0)	8.3	2.4	0.5				2.8	0.7	0.4	1.2	(27.5)	
89	ＳＴ2007	Ｋ１	19.0	11.0	4.0	0.4				7.4	1.3		1.1	52.0	
91	ＳＴ2007	Ｋ２	15.9	6.3	2.8	0.4				3.8	0.6		1.1	21.5	
92	ＳＴ2007	Ｋ２	16.9	5.9	2.3	0.35				11.0	0.6		1.1	21.5	
93	ＳＴ2007	——	(15.5)	(7.5)	(3.0)	0.14				8.1			1.1	(29.0)	
94	ＳＴ2009	Ｙｒ１	10.6	6.7	1.9	0.35	0.9	1.1	0.4	3.9	0.4	0.5		17.5	関部幅 1.4
99	ＳＴ2010	Ｋ１	16.5	11.7	4.0	0.4				4.8	0.5	0.4	1.1	47.5	
100	ＳＴ2010	Ｔ２	13.7	2.8	1.3	0.3	3.6	0.6	0.4	6.3			1.1	17.0	
101	ＳＴ2010	Ｒ４	11.0	6.0	1.4	0.3	1.1	1.1	0.4	3.9	0.5	0.5		15.0	
103	ＳＴ2011	Ｋ２	(12.2)	(6.4)	3.0	0.4				4.4			1.0	(32.2)	
104	ＳＴ2011	Ｋ２	13.5	10.0	3.1	0.5				3.5	0.6	0.4	1.0	(32.2)	
105	ＳＴ2011	Ｋ１	14.8	8.7	3.5	0.4				4.3	0.6	0.4	1.0	31.0	
108	ＳＴ2012	Ｋ１	17.1	12.2	4.0	0.4				4.9	0.5	0.5	1.1	65.0	
109	ＳＴ2012	Ｋ１	(14.6)	16.0	3.7	0.5				(3.9)	0.6	0.6	1.1	(49.0)	
110	ＳＴ2012	Ｙｒ１	(8.5)	6.8	1.6	0.3	2.1	0.7	0.4	(1.6)	0.6	0.4		(13.5)	関部幅 1.2
111	ＳＴ2012	Ｙｒ１	16.8	13.0	3.0	0.5	2.5	1.0	0.5	6.5	0.8	0.4		66.5	関部幅 2.1
112	ＳＴ2012	Ｙｒ１	(12.5)	12.0	2.4	0.4	1.8	1.0	0.8	(1.9)	0.4	0.6		(42.5)	関部幅 1.4
113	ＳＴ2013	Ｋ３	(5.8)	(5.8)	(2.2)	0.4									
114	ＳＴ2013	Ｙｒ１	(9.2)	9.2	2.3	0.4	1.8	0.9	0.5						関部幅 1.4
115	ＳＴ2013	Ｋ２	11.5	7.0	3.0	0.6				3.9			1.1		
120	ＳＴ2013	Ｋ１	14.8	12.3	4.2	0.4				2.5	0.6	0.5	67.5		
121	ＳＴ2013	Ｋ１	19.3	14.5	4.7	0.5				4.6	0.7	0.6	1.1	94.0	
122	ＳＴ2013	Ｋ１	12.6	10.5	3.5	0.6				(2.1)	0.5	0.3	1.0	45.5	
123	ＳＴ2013	——	(9.2)	(4.5)	(0.7)	(0.4)				4.7	0.5	0.4	0.9	(10.0)	
124	ＳＴ2013	Ｙｒ１	(10.7)	9.2	2.3	0.6	2.4	1.3	0.6	(1.5)	0.7	0.6		(30.1)	関部幅 1.6
125	ＳＴ2013	Ｙｒ１	12.3	7.1	2.1	0.5	2.0	0.9	0.4	5.4	0.5	0.4	1.0	23.0	関部幅 1.3
126	ＳＴ2013	Ｙｒ１	(9.8)	8.3	2.4	0.3	1.5	1.0	0.4	(1.0)	0.9	0.4		(21.0)	関部幅 1.6

表15　鉄鏃一覧表(4)

図面番号	遺構名	鉄鏃形式	全長	鏃身			頸部			茎部			矢柄径	重さ	備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ			
127	ST2013	Yr1	12.9	6.2	2.1	0.5	2.0	1.1	0.6	5.6			1.0	29.0	関部幅 1.5
128	ST2013	——	(7.4)	(3.3)	(1.3)	(0.5)				3.1	0.5	0.5	1.1	(14.0)	
129	ST2013	——	(4.6)							(4.6)	0.6	0.6		(5.0)	
132	ST2014	K1	17.9	13.4	3.8	0.5				4.5	0.7	0.6	1.1	78.0	
134	ST2014	T2	11.9	2.4	1.4	0.3	3.8	0.7	0.5	5.4			0.9	15.5	
135	ST2014	T2	11.3	2.3	1.7	0.4	4.7	0.8	0.7	4.3	0.4	0.5	1.0	24.5	
137	ST2014	T3	12.6	2.4	1.0	0.3	4.2	0.8	0.8	5.4			1.0	20.0	
138	ST2014	T3	8.5	2.6	1.1	0.4	2.4	0.9	0.6	3.4	1.1		1.0	18.0	
139	ST2014	——	(5.4)	(0.6)	(1.0)	0.4				3.9	0.6		1.0	(9.5)	
140	ST2014	——	(4.1)	(0.5)	(1.0)	0.6				3.6	0.8	0.6	1.0	(8.5)	
144	ST2017	K1	14.7	9.4	2.5	0.4				5.3	0.5	0.5	1.0	29.0	
145	ST2017	T1	(15.0)	2.0	0.9	0.3	(8.1)	0.8	0.5	4.9	0.8			(31.5)	
147	ST2018	K2	9.8	5.8	(2.4)	0.3				4.0	0.4	0.3	0.8	15.5	
148	ST2018	K2	(7.3)	6.6	2.6	0.3				(0.7)	0.6	0.4	0.9	(15.5)	
149	ST2018	K2	9.6	5.3	2.3	0.4				3.0			0.9	13.0	
150	ST2018	K2	11.5	7.6	2.9	0.4				3.9	0.6	0.4	1.1	28.5	
151	ST2019	Yr2	(8.45)	8.0	2.1	0.4	(3.7)	0.8	0.4					(21.5)	
152	ST2019	——	(12.2)		(2.9)	0.5					0.7	0.6		(21.5)	
153	ST2019	K2	(6.9)	(6.9)	2.4	(0.6)								(26.0)	
154	ST2019	K4	(13.1)		2.7	0.5					0.8	0.5		(43.0)	
155	ST2018	K2	(6.8)	(6.8)	2.3	0.5								(13.5)	
156	ST2018	K2	(12.4)	(3.8)	1.7	0.3	2.4	0.8	0.5	3.6			0.9	(13.5)	
159	ST2026	K2	11.0	6.2	2.1	0.4				4.4			1.1	20.0	
160	ST2026	——	(6.6)	1.5	1.2	0.3	1.9	0.7	0.4	(3.2)	(0.4)			(9.0)	
161	ST2026	——	(6.4)		1.3	0.3				0.6	0.3			(6.5)	
164-1	ST2029	T3	18.1	3.5	1.0	0.4	9.6	0.7	0.4	5.0			1.0		
164-2	ST2029	T3	19.7	3.2	1.1	0.4	14.5	0.9	0.4	4.1			1.0		
164-3	ST2029	T3	(16.8)	(1.6)	1.0	0.3	10.3	0.7	0.5	4.6		0.3	0.9		
164-4	ST2029	T3	(9.7)				(5.7)	0.6	0.4	4.0	0.4	0.4	0.9		
164-5	ST2029	T3	(17.0)				(13.5)	0.7	0.4	4.6	0.5	0.5	1.1		

表16　鉄鏃一覧表(5)

図面番号	遺構名	鉄鏃形式	全身	鏃身			頸部			茎部			矢柄径	重さ	備考
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ			
164-6	ＳＴ2029	Ｔ３	(17.5)				(13.1)	1.0	0.5	4.4		0.5	0.9		
165-1	ＳＴ2029	Ｔ３	(16.5)	3.0	1.5	0.6									
165-2	ＳＴ2029	Ｔ３	(18.1)												
165-3	ＳＴ2029	Ｔ３	15.3	2.7	1.3		7.2	0.6	0.4	5.2	0.4	0.3	0.9		
168	ＳＴ2025	Ｋ１	(12.0)	(12.0)	4.2	0.4								(52.5)	
169	ＳＴ2025	Ｋ１	(10.1)	(10.1)	4.3	(0.7)								(61.5)	
171	ＳＴ2025	Ｋ１	(13.5)		3.6	0.3					0.7	0.6			
172	ＳＴ2025	Ｋ１	(8.7)	(8.7)	3.5	0.5									
173	ＳＴ2025	Ｋ２	10.5	7.4	2.5	0.4				3.0	0.5	0.4	1.0	23.5	
174	ＳＴ2025	Ｋ２	7.8	7.3	2.6	0.4				2.5	0.5	0.5	0.9	21.0	
175	ＳＴ2025	——	(9.5)	(5.1)	(2.1)	0.4				4.4	0.6	0.4		(19.0)	
176	ＳＴ2025	——	(5.7)	(5.7)	(1.9)	0.4								(10.5)	
177	ＳＴ2025	——	(13.5)	(7.1)	2.0	0.5				6.4	0.8	0.6		(31.5)	
178	ＳＴ2025	Ｔ３	(6.6)	4.2	1.3	0.4				(2.3)	0.9	0.6		(11.5)	
180	ＳＴ2027	Ｋ１	15.7	11.3	4.0	0.5				4.2		0.5	1.0	64.5	
181	ＳＴ2027	Ｋ１	(13.4)	(13.4)	4.1	0.4								(56.0)	
182	ＳＴ2027	Ｋ１	16.5	12.2	4.3	0.5				4.3	0.6	0.5	1.0	78.5	
183	ＳＴ2027	Ｋ１	18.9	11.0	4.4	0.5				7.7			1.1	62.0	
184	ＳＴ2028	Ｋ１	(8.6)	(8.6)	2.8	0.5								(20.0)	
185	ＳＴ2028	——	(6.7)	(2.1)	(1.1)	0.5				4.2			1.1	(11.5)	

表17　土器観察表(1)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
99	1	4・5 a・b	壺	口縁〜胴部	口縁…ナデ 頸部…ハケメ 胴部…風化	ナデ	良好	淡橙（5YR8/4） 黄橙（10YR8/6）	浅黄橙（10YR8/4）	白・茶・透明な粒を含む 1㎜内の粒を多く含む	
〃	2	〃	〃	胴部〜底部	ナデ？	風化の為調整不明	〃	淡黄（2.5Y8/3） 橙（5YR7/8）	橙（7.5YR7/6）	白・茶・透明な粒を含む 2〜1㎜大の粒を含む 1㎜内の砂粒を多く含む	底部…黒斑
100	3	〃	〃	口縁〜胴部	口縁…風化 胴部…工具によるナデ	ナデ	〃	橙（7.5YR7/6） にぶい橙(7.5YR7/3)	浅黄橙（7.5YR8/3）	ガラス質のもの・黒く光るもの少量含む、0.5〜2㎜前後の灰・茶・黒色の砂粒多く含む、3㎜大少々含む	
〃	4	〃	〃	口縁〜胴部	風化、一部にハケメの跡が残る	風化の為調整不明	〃	にぶい黄（2.5Y6/3） 暗灰黄（2.5Y5/2） 黒　褐（2.5Y3/1）	にぶい黄橙（10YR6/4）	3㎜大の粒を含む 白・茶・透明な粒を含む 0.5mm内の粒を多く含む	
101	5	〃	〃	口縁〜頸部	口縁…ヨコナデ 頸部…ナデ	口縁…ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1〜3㎜程の白・茶・灰・黒等の砂粒を含む、黒く輝く粒・透明に光る粒を含む	
〃	6	〃	〃	口縁〜頸部	口縁…ヨコナデ 頸部…風化	風化の為調整不明	〃	にぶい橙(7.5YR7/4) 黄橙（10YR8/6）	浅黄橙（7.5YR8/4） 橙（5YR7/8）	2㎜大の粒・1㎜大の粒を含む、透明な粒を含む、0.5mm内の粒を多く含む	
〃	7	〃	〃	口縁〜頸部	口縁…ナデ 頸部…板状のものによるナデ	ナデ	〃	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/4）	透明な粒を含む 1㎜内の粒を多く含む	
〃	8	〃	〃	口縁〜頸部	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	〃	にぶい赤褐(5YR5/4)	橙（5YR6/6） 灰黄褐（10YR5/2）	黒く光るものを含む、ガラス質のものを多く含む、砂粒少々含む	
〃	9	〃	〃	口縁	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ、ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1〜3㎜の白・黒・茶の砂粒、透明で光るもの、黒で光る砂粒も含む	
〃	10	〃	〃	口縁	ヨコナデ タテ方向のハケ目	ヨコナデ ヨコ方向のハケ目	〃	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄橙（10YR6/3）	1㎜以下の茶・黒・透明で光る砂粒を含む	
〃	11	〃	〃	口縁	ヨコナデ、ハケ目	風化の為調整不明	〃	にぶい橙（5YR6/4）	にぶい橙（5YR6/4） にぶい黄橙（10YR7/3） 暗灰黄（2.5Y4/2）	1.5mm以下の茶・黒・透明で光る砂粒を含む	
〃	12	〃	〃	口縁	ヨコナデ タテ方向のハケ目	ナデ 風化の為調整不明	〃	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい橙（7.5YR6/4）	1〜4㎜の粒を含む、黒く光る粒・透明な粒・白い粒・細砂粒を多く含む	
〃	13	〃	〃	口縁	ヨコナデ ナデ ハケ目	ヨコナデ ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4） 灰黄褐（10YR4/2）	明褐（7.5YR5/6） 淡黄（2.5Y8/3） にぶい黄橙（10YR4/2）	4㎜以下の茶・黒・灰色の砂粒、3㎜以下の黒い透明で光る砂粒を含む	

表18　土器観察表(2)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
101	14	4・5 a・b	壺	口縁〜胴部	口縁…ヨコナデ、ナデ 胴部…斜・タテ方向のハケ目	全体的に剝離・風化しているが一部ヨコナデが残る	良好	にぶい橙（5YR7/4） 灰白（2.5Y8/2） 褐灰（10YR5/1）	にぶい橙（5YR7/4） 灰白（5Y8/2） 淡黄（2.5Y8/3）	ガラス質のもの黒く光るものを含む、0.5〜3㎜前後の茶・灰・黒色などの砂粒を多く含む	
〃	15	〃	〃	底部	斜、タテ方向のハケ目	全体的に剝離・風化しているが一部にナデの跡がみられる	〃	橙（7.5YR6/6）	淡黄（2.5Y8/3） 灰白（5Y8/2）	ガラス質のもの含む、0.5〜2㎜弱の灰・うす茶・茶色の砂粒を多く含む、5㎜大少々含む	
102	16	〃	〃	胴部上部	ハケ目	風化して殆んど剝離している、しかし一部にハケ目がのこる	〃	にぶい黄橙（10YR7/3） 〃（〃 6/3） 褐（10YR6/4）	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	4〜8㎜程の赤茶の粒、2〜3㎜の赤茶・黒・白・茶・灰色の粒、光る黒の砂粒、及び光る微粒を含む	部分的に丹が残る
〃	17	1015	〃	胴部下部	風化しているが一部ハケ目が残る	風化のため調整不明	〃	黄橙（10YR8/6） にぶい赤褐（5YR5/4）	にぶい橙（5YR6/4）	1㎜幅、4㎜長さ〜2㎜幅の沼鉄鉱のようなもの、白・茶・透明・黒の粒を含む、1㎜内の粒を多く含む	
〃	18	4・5 a・b	〃	底部	風化の為調整不明	ナデ、風化著しいがヘラ状工具による調整跡がみられる	〃	黄橙（10YR7/8） 橙（5YR6/8）	橙（5YR6/8）	1〜6㎜の肌色の砂粒、2㎜以下の茶・灰等の砂粒を多く含む	
〃	19	〃	〃	底部	ナデ	ナデ	〃	明黄褐（10YR7/6）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1.5㎜以下の黒・茶の砂粒を含む	黒斑
〃	20	〃	〃	底部	指で調整のあとをていねいなナデ	風化の為調整不明	〃	灰褐（5YR5/2）	橙（7.5YR7/6）	1㎜以下の茶・灰・黒等の砂粒を多く含む	
〃	21	〃	〃	底部	ナデ	風化の為不明	〃	明黄褐（10YR6/6） 明黄褐（10YR7/6）	黄橙（10YR7/8）	3㎜以下の茶・灰・白等の砂粒を多く含む、透明に光る粒を含む	
103	22	〃	〃	頸部	ヨコナデ	風化の為不明	〃	黄橙（10YR8/6）	浅黄橙（10YR8/4）	5㎜程度の茶褐色の粒、4㎜程度の白色の粒、3㎜前後の茶褐色・茶の粒、2㎜前後の茶褐・茶・灰・白色の粒、1㎜前後以下の茶褐・茶・灰・白・黒・透明、及び光る微粒を含む	
〃	23	〃	〃	胴部	突帯の下ヨコナデ 他ナデ	風化の為不明	〃	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	1㎜前後の白透明の砂粒、白・黒く光る透明の細粒、及び光る微粒を含む	
〃	24	〃	〃	胴部	突帯の間・下部ヨコナデ 突帯の上部ナデ その他ヨコ方向のハケ目	ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	2㎜前後のうすい黄土色・茶色の粒、1㎜以下の茶・灰・黒・透明の砂粒、及び光る微粒を含む	
〃	25	〃	〃	胴部	突帯の上・間・下部ヨコナデ、その他↘方向のナデ	↘方向のナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	5㎜程度の赤茶の粒、3㎜前後の赤茶・白・黄灰の粒、2㎜前後の光る黒・茶・灰、及び1㎜前後の白・茶・赤茶・透明・白透明・光る黒・灰色の粒、及び光る微粒を含む	
〃	26	〃	〃	胴部	突帯の上・間部ヨコナデ、その他ナデ	風化の為不明	〃	黄橙（10YR8/6）	橙（5YR7/6）	2㎜前後の白・白透明の粒、1㎜以下の白・白透明・光る黒色の砂粒、及び光る微粒を含む	
〃	27	〃	〃	胴部	ナデ ヨコナデ ヨコ・斜方向のハケ目	ヨコナデ	〃	明黄褐（10YR7/6）	明黄褐（10YR7/6）	3㎜程度の赤茶色の粒、2㎜前後の茶色の粒、1㎜以下の透明・白透明・茶・灰・白黒色の砂粒、及び光る微粒を含む	

表19　土器観察表(3)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整		焼成	色調		胎土	備考
					外面	内面		外面	内面		
103	28	4・5 a・b	壺	胴部	タテナデ ヨコナデ	風化の為調整不明	良好	にぶい黄橙（10YR7/4） 灰黄褐（10YR5/2）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1～3㎜の灰・茶・黒・白等の砂粒、黒く輝く粒・透明に光る粒を含む	
〃	29	〃	〃	胴部	ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1～3㎜の灰・茶・黒・白等の砂粒、黒く輝く粒・透明に光る粒を含む	
〃	30	〃	〃	胴部	ヨコナデ	ナデ	〃	明黄褐（10YR7/6）	明黄褐（10YR7/6）	2㎜前後の赤茶色の粒、2㎜程の灰・茶色の粒、1㎜前後の灰茶・白・透明に光る金・黒の砂粒・光る微粒を含む	
〃	31	〃	〃	胴部	ナデ ヨコナデ	ハケ目	〃	灰黄褐（10YR6/2） 一部灰黄（2.5Y6/2）	にぶい黄橙（10YR6/3）	5㎜程度の赤茶色の粒、3㎜程度の赤茶色の粒、1㎜以下の白・茶・透明・光る黒・灰色の砂粒、及び光る微粒を含む	
〃	32	〃	〃	胴部	ヨコナデ ナデ	風化の為調整不明	〃	黒（2.5Y2/1） 部分的に灰黄褐（10YR6/2）	にぶい褐（7.5YR6/3）	1㎜前後の赤茶・白・灰黒・透明の砂粒、及び光る砂粒を含む	
〃	33	〃	〃	胴部	ヨコナデ	ナデ	〃	浅黄（2.5Y7/3） 一部黄灰（2.5Y5/1）	にぶい黄橙（10YR7/4）	2.5㎜程度の赤茶色、1㎜前後の黒・白・透明の砂粒、赤茶色の細粒、及び光る微粒を含む	
〃	34	〃	〃	胴部	ヨコナデ 斜方向のハケ目	風化の為調整不明	〃	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄褐（10YR5/3）	2㎜前後の茶・白・透明の粒、1㎜以下の灰・白・茶・透明・光る黒の砂粒、及び光る微粒を含む	
〃	35	〃	〃	胴部	ヨコナデ 斜方向のハケ目の上をナデ	風化の為調整不明	〃	浅黄（2.5Y7/3） にぶい橙（7.5YR7/4）	にぶい黄橙（10YR6/3）	2㎜前後の白・茶・黒色の粒、1㎜前後の茶・灰・透明・白の砂粒、及び光る微粒を含む	
〃	36	6・d	甕	口縁～胴部	ヨコナデ 板状のものによる斜方向のナデ	ヨコナデ、ナデ 粘土のつなぎのあとが残る	〃	橙（7.5YR6/6）	にぶい赤褐（5YR5/4）	透明・白の粒を含む 1㎜内の粒を多く含む	黒斑が部分的に残る スス付着
104	37	1008	長頸壺	完形	ナデ	ナデ、ハケ目 指頭圧痕が残る	〃	灰黄褐（10YR5/2） 浅黄橙（10YR8/4） 灰　白（10YR8/2）	にぶい黄橙（10YR7/3） 灰黄（2.5Y）	ガラス質のもの黒く光るもの含む、1㎜弱の茶・黒い砂粒含む	
〃	38	4・5 a・b	壺	完形	ナデ ハケ目	ヨコナデ ナデ 指調整	〃	黄橙（10YR8/4） 浅黄橙（10YR8/4）	黄橙（10YR8/6）	光る微粒子・黒く光るもの含む、細砂粒、1㎜前後の茶・黄色などの砂粒含む、3㎜大の砂粒少々含む	
〃	39	1003	〃	頸部～胴部	ナデ	ナデ	〃	灰白（10YR7/1）	にぶい黄橙（10YR7/2）	2㎜大の粒を含む 微砂粒を多く含む	
〃	40	4・5 a・b	〃	口縁～胴部	ハケによるナデ ナデ	ナデ、指・工具による ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR6/4） 浅黄（2.5Y7/3）	にぶい橙（7.5YR6/4） 浅黄橙（10YR8/3）	黒く光るものガラス質のもの含む、細砂粒・1㎜弱の砂粒含む	黒変
〃	41	〃	〃	底部～頸部	頸部～胴部…風化の為不明 胴部…ミガキが一部残る 底部…ミガキ？	ナデ 一部指ナデ	〃	灰白（5Y8/1） 浅黄橙（10YR8/3）	浅黄橙（10YR8/3）	黒く光る粒・1㎜大の粒を含む 細砂粒を多く含む	一部黒斑

表20　土器観察表(4)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
104	42	4・5 a・b	壺	完形	口縁上部ヨコナデ、頸部指での調整の後ヨコナデ、胴部上部タテ方向のハケ目、同下部指による調整の後ナデ？	口縁上部ヨコナデ、口縁下部ナデ、胴部指調整及び指頭圧痕がある	良好	橙（5YR6/6）	橙（5YR6/6） 灰白（10YR8/2） 褐灰（10YR4/1）	黒く光るもの多く、含む（黒雲母）ガラス質のもの含む 1mm前後のうす茶・灰色などの砂粒多く含む、3mm大少々含む	一部黒変
〃	43	〃	〃	口縁	口唇部ナデ 口縁上部ヨコナデ その他↙↕方向のナデ	口縁上部ヨコナデ その他ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/3） 黒褐（10YR3/1）	にぶい褐（7.5YR5/4） 灰白（7.5YR8/2）	透明・白の粒を含む1mm 内の粒を多く含む	
〃	44	〃	〃	口縁	ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	灰・茶・黒等の細粒、透明に光る粒を含む	
〃	45	〃	〃	口縁～頸部	口縁上部ヨコナデ、口縁中部斜めヨコ方向のハケによるナデ、口縁下部タテ方向にヘラか他の工具での調整で下方はその後ヨコ方向にナデてある様だ胴部ナデ？	剝離・風化の為、調整ははっきりしないが、一部ヨコ方向のナデ？	〃	明赤褐（5YR5/6） にぶい橙（5YR7/4）	浅黄橙（10YR8/3） 灰黄褐（10YR5/2）	黒く光るもの、ガラス質のもの含む、0.5～1mm大の半透明、白っぽい色の砂粒を多く含む	
〃	46	〃	〃	頸部～底部	頸部～胴部ヨコ方向のミガキ？ 胴部中部にユビオサエ 胴部下部ナデ？	胴部上部～中部ユビオサエ	〃	浅黄（2.5Y7/4）	にぶい黄橙（10YR7/3）	3mm前後の茶・こげ茶色の粒、2mm程度の赤茶の粒、1mm以下の黒・白・灰・赤茶・茶・透明・光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	外面部分的に丹塗り？ 内面一部黒変
〃	47	〃	〃	胴部～底部	板状のものによるナデ ハケ目とミガキの痕が残る	ナデ（剝離している）	〃	黒褐（2.5Y3/1）	灰白（10YR8/1） 灰白（10YR8/2）	透明・白の粒を含む 1mm内の粒を含む	
〃	48	〃	〃	胴部～底部	胴部上部ナデ板状の工具のあとがのこる、胴部下部～底部ハケメのあとナデ、ハケメのあとが一部のこる	胴部上部指押えのあとヨコナデ、以下ナデヘラでナデたあとあり	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	白・茶の粒を含む細砂粒を多く含む	一部黒斑
〃	49	1015	〃	頸部～底部	ナデ	頸部～胴部下部ナデ・板状のあとが残っている 胴部下部～底部風化	〃	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/4）	白・茶・透明な粒を含む 0.5mm以下の粒を多く含む	一部黒斑
〃	50	4・5 a・b	〃	胴部～底部	ナデ	胴部中部指ナデ、以下板状の工具のあとが残る、板状のものによるナデのあとナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	黒（10YR1.7/1）	白の粒を多く含む細砂粒を多く含む	一部黒斑
〃	51			胴部～底部	風化の為不明	風化の為不明	〃	黄橙（7.5YR7/8）	黄橙（7.5YR7/8）	3mm程度の白色の粒、2mm程度の白・薄茶の粒、1mm以下の白・茶・黒・灰・光る灰・光る黒・透明の砂粒及び光る微粒を含む	一部黒斑
105	52	1001	高坏	坏部	口唇部ナデ、口縁部上部ヨコナデ 口縁部中部↔↘方向のハケ目 以下↕方向のミガキ・ハケ目のようなあとが残っている	口縁部上部ハケ目のあとミガキ（ハケ目が残っている部分がある）以下ミガキ	〃	赤褐（5YR4/6） 橙（5YR6/8）	明赤褐（5YR5/8） 明黄褐（10YR7/6）	2mm内の白の粒、透明な粒を含む 0.5mm大の黒の粒を含む 0.5mm内の砂粒を多く含む	
〃	53	4・5 a・b	〃	坏部	口唇部ナデ 口縁部上部↔方向 以下↕方向のミガキ	口縁部↘方向のミガキ 以下↕方向のミカギ	〃	橙（5YR7/8） 橙（5YR6/6）	橙（5YR7/6）	細かい透明な粒を多く含む砂粒を含む	一部黒斑
〃	54	〃	〃	坏部	口唇部ナデ 口縁部上部ヨコナデ その下↔方向の八ケ目、その下ナデ以下↕方向のミガキ	口縁部上部風化の為不明、以下↔方向のミガキ	〃	橙（5YR6/6）	浅黄橙（10YR8/4） 橙（7.5YR7/6）	透明で細かい砂粒を多く含み、2mm以下の黒の砂粒を含む	内面一部黒斑
〃	55	〃	〃	坏部	口唇部ナデ 口縁部上部ヨコナデ、その下ハメのあとヨコナデ以下ハケ目	ハケ目のあとナデ ハケ目のあとが一部うすく残る	〃	淡黄（2.5Y8/3）	淡黄（2.5Y8/3） 橙（5YR6/6）	白・透明・茶の粒を含む 5mm内の砂粒を多く含む	内面一部黒斑

表21　土器観察表(5)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
105	56	1015	高坏	坏部	口唇部ナデ、風化の為不明、工具のあとが口縁部の上部にある	ナデ	良好	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/3）	1～2㎜大の茶の粒を含む、透明・白の粒を含む細砂粒を多く含む	
〃	57	1015	〃	坏部～脚部	坏部ハケ目、その下ハケ目のあとナデ、その下ハケ目のあとが残る(ハケ目の後ナデ?)その下風化の為不明、その下ヨコナデ以下ナデ	坏部ナデ 脚部上部風化の為不明 その下ナデ以下ヨコナデ	〃	灰白（2.5Y8/2） にぶい黄橙（10YR6/4）	浅黄橙（7.5YR8/4）	2㎜大、3㎜大の粒、1～3㎜大の茶の粒、白・透明な粒、細砂粒を多く含む	
〃	58	4・5 a・b	〃	脚部	タテ方向のミガキ	脚部上部風化の為不明 以下ナデ ヨコナデ	〃	にぶい黄橙（10YR6/3） 橙（5YR7/6）	にぶい黄橙（10YR7/3） 橙（5YR7/6）	2㎜以下の茶・灰と白の半透明、黒で光る微粒を含む	一部黒斑
〃	59	〃	〃	坏部下部～脚部上部	坏下部～脚部上部ミガキ、以下ミガキ？	坏部ミガキ 脚部上部↔方向のナデ 以下ナデ	〃	明黄褐（10YR7/6）	橙（7.5YR7/6） にぶい黄橙（10YR7/3）	白・灰・黒等の細砂粒、ガラス質に光る粒を多く含む	
〃	60	〃	〃	脚部上部	風化・剥離のため不明	上部指による調整？ 以下風化の為不明 ※全体的に風化	〃	明黄褐（10YR7/6） 浅黄橙（7.5YR8/6） 灰　白（2.5Y7/1）	浅黄橙（7.5YR8/6）	ガラス質のもの、黒く光るもの含む、0.5㎜以下のうす茶・灰白色などの砂粒含む	
〃	61	〃	〃	脚部	ナデ	ヨコナデ	〃	黄橙（10YR8/6）	にぶい黄橙（10YR7/4）	4～2㎜程の茶の粒、2㎜程の灰色・黒の砂粒、1㎜程の透明で光る砂粒を含む	穿孔あり
〃	62	〃	〃	脚部	ミガキ	ナデ	〃	明赤褐（5YR5/6）	にぶい赤褐（5YR4/2）	2㎜程の白い砂粒、2～3㎜程のこげ茶の砂粒、1㎜程の赤茶の砂粒を含む	
〃	63	〃	〃	脚部	タテ・ヨコのミガキ	ヨコナデ	〃	浅黄橙(10YR8/3.8/4)	浅黄橙(10YR8/3.8/4)	光るガラス質の微粒子含む、黒・灰色などの細砂粒多く含む	
〃	64	〃	〃	脚部	ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	2㎜以下の灰・茶・黒で光る透明で光る砂粒を含む	

表22　土師器・陶磁器観察表(1)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器形	法量 (cm)			色調		胎土	焼成	調整			備考
					口径	底径	高	内面	外面			内面	外面	底部	
121	1	12・C	土師器坏	完形	(11.8)	8.5	3.3	10YR 8/3 浅黄橙	同左	きめ細やか 小さなガラス質のもの多く含む 1mm弱の砂粒少々含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラナデ?	糸切り	半分以上残存
〃	2	〃	〃	口縁～底部	(12.0)	(9.6)	3.3	2.5Y 8/4 淡黄	〃	3mm前後の茶色の粒、2mm前後の茶色の粒、1mm以下の茶・灰・白の砂粒及び光る微粒を含む	〃	ナデ	ヨコナデ	〃 ?	1/6残存
〃	3	〃	〃	〃	(11.3)	(7.7)	3.25	2.5Y 8/4 淡黄	〃	1mm以下の灰・黒・茶色の砂粒、及び光る微粒を含む	〃	〃	〃	〃	1/3弱残存
〃	4	〃	〃	〃	(11.4)	—	—	7.5YR 7/6 橙 一部 7.5YR 7/4 橙	10YR 8/4 浅黄橙 一部 7.5YR 7/6 橙	1mm前後の茶・黒・白色の砂粒、光る微粒を含む	〃	ヨコナデ	〃	—	1/6残存
〃	5	12・13 c・d	〃	底部	—	(8.5)	—	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 8/4 にぶい橙 口縁及び底部の一部 7.5YR 5/3 にぶい褐	2mm以下の白・灰色の粒、1mm以下の茶・白・灰・黒色の細粒、及び光る微粒を含む	〃	ナデ	〃	糸切り底	1/6残存
〃	6	〃	〃	〃	—	(7.4)	—	10YR 8/4 浅黄橙	5YR 8/4 淡黄 10YR 8/3 浅黄橙	2mm程度の茶色の粒、1mm前後の茶・灰・白色の砂粒、光る微粒を含む	〃	〃	〃	〃	1/4残存
〃	7	12・c	土師器皿	完形	(8.5)	7.0	1.9	10YR 5/1 褐灰 一部 10YR 5/1 褐灰	10YR 5/1 褐灰 一部底部 2.5Y 7/1 灰白	3mm以下の赤茶色の粒、1mm前後の赤・茶・灰・白・黒色の砂粒及び光る微粒を含む	〃	〃	〃	〃	半分以上残存
〃	8	12・13 c・d	〃	〃	8.9	6.5	1.5	10YR 8/3 浅黄橙 10YR 5/2 灰黄褐	同左	きめ細やか、ガラス質のもの含む、0.5mm大の茶、灰色などの細砂粒含む	〃	ヨコナデ	〃	〃	〃
〃	9	〃	〃	〃	(6.8)	(5.2)	(1.4)	10YR 5/3 にぶい黄橙	10YR 8/4 にぶい黄橙	4mm程度の灰色の粒、2mm程度の灰色の粒、1mm前後の白・灰・茶色の粒及び光る微粒を含む	〃	ナデ	〃	ヘラ切り	1/4残存
〃	10	〃	〃	口縁～底部	(7.5)	(6.2)	1.7	10YR 7/4 にぶい黄橙 一部 10YR 5/2 灰黄褐	10YR 7/3 にぶい黄橙 一部口縁 10YR 5/2 灰黄褐	茶色の細粒、及び光る微粒を含む	〃	〃	〃	ナデ	〃
〃	11	12・c	〃	〃	(7.65)	(6.0)	1.5	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 8/4 浅黄橙 10YR 8/3 浅黄橙	1mm前後の茶・灰・黒色の砂粒及び光る微粒を含む	〃	〃	〃	糸切り	〃
〃	12	12・13 c・d	〃	〃	(8.2)	(7.65)	1.35	7.5YR 7/6 橙 一部口縁部 7.5YR 6/6 橙	7.5YR 7/6 橙	2mm程度の白い粒、1mm前後の白・赤茶・灰・透明の粒、及び光る微粒を含む	〃	〃	〃	〃	1/3弱残存
〃	13	〃	〃	〃	(8.5)	(7.1)	1.5	10YR 7/4 にぶい黄橙	同左	2mm前後以下の茶・灰色の粒黒・白・灰・茶透明の細粒、及び光る微粒を含む	〃	〃	〃	ヘラ切り	半分弱残存

表23　土師器・陶磁器観察表(2)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	備考
121	14	12・a	土師器皿	底部	—	(6.0)	—	2.5Y 8/3 淡黄	同左	無色の光る微粒を含む	良好	ナデ	風化の為不明	糸切り	1/3弱残存
〃	15	〃	〃	口縁～底部	—	—	1.4	2.5Y 8/3 淡黄 一部口縁 7.5YR 8/3 浅黄橙	2.5Y 8/4 淡黄 一部底部 2.5Y 8/2 灰白	1mm以下の茶・白・灰色の砂粒及び光る微粒を含む	〃	〃	ヨコナデ	〃	1/3残存
122	21	5・a	土師器坏	〃	(12.25)	(8.45)	4.0	10YR 8/3 浅黄 一部口唇部 10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 8/3 浅黄	1mm以下の白透明・茶色の粒及び透明・茶・黒色の細粒及び光る微粒を含む	〃	ヨコナデ	〃	〃	1/4残存
〃	22	4・d	〃	底部	—	(8.4)	—	2.5Y 8/3 淡黄	同左	1mm前後の茶・黒・赤茶色・うす茶色の砂粒及び光る微粒を含む	〃	ナデ	〃	〃	1/3残存
〃	23	5・b	〃	〃	—	6.55	—	10YR 7/4 にぶい黄橙	〃	1mm前後の茶色の粒及び茶・白・灰・透明・黒く光る細粒及び光る微粒を含む	〃	〃	〃	〃	底部のみ残存
〃	24	5・a	〃	〃	—	(6.1)	—	2.5Y 8/3 淡黄	〃	1mm前後の茶・黒の粒光る微粒を含む	〃	〃	〃	ヘラ切り	底部のみ半分以上残存
〃	25	5・b	〃	〃	—	5.8	—	7.5YR 7/3 にぶい橙	〃	茶色の細粒及び光る微粒を含む	〃	〃	〃	糸切り	底部のみ半分以上残存

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴
121	16	12・a	青磁埦	口縁部	—	内外 7.5GY 8/1 緑灰 胎 10Y 7/1 灰白	口縁部は端返り、外面に鎬を有する蓮弁、施釉、光沢がある
〃	17	12・c	〃	〃	—	内外 10Y 7/2 灰白 胎 10Y 7/1 灰白	口縁部は端返り、外面に蓮弁を有す、施釉・光沢がある
〃	18	12・13 c・d	青磁蓋	体部～端部	口径(7.9) 器高(1.55)	内外 2.5GY 8/1 オリーブ灰 胎 7.5Y 8/2 灰白	外面に文様有り輪花、器端部～内面露胎、内面天井部及び外面施釉
122	26	5・b	青磁埦	口縁部	—	内外 10Y 8/2 オリーブ灰 胎 10Y 8/2 灰白	外面に蓮弁、施釉、光沢がある、貫入がある
〃	27	4・c	〃	底部	底径 5.6	内外 5G 8/1 オリーブ灰 露 2.5Y 8/2 灰黄 胎 2.5GY 8/1 灰白	底部ヘラ削り、中心に丸い膨らみが残る、施釉、光沢がある、一部高台、畳付大部分、高台底面大部分露胎
〃	28	5・b	〃	〃	底径 5.4	内外 5G 8/1 オリーブ灰 露 10YR 8/4 にぶい黄橙 胎 5G 7/1 明オリーブ灰	底部ヘラ削り中心に膨らみが残る、高台外面まで施釉、光沢がある、高台内面一部、底面一部露胎

表24　土師器・陶磁器観察表(3)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴
122	29	5・b	備前焼 甕	口縁部	—	内 5YR3/6 暗赤褐 / 5Y6/6 オリーブ黄　外 5Y3/2 オリーブ黒 / 7.5Y7/3 浅黄とこれに7.5Y7/1灰白 / 7.5YR5/6 橙　胎土 2.5Y6/1 黄灰	ナデ、外面及び内面中ごろまで光沢のある施釉、以下光沢のない施釉
〃	30	5・a	〃	〃	—	内 10YR5/1 褐灰　胎 10YR4/1 褐灰　外 2.5GY3/1 黒（にぶい光沢あり）	内面ヨコナデ、その他ナデ、口縁部外面ににぶい光沢のある施釉
〃	31	5・b	備前焼 擂鉢	底部	—	内 2.5Y4/1 黄褐　胎 2.5YR5/4 にぶい赤褐　外 2.5YR5/4 にぶい赤褐	内面ヨコナデ、6本の条線を持つ櫛描条線、外面ナデ、荒い調整
〃	32	5・a	〃	底部	—	内 10YR7/6 明黄褐 / 7.5YR5/2 灰褐　外 7.5YR5/1 褐灰 / 5YR7/1 橙	内面底部ナデ、胴部ヨコナデ口縁一部スス付着、幅2.25cmの櫛描状線で幅0.22cmの条線を7本もつ外面ヨコナデ、口縁一部スス付着
〃	33	5・b	〃	〃	—	内面 7.5YR7/4 にぶい橙　胎 5YR6/3 にぶい橙　外面 7.5YR7/4 にぶい橙 / 5YR6/3 にぶい橙	内面ヨコナデ、幅2cmの櫛描条線で2～3mm間隔の9本の条線をもつ、外面ナデ
〃	34	2・c	備前焼 甕	〃	底径 12.8	内 5YR3/2 暗赤褐　胎 5YR5/1 褐灰　外 5YR5/2 灰褐	内面ナデ、光沢のない施釉、外面底部ナデ光沢のない施釉、胴部タテ方向の削り光沢のない施釉に釉の垂れがみられる
〃	35	3・d		〃	底径 5.5	内外 5Y7/4 浅黄　露 7.5YR6/6 橙　胎 5Y6/3 淡黄	光沢のある施釉、貫入あり、内面〝得〟という線刻あり、高台蛇ノ目釉剝ぎ、底部中心一部光沢のある施釉貫入
123	36	5・b	染付 皿	〃	底径 (6.2)	内外 10GY8/1 明緑灰　胎 10Y8/1 灰白	内・外面染付、光沢のある施釉、高台露胎
〃	37	2・c	染付 小鉢	口縁部～底部	口径 (5.8)	内外 7.5GY8/1 明緑灰　胎 N8/ 灰白	内・外面染付、光沢のある施釉
〃	38	4・d	薩摩焼 碗	底部	底径 4.1	内外 10Y8/2 灰白　露 2.5Y8/2 灰白　胎 5Y8/2 胎土	内・外面光沢のある施釉、高台及び一部胴部露胎
〃	39	5・b	〃	〃	底径 (4.6)	内外 10Y8/2 灰白　露 7.5Y8/1 灰白　胎 7.5Y8/2 灰白	内・外面光沢のない施釉、胴部一部、高台一部、底部露胎
〃	40	2・c	〃	〃	底径 4.4	内外 10YR5/6 褐　胎 10YR7/3 にぶい黄橙	内面光沢のある施釉、蛇ノ目釉剝ぎ、外面光沢のある施釉畳付き露胎
〃	41	5・b	〃	〃	底径 4.6	内外 2.5Y8/3 にぶい黄　露 5YR5/6 明赤褐　胎 5YR6/4 にぶい橙	内・外面光沢のある施釉、貫入あり、畳付き一部、底部露胎
〃	42	1・g	石鍋	口縁部～底部	口径 16.1 底径(12.8)	内 2.5Y7/1 灰白 / 2.5Y5/1 黄灰 / N4/ 灰　外 2.5Y8/1 灰白 / 5Y3/1 黒	

表25　土師器・陶磁器観察表(4)

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴
123	43	2・f	備前焼甕	底部	底径(14.2)	内　10YR5/2　灰黄褐　　胎　5YR5/3　にぶい赤褐 外　2.5Y5/1　黄灰 5YR5/2　灰褐、光沢なし	内面ナデ、にぶい光沢をもつ施釉、外面光沢のある釉が雑にうすく施釉、その為光沢なし、底の中心から2.5cm位離れたとこに釉のたまりを有す
〃	44	〃	薩摩焼碗	胴部～底部	底径 4.8	内　2.5Y3/2　黒褐　　外　2.5Y3/2　黒褐 2.5Y5/3　灰赤　　5YR3/3　暗赤褐 5YR5/2　灰褐　　胎　10YR5/1　褐灰	光沢のある施釉、内面蛇ノ目釉剝ぎ、畳付き露胎、底面中心を少し離して釉か粘土のたまり(?)がある
〃	45	〃	〃	〃	底径 5.0	内　2.5YR3/3　暗赤褐　　外　2.5YR3/3　暗赤褐 2.5YR6/6　橙　　2.5YR6/6　橙 5YR6/4　にぶい橙	にぶい光沢のある施釉、内面蛇ノ目釉剝ぎ部分に一部粘土のかたまりが付着、中心部釉二度がけ、うず巻き、外面部分的に高台、底面露胎
〃	46	〃	〃	〃	底径 4.6	内　5YR3/1　黒褐　　外　5YR3/1　黒褐 5YR5/4　にぶい赤褐　　7.5YR5/3　にぶい褐 5YR6/6　橙	にぶい光沢のある施釉、内面、ナデ蛇ノ目釉剝ぎ、外面高台中端～畳付き部分的に釉の垂れ、露胎、畳付き部分にろくろの跡を有す、底面露胎、けずり出し高台
〃	47	2・e	〃	〃	底径 4.6	内　7.5YR3/4　暗褐　　外　7.5YR3/4　暗褐 7.5YR3/2　黒　　5YR5/4　にぶい赤褐 5YR5/4　にぶい赤褐	光沢のある施釉、内面蛇ノ目釉剝ぎ部分に一部砂付着、外面高台付近～底面露胎、高台内面一部、底面一部、砂付着胴部に釉のたまり有り
〃	48	〃	〃	完形	底径 4.4 器高 5.95 口径(11.5)	内　5Y8/3　淡黄　　外　5Y8/3淡黄に5Y5/1灰の細かい点がある 7.5Y8/2　灰白　　5YR5/6　灰褐 5YR5/6　明赤褐	光沢のある施釉、内面蛇ノ目釉ぎ、外面高台部分的に施釉、畳付き～底面露胎外面胴部粘土のかたまりがくっついた上に釉がかかっている（2ヶ所）
〃	49	〃	〃	底部	底径 4.4	内　2.5Y8/3 淡黄 5YR3/4暗赤褐に2.5Y8/3淡黄　　外　2.5Y8/3　淡黄 5YR5/2　灰褐 5YR5/6　明赤褐	光沢のある施釉、内面蛇ノ目釉剝ぎ外面高台部分的に露胎、畳付き、底面露胎
〃	50	2・f	〃 皿	口縁部～底部	底径 4.2 器高 2.5 口径(11.3)	内　7.5YR5/6　褐 7.5YR5/6　褐に10YR7/6明黄褐をかけたよう 外　5YR6/6　橙	内面にぶい光沢のある施釉、底面よりなだらかに立ち上がるあたりに2ヶ所石粒が3コついている、口唇部施釉、外面口唇部以外露胎、部分的に丸く釉の垂れ有り、外面底部付近に粘土のたまりがみられる、ナデ
〃	51	〃	〃 蓋	完形	器径 7.7 器高 2.85	内　2.5YR6/6　橙　　ス ス　2.5YR3/1　赤黒 外　5YR3/4　暗赤褐 5YR6/4　オリーブ黄	天井部ナデ、光沢のある施釉、つまみ中心に切った時の粘土のたまり、受部ナデ露胎は縁部にスス付着、内面ナデ、露胎、スス付着
〃	52	3・j	〃 碗	底部	底径 4.4	内　10Y8/1　灰白　　露　10YR4/6　褐 外　10Y6/2　オリーブ灰　　胎　10YR5/4　にぶい黄褐	光沢のある施釉、内面蛇ノ目剝ぎ、外面高台一部露胎、畳付き～底面露胎、削り出し高台
〃	53	〃	備前焼甕	口縁部	—	内　7.5Y4/3　暗オリーブ…光沢あり 7.5Y3/3　黒オリーブの上に7.5Y8/1灰白がかかっている…光沢なし 5YR5/6　明赤褐 外　7.5Y4/3　暗オリーブ 7.5Y3/3　黒オリーブ 5YR5/6　明赤褐	内面ヨコナデ、乱れている部分もあるが口縁と平行に4本しま状に光沢のある施釉、口唇部部分的に光沢のない施釉、外面光沢のある施釉、口縁部部分的に露胎ヨコナデ
〃	54	〃	〃	〃	—	内 10YR3/3黒褐の上に5Y8/1灰白がかかっている　　口縁 2.5YR5/6にぶい赤褐 外 10YR3/3黒褐の上に5Y8/1灰白と1部10Y8/1灰白がかかっている　　胎 2.5YR5/4にぶい赤褐	にぶい光沢のある施釉、内面ヨコナデ、口唇部ナデ、外面ヨコナデ
〃	55	10・J	青磁碗	底部	底径 9.3	内　7.5GY7/1　明緑灰　　胎　10Y7/1　灰白 外　　露　7.5YR4/6　褐	光沢のある施釉、貫入あり、内面中心に祥細不明の文様有り、畳付きから底面にかけて露胎、(一部釉がかかる)削出(高台)

図版1

A地区北西遺構群遠景（南東から）

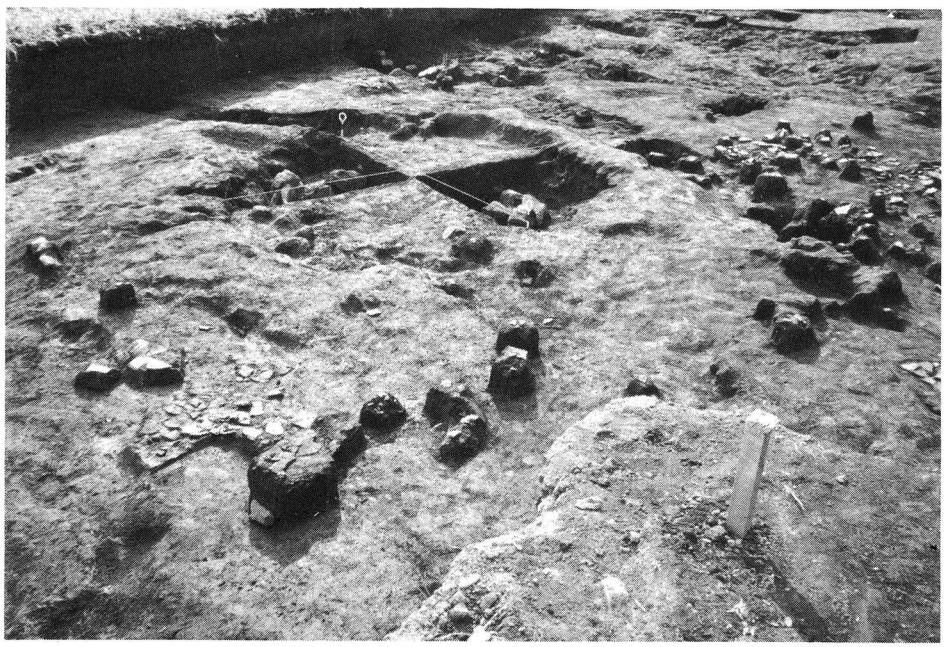
A地区北西遺構群遠景（東から）

図版2

A地区北東遺構群（12・13－c・d区）

A地区北東遺構群（12・13－e・f区）

A地区北西遺構群－SI103および周辺検出状況（南から）



A地区北西遺構群－SI103および周辺検出状況（東から）

図版4

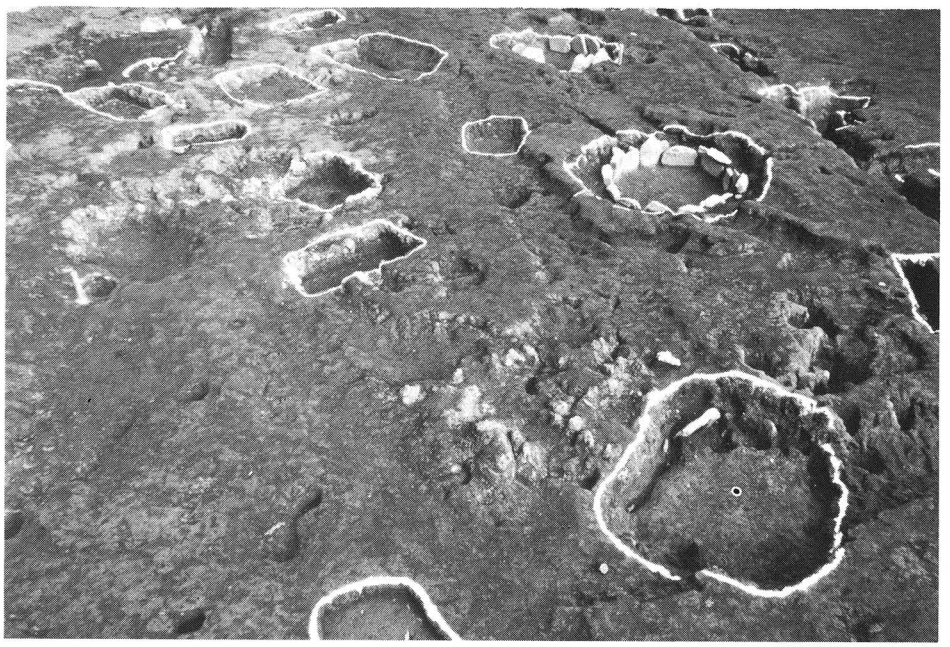
A地区北西遺構群（SK 6，SI 103・105周辺）

A地区北西遺構群北側全景

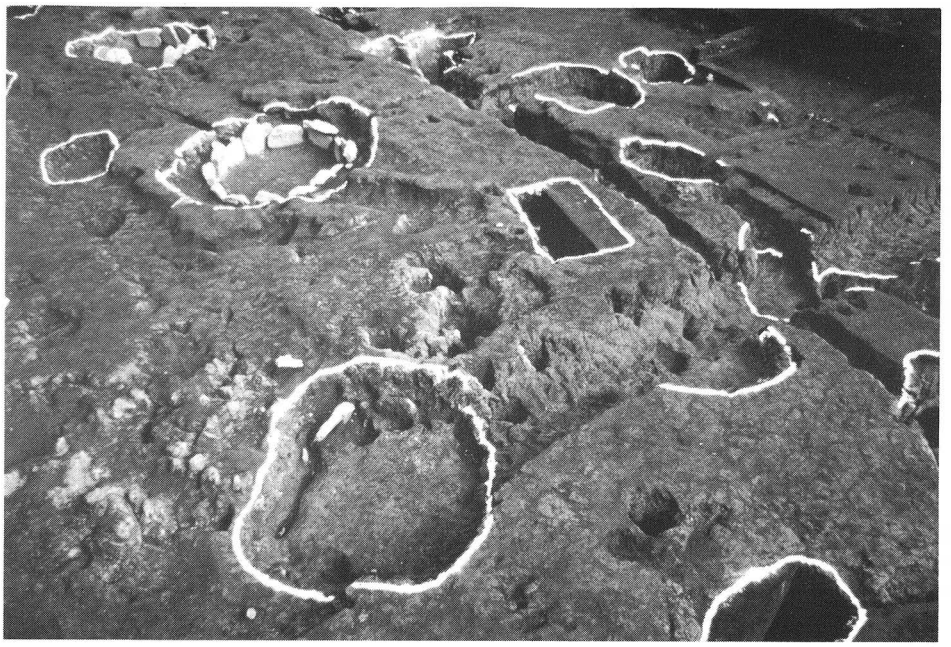
A地区北西遺構群北西側全景

A地区北西遺構群北東側全景

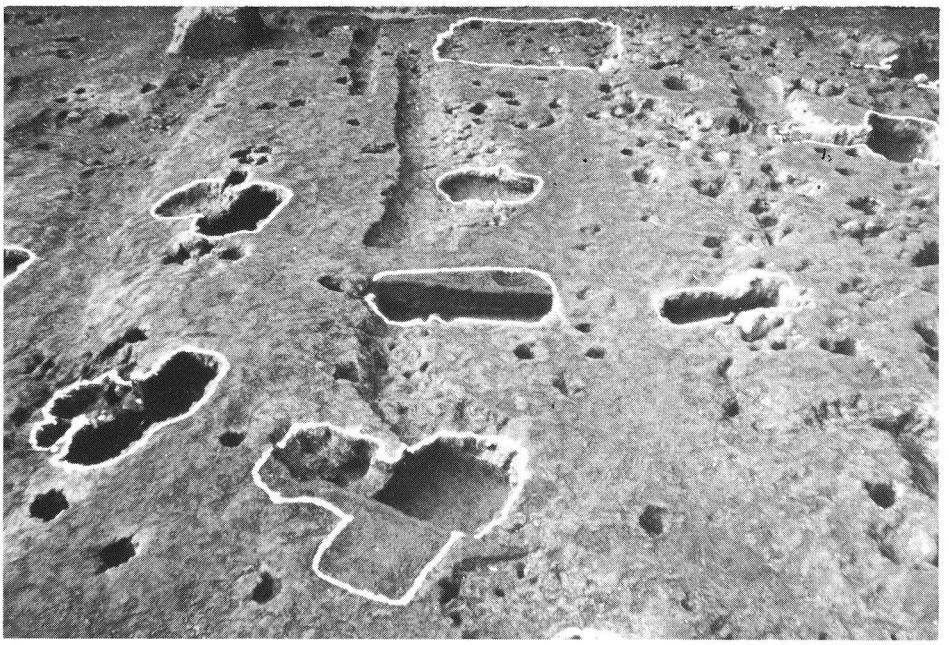
図版6



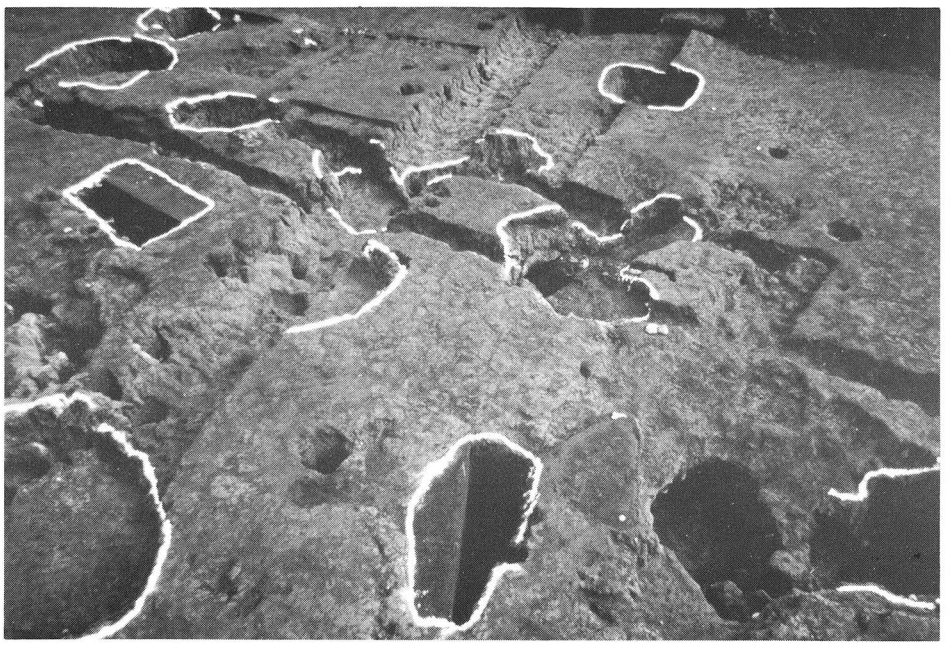
A地区北西遺構群東側全景



A地区北西遺構群東側全景



A地区北西遺構群南西側全景

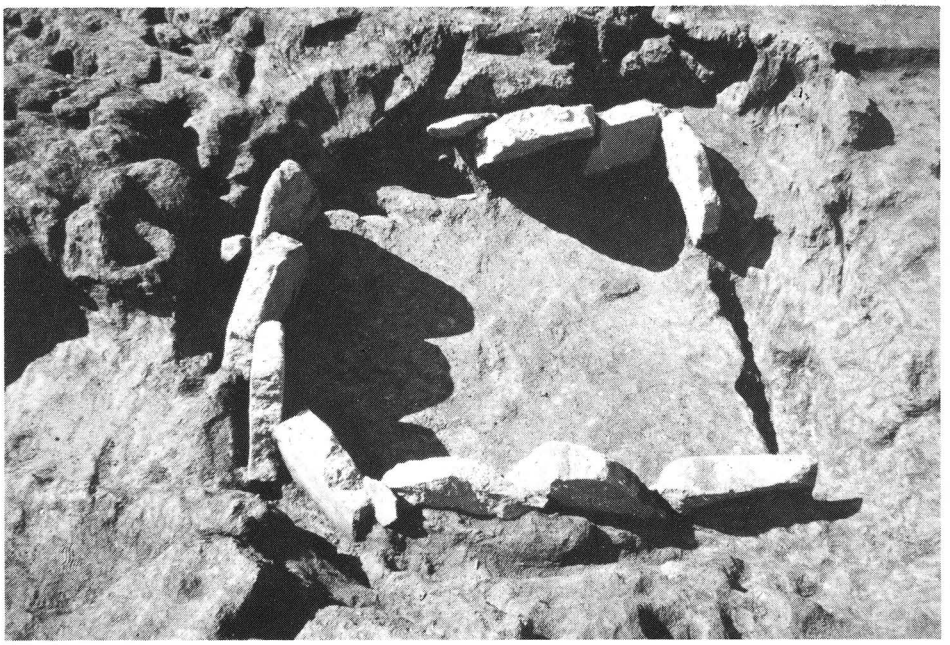


A地区北西遺構群南東側全景

図版8

A地区北西遺構群南側全景

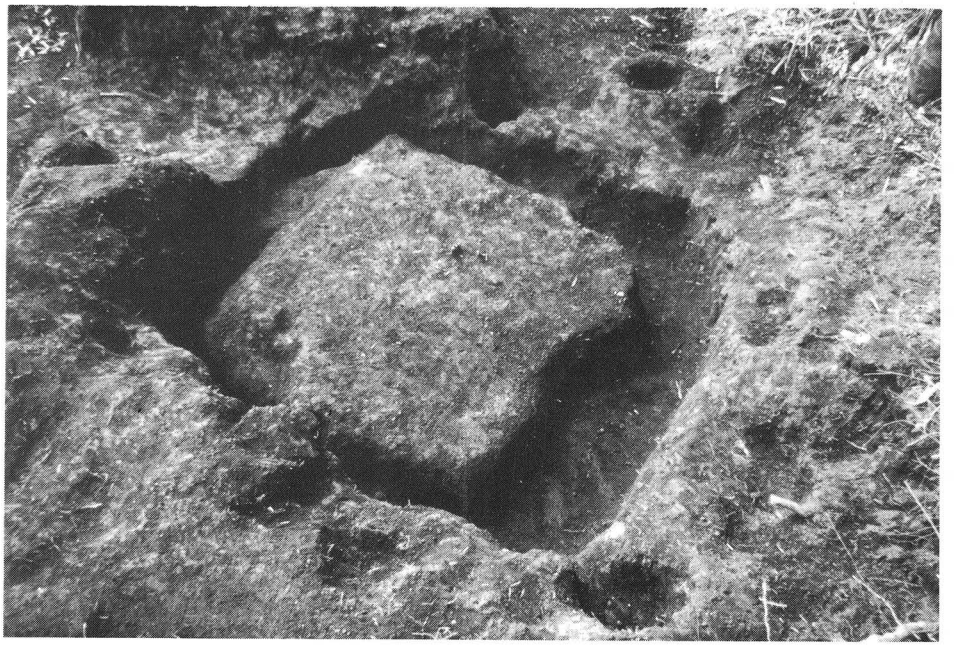
A地区西遺構群北側全景



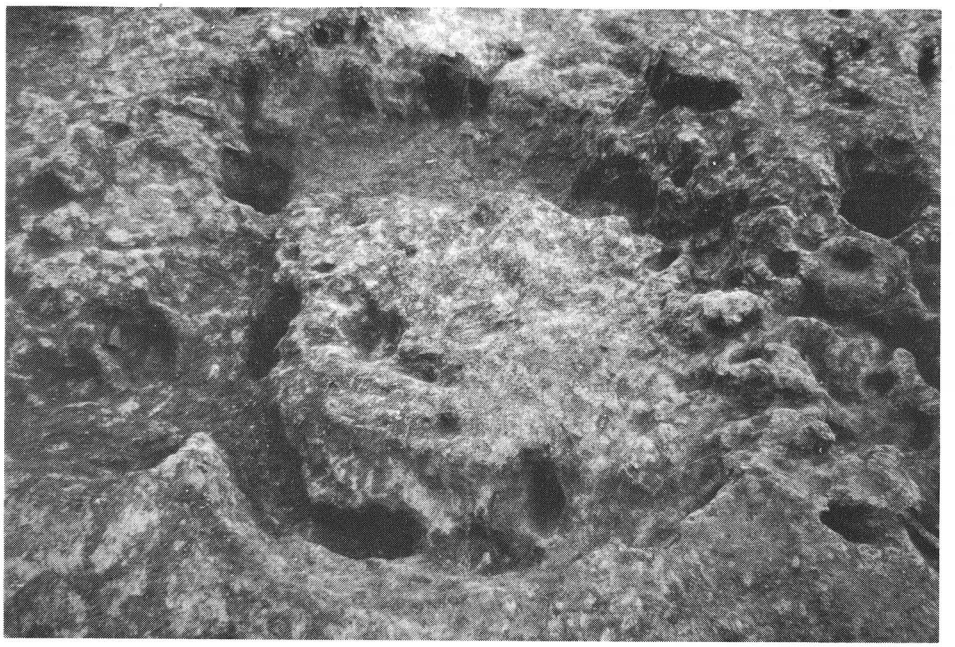
SI 105

SI 105（完掘）

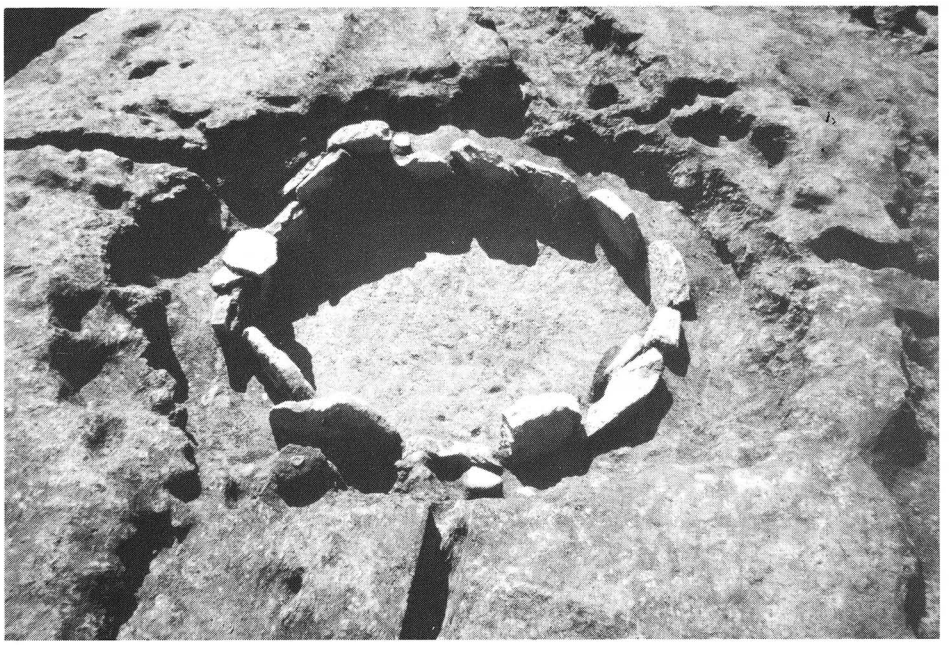
図版10



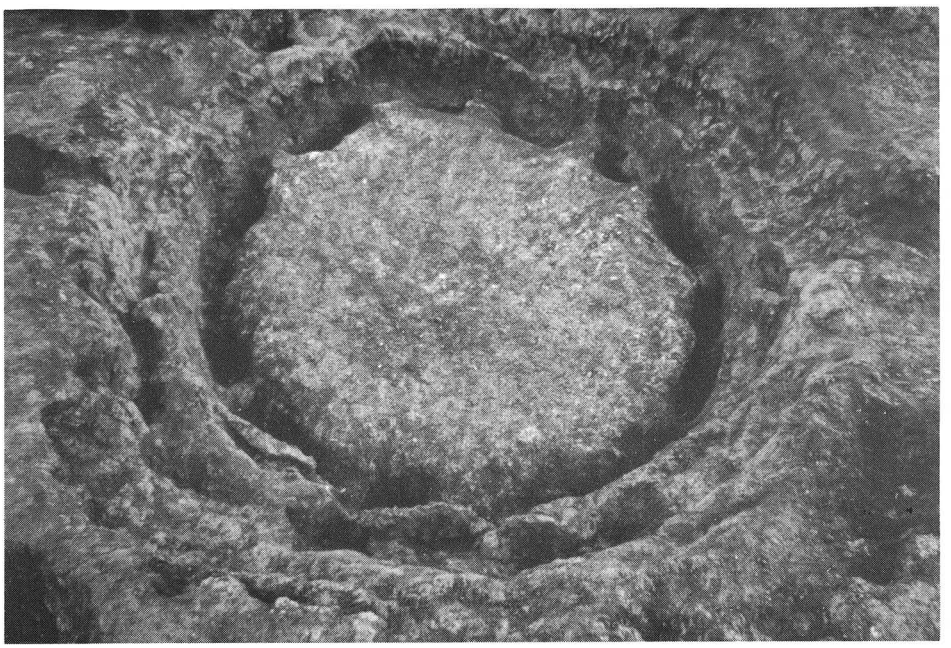
SI 103



SI 103（完掘）

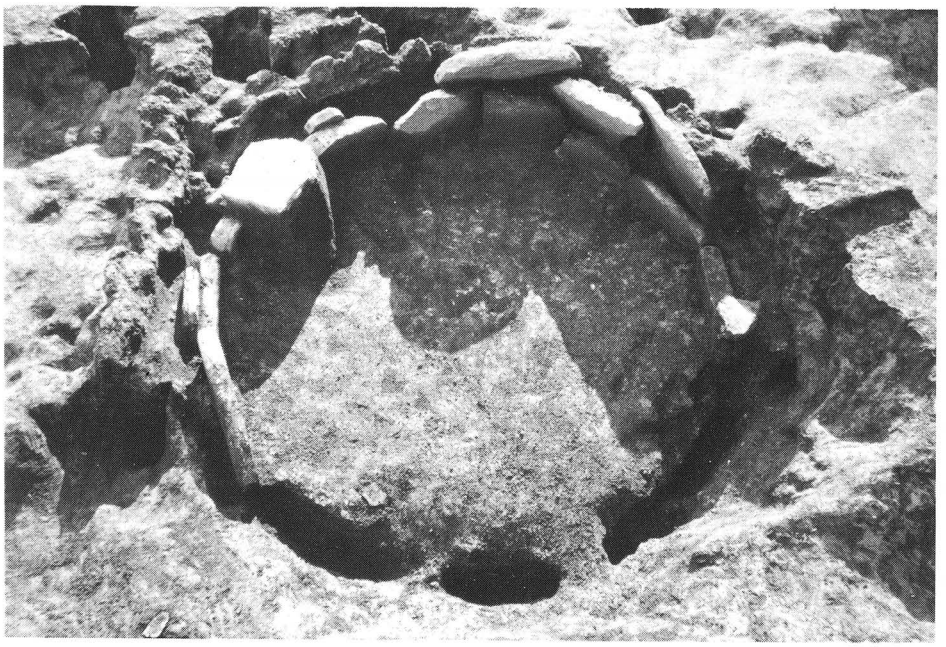


SI 108



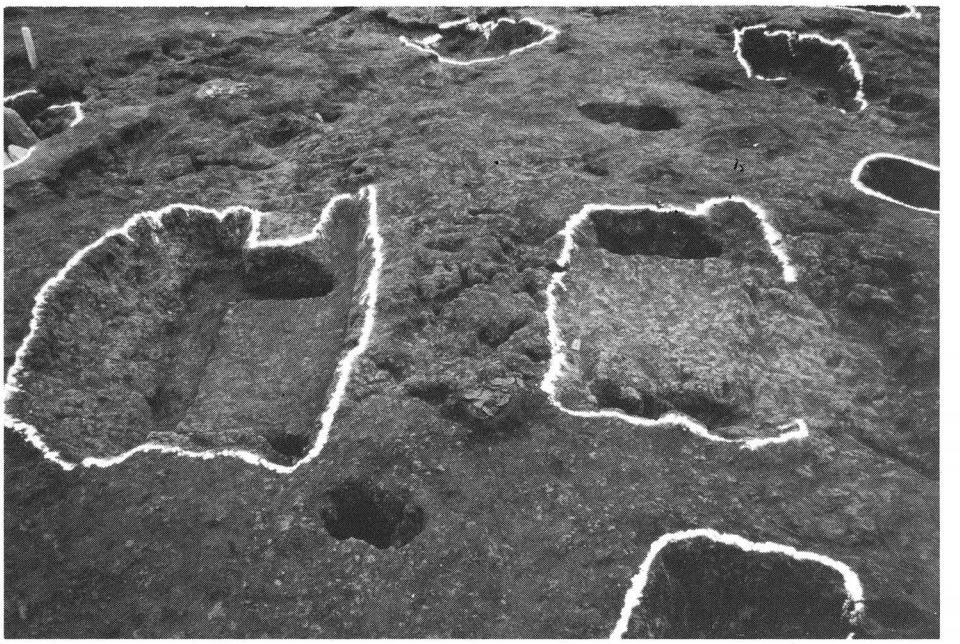
SI 107

図版12

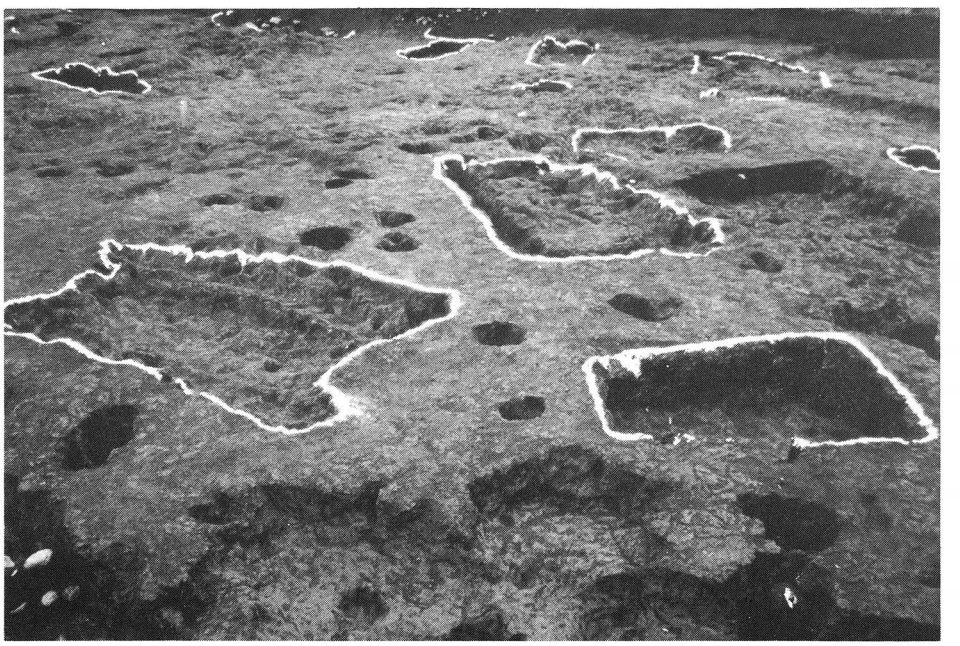


SI 102

SI 104

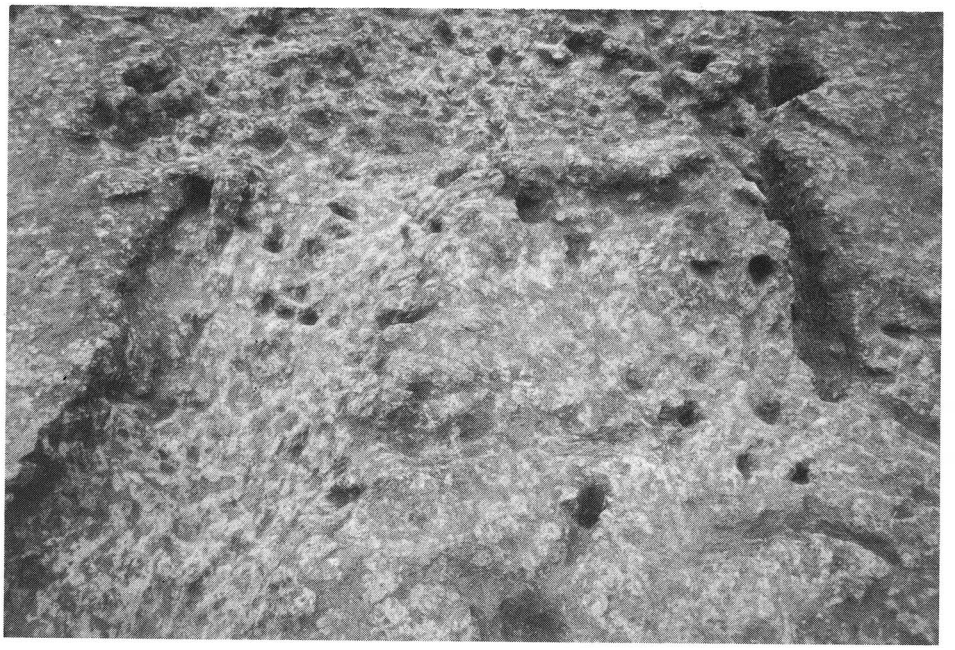


SK 5 ・ 6

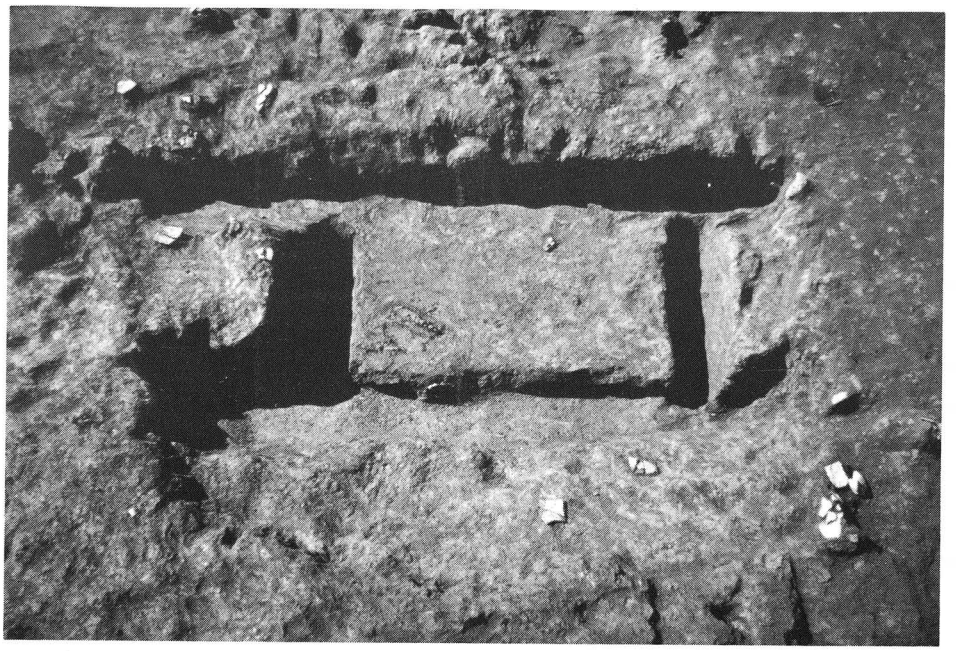


SK 1 ・ 2

図版14



SK 4

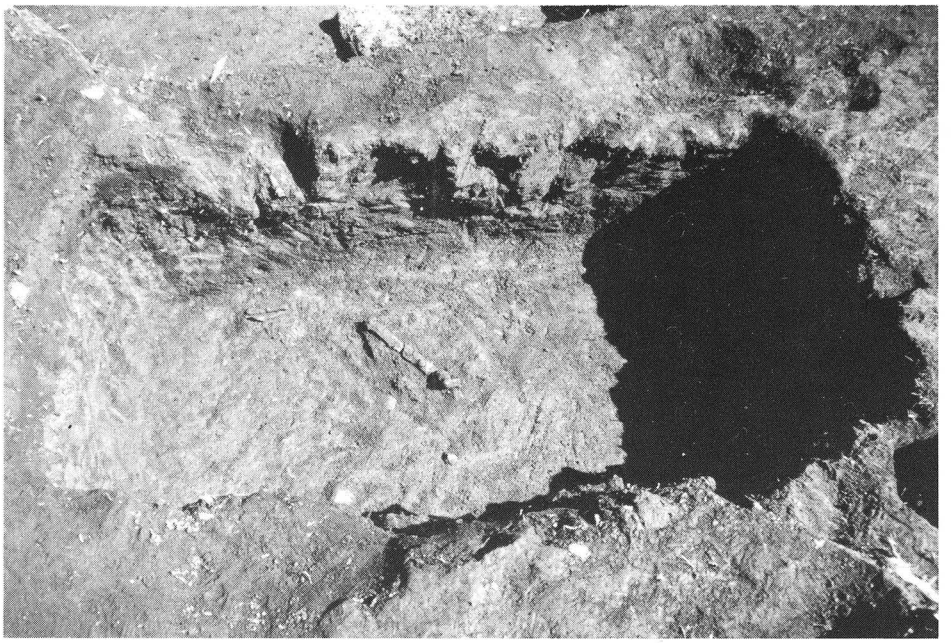


SK 6

SK 5

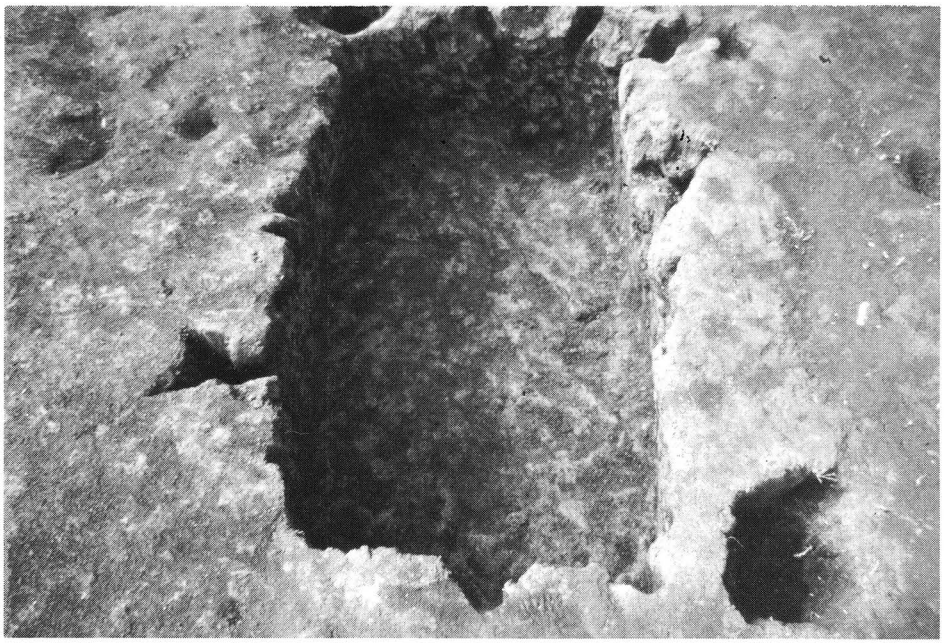
SK 2

図版16



SK 7

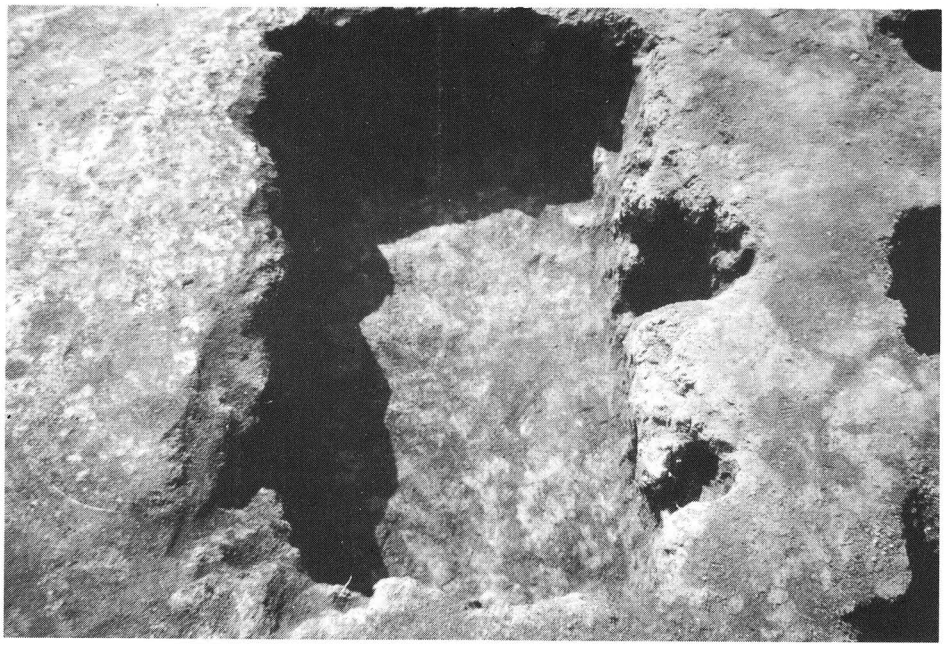
SK 8



SK12

SK14

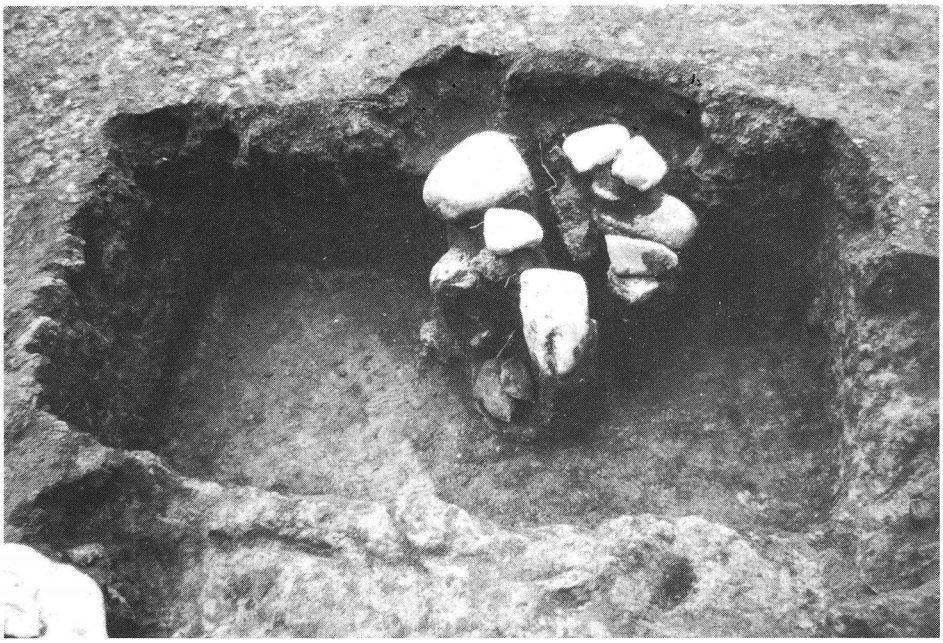
図版18



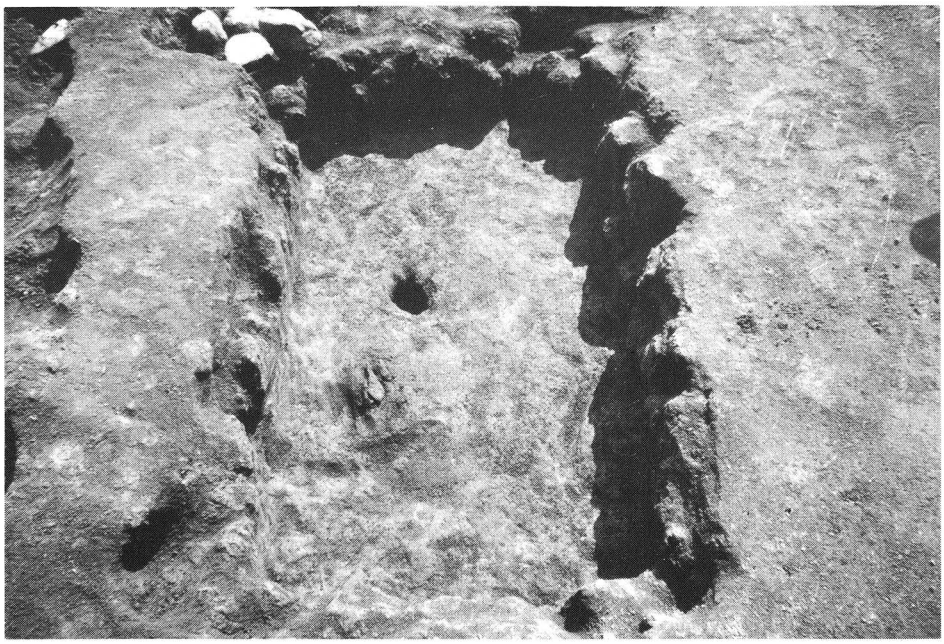
SK15

SK16

図版19



SK17

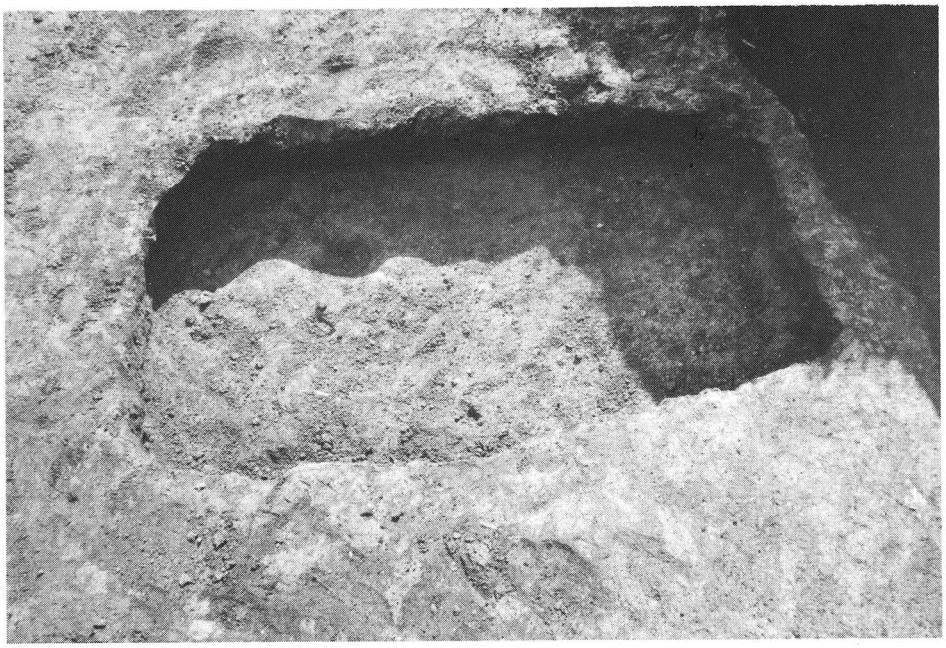


SK19

図版20

SK20

SK21



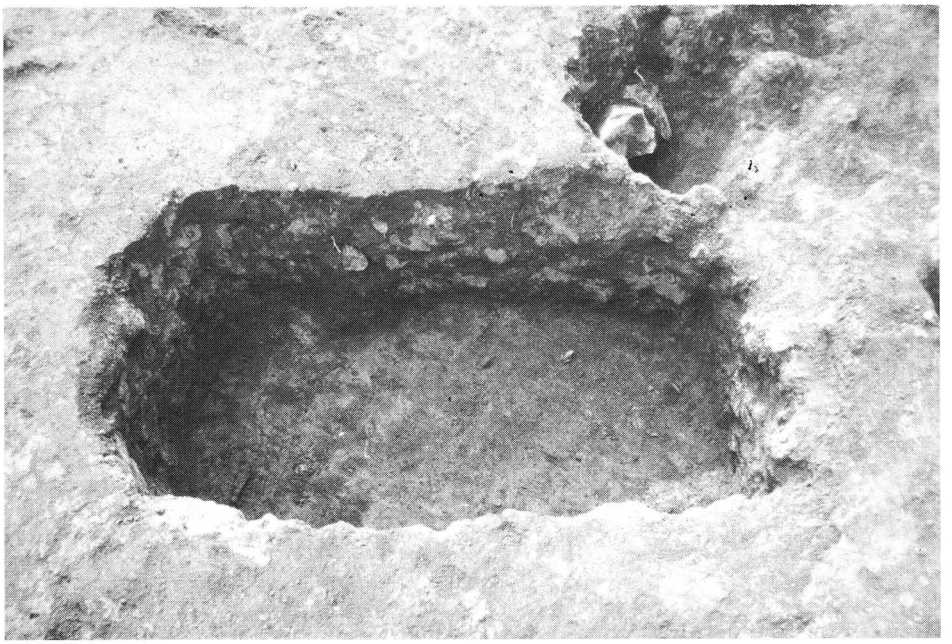
SK22

SK23

図版22

SK16・25・57

SK24



SK33

SK26